

んば、口邊に白醜を生ず、學人出で去つて四十餘日、作廢生。師云く、「爾が口邊に青艸を出さん待つて、却つて汝に向つて道はん。」僧云く、「低聲低聲、墻壁に耳あり。」師云く、「也た大家知らんことを要す。」僧云く、「只だ口邊に青艸を出す底の人の如きんば、還つて方便ありや也た無や。」師云く、「大いに方便あり僧云く、「那裡か是れ他の方便の處。」師云く、「牛搏馬踏に一任す。」僧云く、「學人不會。」師乃ち云く、「風穴破屋數間、單丁なるもの七年、後に臨濟の正續と爲る、西白道人は即ち斯の人なり。深雲古木、雙眼清寒なり。大音希聲、豈に常の調に同じからんや。」佛生日上堂、僧問ふ、「鐵壁鐵壁、之を號して佛と曰ふ、常に苦海の中に在つて立つ。」

の當位なり。
 不然。珠云く、「上句の意、見得せずんば、光陰矢の如く、春過ぎりて直に夏來る、あつたら春を過ぎん」と。
 杜宇催歸。杜宇又は催歸と名づく催歸は四月なり、過三は三更を過ぎてゐるといふこと。普請。作務と云ふて禪宗の僧堂では目をきめて雑務をさせる、この百丈は九十五歳までこの作務をせられ、「一日作さざれば一日食はず」といはれしなり。
 俊哉此是。大鼓の音をきいてこれは衆を集める合圖なり、飢をほりだして大笑す、これを百丈がみられて、太だ俊快な奴じや、觀音の入理にかなふてゐると云はれた、これは楞嚴經六に「觀世音は聞思修より三摩地に入る」とあるによる、珠云く、「あつ、此の

八〇
 僧佛性を識得す、皆だれでも了悟の者は本心が明く、其上諸縁をはなる、凡夫はさうでない、諸に觸してばかり居る。
 僧云適來。珠云く、「此の僧久しく百丈下に居て、にがでをくらすつてゐた故、さきから、はらがすいてひもじいかつたからとやつた。」
 誰管爾口款。誰は虛堂がその方の適來吐飢肚飢と、口款は白狀するのも管せん、かまふものかなり。
 未招爾胸。未招は招き承はる招き伏するの招なり、罪人が罪に伏するなり、爾胸は蓋直に胸を踏み倒す、これを爾胸一踏と云ふ。
 還有優劣。只だと併しながら百丈も笑ひ者の僧も笑ふやうなれば、まだどちらか優劣があるかどうかと、珠は云ふ。

「虛堂先づおぬしから云はしやれ、差配をきゝたい。」
 西白。未だ春にせず、羞し縮光晦跡の道人ならん。
 説著。此の事をば三日も説きえなかつたならばなり。
 口邊白醜。前の冬至小參に見ゆ、不言の義。
 學人出去。この禪客久しく外に在つて今かへり來て、此の問を立つ。
 日邊青艸。これは死人なり、青草が舌の上にはえると、これも把住して云ふなり、不言の義なり。
 低聲々々。其の聲、雷の如き故に」と溪注にあり、珠云く、「この僧は大低のやつではない。」かべに耳ありとなり。
 要大家知。衆人同知すべしとなり珠云く、「おらが大家にもきかせたい。」
 還有方便。或抄に「不說底、かへつて垂手爲人の處あり廢。」
 牛搏馬踏。溪注に「大無心無方便

これ眞の方便。珠云く、「牛がふまうが馬がはねやうが、とんとかまはぬ、口邊に青草を出す底の方便。」
 學人不會。珠云く、「それでは到りえません、こいつよほどよき坊主じや。」
 破屋數間。外の書には數椽に作る數は幾なり、五六間なり。
 單丁。たった一人、影ばうしとともにくらしてゐられた單は獨なり丁は伴侶なきを云ふ。
 臨濟正續。後唐の明宗長興二年、汝水に至りて艸屋數椽、山に依つて逃亡の人家の如くなるを見て、田家父老曰く、古の風穴寺なり、風穴入りて、留止す日は村落に乞ひ、夜は松脂を燃く、單丁なるもの七年、檀信之を新にして業林と成る、天福二年州の牧、其の風を聞いて、禮を盡して之を致す、上元の日開法す、南院に嗣ぐ、また雲門は生れてゐられて、師の風穴に住す、前年の長興元年に靈樹寺

に入院、これ韶州なり、日本では醍醐帝の延長八年である、珠云く「まがひかくなれない、臨濟第四祖と稱す。」
 西白道人。珠云く、「此の西白道人は彼の風穴の如く七年も隱遁してゐられるが、爲人底なし」と。
 深雲古木。溪注に「白雲深き處、古木寒嵩に安住す」とあり、珠云く「すみあかり立ちあがり、深雲にかれ木の立ちあがつたやうな。」
 雙眼清寒。眞の靜退なり、眼前一點の塵俗なし、珠云く、「暖かな目もとほすきとない、すきとほり切りて、悟りも迷ひも、今時那邊眼にかゝるものはない」と、又云く、ほめたやうなが虛堂の氣にはいらぬ。
 大音希聲。これは老子經の下に、大方は無隅、大器は晩成、大音は希聲、大象は無形、却つてこれ大音聲佛事なり、これ箇の妙唱舌に干らず、故に尋常の調に同じから

只だ今日の如きんば、降生底が是、苦海の中に立つ底が是。師云く、「二り俱に不是。」僧云く、「天上天下唯我獨尊、」師云く、「籠頭を脱却し角駄を卸せ。」僧云く、「恁麼ならば則ち三尺と一丈六と、且つ同じく手を携へて歸る。」師云く、「偏道へ、他幾莖の蓋膽毛がある。」僧便ち喝す、師亦喝す。

乃ち拄杖を卓して云く、「看よ看よ、九龍水を吐いて、金軀を灌沐することを、紫毫相の光、幽として燭さすといふことなし。直に得たり、嘉禾の老比丘、一足を跛却して、走りて廣南の光泰寺裏に到つて、口あれども也た讚嘆し及ぼさざることを。何が故ぞ、物主を見て眼卓堅す。」

結夏上堂、「山に登らば須らく頂に到るべし、

ず、今出世説法せざるが故なり、淡注に見ゆ珠云く、「雷の如くなる、平生説法してみられる。」

① 豈同常調。珠云く、「皆がき、とらぬも尤もじや、世の陽春白雪のやうなことでなし。」

② 籠頭。難關につきあたるを云ふなり、珠云く、「惡さう妄想をひつくるめ、其の上へ萬空法界をとつてのける」と、外は鐵壁々々、又この座しきもせども、かい道も一べい、天魔波旬も、つらだしはならぬ、或抄に「堅固法身底。」

③ 苦海中立。淡注に「鐵壁に寄せて言ふ、或は因地歷劫、勤苦を謂ふ」と、常とは二七時なり、苦海は娑婆世界なり、苦具とも云ふ、法身理體、人々具足底なり、立は化身を云ふ。

④ 只如今日。是の如きんば應身降生底とは生身佛がほんとうか、苦海中は化身佛がほんとうか。

⑤ 天上天下。珠云く、「恁麼ならばぢや、これは佛降生の初言なり、瑞應經に出づといふ、「これをも不足とはいはれまい」と或抄にいへり。

⑥ 聖。こりやなんと形付けたものぢや。

⑦ 脱却。この語は前に見えたり、籠頭は降生底、角駄は苦海底、「已に與麼ならば、苦海降生の窟を脱出す」と淡注に見ゆるが、この語の説明を今一度すべし、先のは或は不當かもしれぬ、籠頭は馬の口に籠の形ものを舐める馬の口籠のこと、飲食の自由を縛するもの、角駄は牛の角に角かくしをかぶせて、これも自由を束縛するものなり、つまりいへば思想の自由を束縛するの意に用ふる語なり、碧

岩十七則の頰に出づる或抄に委しく見えたり、これは新譯にて妥當なり。この東縛思想を脱却せよとの語なり、珠云く、「むさくしい獨尊のなんのと、邪魔ものをはづしておろしてしまへ。」

③ 三尺一丈六。三尺は凡器で僧が自らを比す。丈六佛身で、丈六の法身じや。

④ 同携手歸。これ凡聖不二の義なり、珠云く、「佛と不二一體で、ありがとう存じます。」

⑤ 他有幾莖。淡注に「他は佛を指す、丈六に自ら蓋膽毛あり、偏今佛と同途、必ず能く之を知んと弄して問ふなり」とあり、珠云く、「佛に幾筋の胸毛があるか、さあ云ふて見よとなり。」

⑥ 僧便喝。或抄に「毛がいかほどあるぞ、ごらんせよと指し出した。」

⑦ 師亦喝。或抄に「此れは鋒を交へた一喝なり、まだこゝにもあるぞと一喝した。」

① 看看。珠云く、「見たか、誕生佛をあらうを、」又云く、「是れが見える」と地獄の衆生の、ぎやつぎやつとなくも見える。」

② 九龍吐水。これは普羅經に、「釋梵香雨ふらし、九龍香水を下して身を浴す」因果經にも「維陀兄弟の二龍王虚空の中に於て清淨の水を吐いて、一温一涼以て太子に灌く身黄金色にして、三十二相大光明を放つて、三千界を照し玉ふ」とあり。

③ 紫毫相光。眉間の毫相、照燭せずと云ふことなし、珠云く、「紫金光白毫相、これを納僧の正法眼とも云ふ」、又云く、「これも只だではない、是れ全く虛堂、かう見たと云ふでもない、面目さへ見れば。」

④ 直得。其の證據にはなり、この直に得たりは或抄に「日本のことばにする、なんのことはない、又それこそ云ふに似た言葉なり」と。

① 嘉禾老比丘。これは雲門區眞禪師を指して云ふ、嘉禾は前に出てあるが、雲門は嘉興の生れで姑蘇である、上海の南方にあたり、蘇州と杭州との中間に位して居るところであるといふ、比丘は沙門なり。

② 跛却一足。これは雲門がその師の陳州に參じて、州便ちひとつとらへて曰く、「道へ道へ」と、師擬議す、州便ち推し出して曰く、「秦の時の轆轤鑽へあばう宮をこしらへたのみ」と、遂に門をびちんとしめきる、そのはづみに師の一本の足をけがした、これがちんばの本なるが、雲門は此に於て大悟した、これを云ふたもの、しかし嗣法は雪峰存に嗣ぐ。

③ 走到廣南。韶州雲門山光泰院の文偃禪師と云ふ廣南東路に屬す、宋ではそこに韶州府がある、この光泰寺は雲門光泰院なり、この開山である、後に日州の靈壽寺にも住す、姓は張氏、師は後漢の高祖乾

海を涉らば須らく底に到るべし。頂に到るときは、則ち宇宙の寛廓なることを知り、底に到るときは、則ち大海の淺深を知る。故に我が釋迦老子、九夏の月を以て、剋期取證して法中の龍象の、其の山の高さ、海の深さを知らんことを欲す。苟も或は飽食安眠して、略愧を知ることなくんば、是れ大罪人ならん、言ふこと莫れ道はずと。

上堂 僧問ふ、「結夏已に半月、納僧家、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、還つて虚堂の一句子を透得すや也た無や。」師云く、「老僧曾て殺生害命せず。」僧云く、「和尚太煞だ慈悲なり。」師云く、「埧間飢飽し易し。」僧云く、「有る一人は、常に途中に在りて、家舍を離れず。有る一人は、常に家舍に在りて、途中を離れず。」

且く道へ、那一人、人天の供養を受く合き。師云く、「水をも也た他の一滴を消するこ」と得じ。僧云く、「甚に因つてか此の如くなる。」師云く、「蓋し他布袋裡に在りて毬を靴すればなり。」僧禮拜す。

師乃ち擧す、雪峰一日、觀和尚の門を敲く、觀云く、「誰ぞ。」峰云く、「鳳凰兒。」觀云く、「甚麼をか作す。」峰云く、「老觀を啗く。」觀便ち門を開いて拘住して云く、「道へ道へ。」峰擬議す。觀に推し出さる。雪峰住して後に云く、「我れ當時に若し老觀の門に入得せば、爾者の一隊陣酒糟の漢、甚の處に向つて、摸捺せん。」師云く、「雪峰の擬議、老觀の推出、若し其の錘銖を較べば、則ち固に重輕あり、知らず雪峰當時、合に甚麼の語を下し得てか

祐二年四月十日、日本の村上天皇天曆三年寂す。有口也證。雲門云く、「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめんには貴ぶらくは天下の太平を圖ることを」と、珠曰く、「釋迦と云ふものはどうもほめようがなかつた、故にしかたなく昔日云云とやつた。」物見主眼。「何が故ぞ、箇の小孩を見て、奇異の想を生じて眼を卓擊すと也」と溪注に見ゆ、珠云く、「日かどがちがつた故、後世に取りちがへしならんと思へり。」忠曰く、「我點は非なり。」虛舟録に靈隱録に曰く、「物若見主兩眼卓擊也」と、主眼は非なること明けし、忠曰く、「眞佛を微見して驚いて茫然として、讚歎すること得ざるなり」と、又日かどをきつとたてゝなり、物は佛な

り、主は雲門なり。登山須到頂。珠云く、「總じて參禪辨道はかうじや、轉た悟れば轉た參ずべし。」沙海須到。珠云く、「龍宮の納戸のすみまでさがせ。」宇宙之寛廓。珠云く、「富士山にのぼれば日本は一目じや、宗乘向上を盡すと、十界が手に入るじや、字は天地四方を云ふ、宙は往古來今を云ふ。大海之淺深。珠云く、「看經の眼で、大法の淺深龍網が分る。」法中龍象。祖庭事苑の七には大毘婆藍に云く、「大龍象あり信を以て手と爲す、捨を以て牙と爲す、慧を以て頭と爲す念を以て頸と爲す、其の兩肩に於て善法を擔集す」とあり、珠云く、「大願心大威力、大法を荷擔するものを云ふ。」無知愧。珠云く、「圓老子飯錢を乞はん、佛法中の大罪人」

と。妄言不道。珠云く、「閻魔の廳で、羅義するときに、おれが云はなんだと云ふな。」已半月。珠云く、「六月且になつた。」牙如劍樹。珠云く、「納僧家は佛を咬みころし、祖を咬みころし、古則公案をかみくだく」溪曰く、「一會の衆、安居加行未だ幾くならざるに、取證顯説なり。」老僧曾殺。溪曰く、「一句子の人を縛殺して、其の慧命を害するなし」と、珠曰く、「こりなんじや、誰か知る遠き烟浪やに別に好思量あることをじや」と又云く、「好肉着を剗らず、人々具足なれば、つひにいぢりちらかしはせぬ、又云く事理透員の語じや、假に和して托出す夜明珠じや。」和尚太煞。溪曰く、「把任の

言を指して、却つて慈悲と稱す、珠云く、「機に投合するやつ。」埧間飢飽。溪曰く、「言句餘殘を咬むの故に」と、溪は埧間「はかばやきば」なり、珠曰く、「うぬはしぶと場へゆきて乞ひてくふ、又云く、「うぬがやうな早や呑みこみするやつ、くひさいすればよいこと、少を得て足れりとすじや。」有一人常。これは臨濟上堂の全文を擧して問ふ、少異あり、溪曰く、「途中は世諦を表し家舍は本分を表す、或抄に「途中受用、本分家舍」とあり、途中は入鄣垂手家舍本分向上珠曰く、「有一人は正偏回互を手に入れねば相談はできぬ、常在途中は萬法の中において本心本性を離れず、差別の途中本分の家舍じや」と。

以て老觀の門に入得すべき。

上堂、擧す、五祖道く、「諸莊の收らざるこ
と、以て憂と爲す、百數の禱子、一箇も狗子佛
性の語を透得するものなきを、誠以て憂と爲
と。師云く、「五祖、大いに關中を破つて、
圖書を收むるに似たり。」

承天の短蓬遠和尚の遺書至る上堂、僧問ふ、

「昔本此を離れず、今朝亦來らず、且く道
へ、承天老子、甚麼の處に向つてか去る。」師云

く、「人を起つて起ひ上ることを得ず。」僧云く

「是れ、不生不滅の處に向つて去ること莫し麼」

師云く、「爾要することなかれ、者の氣鼓の老

僧を擦撥せんと。」僧云く、「他觸著すれば便ち

三毒起る。」師云く、「多少の人仰望すれども及

ばず、僧云く、「洞山遷化して、愚癡齋を設く

見よ」で「暫の時とちがふ、
これ時間のしばらくじやが、
且は姑とおなじなり」と或抄
に見ゆ、參考とすべし、珠云
く、「已下は臨濟が拈じ來つて
吹毛となす。」

● 一人。珠云く、「臨濟の骨髄
はこゝにある、或抄にはたう
とさはどちらか」とあり。

● 水也他一箇。漢曰く、「況んや
人天の供養を乎」と、珠云く、
虚堂の云ふのは、「毒を以て人
にあぶせかけるぞ、必ず油斷
すな、若し一なめでもすると、
喪身失命、供養どころか水一
なめもなめることはならぬ。」
他は忠曰く、「即ち上の水を指
すなり」と。

● 蓋他布袋。「袋の中で種をつ
く、途中家舎の處は自在なる
に似て自在なと抑したなり
と或抄に見ゆ、他は上の二人
をさす、漢曰く、「人天の知見

するところには非ず」と、珠云く
「おれも眠つて見たが、眠らる
ゝものでない、他は臨濟をさ
す、輾轉は手脚動されぬ、不
自由千萬じや、」又云く、「鳴
呼上堂の問答、又々ましまり
あるまい、祖師人の窠窟を破
り、眼膜を抜く腕力がきびし
い。」

● 雪峰。名は義存、徳山に嗣ぐ。
● 觀和尚。福州烏石山靈巖時に
は老觀と稱す、前に見ゆ。

● 鼓門。ぼとくとおとづれた
● 鳳凰兒。珠云く、「そつちはみ
さご、こつちはほうわう。」

● 作甚麼。なにをすると、鶴と
觀とは普通ず、水鳥で鴻のた
ぐひ、和名こふのとより。」

● 暗老觀。ひしやごと云ふ鳥。
● 啼擬議。珠云く、「峰、合點で
擬議したか。」

● 披觀推出。珠云く、「峰も手も
ちぶさたでそれにござりませ

せと云ふてかへつた。」

● 我當時。珠云く、「實に一千五百人
の師家じや、昔し若し好く言ひ得
て、老觀の門に入得したならば」
と。

● 備者一隊。どうしゆざうの漢は、
昔罵辱のことなり、爾等がとても
よりつくことはならぬ、入り得ざ
りし故に、摸索せられるのである
と、一事をまけて學人を釣る。

● 較其錘録。珠云く、「微細の差別を
較量するなり、錘録はなほ毫釐と
言ふが如し、一りん一毛じや。」

● 合。下得其塵語。合には合塵など
と同じ、かなふたことでちやうど
などとおなじきか。べしの意もあ
る、珠云く、「さあ、人々、どう云
ふたならば老觀の門に入得しよら
な云ふてみよ、合は方語に曾不捨
離とあり。」

● 五祖。名は法演、白雲禪に嗣ぐ、
この語は靈源に答ふる時に云ふ、
大惠書の下、禪門實訓の上に見ゆ。

● 諸莊不取。村々の領地から寺への
年貢のとれぬことは、憂ふはせぬ
が、此の示衆は靈通も達磨もつら
出しはならぬ、波瀾廣大にして人
の命根を奪ふた人じやゆゑに」と

● 珠は云へり。

● 五祖大關中。漢曰く、「取圖書は要
領を得るの謂なり、」珠云く、「五祖
の示衆と虚堂の評判とどうしたこ
とじや、破關中とは漢の蕭何の權
柄手に入ること、取圖書とは智慧
あるものは來年知るべし」と、史記
五十三の蕭何世家にこの故事あり
見るべし、忠曰く、「金帛財物を以
て諸莊の禾穀に喩へ、圖書を以て
狗子の語に喩ふ、言ろは意を緊要
物に繋けて、餘物を管せざるなり
取らざるなり」と。

● 承天。能仁禪師、蘇州平江に在り
宋には永天寺と名づく、支那甲刹
の一なり。

● 短蓬遠和尚。天童如淨に嗣ぐ、眞
歇五世日本の道元禪師の法兄弟な

り、枯崖漫錄の中にも承蹟見ゆ。

● 昔本不離此。漢云く、「法身に約し
て問端を立つ。」珠云く、「本離此れ
は本覺心法身はじや、正眼に見來
ればじや。」

● 且道。珠云く、「それじやので遺書
なんど、は」と。

● 起人起上。漢云く、「承天の去處を
逐ひ通ることなかれ。」珠云く、「犬
をおひちらかすやうな虚堂じやが
見ゆはどこじや」と。

● 不生不滅。珠云く、「如是柳花紅
の上、全體眞空、無相般若の端的
に向つて去ると云ふは承天の職を
起すべし。」

● 者氣鼓老僧。擦撥はそゝのかしお
だてるなり、氣鼓は氣の短きを云
ふ、この短蓬は短氣な老僧じやほ
どにと。むざとなぶりそゝのかし
て不生滅のところへ去らしめんと
するなり、立腹せられんとなり。

● 他觸著。漢云く、「瞋恚の毒を謂ふ
嵩頭の所謂刺帽子の如き故なり、

承天遷化、何の分付かある。師云く、「分付あり。僧云く、「甚の分付かある。師云く、「備をして近前退後して、牢く語頭を記せしめん。師云く、「也たこれ口業を惜まざる漢。師乃ち云く、「遠くして及ぶこと莫し、故に短と曰ふ、蹤へども即かず、故に遂と曰ふ。波波浪浪、西西東東、直鈞已に掛く雙峨の碧、一燒香散す蘆花の風。解夏小參僧問ふ、「禿僧家、四月十五、他を結すること得ず、七月十五、他を解すること得ず、畢竟其の處に向つて安身立命せん。師云く、「針鋒頭上に筋斗を翻す。僧云く、「與麼に自由自在なることを得たり。師云く、「備石灰羅裏に向つて反眼すること莫れ。僧云く、「謂つべし、一夏虚しく光陰を度らすと。

珠云く、「他は承天、三毒起はける人でなし。或抄に「三毒は瞋恚の事を云はん爲なり。言ろは然らば短蓬は惡辣にして近傍かたからんとなり。多少人。溪曰く、「承天平昔辛辣の故に近望しがたし」と。珠云く、「人天八萬三賢四果も目の付ることならぬ」と、不及はとやかぬこと。洞山遷化。溪云く、「洞山良价禪師は臨終の時、乃ち剃沐し端然として坐逝す、大衆號慟時を移す、師忽眼を開いて云く、「夫れ出家の人は心物に附かず、是れ眞の修行勞生、死を思ふに於ては何かあらん乃ち主事をして懸礙舟一中を辨じて、蓋し其の無情を責むなり、衆は皆無言已まず、延いて七日に至りて食具方に備ふ、師も亦したがつて齋し畢る云云、八日に至りて化す。」

珠曰く、「承天和尙、曹洞宗の五聖揚したるもの」と。
 ①分付。遺物どもはござらぬか
 ②近前退後。おのれ近前退後、それあちこちへさはりまはる
 ③牢記語頭。短蓬分付の那箇の語頭をおぼえてをらしむと。
 ④也是口業。溪云く、「只た三毒起るのみにあらず、也たこれ口業を惜まざることを、此の如く分付すとなり。珠云く、「承天は只だ衆生の爲に口業を惜まず」と。
 ⑤乃云。提綱なり、短蓬遠の名字に因つて以て其の徳を稱し賜ふ、短蓬は小舟なり。
 ⑥逆之莫及。溪云く、「遠く聽求して及ぶことなきは長ぜざるの謂なり」と、珠云く、「遠く求めてはなんぼうでもとやかぬ、なんで短蓬と名づけたのじやな、「短は去れ此不逆の意。」又云く、「眞の承天は目の

師云く、「刀錐の利。僧云く、「前程に忽ち人ありて問ふ、和尚今夏何を將つてか人に示すと。師云く、「多に添へ少に減す。僧云く、「三世の諸佛も也た理會すること得じ。師云く、「山僧も更にこれ理會すること得ず。僧云く、「和尚今夜何を盡して、學人に説與し了れり」といつて、也た便ち禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、「便ち與麼に去るも、早く是れ節外に枝を生じ、更に若し短を較べ長を論せば、何ぞ雷崖州萬里のみならん。所以に道ふ、太陽門下、日日三秋、明月堂前、時時九夏と、何ぞ用ひん、舟を刻んで劍を尋ね、木に縁つて魚を求むることを。西天此土、佛法平沈して、末代の比丘全く慚愧なし。甚の正因の二字、言薦賞

①さき耳のさき。溪曰く、「蹤迹するは其の行蹤を尋逐するの謂なり、これ舟篷の故に即くべからず、珠云く、「やれ」と、外へ向つて返り尋ねてはとりつかれぬ、はせる舟のあとを追ふやうなもの」と。
 ②波波浪浪。溪曰く、「蹤の句を結ぶ。珠曰く、「舟をやることは自由自在、この和上どこへ往つたか一向しれない、或抄に「短蓬に乗じて波浪をあなたと東西して釣を垂るるなり此れまでは生前の度生爲人の體を云ふ」と。
 ③西西東東。溪云く、「遠の句を結ぶ、已上は法號に約して其の深遠の徳を嘆ず、珠云く、「西の西、西方十萬億土、東の東、東方八千土」と。
 ④直鈞已掛。溪云く、「直鈞は正法を以て餌と爲し、衆生を接

する故に常に異なるなり、已掛は用ひざるの謂なり、遷化の故に、雙峨はこれは承天寺に三境あり、雙峨峰、萬佛閣、碧玉盤と云ふ。珠云く、「直鈞は一切衆生を利益するになぞらへていへり、これまで直鈞を以て大魚を釣つてあられた遷化なればもふいらぬ故、已掛は釣をやめられた、又直鈞は蘇東坡詩集紀行に、太公直鈞を以て釣ると、盧同詩に人鈞は曲、我鈞は直、嗟哉我が鈞反つて食むこと無しと。
 ⑤一燒香散。溪云く、「已上の兩句は化縁已に終り、滅後の風物を述ぶ、句法短長、韻を押す、珠云く、「燒香餘、母なり小舟にのり、沼のあし間をおしわけ、何くへ行かれたか」と。或抄に「花も香もちつた」と。
 ⑥結他。那一人なり、珠云く、「面目坊はしばつておくこと

もどうすることもならぬ」或抄に「本色の衲僧、即ち上に所謂衲僧家」と。
解他。他は是れ阿誰ぞ、そんならと云ふて、ほどいてやることもならぬ。

● 畢竟。此の面目坊はひつきやう。立身立命。他の歸處を問ふ。

● 針鋒頭上。筋斗は倒立なり、陸通じて斗に作る、峻立たり、溪云く「不思議大活自在、蓋し他の安立を表す。」珠云く「それは針の上にてとんぼ回りにしてゐる、さるかへりしてゐる。」

● 備石灰。溪云く「備が語に隨つて見を生ずるを罵る」と、珠云く、筋斗の處を奇特と思はゞ、それは眼中麟と云ふ、そのやうなことではない、子細のある語なり。」石灰は灰だはらにつゞらつゝ、こんで目ばち／＼すると目に灰が入る、反眼に目ただき、平たくいへば、石灰をふるふところでの目をあけ

● 太陽門下。溪云く「太陽明月は日月なり、門下堂前は文を互にして別の由なし、只だ日月前のみ、日に三秋、時に九夏更に餘時に於て思索すべからず。」珠云く「太陽門下は偏なり、あつき上に寒きところあり。」

● 日三秋。珠云く「正。」冷なるうへにあつきことあり、これ洞下の修行底吹毛斬れども入らず。」

● 明月堂前。珠云く「正。」盤に和す。

● 時時九夏。珠云く「偏。」

● 何用刺舟。孟子の一に出づる語、注に言は不可得なりと、珠云く、「何ぞ用ひんと、此の端的佛法の玄妙を求むるならば、劍を尋ぬる上の洞山の語で涙をこぼせ。」又云く、「修行じやの接心じやの、やれ

の諸佛もさへのに此方づれが中々及びもないこと。」
● 更是理會。珠云く「是れで三文がものもない、くさされたへご雜水それはしれたこと、虚堂でさへ知らない。」

● 盡情學人。珠云く「盡情は丁寧の義、又出精の義私へ十分の説法でござります。」

● 拈拄杖云。珠云く「今時に非ず、那邊に非ず、空に非ず、假に非ず。」便與麼去。珠云く「此れかうして居る、了々分明なれども」と。

● 早是節外。溪云く「拄杖によせて節外枝を生ず、一重の無川處を言ふ。」珠云く「はや毛がはえるで、まだ／＼節外に枝を生ず。」

● 更若較短。龍く「杖子の長短に託して、長期短期の功課を較論するを謂ふ。」長期百二十日、中期は百日、短期は九十日なり。

● 何寄崖州。「遠くして遠し」と溪は云へり、崖州は瓊州府なり、京師

參譯じやのと云ふも、みな是れ餘方をかせぐのじや」と。

● 西天此土。西天の二十八祖、東土の六祖と展てとなり。

● 佛法平沈。眞實の佛法はれいらくしてと。

● 說甚正因。これは報恩錄の解夏小參にも見ゆる語なり、珠云く「末世になつて悟りの何のと云ふことはない、夫婦いさかひせんが大きなこと、」又云く「涅槃經三因佛性たゞ今は心性の道理」と。

● 言薦。忠曰く「解夏の時、師家學者の見解を辨驗す、其の工夫の巧あるものをば則ち一言一句之を稱譽す、此を言薦と云ふ。」

● 賞勞。前に見ゆ。

● 古人隨機。珠云く「洞山衆生の機にしたがうことがさあひであつたさうな」と。

● 二林只賞効。珠云く「虚堂は機に應するやうに説いて、一夏のそのしるしを得させたいと思ひはか

る。」又云く「向上を言はず、中下の機の爲に効驗を圖る」と。

● 七佛行處。溪云く「この當山の行道塔。」珠云く「こりや何のことじや、上に用はない、此の語難透」と。

● 因甚寸紳。溪云く「千古の奇瑞じや是の如くならば則ち實に怪むべし。」珠云く「虚堂の云つたところ洞山のとかけ合せて見る、になへば棒がをれる」又其の迹々に至るまで寸草生ぜず。

● 快出来。珠云く「さあ、ふんぐりがあらばさひよく」と。

● 九夏闕疑。九夏己來のかけめを補へと。

● 南泉。名は普願。馬祖に嗣ぐ、趙州の師なり。

● 麻谷。名は實徹、馬祖に嗣ぐ。

● 歸宗。名は智常、馬祖に嗣ぐ、廬山に住す。

● 同往。同行同道の意。

● 忠國師。南陽山慧忠、六祖能に嗣

勞とか説かん。古人隨機を解せず、二林は只だ實効を圖る。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、七佛の行處、其に因つてか寸艸生せざる。快に出で來つて一轉語を下して、以て九夏の闕疑を補せよ」といつて、挂杖を卓す。

復た擧す、南泉、歸宗、麻谷、同じく往いて、忠國師を禮拜せんとす、泉、路に至つて、一圓相を畫して云く、「道ひ得ば即ち去らん。」歸宗、圓相の内に於て坐す、麻谷、女人拜を作す。泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ。」宗云く、「是れ、甚麼の心行ぞ。」師云く、「王老師既に人に道破せらる、未だ好手と爲す。麻谷、女人拜を作す、國師を見得せり。」

次の日上堂、「一夏未だ嘗て諸人と朝思暮

ぐ、此の公案のあらましを譯すれば、ある日南泉、歸宗、麻谷の三人が、江西の馬祖山を出發して、はるばると長安の忠國師が禪島も落す様な勢に居るをきいて、よい教訓を蒙らうと思つて、半分みちほどきたときに、南泉が大地の上の一圓相をかいておいて云ふのには、「だれぞ、何か真理の絕對にはまるやうな一句を云ふならば」と、はじめ約定どほり長安まで行くことにするが、さもなくばやめじやと云ひ出した、すると歸宗はその一圓相の中にはいつて坐つた麻谷この様子を見て、早速歸宗の前にゆき、女が觀音さまか地藏さまをがむやうに可憐に歸宗を禮拜した、南泉はこの二人の芝居の眞似見たやうなことをするのを見て、「そのやうなことをするならば、

私はまう長安行きをやめる」と云ふた、歸宗は「今更何を云ふのか、こゝまで來ておいて、長安行きはやめとは一體どんなはらで、そのやうなことを云ふのか」と詰問したと或抄にあり、珠云く、「これは向上の因縁なりと、又女人拜を作すは、あゝ見事なものじや、國師相見底なり」と、又是れ甚麼の心行ぞとは、そりやどう云ふ存じよりじや。心行は和語の「こゝろね」と、虛堂の評の既二被二人道破一は歸宗にこれ甚麼の心行ぞと云はれて、未爲好手は虛堂が目からはまだまだあつたれば手ぎはでない。見得は南泉がこの時のはらの中より、麻谷は三十年後、こりや師翁の著語なり又虛堂が評判じやとやら云ふて、こんなことを云ふと、碧岩の六十九則にも出てゐる、

想せずんばあらず、今朝期滿じて、慕忽相應す、方に知る、山は是れ山、水は是れ水なることを。向來豈に山は是れ山水は是れ水なることを知らざらんや。今日方に山は是れ山、水は是れ水と道ふことを知る。汝若し信せずんば、三十年後自ら人の知るあらん。」上堂執事を謝す、「松に操あるときは則ち嚴寒けれども凋まず、竹に節あるときは則ち虚心澹静なり、襦子、義に勇むときは、以て叢林に表率たるべし。及を事海に游するに、自然に左右其の原に逢ふ。」

中秋上堂、挂杖を以て、一圓相を打して云く、「裏面に一株樹あり、之を名けて、娑婆樹と曰ふ。下に一兔あり、長時に藥を搗く、尋常見得するは、甚だ眞ならず。惟だ今宵のみあつ

王老師は南泉を云ふ、王老師ものしりをやじや、唐宋の俗語なり。

① 至路。途中、意はこの三人は大方馬祖のところへ出發して忠國師は長安の光宅寺に居つたので、行くつもりでありしならんと。

② 一圓相。これは禪宗では、或は手まれで、空中に圓相をかきたゞ一指頭を立てたり喝といひ嘖と叫び、思想を表現する一種の方便とみてよい。

③ 女人拜。これは立ちながら兩手をむねに當て、すこし腰をかゞめ敬禮するなり。

④ 什麼心行。これは日本語の「何たる料簡じや」とか、「今になつて何を云つてをるのか」とか、「どなんつもりでそんなことを云ふのか」と或抄に見ゆ、心行とは今日の言ばでいふならば「動機のこと」とあ

⑤ 次日上堂。十六日のことなり。珠云く、「此の間の上堂大に推泥」と。

⑥ 一夏未嘗。珠云く、「この上堂は此の中での上堂なり、なんでも五家七宗をまぜくりちらかして」と。

⑦ 朝思暮想。溪云く、「工夫提擲」と。

⑧ 期滿。九十月の期限がみちた。

⑨ 慕忽相應。溪云く、「取證時到るが故に頓に、本來と相應するなり。」無忽は正字通に迅疾の元とあり。

⑩ 方知。方には初めてなり、珠云く、「知りてと云ふ點もある山はなるほど山じや、水はなるほど水じや」と。

⑪ 向來。ききつたかたよりなり、珠云く、「きやつと云ふから、知つてゐたけれども、背觸と云ふつはものがすまんだ」

て極めて是れ分曉なり、諸人還つて見る處の」
挂杖を卓して、「之を見んとならば、則ち妄に
眸を擡げざれ、然らずんば、明は暗に如か
じ。」

上堂 擧す、馬祖因に百丈再び參す、祖
目を以て禪牀角の拂子を視る。丈云く、「此
の用に即するか此の用を離するか。」祖云く、「
爾 向後 兩片皮を開いて、何を將つてか人の
爲にせん。」丈、拂子を取つて豎起す、祖云く
「此の用に即するか此の用を離するか。」丈、拂
子を舊處に掛く、祖、威を震つて一喝す。丈云
く、「我れ直に得たり三日耳聾すること。」師云
く、「豈に百丈の三日耳聾するのみに止らんや
直に 盡天下の人をして、事を聽くこと真なら
ず、鐘を喚んで甕と作さしめば、方に馬師

に契はん。」

上堂 擧す、「汾陽の 無業國師、衆に示す、「若
し 一毫も 聖凡の情念未だ盡さざるあらば
未だ 驢胎馬腹に入ることを免れず。」白雲又
道ふ、「直饒一毫の聖凡の情念 頓に盡くる
も、亦未だ驢胎馬腹に入ることを免れず」と。
師云く、「二大老、無心の中に向つて、一場
の口面を撰出す。」拄杖を卓して、「近日 王令稍
嚴なり。」
開爐上堂、「箇の裡、峻機妙用の人に與へて
湊泊せしむるなし、老來寒を畏る、只だ此の
火爐頭の話をか説かんとを要す。且く道へ、火
爐頭に甚麼の話をか説かん、恐らくは 冷灰の
豆爆して諸人の鼻孔を彈破せん。」
達磨 第三忌の拈香、十萬里、水雲の蹤跡、

と。
① 知道。珠云く、「知つてと云ふ
點もあり。」知道すと點すべし
知道は俗語なることをしるべ
し、道の字には意なし。
② 三十年後。淡云く、「唯だ將來
を記して、別の表示あるに非
ず。」或抄に「上に所謂千古の
下、豈に人なからんやの義と
同じ」と。

③ 松有操。淡云く、「把持なり、
又節操は操守するところなり
災害に遇ふとも其の操を失は
ざるなり、正直に不退風に寺
務をとるにたとへる。」珠云く
「松有操云は行者根大智が
しつかりとしてあると、心境
一切に味まざるものでない
又云く、「春夏は同じく緑とい
へども、秋冬は同じからず、
凋零す。」
④ 竹有節。淡云く、「邪曲の心な
きこと、竹中の虚瀆なるが如

し、澹靜は水の觀節は簡要な
り。」珠云く、「節はほど／＼、
又くくり、虚は中、虚心は實
心、澹は泊、靜は恬。」
⑤ 勇於義。珠云く、「世法佛法、
一切に於て宜しく理あること
には見捨をかす、この語は論
語の「見レ義不レ爲無レ勇也」に
出づ。

⑥ 表率叢林。率音リつ、表的な
り、めあてなり、百丈清規に
も前堂の下に「表率叢林」とあ
り、人天の眼なるものなりと
あり、珠云く、「首座を表率と
爲すは、衆人目を屬すること
は此の人に在り、表的の如し
今借りて美執事と云ふ。
⑦ 游及事海。淡云く、「游及は莊
子の養生主の篇に「庖丁牛を
解く、恢恢乎として其れ刃を
游ばしむる於て必ず餘地あり
と事海は事務無量以て海に喩
ふるなり。」珠云く、「執事は世

間の逆順の境に入り涉りて、
少しも煩しとせず、甚だ餘裕
あり、游は理善をよく分つこ
と、及は氣象を云ふ」と。
⑧ 左右逢其原。淡云く、「孟子の
離婁にもあり、左右は兩旁、
言ふ意は至近にして一處に非
ず、逢は猶値の如し、原は本
なり、水の來れるところなり
今執事の處爲一一其の理に合
ふなり。」珠云く、「世法佛法、
どうしても單傳心印の妙道に
みな一體になること。」
⑨ 婆娑樹。古抄に、「これ婆娑な
り、傳寫の誤乎、韻字の格手
書林に桂なり、けだし月中の
桂樹を謂ふ、爾雅に「婆娑は
舞なり。」
註に云く、「舞者の容なり。」淡
曰く、「桂樹の光影閃爍して盤
辟の舞に似たり、故に婆娑樹
と稱する乎。」或抄に「婆娑は
草木の盛なる貌」。

⑩ 下有一鬼。珠云く、「その樹の
下に玉兔あり、金杵を操りて
不老不死の丹藥を搗きねると
云ふ。」
⑪ 尋常見得。珠云く、「常の月
ではない。」
⑫ 極是分曉。珠云く、「本覺の心
月はじや。」
⑬ 不安撞眸。珠云く、「外へ向つ
てはみえぬ、只だ氣海丹田へ
氣をおとしつけ。」
⑭ 明不如暗。淡云く、「物に託し
て眞を辨ず、尋常のみに非ず
じや。」珠云く、「大切な此の明
月、又つい見ることならぬ。」
これが虚堂の奥の手じや、明
暗にしかんと云ふことか、そ
ではない。」
⑮ 百丈再參。これは碧岩十一則
の評にも出てある、珠云く、
百丈再參の因縁、臨濟破夏の
則なくんば、臨濟宗は泯滅せ
んと、誠なるかな此の言又云

く「路頭窮まる處、再び翻過すじや、大切な因縁。」
 ⑦以目視。珠云く「じろりとしられた。」
 ⑧此用離此用。珠云く「即は建立なり、離は掃蕩なり、これは拂子を以て御示したるか、拂子を離れて御示したるか」と。
 ⑨備。珠云く「即離の大事を吞み込んでのこと、こりやまあよいは」と。
 ⑩向後。珠云く「してこれからは東道西話、應接するに」と。
 ⑪兩片皮。口をいふ。
 ⑫取拂子。珠云く「すさまじい手もと」と。
 ⑬使盡天下人。珠云く「三千大千世界の所有のもの、地獄の苦む聲を芝居の三味線の聲ときき、經をよむのを馬の尻をたまく聲ときき、不真とはこのきまごこなひはありがたい」と。
 ⑭喚鐘作樂。或抄に「耳聾する體」

とあり。
 ⑮方契馬師。珠云く「ややくはじめて大師のにこりとめされた」或抄は「一喝の聲を云ふ」とあり。
 ⑯無業。大達國師と謚す、唐十一代憲宗召せども出でず。馬祖に嗣ぐ。
 ⑰一毫。珠云く「上佛なく下業生なきところを見よ。」
 ⑱聖凡情。珠云く「石になれと云ふことか、それより外はあるまい。」
 ⑲體胎馬腹。珠云く「そればかりではない、三塗地獄へいる」或抄に「畜生道三惡道じや」とあり。
 ⑳傾盡。珠云く「是れでなければ境界に入ることにはなるまい」と。
 ㉑亦未免。珠云く「又宗旨の穿鑿。」
 ㉒向無心中。珠云く「世間の是非をはなれ切つてと云ふこと。」
 ㉓一場口面。或は口或は面、珠云く「一場は一所と同じこと、口面は言語を云ふか云ふことかあ、云ふことかと、工面し出された露出な

り。
 ㉔王令精懸。嚴は教命急なり、玄沙の語、この鐵の頭古の部に見ゆ。これは二大老の賊心を許さずとなり珠云く「法度がきびしい、うつかりとするなと、虚堂これ何んじや。」
 ㉕箇裡。珠云く「虚堂ひまなに依つて色々のことを思ひ付く。」
 ㉖峻機妙用。珠云く「峻機妙用の悟を人に與へてと、海泊とは佛も違勝もこはいことはない。さとりも迷ひもよりつき處はないと。峻機はけだかいこと。」
 ㉗老來畏寒。珠云く「たゞ年をとれば寒むいことがいやじや」と。
 ㉘冷灰豆爆。珠云く「たゞきづかひなことは、火爐頭の話をかたらうと思ふが、冷灰の中から豆が一つぶ飛んで、こなたの鼻の孔にあたりとならん、先づおきませう」と。淡曰く「恐らくは頓脫の出で来る底あらん」と。

①七百年。西竺の陳人、②眼晴烏律卒、③面子黑鱗皴、④傳衣付法、⑤埃塵を惹起す。⑥如今紅紫朱。亂して、紛然として出づ、⑦豈に少林五葉一花の春に止らんや。斯に遠諱に臨んで此の溪嶺を薦む、⑧萬古千秋子孫を累はす。⑨上堂「一たび出で、より數日、⑩至る所の溪山の風物、⑪歴歴として目に在り、⑫歸り來つて鼓を搥つて陞堂。⑬從頭又舉すること一遍す會す麼。⑭眼力の到る處、人の謾を被らす。⑮冬至小參、⑯一氣順昇して、⑰百昌萌動す。是において時の人有ることを知らば、⑱還つて有ることを知らざる者あることを知らん。⑲寒暑の推遷を被らす、⑳四時の消長を逐はず、㉑靜にして善く應じ、㉒卓爾として羣ならず、若し、㉓尺二の眉毛領下に生ずと謂はゞ、㉔此れ

①第三忌。劉善富が田を捨てて供を設く、これ第三忌なり。
 ②十萬里。佛祖統記に曰く「摩伽陀國より益州に至る途、九萬九千三百八十里を經る」とあり。
 ③七百年。建曆示寂の年より、北魏の孝宗永安元年、梁武帝大通二年十月五日、日本の繼體天皇二十二年に當る、南宋理宗に至りてなり。
 ④西竺陳人。西竺は印度、陳人は莊子の寓言にある人として人道なきこれを陳人と謂ふ。「注に陳人は世間陳久、無用の人を謂ふ」と故にまだ世すて人なり、古なり、おきぶるしのことと陳と云ふ。
 ⑤眼晴烏律卒。珠云く「俗談の黒の義、又烏律漆に作る、眼晴突出のこと。」
 ⑥面子黑鱗皴。子は助語なり、面目共に黒く、しわあるを云

ふ。
 ⑦傳衣付法。珠云く「傳衣でござるの、得體でござるの」と。
 ⑧惹起埃塵。珠云く「そこばくの埃塵をひきおこす。」
 ⑨紅紫亂朱。淡云く「後代に至りて五家七宗、宗技門葉一色に非ざるなりと、珠云く「如今の坊主は實の達磨の子孫乎又益人乎、まんざい乎、ことふれ乎、紅紫は間色で、朱は本色、紛然はみだれ出づるじや。」
 ⑩豈止。珠云く「豈に達磨ばかりではない。」
 ⑪五葉一花。五葉は二祖より六祖までなり、一花の春とは底意に子孫の繁榮を言ふ。
 ⑫薦此溪嶺。池の水草などを、ざつとした供へものを御上げして、蕪齋の菜行潦の水などなり。
 ⑬萬古千秋。孫は領倫の切「ひ

又是れ他を見ること未だ盡さず。山僧尋常、口禪盤に似たり、未だ嘗て容易に人の與に道破せず。備若し見得分曉ならば、黑豆芽を生じ、繡紋線を添ふるも、也た是れ尋常の時節ならん。且く道へ、今夜還つて來つて、果子を喫すや否や。拄杖を卓して、飯を嚼んで嬰兒を偲ふ。

復た擧す、五祖因に僧問ふ、如何なるか是れ道祖云く、始平郡。僧又問ふ、如何なるか是れ道中の人。祖云く、赤心を主と爲す。師云く、五祖、者の僧の信根未だ深からざらんことを恐る、之に囑して又囑す。且く道へ、節文甚麼の處にか在る、源河を逗し泰華を攀くことは、須らくこれ其の人なるべし。上堂して乗拂を謝す、此の拂子、吹毛の劔

云ふときは野も山も何もかも本心じや、生滅を以て云ふときは五蘊六欲にひつたくられる、是れ説を被るなり、豈に虚堂のみならんや。

- ① 氣順昇。溪云く、「一陽來復して次第に順昇す。」珠云く、「大死一番底。」
- ② 百昌萌動。昌は美なり、盛なり、神木美盛を謂ふ、禮記の月令に「天地和同し、神木萌動す。」みな芽をふき出す。
- ③ 是時人知有。溪云く、「不傳の妙道あることを知るならばなり。」
- ④ 還知有。溪云く、「物外の那人を指す。」珠云く、「とつくり知つて見なならば立ちもどつて。」
- ⑤ 不被寒暑。珠云く、「有ることを知る底は、寒暑の推遷もならぬ。」
- ⑥ 不達四時。春夏は長、秋冬は

如りも過ぎたり、善く用ふるものは、坐ながら太平を致す、善く用ひざるものは、鋒を傷り手を犯す。二林に厩を出づる良駒の、鞭影を勞せざる底あること莫しや。拂子を擲下して、看よ看よ。上堂、僧問ふ、「雲門因に僧問ふ、不起一念還つて過ありや也た無や。」門云く、「須彌山」と、此の意如何。師云く、「鐵を買ふて金を得たり。僧云く、和尚平生、古人を凌辱す、今日甚に因つてか全く雲門を肯ふ。」師云く、「冷處に把火を著く。」僧云く、「學人一冬外に在つて奔波す、還つて過ありや也た無や。」師云く、「秤椎井に落つ。」僧云く、「許多の施利、常住に歸す、甚に因つて全く此子の功勞なき。」師云く、「來つて我れを掩彩すること莫

- ① 消珠云く、「十二時にもつかはれず」と。
- ② 靜而善應。祖英集に靜而善應の二首あり、珠云く、「寂靜にして善應は喫茶飯」と。
- ③ 卓爾不羣。溪云く、「物外の那人を讚歎す。」珠云く、「佛手祖手、凡聖聖賢、くらべものが毛ほどもない。」
- ④ 尺二眉毛。一尺二寸、珠云く、「大人の異相を具すと云はゞ」と。
- ⑤ 此又是見。他は那一人を指す日似禪盤。溪曰く、「口重くして動かず、柱下の禪盤に似たり、不首のこと。」
- ⑥ 若見得分曉。珠云く、「有を知る底の人。」
- ⑦ 黑豆生芽。珠云く、「靜にしてなり」と。黑豆の事は前に出づ。
- ⑧ 繡紋添線。これは報恩錄にさきに出づ、次第々に陽氣が

- ① 回復して、日が長くならんと冬至の起る縁なり。
- ② 尋常時節。奇特とするにたらず。
- ③ 今夜還來。珠云く、「卓爾たる客人はじや、那一人來りて果子を喫するや否や、冬至の果子をもじや」と。
- ④ 嚼飯饑嬰兒。自ら謂へり、老萊の説話と、珠云く、「虚堂が此のところでのやうなことを云ふ、おそろしい、とつくりかんだ、さあむせるなよ」と。
- ⑤ 復舉。拈提なり。
- ⑥ 始平郡。これは始平郡と外書にあり、五祖演の海會錄中の語なり、これは柳文二十六聽壁の記の注に「始平は京都二十三縣の一なり」とあり、或抄に「大道長安に遼る」と、珠云く、「人跡不到の處、雲門の須彌山と同じ。」
- ⑦ 赤心爲主。溪云く、「誠實のみ

乃ち云く、其の機用を盡して、只だ一句と作して、諸人に布施せん。良久して、拄杖を卓して、大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」

臘八上堂、僧問ふ、「枯木寒巖に倚つて、三冬暖氣なし、此の意如何。」師云く、「牙根水を瀝さす。」僧云く、「婆子甚に因つてか庵を燒却す。」師云く、「爭か賭籌を交へん。」僧云く、「和尚也た胡亂に、古人の公案を穿鑿することを得ざれ。」師云く、「子に非ずんば委せじ。」僧云く、「老胡今日成道、何の祥瑞かある。」師云く、「山深うして雪未だ消せず。」僧云く、「諸諾。」師拂を以て一指す。

にして餘蘊なし、珠云く、「そこつめたい苔じや、赤心を主位とす。」
● 囉之又囉。重重叮嚀の故、珠云く、「しちくどく云ひきかせられた。」
● 節文在甚麼處。珠云く、「肝要かなめの處、殺訛を云ふ。」
● 迦源河。源河は黄河の源なり。返は忠曰く、「住なり投合なり等の調あり、透徹の義となすべき乎、泰華元一山、互裏擊開して以て河流を通ず。」
● 須是其人。溪曰く、「大法を荷擔し、衆生を開導するときは須らくこれ、有力量底なるべし。」其の人とは五祖を指す。
● 此拂子。珠云く、「用ひざれば蠅拂ひに劣る。」
● 吹毛劍。珠云く、「日本でならば天國、草薙なり。」
● 敬太平。珠云く、「地獄、修羅、大焦熱の中も太平じや、この

語は契理錄に見えたり。
● 傷銅犯手。珠云く、「なま兵法のものに持たせたら、きつさをそんじ手あやまち」と。
● 出脱良調。珠云く、「俊利底のもの、鞭の影を見てにげるは眞の良駒でない。」
● 看看。溪云く、「拂子に託して其の人に示す。」珠云く、「首座のことか、あかべの茶の子じや。」
● 上堂。この上堂は寶林の化主外より歸りて、この法筵をまうくるなり。
● 不起念。何の心も起らぬ時。
● 須彌山。珠云く、「須彌山ほどあると云ふこと乎、ないと云ふこと乎、是れは雲門の宗旨の言句なり。」或抄に「鐵樹子」と。
● 買鐵得金。溪曰く、「小事を問ふて巨益を得たり。」珠云く、「此の僧仕合せものじや、」或

抄に僧が鐵を買はんとて、往いて却つて金を得た。」
● 平生凌辱古人。和尚常平生、古の佛祖たちをこぼちぬかれる。
● 冷處著火把。火把は一束の火なり、合好の義なり、珠云く、「雲門と手を把つて共に行く底の語、寒きとさは一くべたいであたるが、かたじけない。」
● 在外奔波。外に在りて化主となり衆の爲めにす、奔波は東西かけまはりました、奔走すること波の起轉するが如し。
● 還有過也無。溪云く、「單話は靜時即今は閑時、又是れ過ありや無しや」となり。
● 秤推落井。出期なきの義なり、方語に不得出頭、珠云く、「とがと云ふこと乎、寸歩を動ぜしや」と。
● 許多施利。化主となりて受けた施物の品にはみただいどころにをさめてしまひました。
● 無些子功勞。溪云く、「奔波勞役す

ること此の如し、此の功なきことは何ぞや。」珠云く、「功勞ははらび」と。
● 莫來掩影我。溪云く、「施利を以て我が光彩を掩ふことなけれ、掩影は陰抹の義なり、珠云く、「我が面よごしてくるな」と。
● 盡其機用。珠云く、「千佛萬祖の大機用を括盡して」と。
● 只作一句。溪云く、「提要の義、且く道へ、これ什麼の一句ぞ。」
● 大海若知。溪云く、「聲聞は少欲知足菩薩は多求廣施なり、なほ大海の例に流れざるが如し。」珠云く、「是の語無量の妙義、恒沙の意を含む、虛堂の腹の中を見たくば此の句を見よ。」
● 枯木倚寒巖。この話は頌古に見ゆ時節相應に依つて開端と作す、この話は婆子燒菴の則に云ふ、昔一婆子あつて一の庵主を供養して二十年を経たり、常に一人の二八の女子をして飯を送りて給仕せしむ

一日女子を抱定「かゝへたが」しめて云く、「正與麼の時如何、庵主は「この枯木云云」の句をとなへ出した、女子が飯りて婆子に舉示したところが、婆子の云く、「我れ二十年只だ箇の供養するに俗漢の爲にするとて遂におひ出して庵をやく「枯木は性のないかれ木なり、寒巖はあまつさへ凍り切りたるいはほによつて、年が老いてまう身體に生氣がない」と珠は云へり。
● 牙根不瀝水。溪云く、「口を合して水氣を瀝さざるなり、水をもらすは外言の義、これは把住の境界なり。」珠云く、「よい云ひわけじや、此の僧向をくひしりて情を出す苦集滅道の四諦を斷じ、不淨を觀じ、中に一滴ももらさん」と。
● 爭交賭籌。溪云く、「賭は音觀、圍碁はなんとか博奕して財を取るなり、籌は算なり、婆子、庵を燒却するも、爭か這の僧に敵對せんとたり、珠云く、「じや〜むや、

ちて、臘月八夜に到つて、一條の路子を討得して、後人に與へて行かしまむ。若し他明星を見て悟り去ると謂はば、已に是れ誘餓未だ息まざるならん。

上堂、僧問ふ、「馬祖因に龐居士問ふ、「萬法と侶たらざる者、是れ甚麼人ぞ」と、此の意如何。」師云く、「乞兒飯碗を弄す。」僧云く、「只だ馬大師の如きんば、汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、却つて汝に向つて道はんと道ふ、鬻。」師云く、「劈腹剜心。」僧云く、「且く道へ、龐老子、此の一間を興す、是れ會し了つて問ふか、會し了らずして問ふか。」師云く、「會し了つて問ふ。」僧云く、「既にこれ會し了つて問はば、何ぞ必ずしも悟り去らん。」師云く、「悟らずんば争か會することを得ん。」僧云く、「人天衆前、

からにしてしまふた、或抄に「大把住なり、勝負なし」と。
●古人公案。婆子燒菴。
●非子不參。委細領會せざらん珠云く、「いかさま、なるほどじゃ」と。
●山深雪未消。天眞の祥瑞。
●諸々。此の僧ががてんいかん彼ばくち位であらう、此れは頓悟なり。
●以拂一指。點破の意、汝が事かと弄したところ、諸々と云ふところをば點破す。
●乃云。橫綱なり。
●一條路子。是れ甚麼の路ぞ、家山への道筋なり。
●他。佛世尊を云ふ。
●誘餓未息。是れ小機曲見の故に、金剛經に所謂則爲誘佛の意なり、珠云く、「如來をそしりころすものじゃ」。
●不與萬法爲侶。珠云く、「これは龐居士、石頭に參じた處を

力一ばいに出て來た、山をみても川をみても、男をみても女をみても、一切と共たらざるものあり、これ甚麼人ぞとふた。」
●乞食弄飯碗。漢云く、「不侶の者を認めて究竟と爲す、その伎倆賤しむべし、珠云く、「乞食が飯をもちうて來つてたのしみもてあそぶなり」。
●汝一口西江。大光明 云く「これは龐居士の傳をみると、居士言下に騰て旨を領す、乃ち留めて參承して、經涉すること載」とあり。
●劈腹剜心。漢云く、「情を盡して遺破す、珠云く、「馬師にはらわたを取り出して、親切に五臟六腑をえぐり出して示されたぞ」と。
●師云會了。珠云く、「それはしれたこと、石頭が處で會し了りて問ふたのじゃ」と。

豈に方便なからんや。」師云く、「泥を踏む漢。」

乃ち云く、「自家の田地、背て實に従つて履踐せず、只だ姓を冒して官田を佃にせんことを要す。還つて二祖の遠應に對して、禮三拜して位に依つて立つことを知る麼。」
除夜小參、僧問ふ、「年窮り歲逼り、烏龜壁に上ると、豈に是れ和尚の語にあらずや。」師云く、「只だ自己が命を傷ることを得たり。」僧云く、「忍然として衆中に、箇の通方の作者ありて冷笑一聲せば、老師未だ面熱し汗下ること免れず師云く、「爾更に近前して我れを驗して看よ。」僧近前して云く、「了。」師云く、「果然。」
乃ち云く、「日日は東に上り、日日は西に

●何必悟去。居士は馬祖の此の語の下に於て、大悟すればなり。
●不悟爭得會。珠云く、「今日悟らないで、きのふ會することがないで出來やう」。
●豈無方便。漢云く、「人情に順つて開説すべし、珠云く、「なんと私の爲に一超直入の方便を御示し下され」と。
●踏泥漢。漢云く、「自ら謙溢して進まず、却つて方便を求む」となり、珠云く、「くそ、このどもらうめ」と。
●自家田地。珠云く、「佛祖のおせわにも誰のせわにもならぬ田地を取り失ふて、輪延の暗に沈む」。
●不肯從實。珠云く、「自心は法王の王と成りてゐながら自身から臣下に成りて公僕の田を作らんと思ふ」。
●冒姓細官田。冒は貪なり犯な

り、他の姓を貪り犯すなり、史記の衛將軍傳に「衛は他人の姓を冒して衛氏となる」この故事を引く、佃は土を治むるなり、官田は公田なり。
●還知二祖。漢云く、「眞實契當の去就を顯示して、他の言語の方便の境上に渉る者を甄別す得骨得髓のことを並べたる依位立とは二祖が髓を得るを賞せられたことを云ふ」。
●年窮歲逼。漢云く、「心思路絶する底の禪話なり、珠云く、「如何ん」と究め來り究め去る底の時、石頭が壁に上る」或抄に「烏龜上壁は物のゆきつまりて窮りたるを云ふ、鶴林大師(自隱)曰く、「此の語は金槌打ても破れず、吹毛戲れども斬らず」と云はれてある」。
●豈和尚語。この語、徑山錄の除夜にも亦この問あり。」

沈む、^①無爲無事の者、子細に好く推尋せよ。既に是れ無爲無事、又箇の甚麼ぞか推尋せんと若し佛法の要妙を推尋せば、毎日起き來つて奴を呵し、婢を使ひ、東と説き西と道ふ、他の影子裏に在るに非ずといふことなし。若し舊歲未だ去らず、新歲未だ來らざることを推尋せば、^②東村の王老夜餞を焼く、^③野鬼閻神俱に飽足す。者裏又備が袴を挿む處なし畢竟して如何。拂子を撃つて、一年三百六十日、^④斷斷月は寅を建すを首と爲す。復た擧す、^⑤晦堂因に「如何なるか是れ多福の一叢竹、^⑥一莖兩莖は斜なり、學人不會三莖四莖は曲れり」といふを看して、^⑦慕然として契悟す。師云く、「^⑧往往多くは是れ竹を知つて、多福を知らず、多福を知つて竹を知ら

^①只自傷已命。淡曰く、「自作自受、他人の傷害するところに非ず、これは爲山の語なり、前の解夏小參に見ゆ、珠云く「をほさ是れを命根截斷底の時節とも云ふ、外からさすこととはならぬ。」
^②通方作者。「通方とは通達大方れいりのものと云ふこと。
^③冷笑。珠云く、「かげわらひ、かの鳥龜壁に上ると云ふ語を無侮して笑ふやつ。」
^④面然汗下。始めて慚愧を知べしと。
^⑤近前驗我着。珠云く、「勘破了也なり、おれが汗をかいたかか、ぬかと、とくとちかよりてみよ」と。
^⑥近前云了。珠云く、「此の僧よいかげんにつんぼう、てつぼう、よいかげんに驗過了るなり。」
^⑦果然。釣に上り來れりて、作

家の宗匠なり。
^⑧日日。珠云く、「これは發毒鼓の語じや。」
^⑨無爲無事者。珠云く、「禪宗のやくにたたぬ、無事これ貴人と、くその貴人、又云く、「學者を驢胎や馬腹に入るに三途の衆生とする根元、鶴林大師(白隱)曰く、「經を讀んでわるいことさへせねばよい、なにを知らずともよいと、三毒五欲は腹くら一ぱい知りて居て何にも知らぬの願力を成就したはのと、そりや牛馬は、みよ牛馬は何んにも知らぬ、あれがよからうか、法門無量誓願學と佛も立てられたではないか、爲レ僧不レ通レ理反レ身還レ信施」と云ふたは水も消し難しとは、こいつがことじや、無爲と云ふやつは地獄へ落ちぬやつはない」と仰せられた。
^⑩佛法要妙。珠云く、「眞諦門に

約せば。
^①呵奴使婢。珠云く、「佛法は日用の上にある事なれば」と。
^②他影子裏。珠云く、「他は佛法、影子裏は光明裏じや、全體本來の面目大道の中にあるものはない。
^③歲未去。珠云く、「今夜除夜じやが世諦門に約せば、しほざかひ。」
^④東村王老。陰陽師の類なり、除夜に紙錢を焼き、夜鬼を遣ふ、王老は張三李四の類、權兵衛、太郎兵衛といふと同じ、珠云く、「如是の祭りするも、納僧境界、向上宗乘の一路子、この解は前の與聖錄に見ゆ。」
^⑤野鬼閻神。珠云く、「道祖神も疫病の神も、きげんよく行けならば行く、をれならをらうと紙錢の供をうけてまん足す。」
^⑥者裏又備。淡云く、「これ又時節任運の事言論を著くべからず、珠云く、「この處は虛堂が處は中々備すつても見ることもならぬ、此れ

はがいにりきんだな」と。
^⑦一年三百六十日。珠云く、「虛堂がはじめは日日出東云々と云ふて又しまいに以て來て、このやうなことを云ふ、此れは虛堂家の大事じや。」
^⑧斷斷月建寅。淡云く、「斷は決なり重ねて之を言ふは、毎歲此の如くなるを以てなり、畢竟任運法爾異念を生ずべからず、珠云く、「斷々は決定の義たしかに、十二月の月始りを正月といふは、いつでも寅の月じや、建寅これが無爲無事に見えるならば、おれが耳なと鼻なと切つてやる。」
^⑨復舉。珠云く、「晦堂と眞淨がある故、黃龍の威光が盛なり。」
^⑩晦堂。名は祖心、隆興府黃龍寶覺禪師、黃龍南禪師に嗣ぐ、慈明三世たり、この話は傳燈錄を讀んでこの語をみて大悟す。
^⑪多福一叢竹。杭州の多福和尚は趙州諡に嗣ぐ。珠云く、「此の僧見地

に坐在して不可思議なる故、問ふ假諦門なればじや。」
^⑫一莖兩莖斜。これは多福の答。
^⑬三莖四莖曲。これも多福の答。
^⑭慕然契悟。慕然は忽ちなり、珠云く、「無爲の漢には耳に口を付けて百日呼んでもへうたんが眉根から落ちたで、なかなか契悟はならぬ。」
^⑮往往多是。珠云く、「往往(を)をり、虛堂家裏、毒藥醍醐、一時に行ずる。」多是とはさうであらう。知竹は偏位外解脫、不知多福は正位内解脫知多福は正位内解脫。不知竹偏位外解脫、淡云く、「人の一邊を見るを呵す。」
^⑯細索得出。或抄に「この話を辨得し悟る人の知るところ全分が全分にあらざるかをじや」と。
^⑰許備親見。「見處一般の故に」と淡注にあり。珠云く、「虛堂和上、いらぬことを仰せてござる。」
^⑱使府陸座。龍云く、「使君の府第(官邸)に就いて説法して、今この

ず。人ありて、緇素得出せば、^①備に許す親しく晦堂を見ることを。

使府に陞座して回る上堂、僧問ふ、「毘耶城裏に法を説いて、^②雙橋樹下に玄を談ず、如何なるか是れ、^③不動尊、^④師云く、「東走西走、僧云く、既に是れ不動尊、甚麼としてか東走西走す。」^⑤師云く、「癡人面前、夢を説くことを得ず。」^⑥僧云く、「是れ動則ち不動、不動則ち動なること莫し麼。」^⑦師云く、「寶所近きに在り、更に一步を進めよ。」^⑧僧云く、「忽然として動と不動とを將つて、一時に無生國裡に駈向して、却つて問ふ、如何なるか是れ不動尊、^⑨師云く、「東走西走。」^⑩僧云く、「和尚也た只だ一半を救ひ得たり。」^⑪師云く、「信根の者少し。」^⑫乃ち云く、或は指し或は掌す、^⑬是れ太平の

を離得せん。^⑭ 元霄上堂、僧問ふ、香林因に僧問ふ、如何なるか是れ、^⑮室内一椀の燈、^⑯林云く、「三人龜を證して龜と成す」と、^⑰意旨如何、^⑱師云く、「奴は婢を見て殷勤。」^⑲僧云く、「學人禮謝し去らん。」^⑳師云く、「^㉑虚を受け響を接す。」^㉒乃ち云く、「^㉓火を以て燈に續ぐを畫と名け、^㉔燈を以て火に續ぐを夜と爲す、^㉕晝夜相續いで燈燈盡くることなし。」^㉖焉然として黒地裏に、^㉗露柱に撞著せば、^㉘阿誰をか怪み得ん。」^㉙妙勝和尚至る上堂、僧問ふ、「^㉚雪峯、^㉛僧の來參するを見て、^㉜低頭して庵に歸る、^㉝此の意如何。」^㉞師云く、「^㉟誰か知る席帽下に、^㊱此の昔愁人ある

實林寺に回り來りて上堂するなり、使君は蓋し列府直院侍郎なり前に見ゆるが如し」と、^①珠云く、「金華府の使君なり、^②守護所なり。」^③毘耶城裏、毘耶は摩竭土の所居の城、今居士の縁を用ふ報恩縁に見ゆ、^④珠云く、「予使君の府第を云ふ、説法は化身佛を現しては種々の説法なされます。」^⑤雙橋樹下、^⑥珠云く、「雙橋樹下では教外別傳、^⑦單傳心印點滴も施さず、談玄は一切の要をいふ。」^⑧不動尊、^⑨不動尊は應身なり、^⑩孤山智圓曰く、「不動は中論法身の徳を讚する也」と、^⑪溪云く、「此の間の意は、蓋し孤山の義に據れり。」^⑫東走西走、^⑬溪云く、「此の答の意はさきの關注にある應身の意なり、^⑭珠云く、「おゝゝ其の

らぬやつがなり、却問は一步を進めた處乎、^①或抄に「駈向はとが人をながずやうに、無生國は他方世界をいふ。」^②萬法淨慈後縁にも見ゆ。^③東走西走、^④溪曰く、「波を離れて水を求むべからずの故に」と。^⑤和尚也、^⑥溪曰く、「只だこれ別の方便なきの故に、^⑦三光(東嶺)老師云く、「この句はこれ能くいふた」と。^⑧信根者少、^⑨溪曰く、「日月盛明ありと雖も、^⑩覆盆の下を照さず、^⑪或抄に「信根の者はすくないが、^⑫奇特とせう」と證明しられた、^⑬珠云く、「なるほどうねは馬鹿ではないて。」^⑭或指或掌、^⑮或は指して之を示し、^⑯或は掌して之を翫す、^⑰珠云く、「これは窟居士が藥山を辭する因縁を用ふる歟、^⑱或は

不動尊がけふは飯がこはかつた汁がからいと、^①きやつ、^②いふて居らつしやる。」^③癡人面前、^④大慧禪師が榮侍即ちふるの書にも、「癡人面前に夢を説くことを得ず、^⑤便ち實法の會を作すとあり、^⑥この語は仰山にある僧が問ふたとき答へられた第二句目の語なり、^⑦實法の會を作して悟りは皆第二頭に落つるといふて、^⑧只だ靜處を守るを簡要とするを呵せられたのである。珠云く、「うねが夢がさめないせどかいだうも、^⑨大屋もみな不動尊じゃ。」^⑩寶所在近、^⑪これ法華の文略してこの縁の與聖縁に在り、^⑫珠云く、「そのところをとつくり呑み込むと、^⑬あまり遠くはない。」^⑭駈向無生國裡、^⑮珠云く、「一念不起の無生國裡、^⑯駈向はぬか

指すとは隻手の塵をきけ音聲を止めよと指し示す、^①或は掌すはさうでもない、^②かうでないとはうげたをいはせる。」^③太平戈矛、^④溪云く、「本無事、^⑤強ひて事を生ずるが故に」と。^⑥珠云く、「戈矛は太平をはかるの道具なり、^⑦又云く、「正眼のものからみると、^⑧いらざることを、^⑨然れども、^⑩夫はさうでない、^⑪むねの中は八鳥、^⑫壇浦の合戦じやと。」^⑬二林捷徑、^⑭珠云く、「干戈を動ぜずして安然としてちかみちがあるであらう。」^⑮兔子何曾、^⑯溪云く、「兔徑ありといへども、^⑰只だこれ窟を離るる底の兔なきなり、^⑱以て頓脱英俊の學者なきに喩ふ。」^㉑珠云く、「穴にしゃがみたがる二障の穴にしゃがんでゐては、^㉒我が宗別の生涯あることはしれぬ、^㉓或抄に「兔子は學者修

ことを。僧云く、「未審し二林僧を見んには、作
麼生か接せん。」師云く、「手を把つて拽げども
入らず。」

乃ち云く、「洪波深き處 赤立す、妙、一毫
に資らす、香積世界に用を藏す。勝、一握
に盈たす、是の如くなるときは、則ち 担夷の
處 蠅、木訥の處 酬い難し。且く道へ、此れ
は是れ 何人ぞ」といつて、拄杖を卓す。

上堂 僧問ふ、「二月已に過ぎて、三月已に来る
桃花李花零亂し、桑條柳條陰を成す。萬
縁に涉らす、如何が願鑑せん。」師云く、「覺え
ず日又夜、争か人をして少年ならしめん。」僧云
く、「和尚豈に方便なからんや。」師云く、「生
薑終に辣きことを改めず。」僧云く、「一人あり、
十二時中、一物に依倚せざる時如何。」師云く

燈を用ふ。

① 晝夜相續。珠云く、「十二時中念々
相續、釋迦如来一度燈燈より乃至
達磨に至り、今に及ぶまで燈々盡
くることなしや。」溪云く、「元霄
の燈火に託して、學般若者の慧炬
相續して、曾て間斷なきことを表
す。」

② 驚然黒地。ふいつと、黒地は無念
無想のうちになり、溪云く、「暗地
を以て正位と爲す。」

③ 撞著露柱。溪云く、「大悟の端的を
表す。」珠云く、「露柱は本来の面目
じや、これに撞著せば、神儒佛一
時に祭ぬ。」

④ 怪得阿誰。溪云く、「元來自家更に
阿誰をか怪み得ん」と、珠云く、「佛
を怪まず祖を怪まず。」或抄に大悟
してあらばじや」と、生死の命根を
たへはてたところで、誰じやと怪
み得てん。」

行者にたとへる。
香林。「さやうりん」と讀むも
これは「かうりん」の方が正し
かるべし、香林澄遠和尚は雲
門僊に嗣ぐ、雲門に 十八年
も隨侍してゐた、香林寺は益
州の青城にあり、八十歳にて
示寂す、宋の太宗雍熙四年で
日本の一條天皇永延元年に當
る、この上堂は正月十六日な
り。

① 室内一輪燈。溪云く、「寂定甲
の智明を表す。」或抄に「衲僧
の命根を截斷する底の所問な
り。」この話は前にも見ゆ。
② 三人證龜。三人證なるときは
人必ず之を信す、珠云く、「お
らがところは貧乏で油がない
ので、三人龜を證して龜とな
す。」又云く、「これは直到句到
と云ふて、宗旨がある」と、
或抄に「言ふころはいかな
大智光明も二念に涉れどはや

を愁へたるなり、珠云く、「そこば
くのかなしじゆつない、畢竟雲
峰の全體作用の處を知るものある
まいと云ふて、虛堂こそ知つた。」
溪云く、「人を顧みざる處、却つて
これ接得なり、この實實に知り難
し。」

③ 把手拽不入。即今備進入せざるな
り、珠云く、「此の語極めて難透。」
禪門類聚に雪峰、衆に示して云く
「盡大地是れ解脱門、手を把つて伊
を拽げとも、肯て入らず」とあり、
或抄に「天下の學者門に入り得ず」
と。

④ 洪波深處。溪云く、「不思議自在の
妙機、所謂深深たる海底、行いて脚
を濕ほさざる境界なり、赤立は赤
體裸形にして立つたり。」珠云く、
「洪波は浩渺の大海、赤立は赤脚
裸形に獨立して」と。

⑤ 妙一毫。妙の字を打す、實は類な
り、珠云く、「妙と云ふも奇と云ふ
も、此の和尚面前には一毫のさき

程でもない。」

●香積世界、又是れ不思議自在の勝用なり。香積は維摩經の香積佛品に出づ、禪宗寺院では庫裏のことを香積界と云ふ、妙勝和尚は久しく典座(飯頭)をして居られた。藏用は珠云く、「大機妙用をかくしてしつこんで居られる、徳をつむむ陰徳家じゃ。」

●勝一擲。これは勝の字を打す、溪云く、「一毫一擲は細微の謂、言は此の如くの殊勝の事を以て自ら足れりと爲す。」珠云く、「殊勝な境界は妙勝面前一擲にもあたられぬ。」又云く、「大きな隱徳があれば、一擲は無一物のとこ、無盡蔵べや。」或抄に一擲は至つてすくなきを云ふ、不盈はあたらずと。

●如是則。是の如き境界なればなりと。

●坦夷處。溪云く、「嶺は山相對して危峻、又妙處を説く、所謂平坦却つて趣趣し難しと是なり。」珠

云く、「曉睡の處、孤危峻峻がありこれは洪波の句を受く。」

●朝納處。溪云く、「木訥は仁に近しとの語は論語にあり、木は質樸、訥は遲鈍、又勝の處を説く、所謂樸訥却つて剛對し難しと是なり、皆妙勝の處なり。」珠云く、「木訥は無言のところ、無碍辯才難酬はいかなく、四辯八音でも富樓那の舌でも應對はできぬこれは香積の句を受く。」

●此は何人。其の人に歸結す。

●卓拄杖。珠云く、「妙勝和尚でなくでどうするものじゃ。」

●桃花李花。珠云く、「もよのはなやすもよのはなが、うつくしいと思ふうちには、零亂とちつてしまふ。」

●桑條柳條。くはのえだややなぎのえだ、青々と芽をふいてさかえてきた。

●不涉萬緣。溪云く、「目前の萬緣に涉らず。」如何が見得せんとなり、「雲門は毎に僧を見て、之を顧みて

ふこと腹のへつた處へ食ふやうにとくとをさまらぬ、又うぬが習氣煩惱をばつめこみくして」と。

●乃舉。拈提なり。

●入龍。名は智洪、耶州の大龍山に住す、自兆志圓に嗣ぐ、徳山四世。

●色身敗壞。色身とは法身に(靈)に對する語で、この肉體のことを云ふ、地水火風の四大でできたもの、堅固法身。堅固は不滅の意なり、この靈魂は不滅なりと云ふ、又生死かはなれたるを云ふ。

●潤水。この話は碧岩の第八十二則にも出てゐる。ある禪僧が大龍山の智洪和尚に佛法ではこのわたしらのからだを靈魂と肉體との二つから見てこの肉體即ち色身の方は生理の上からは死んでしまへば共に腐敗し破壊してしまふがその靈魂即ち法身の方は死んだがらとてそれは滅びばせぬ常住不壞でありますが、さあ其の不滅の法身とは如何なるものを云ふのであります

即ち曰く、「靈」と僧擬議すれば門即ち曰く、「嘆」と、而して之を録するもの、願靈嘆と曰ふ、珠曰く「正與魔の時節じや、萬縁は直に見直に聞く、佛になさず、法になさず、時になさず、境になさず、なまで見聞す、或抄に、願靈は示まんの心なり。」

●不覺日又。これは三體詩の三に、又唐僧弘秀集三にも出てゐる五言律の詩なり、栖蟻といふ僧の宿ニ巴江一詩に曰く、江聲五千里、湯レ碧急三於枝、不覺日又夜、爭教ニ人少年、一汀風映月、兩岸子規天、山影似三相伴、濃遮到三客船」とこの詩に出づるなり、三體詩の雪心抄にはかう云つてゐる、「山中は兩岸の山が高うして、日月の光も見えぬほどに、晝夜を知らぬぞかくある處を舟にて透るほどに、頭が俄に白髮するぞ、さて人を少年のまゝにして置くことは、争でかあらん」と、珠云く、「是れ事理具

か」と問ふた、すると、智洪和尚は、「左様左様、この吾れ吾れの靈魂は堅固不滅であるから、吾人の死ぬると共になくなりばせぬが、しかしその靈魂が「死後に於て一塊の物體が」梅樂へ行つたり高天原に旅行したりするものではない野や山の花は、あれあの通りきれいに歸の如く咲きみだれて居る、谷川の水もあれあのとほりにすみきつて、きれいに藍色を流したように湛へてゐる、あそこに吾人の靈魂即ち堅固不滅の法身を現してゐる、現成公案そのまゝであると見たならば没交渉じやと或人亦いつてゐる。

●也苦地在。溪云く、「大龍法身に若ふ、未だ一場の苦屈を免れず」と、珠云く、「佛祖も粉骨碎身めされたくるしい、或抄に「大珠も屈を免れず」と。

●垢面漢。龍云く、「堅固法身の面目を表す、」珠云く、「問話の僧か罵の

足の蒼へなり、「祖師も多く問答あれども、此のやうな名句はあるまい教人少年で、再びわかうなることは無い。」

●和尚豈方便。珠云く、「これ和尚の様なえしれぬことをいはずと。」

●生薑終改練。溪云く、「始終把住、」珠云く、「うぬは鈍漢、いくら云ふてきかせても、利口にはならぬやつ。」

●不依倚一物。或抄に「獨立無碍の時」と。

●體臭布彩。溪云く、「此の意趙州放下着の如し。」珠云く、「鶴臭はふるいわんぼうで、之れば脱却、「ぬいでしまへ、」いやはや通身これ口じや、鶴臭は知見解會を云ふ、この解は前にもあり。

●細嚼確飢。溪曰く、「根本無明の糧食斷えざるに喰ふ、又の義に子細に此の旨を翫味せば當に飽參すべし」となり。珠云く、「諸方の安見解なつめこみくした故、おれが云

「鶴臭布衫、須らく脱却すべし。」僧云く、「既に一物に依倚せず、又箇の甚麼をか脱せん。」師云く、「細嚼飢ゑがたし。」

乃ち擧す、大龍因に僧問ふ、「色身敗壞如何なるか是れ堅固法身。」龍云く、「山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。」師云く、「若し是れ堅固法身ならば、也た苦地なること有り、雲黃に問ふものあらば、只だ他に對して道はん、垢面の漢。」我れ二十年、長老と做る、未だ嘗て人の與に過話せず。

上堂、擧す、烏白因に玄紹の二上座來參す、白問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「江西。」白便打つ、僧云く、「也た知る和尚に此の機要あることを。」白云く、「爾既に會せず、第二の禪客近前し來れ。」僧擬議す、白亦打つ、師云く、

なり、うぬはよこづらのむさくしい。」

我二十年。珠云く、「若いとさは筋骨ぬいて辛苦した故」又云く、「あゝ虚堂は七輪林の才とあるに依つて叢林の長老となる。」

未嘗與人。珠云く、「いひぞこなひはいかなくした覺えはないといふこと。」

烏白。馬祖に嗣ぐ。

江西。江西の方からきましたと、珠云く、「實頭の漢」と。

也知和尚。珠云く、「これは好く云つた、知はしり得たじや、機用は要領をじや」

如登龍門。淡云く、「共に容接せらるゝが故に、珠云く、「僧見ニ烏白一は師家も學者も中々大低の者ではない、如登龍門さりてけはしいものじやに二僧の志、貴いことじや、或抄に「烏白の機鋒の峻峻に比

ふは竹筒を打つて木響に方ぶるが如しじや、或抄に「筒は禁足安居を、木響は布袋觀音にたとへる」と。

深密處。珠云く、「二聖の境界の深密のところ。」

足可觀光。把任の處放開を見るに足る。珠云く、「とつくりよみ、へたなり。」

差之毫釐。珠云く、「的をいには毛すぢも差へば先きでは大ちがひ。」

辛辣。きびしい。

淡泊。よりつかれぬ。

無添泊處。珠云く、「この語は鶴林「白隱」天師も「此の語は虚堂の語に非ず」と仰せられた、三光「東嶺」先師は曰く、無能々見れば惡語にあらず、無添泊處とみれば惡し、難添泊とみれば好しと仰る。

舉一事則。珠云く、「事の現するときは理藏る、理の現する

す如しといふ字に心を付くべし。」

長年闍市。珠云く、「布袋はくる年もく、山に入られたことばない、まはがしい市中ばかりで」と。

終日魚籃。珠云く、「觀世音はくる日もくも、なまぐさいさかなうり。」

禁居安居。珠云く、「江西湖南禁足安居なんのまればじや」

富圓何事。二大士の高蹤に異なるが故に。

製筒木響。淡曰く、「皆これ眞妄一致の境界なり、夫の竹筒をうつて木響に比方する、その意入郎と安居と一致の境界を明めんことを要す。」珠云く

竹筒と木響は拆木のひびきじや、没滋味鐵櫃子と見たら大ちがひ。」又云く、「此の僧は二聖の市郎の佛事を認めて、己も二聖の境界を學ばんと思

ときは事藏る、或抄に「事に即するときは即ち理を失す、その事についてどうかういへば、はや機用を失す、理は理論で事は實際じや。」

指一機則。珠云く、「機は心の發する所なり、一機を捨て措くときは則ち其の作用を失す機は見性悟道失用は石佛も同じやうじや。」淡云く、「至理は無爲妙用は無作の故に。」

納僧家。珠云く、「納僧家はそれではならん、擧もせず措もせずじや、象外は格外じや、」

溪云く、「萬象の外、世智の及ぶところに非ず。」

妙入環中。或抄に「大道虚無をいふ、わの中なり、妙は環中に入るところにとゞまらぬ游と入の二字に著眼すべし。」

この語は莊子の齊物篇に「樞始めて其の環中を得て以て無窮に應ず」と云ふに出づるな

二僧の烏白に見ゆるは、龍門に登るが如し。」結夏小參、僧問ふ、「布袋、長年闍市、觀音、終日魚籃、禁足安居、當に何事をか圖るべき師云く、「筒を撃つて木響に方ぶ。」僧云く、「與麼ならば則ち深密の處、觀光すべきに足れり。」師云く、「之を毫釐に差ふ。」僧云く、「和尚の答處、辛辣なり、學人如何が淡泊せん。」師云く、「淡泊なき處に向つて領取せよ。」乃ち拄杖を拈じて云く、「一事を擧するときは則ち理に迷ひ、一機を措くときは則ち用を失す。」稍僧家、智、象外に遊び、妙、環中に入るも、猶ほ是れ家常の茶飯。端なく、釋迦老子に、無絲の線を以て、脚跟を擊却せられ、直に得たり、東西南北、去路從ふことなきことを。是に於て九十日の内、古塚を守

る鬼の如し、之を禁足、安居、剋期、取證と謂ふ、亦未だ知らず、證するところのもの何事ぞ。蕩然として、箇の危亡を顧みざる底あつて、圓覺の伽藍を掀翻し、平等性智を毀罵せば、山僧只だ退身分あることを得ん。何が故ぞ。」拄杖を卓して、老いて筋力を以て能と爲す。」

復た擧す、雪峯衆に示す、「盡大地撮し來るに、粟粒の如し、面前に抛向す、漆桶不會、鼓を打つて普請して看よ。」師云く、「雪老當時與麼、殊に知らず、今日あることを。二林今夏、亦諸人をして密密地に與麼ならしむ。但だ必ずしも普請せしめず、更に若し會せずんば、爾自ら雪峯に孤負せん。虚堂に於て、初より與ることなし。」

り、珠云く「妙處は無心無心即ち妙處」又云く「殺人刀活人劍、百萬の軍兵の中に入りて一日にころす。」
② 家當茶飯。未だ分外とせせず無端、ひよいと、元來さう云ふ者じやに理趣が出てと。
③ 無絲線。九十日の禁足安居を云ふ、漢云く「法を以て繫縛して禁足せしむればなり。」
④ 東西南北。珠云く「今日からは、まう東へでも西へでも。」
⑤ 無從。心のまゝにならぬ。正字通に云く「從はなほ因の如し」とあり。
⑥ 如守古塚鬼。まつくらい處へ入りて、死人の番人を見たやうに。
⑦ 未知所證。珠云く「何を悟るのじや。とんとすゝめん、別の事ではない。」
⑧ 蕩然。しかれども、又たちまちに。

① 箇不顧危亡。珠云く「箇の俗利の漢がありて、法の爲めなら切られても刻まれてもなんとも思はぬもの。」
② 圓覺伽藍。圓覺は前に見たり、根本大智なり、掀翻ははねとばすこと、珠云く「虚空へけとばしてしまへ。」
③ 平等性智。平等性智は後得智なり、毀罵はくそくと願みすと、この二語前の與麼錄に見えたり。
④ 退身有分。珠云く「虚堂もそれでばあとしさりするほどのことじや。」又云く「虚堂もはや。こくらうでござりましたと云ふて」と、或抄に「退休して吾れに代りて説法せしめんとなり。」
⑤ 老以筋力。この語は證記の曲禮に貧者は貨財を以て禮と爲す「老者は筋力を以て禮と爲す」と云ふに出づるなり、漢

曰く、「我れ老者の故に令を行はず」と、平語でいふと、年よりてうでだては無用といふことなり、ちからわざを以てはならぬことなりと云ふて大機用を奪ふ、珠云く、「是れ又今迄云つたのを坐斷したのじや。」又云く「夜深けて轉々單子の調に入る乎、實に斷腸々々。」
① 雪峰。名は義存、徳山宣鑒に嗣ぐ雪峰山は福州附近で、屋島の獅子岩に似た象骨巖といふがあると云ふ、雪峰は唐の穆宗長慶二年生る日本では嵯峨天皇の弘仁十三年に當る、支那の福建の泉州の人。
② 盡大地。以下この字解は或抄によると全宇宙のこと。
③ 撮來。手の指でつまみあげるなり來の字は助辭で、語勢をつよめる爲につかふ、これは「さつらい」と音でよむが正當なりといふ説あり
④ 粟粒。これも日本で云ふ粟粒ではない、もみがらをかぶつてゐる米粒でも米粒である。

① 面前。御互のめのまへ。
② 抛向。これも抛擲ではない、抛棄してあることで、存在して居ると云ふほどのこと。
③ 漆桶不會。さつぱりわからぬといふ意。これは、唐宋時代の俗語なり。日本俗語の「暗夜の鳥」「盲人の垣のぞき」などに似て居る、漆桶はうるして、黒くして木の性のわからぬ桶のこと、不會は黒くぬりであるから、木か金か石か何か一向わからぬこと。
④ 普請。あまねくたのむことで、寺中の僧侶が共同作業で掃除とか草引きとか薪仕とか圍頭とか米つきとかをすること、大仕事るときは合山禪僧の身仕度が出来れば、普請鼓と云ふて「太鼓の打ちかた」今日の普請と云ふ語は、禪宗から出た語なり。この公案の大體を話せばかういふことになる、雪峰和尚が座下の禪僧たちに示さるゝには、盡大地、この宇宙は廣大無邊

のひろきものであるが、指のさきでつまみ上げてみると、實に米粒の大きさがさしつかない、さうしてその米粒のやうな世界が、今めいめいたらの眼前に横はつて居るが、漆桶不會で、ちやうど盲人さんの垣のぞきと同じで、そのやうなわからずやには何か何やら一向がてんがまゐらぬわい、さあ米粒ほどの宇宙を、手指のさきで撮み上げやうと思ふならば、一つ普請鼓をならして、大衆一同總がよりでさがして看よと、この話は多分華嚴教の轉用であるから、一つ華嚴の立場から、文字の詮索をしてみるのも、第一主要である、この話は碧岩の第五則にも出てゐる。珠云く、「此の示衆は雲門宗の親元じや、意到句到徹細のところがある、三光先師も此の則は雲門言句の根本明かすといはれた。」
⑤ 殊不知。珠云く「虚堂もこの通りじや、虚堂ばかりではない。」又云

次の日上堂、「諸方は、期を以て効を取つて、時刻忘せず、我が者裏は、山邊水邊、便に従つて走作す。何が故ぞ。」拂子を撃つて、細を棄て大を録して以て知己を待つ。

上堂、僧問ふ、「臨濟會下、兩堂首座相見、齊しく一喝を下す、此の意如何。」師云く、「貧を聞はしめて富を聞はしめず。」僧云く、「僧あり問ふ、此の兩喝、還つて賓主ありや也た無や。」濟云く、「賓主歴然」と、又作麼生。師云く、「隻手にして日を遮る。」僧云く、「二林の頭首、峻機妙用、衆眼謾じ難し、還つて者の兩喝と是れ同か是れ別か。」師云く、「自ら他を勘して看よ。」僧云く、「人天衆前。」也

た伊を蓋覆すること得ざれ。師云く、「偏道へ那箇か賓、那箇か主。」僧便ち喝す。師云く、「

く「虚堂が今日如是なることを雪峯もとんと知らずして。」今日、淡云く、「今日は休歇了會の時節なり。」

① 與麼。珠云く、「法桶不會の處に坐せしむ。」

② 不必普請。密々に與麼に指示して、鼓を打つて普請して看せしめずとなり。

③ 更若不會。珠云く、「それでもまた不會ならば、我れとわがでしみのみこまねと云ふものなり。」又云く、「しかしながら三人よれば文殊の智慧と云ふから、えいとう、なうとうと普請して見よ。」

④ 於虚堂初。珠云く、「最初より少しもくいはない」と、底意は自知せよの意。

⑤ 以期取効。社期取證。

⑥ 時刻不忘。晨香、夕燈、夜禪晝師、珠云く、「十二時中、不妄念に住す。」或抄に「一夏九

句の期限なり。」

② 山邊水邊。遊山玩水の活潑僧の三昧なり。

③ 從使走作。淡云く、「安居の法縛を受けず。」珠云く、「人人すきなやうな心のまゝ、じつとしてほるぬ。」遊山して自由自在なり。

④ 棄納録大。淡云く、「上の兩節を結ぶ、言は聲聞の細務を棄て、菩薩の火行を記して、後の讀者を持つなり、珠云く、細或細行を棄却し、大知見を收録して、以て特知己は互に繋つ舞つするやうなものがほしい。」或抄に「大悟知己は大機用のある人。」

⑤ 上堂。この上堂は兩頭首の乗拂を謝するなり。

⑥ 臨濟。名は義玄、唐の宣宗咸通八年、日本の清和天皇、貞觀十年に當る、黃檗希運に嗣ぐ。

① 會下。臨濟和尚の下に就いて修行する雲水の僧たちを云ふ、會はあつまるで、よりあふこと、一會又は會裡などと云ふ。

② 兩堂。前堂、後堂、又は前版後版とも云ふ、これは會下の頭首たち一喝。これは臨濟門下の宗風、或抄に「箭鋒相拄」とあり。

③ 賓主不聞富。珠云く、「互に貧乏じまん。」又云く、「世間の貧にあらざる三毒をなくしてしまつて。」この語は前に見ゆ。

④ 賓主。珠云く、「賓家主家權實あり。」

⑤ 隻手遮日。淡云く、「強ひて賓主歴然と言ふ、猶ほ隻手を以て大日輪を遮るが如し」と。珠云く、「これが主賓が此の四字の内に賓主歴然。」

⑥ 峻機妙用。珠云く、「格外不測の働さ。」

⑦ 衆眼謾設。或抄に「人人見てあるが大眾皆知る。」

⑧ 與者兩喝。下のこの兩喝と、又云

く「臨濟下の僧と虚堂下の學者と同か別か」と。

① 勘他看。珠云く、「他は二林の頭首を勘辨して同か別かを。」

② 也蓋覆伊。淡云く、「宜しく分明に辨折すべし」と。珠云く、「人天衆前脱白露淨、さう云はずにあからさまに仰せられて、ようござる。」或抄に「善覆はひいき、ひいきしてかくしたりとて、かくさせまい。」

③ 偏道。もとへ立ちかへつた。

④ 那箇賓。或抄に「一喝の上で。」

⑤ 脫身鬼子。淡云く、「羅籠を出づる底の死漢、抑揚機權あり。」珠云く「脱卵の鬼の意か、前に云ふ脱卵なり、帳はつれ、亡靈中有にさまよふうろたへもの。」

⑥ 師子嘖呻。事苑四に、敵驕自在無畏、嘖呻はしかむうめくで、四體を展舒通暢する状なり、師子は文殊の智で、嘖呻がこはい、この語前に見ゆ。

⑦ 象王回顧。兩頭首各自に威勇を逞

うす、象王の廻るか如きは、身首俱に轉するなり、輕擧なき故に、以上二句とも華嚴經の法界品などにある世尊入師子嘖呻三昧などから出でし語か。

⑧ 象王は普賢の行で、回顧がいやらし。

⑨ 齊眉共鬪。淡云く、「短長高下なし兩頭首見處一般なることを表す。」珠云く、「せいくらべじや、兩頭首互に長短優劣はない。」

⑩ 鈞釜之作。釜は甕に作るべし、書言故事の子孫の部に父に過ぐるを鈞釜と爲す」と、注に鈞なり、或は云ふ、かまどの上に釜あり、借りて以て言を爲す耳、珠云く、「趙師の作略なり。」

⑪ 豎起拂子。珠云く、「それこゝじや見そこなふな」と。

⑫ 新羅人過海。淡云く、「那一人を指出し、然して蹤跡を以て見得べからず。」珠云く、「毛唐人が海外の雲のあなたへつゝばしつた、きのふ

①「脱身の鬼子、乃ち云ふ、師子嘯呻、象王回顧、此れ猶ほこれ、眉を齊うし躡を共にす。跨釜の作を見んと要す麼。」拂子を豎起して

②「新羅の人海を過ぐ。」
③上堂、僧問ふ、「一句子の偈に到るならば、拔舌犁耕、一句子の偈に到るなくんば、自ら殃禍を招く、甚麼邊の事をか明らめん。」師云く、「彼此出家兒。」僧云く、「和尚封疆を把定して、水泄を通せず。」師云く、「是れ少林の客にあらず。」

④乃ち舉す、仰山、東寺に參じて纒かに門に跨る、寺云く、「己に相見し了れり、上來するごとを用ひざれ。」仰云く、「與麼の相見、得ずといふこと莫し麼。」寺便ち方丈に歸つて門を閉却す、仰山歸つて瀉山に舉似す、瀉云く、「子こ

れ甚麼の心行ぞ。」仰云く、「若し與麼ならすんば、争か伊を識得せん。」師云く、「東寺、便ち方丈に歸る、千古の楷模、仰山、瀉山に舉似す、邪に因つて正を打す。」
⑤上堂、僧問ふ、「劉鐵磨、瀉山を訪ふ、山云く、「老牯牛汝來也」と、此の意如何。」師云く、「一箭紅心に中る。」僧云く、「劉鐵磨云く、來日、臺山に大會齋あり、山臥、勢を作す、磨便ち出づ、雲。」師云く、「果然。」僧云く、「謂つべし二り俱に作家。」師云く、「誘斯經、故獲罪如是。」僧禮拜。
⑥乃ち云く、「師曠が聰、離婁が明、甚に因てか眼あつて、終日鼻孔を見ざる、一轉語を下し得て、老僧に合ひ得ば、樹下塚間、偈に許す忘想することを。然らずんば、老胡望を

のそらに飛鳥のあとじや、又云く、「此の拈語を見そなふな、或抄に「既眼すれば則ち蹶過す、速疾の義にとる、新羅の人は能く舟にのる。」上堂、珠云く、「上堂中の絶妙。」

⑦一句子到偈。この語は應菴の華和尚の語なりと云ふ、珠云く、「佛祖も見る事ならぬ言句じや、それを言句上でさばいたら、偈に到るは學者を呼ぶ、或抄に「有説底。」
⑧拔舌犁耕、無間地獄のありさま、珠云く、「師家得報此くの如し。」
⑨無一句子到偈。雪竇の示衆、珠云く、「此の二句、百鍊千煅して初めて知るべし、或抄に「無説底。」

⑩招禍殃。漢云く、「有句無句共に誘法の故に、皆苦を受け禍を招くなり。」珠云く、「手前

⑪東寺。如會、馬祖に嗣ぐ、湖南東寺如會、唐の穆宗長慶三年八月十九日寂す、壽八十、教して傳明大師と謚す、日本の嵯峨天皇弘仁十四年に當る、與麼相見、これは本は莫不當否に作る、「珠云く、「己相見すと、その相見ならば、そりやさうとして、與麼の相見、こりやでさ中すまいかいや。」
⑫子。是甚麼。珠云く、「仰山おのしが返答はあまりぬるこいおのしが心根はどつじやぞ。」
⑬若不與麼。傳燈錄には「他となす、即ち東寺を指す、珠云く、「かうらしてみれば、向の手本がみえませぬ。」
⑭便歸方丈。珠云く、「そのするどさ、寒毛卓立する。」
⑮千古楷模。楷は法なり、摩竭に室を掩ひ、少林に面壁等は

から拈へ出す洋銅じや。」
⑯彼此出家兒。漢云く、「言句毎句、彼此皆佛法中の入、豈に患磨の事あらんやの意なり、正しく兩段の語を奪得す、珠云く、「一句子を得たも得ぬも、三界出離のみの見じやなげなれば三途の衆生も、眞如の日は照りかややいてゐる、或抄に云ふ、「みな佛法中の人と用ゐて云ふて、上の二件をさす。」

⑰和尚把定封疆。漢云く、「問語を領受せざるが故に、爾か云ふ、珠云く、「海外でも手形があれば通行ができることじやに、餘り和上はきびしい、不自在なことじや。」
⑱不是少林客。漢云く、「不知音底、作家の禪客にあらず」と、珠云く、「うぬは達磨の子孫ではケい。」

⑲乃舉。拈提なり。

⑳千古の法條と謂ふべし。
㉑舉似瀉山。珠云く、「やう／＼手前の無調法となほした。」
㉒因邪打正。權道なり、邪に因るとは經に反するの謂なり、打正とは道に合するの謂なり、其の意見るべし、珠云く、「三光先師も「是れ好心にあらずと入りたい」と仰山邪曲の心瀉山に何の心行ぞと云はれてやう／＼とりなほした、或抄に「邪は仰山瀉山を、正は東寺を指す」と。
㉓僧問。この話は碧岩第二十四則にも出でゐる。
㉔劉鐵磨。尼なり、徑山の二世洪諱に嗣ぐ、諱は瀉山に嗣ぐ、久しく參じて機鋒峭峻なり、人號して劉鐵磨と爲す、瀉山を去ること十里にして、庵を卓す。
㉕瀉山。湖南省の潭州長沙府にあり、岳州の東南にあたり、

失せん。

上堂、僧問ふ、「久雨晴れざる時如何」師云く

「庚に逢はば、則ち變せん。」僧云く、「久雨忽ち

晴る、時如何」師云く、「處處以て皮舄を晒眼

すべし。」僧云く、「與廢の答話、諸方未だ肯は

ざることに在り、師云く、「鶏を割くの及」僧云

く、「二祖禮三拜して、位に依つて立つ。」師云

く、「漆器を呈す。」僧云く、「達磨云く、「汝吾が

髓を得たり」と。師云く、「覆水收め難し。」僧云

く、「學人纔に和尚の陞堂を見て、便ち出でて禮

拜す、箇の甚麼をか得ん。」師云く、「他時退

歎することを得ざれ。」僧云く、「且喜すらくは

水米交りなきことを。」師云く、「早くこれ退

歎了れり。」僧、便ち喝す、師亦喝す。

乃ち云く、「山僧、尋常、曾て人を抑逼せず、

尼の尋には何とも答へず、「あ

今日はくたびれた」と云は

ねばかり、大字なりに臥るま

ねをした、流石の牝牛も閉口

してすぐさま歸つてしまつた

と云ふ。

● 磨便出。とつくり御休みなさ

れと、

● 要。如何ととがめること。

● 果然。そりや見たか。

● 誘斯解故。漢云く、「胡亂に證

明する故に、これは法華經の

譬喩品にある文なり。」珠云く

「鶴林大師もこれは東山下の

古實と仰せられた、勿體ない

大切な法門をそしる故、其の

罪のがれることはならぬ。」

● 乃云。これは前の提綱なり。

● 師嘆。これは孟子の離婁に出

づ、師嘆は管の樂師、離婁は

古の明日の者。

● 終日鼻孔。聰明此の如くなる

も自己を見ず、珠云く、「一朝か

ら晩まで、ひるひなか明かな中に

居ながら、不見鼻孔で、無理かあ

くたいが、小魚大魚を呑む、合點

せねばいけぬこと。

● 合得老僧。珠云く、「おれににつこ

りさせたならば。」

● 樹下塚間。これは十二頭陀の行處

に五つあり、一には蘭若、二には

塚間、三には樹下、四には露坐、

五には墮坐、出家の居るところは

どこでもかしこでも。

● 許備妄想。坐禪觀念を云ふ。

● 老胡失望。老胡は達磨を云ふ、失

望は吾れ本技の土に来る、法を傳

へて迷情を教ふの望を失するなり

久雨不晴時。珠云く、法にかけま

い。「又云く、「さてもくふると云

ふものではない、はてしのない時

はいがせじや」と。

● 逢庚則變。庚は變更之始めなり、

十千は戊己を中と爲す、中を過ぐ

るときは則ち變ず、故に之を庚と

いふ、又庚は巽卦に配す、巽は

風なり、兩風を得て晴るるなり、

庚は更なり。

● 處處皮舄。晒は曬に作るべし、さ

らすこと、履は明なり、さらすな

り、皮舄は糞なり、處處は珠云く

「血滴々視言じや。」

● 諸方未肯在。そのやうなざつとし

た答話は人が肯ふまい。

● 別鶴之及。小器何ぞ大を解するこ

とを得ん。珠云く、「それつらのこ

とを取るに足らんと云ふことか。」

● 二祖禮三拜。前に見ゆ。

● 呈法器。漆桶一般、無分時不淨潔

珠云く、「二祖破道具をさし出し

た。」

● 覆水難收。初祖の錯りて許可する

を抑ふ、珠云く、「達磨も云ひそこ

なひ、こぼした水を再び瓶へば入

れにくい。」

● 得箇甚麼。皮肉骨髓か、又は別に

此ある麼。

● 不得退歎。退歎は俗語で云ひなほ

し、又はれがひさげのことなり、

或抄に「汝分明に白狀せよ、退い

てかげするな。」

● 且喜。珠云く、「それはまあうれし

いことなり、弄して云ふこと。」

只だ退歩して楷磨せしむ。但だ心死し意消すること一番子を得て、自然に胡亂に匙を拈じ筋を放たざれ。然らずんば、盡くこれ念話の杜家ならん。

上堂、擧す、洛浦因に龐居士來參す、禮拜して起つて云く、仲夏毒熱、孟冬薄寒。浦云く「錯ることなかれ。」士云く、「龐公、年老んたり。」浦云く、「何ぞ寒には便ち寒と道ひ、熱には便ち熱と道はざる。」士云く、「聾を患ひて作麼かせん。」浦云く、「偏に三十棒を放す。」士云く、「我が口を啞却し、偏が耳を塞却す。」師云く、「洛浦當時、若し龐公年老んたりといふ處に向つて、一喝を下し得ば、彼此の葛藤を免れ得ん。」

上堂、僧問ふ、「熱の時、寒甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「偏我が痒處に抓著す。」僧云く、「寒の時、熱甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「乾糲頭上に甚麼の汁をか覓めん。」僧云く、「寒暑に涉らざる底の人、甚麼の處に在る。」師云く、「闍市裏に尋取せよ。」僧云く、「尋ね得て後如何。」師云く、「三界の二十五有を出でん。」僧云く、「也た未だ是れ極則にあらず。」師云く、「作麼生か是れ極則。」僧便ち喝す。師云く、「也た未だ是れ極則にあらず。」乃ち擧す、天童の啓和尚、因に僧問ふ、「學人卓卓として上來す、請ふ師、的的、啓云く、「我が者裏、一同して便ち了す、甚麼の卓卓的的とか説かん。」僧云く、「和尚與麼に荅話せば、更に艸鞋を買つて行脚せよ。」啓云く、「近前來。」僧近前す、啓云く、「老僧與麼の荅話、甚

ル楷磨淨盡せしむ、又或抄に回光返照して、切礙疎磨するの義」と。
⑦心死意消。珠云く、「心識は七識なり、懸崖手を撒するの時節なり、意消は第六識なり、或抄に云く、「無心至極になつたらばなり、大死一番と同じ。」
⑧胡亂拈匙。これは開單展鉢なり、珠云く、「胡亂に禪宗の飯をくはん。」或抄に云く、「一回悟得するときは、左右源に達ふ。」匙はさじ、筋ははし。
⑨念話杜家。念話は學語の謂なり、杜家は杜撰胡亂底なり、念は虚念、話は話頭なり。
⑩洛補。夾山善會に嗣ぐ、唐の光化元年十二月二日寂年六十五名は元安、臨濟禪師の侍者たりし人、「この問答は親切血滴々の問答なり」と珠長老はいへり。
⑪仲夏毒熱。珠云く、「一氣含ん

で、以來言中にひびきありじや、「この仲夏は五月菴だあつし、孟冬は十月うすら寒いこと。」
⑫莫錯。これ直念を云ふまいぞ。
⑬年老。珠云く、「この語はすまじい。」又或抄に、「萬事御ゆるし下されじや。」又云く、「或抄に陷虎の機あり。」と
⑭放爾。或抄に「偏に放すといふも與ふの道理。」
⑮愚聾。つんばのまねをして何にしやうぞと、洛浦を罵るなり、ききわけぬを云ふ。
⑯啞却我口。珠云く、「おれが口をあかせにや、そこもとの耳をふさいでやる。」溪云く、「彼此便を得ず。」
⑰彼此葛藤。彼は龐居士、此は洛浦、葛藤は言語を云ふ。
⑱熱時寒。珠云く、「悪い時壞しいのもどこへゆき申すぞ。」

①偏我痒處。溪云く、「一手搔。」珠云く、「そりやあつばれの氣の付きところ、或抄に「僧を褒美するなり」と。
②寒時熱。珠云く、「貧の時、定力はどこへ。」
③乾糲頭上。溪云く、「一手搔、乾糲はざるいかき、めをこまかにあむかこ。」珠云く、「さう逐ひまはつてもいけぬと。」
④不涉寒暑。珠云く、「本地の風光、本来の面目。」
⑤闍市裏尋取。溪云く、「那一人の所在地を直示す。」珠云く、「三條四條の店を尋ねて見よ」と。
⑥三界。欲界、色界、無色界、これ生死の窠窟なり。
⑦二十五有。略頌に云く、「四洲四惡趣、六欲、并に梵天四禪、四空處、無想及び那舍。」
⑧也未是極則。珠云く、「向上の宗乘ではござらぬ、螢火を以

て日月に向ふやうなもの。」
⑨便喝。珠云く、「此の妄喝なり、うめが喝を盲云ふても、也た未だこれ極則にあらずじや。」
⑩天童啓和尚。名は咸啓、洞山价に嗣ぐ。
⑪僧問。會元の本傳に龐大德問と作す。
⑫卓々上來。卓は特立なり、珠云く、「佛法に依らず、今時那邊に依らず、乾坤只だ一人。」
⑬的的。溪云く、「端的底のみにして、物を指出ること莫れ」と。珠云く、「正的、たしかなところ。」
⑭一同便了。珠云く、「佛病風病ぐわりとこぎだした。」溪云く、「尙ほ更に問話の中の伴子を掃へ。」
⑮與麼荅話。珠云く、「あゝそんな荅話では、宗門の大事はおほつかない。」
⑯老僧與麼。珠云く、「近前した

廢の過かある。僧無語、啓便ち打つ、師云く
者の僧喚べば、既に近前す、何ぞ便ち本分の
艸料を與へざる、只だ刃を下すこと嚴ならざ
るに因つて、返つて暗に墻壁を窺はる。
解夏小參、各各鼻貫已に脱す、秋風影の裡
尾を擺ひ頭を搖かす、老安、則ち善能く
跡を訪ふと雖も、終竟に尋ね難し、寂子、
只だ樹下に軀を忘るゝことを知る、何ぞ曾
て牧することを解せん。露迥迥、雲山目に
溢る、飽胸々、野艸天に連る。須ひす短笛
歸を催すことを、千聖も也た覺むる處なし、
驀然として、傅公子出で來つて道く、汝等
頭角の士、九十日の内、此の構陰に託す、未
だ嘗て半蹄の功の、我が常住の一塊の泥埵
を踏破すること、何ぞ此の如く快活なること

とるに於て、なぜ一踏に踏
倒せなんだ。」
僧無語。珠云く「此の僧こま
つての無語でもない。」
本分艸料。淡云く「艸料は資
根なり、直に聰明意識、思量
計較の外に向つて棒を行じ喝
を下して學者をして今時の人
情に墮せざらしむ、之を以て
入道の資糧と爲して、水牯牛
の飽足するに至る、故に本分
の艸料と曰ふ。」珠云く「ちや
うとかひばのあてがひ處、手
おくれがした。」
下乳不嚴。珠云く「足もとが
ゆるかつた故。」
返時墻壁。淡云く「這の僧無
語、其の實は成啓の墻壁を窺
ふことを要す。」珠云く「此の
僧に足もとを窺はれた、さて
うかゞはれたならだじか、
此れくらゐの坊主に見られて
も大事ない。」又云く「暗はど

一三四
こやらがじや。」
各各鼻貫。淡云く「全く牛に
寄せて言を立つ、今解制、各
各隨往無礙、騎牛の鼻案已
に脱して、所繫なきが如し。」
珠云く「解夏のことゆへ、各
各ははなつらをつはなしてし
まつて。」
秋風影裡。解夏の節、すゝ風
はそよぶく。
擺尾搖頭。各自便を得るなり
自由自在に東西へ。
老安。長慶大安禪師、又懶安
と號す、百丈海に嗣ぐ、水牯
牛の因縁を云ふ、會元本傳に
出づ。
善能助跡。跡は跡なり、珠云
く「百丈に牛の行く方を問ふ
ことは根業をからした。」
終竟難尋。珠云く「全牛を尋
ねがたく、こまりほした。」
寂子。仰山惠寂牛を看るの因
縁を云ふ「類聚」牛車に出づ。

を得たる。山僧、只だ他の與に一轉語を代るこ
とを得たり。」
復た徳山托鉢の公案を舉して、師云く「徳山
師子遊行すれば百獸、股栗するが如し、嵩頭、
其の威を假つて、陰風人に逼る。後の來る
もの、土を捧げ木を掲ぐ。」
上堂、僧問ふ、大隋、龜を蓋ふ時如何。師云
く、「神照に此の作なし。」僧云く、「初秋夏末
禱子往來す、牢く者の一轉語を記取して、諸
方に舉似せん。」師云く、「苦なる哉。」
乃ち舉す、天台の幽棲和尚、一日鐘を鳴して
上堂、衆纒に集る、棲云く、「誰か鐘を打つ。」
僧云く、「維那。」棲云く、「近前來。」僧近前す、棲
遂に一掌を與へて方丈に歸る。師云く、「賤き
ことは泥沙の如く、貴きことは金壁の如し。」

樹下忘塵。珠云く「山河大地
一全身となりては、別に身
のあらうはづなし。」
何曾解牧。珠云く「かう人に
かはるる牛があつては、全牛
でないから、しらぬはづ。」
露迥迥。珠云く、面前まるは
だか、十方世界、森羅萬象、
或抄に「牛をぐわらりと山野
に放ち出す、活脫なるを云ふ。」
雲山益目。珠云く「雲又雲、
山又山、首乎尾乎、見わから
ぬ。」
飽胸々。水牯に飽いて、熟睡
するなり、胸は鼻息なり雲山
も野艸も放牛をいふ、珠云く
「妄想煩惱、みなわが草料と
なる。」
不須短笛。珠云く「本分の家
山へかへつてのなんのと云ふ
まい、さあ大ひまあいたのな
んのと云ふまい。」
千聖也竟。珠云く「どこにい

一三五
つたか牛に逢ふと、あとかけ
もなくなるなり。」淡云く「個
等踏人、自ら水牯牛純熟す、
牧笛を吹いて歸を催すことな
かれ、たとび老安寂子等の如
き、千聖も也た這の牛跡を覓
むる處なし。」
傅公子。開山の傅大士を呼ん
で證據せしむ。
頭角之士。淡云く「牛に託し
て出群超邁の衆を稱揚す。」珠
云く、「一等の中のめだつも
の。」
託此構陰。九十日の内よりし
てこの實林に來くなり。
半蹄之功。或抄に「九旬の禁
足安居を言ふ」と、剋刻取證を
云ふて半分足動かすと、功は
功勞なり、忠云く「未だ曾て
修行工夫の効あらざるか云ふ
と。」
一塊泥埵。埵は塵なり、一と
かたまりの土と云ふこと。

①如此快活。踐履快活、輕脫の故に一夏行いて未だ會てに行かず、珠云く、「擺尾搖頭のこきみよい働手。」

②只與他。他は一衆を指す、然も只だ無言を以て代語と爲す、珠云く「だれにも言ひもせずと大きに云つておいた。」

③德山托鉢。この公案は無門關にも出づ、この末後の句あり、後果して三年にして遷化すといふ。

④敗果。あしふるうなり、戰栗恐懼するを云ふ。

⑤險風逼人。師子の殺氣、除風怒號す、珠云く、「師子の威をかかり乍ら兎角に豪勇を働いた。」

⑥後之來者。これは雲門法眼の兩家を云ふ。珠云く、「それからして後の列祖。」

⑦抹土揭木。又是れ師子の威風なり他家の兒孫、或抄に、「普請の手つだひなどしてまはる、此の如くの話を使ひ得ずして、却つて此の話

つかはる。」珠云く、「いつかどやると思はれても、やつぱり岩頭しりつばに付いて、げびた日備とりわざをするやうなもの。」

⑧大隋。名は法眞、神照大師と賜ふ長慶大安に嗣ぐ、本傳に座側に一龜あり、僧問ふ、「一切衆生皮骨をつむ、這箇衆生益としてか骨皮たつむ。」師、神履を拈じて龜の指上をおほふ、僧無語、蓋は佛燈に著とあり。

⑨龜。或抄に、「萬物それん」の上で、烏は黒く鶩は白く、長者は長法身、短者は短法身なれば、疑はしきことはなきに甚としてか骨皮を裏むなど云ふは、此の龜の上にならぬ皮を蓋ふたやうなといふ示しぞ。」

⑩神照。大隋師の賜號は神照大師劉主之をたもふ、漢云く意は大隋と龜を蓋ふと一般、珠云く、「神照が神履をおいたと云ふことばきかない。」

⑪初秋夏末。行脚の僧の出替りどきなり。

⑫生者一轉語。珠云く、「めづらしい答話でござるから、この神照、無二此作」と云ふ一轉語をばじや。」

⑬苦哉。漢云く、「僧の領話せざることを嘆息す、珠云く、「あゝそれは迷惑なことでおじやる。」

⑭天台顯機。名は道幽、洞山价に嗣ぐ、傳燈十一、師の傳に云く、「師將に滅を示さんとす、僧あり、問ふて曰く、和尚百年の後、什麼の處に向てか去る、師曰く、「調然調然と言ひ訖つて坐亡す。」

⑮誰打鐘。珠云く、「無風波起。」

⑯賤如泥沙。珠云く、「剛捷のはたらし、又云く、「不知音のものは、或抄に、「最初の老婆心切の處。」

⑰貴如金壁。漢云く、「法爾分曉、珠云く、「知音の者は、或抄に、「與一掌一歸三方丈一處。」

⑱當時。珠云く、「虛堂向天台一背後不レ合レ掌。」

當時若し 安詳にして、座に登らば、者の僧を活得せん。」

中秋上堂、僧問ふ、「天上は 月圓に、人間は 月半なり。是れ人 有ることを知る、未審し 中間の樹子、甚麼人にか屬す。」師云く、「契券あるもの得、僧云く、「恁麼ならば則ち天香の桂子、落ちて紛紛。」師云く、「備 早く錯つて認め了れり。」僧云く、「馬大師、月を翫ぶ次で一人は道く、 正好供養と、一人は道く、 正好修行と、一人は 驟歩して便ち行く、此の意如何。」師云く、「一畝の地、 三蛇九鼠、僧云く、「馬大師道く、「經は藏に入り、 禪は海に歸す。 唯だ普願のみありて、 獨り物外に超ゆと。」師云く、「驢を打つて馬の如ることを聽す、僧禮拜す、師 嘘一聲す。」

安詳登座。安詳は安閑審密にして、敢て卒業ならず、珠云く、「鐘が鳴つたら座に登りて說法しがよい、鶴林大師も云はれた、虚堂のこの拈語は狼毒の味乎、醍醐の味乎」と、安詳はやすらかに、又はしづくと、漢云く、「剛捷當時、貴賤辨ぜず、金沙分たず、卒業にして作す、故に却つて者の僧を打殺す、若し安閑審詳にして作さば、者の僧を活得せん」と。

①月圓。まるくしてかけめはな

②月半。ちやうど一月の三十日が半分なり。

③知有。人人箇々。

④中間樹子。漢云く、「月中の桂樹に託して那一物を表す。」

⑤契券。漢云く、「心印を得ふるものなり、珠云く、「わりふ、段文じや、又云く、「本地風光

本來面目と云ふ手形なもたれば。」

⑥恁麼則天香。漢云く、「恁麼ならば則ち中間の樹子、我れに屬せん」となり、珠云く、「さやうなれば、月の下をてらす如く、人々本具佛性でござるで、それは心易きことでござる。」又云く、「たれ」が手にも入るであらう、桂子はかつらのみなり、もくせいなり。

⑦早錯認了。珠云く、「そりやみたか、わるいがてん。」

⑧馬大師翫月。この縁はこの縁の續編并に標山の後録に出づ。

⑨正好供養。知藏西堂。

⑩正好修行。百丈。珠云く、「好き修行のしどころでござるます。」

⑪驟歩便行。南泉。ちよこくはしり。

⑫一畝之地。珠云く、「馬大師の會下には百丈、知藏、南泉の

乃ち曰く、「日と運を雙べて、物を鑑して私なし、自らは是れ暗中の人、冬裘を賣めて夏葛に比す、此の良夜、衆星、推し進るの時に當つて、憐むべし、華亭夢を見ざることを。冷しく海濤を照して空しく渺瀰たり。」上堂、僧問ふ、資福の刹竿を望み見て便ち回るも、脚跟下、好く三十を與ふるに、此の意如何。師云く、「臭肉蠅を來す。」僧云く、「雪峯を望み見て、便ち主事に參すと、又作廢生。」師云く、「何樓の漆器拈出することを休めよ。」僧云へ、「寶林の雙楊塔の尖を望み見て、便ち悟り去る。」師云く、「沙裏を金を淘る。」僧云く、「和尚也た是れ、年老いて心孤なり。」師云く、「人の過を宣ふる、未だ好手と爲す。」乃ち擧す、欽山、嵩頭雪峯と同じく、徳山に

と云ふすまじいものがある方語に狼藉不少。
 ③三蛇九鼠。珠云く、「その外、蛇や鼠のやうなものはいくらもある、ましらぬいさもよく集りある、此の語に故事あり、爾雅の翼註に出づ。」
 ④經入藏。珠云く、「經相に達したるは知藏西堂。」
 ⑤禪歸海。我が宗の大事は百丈懷海の腹の中に收めてある。
 ⑥唯存普願。南泉普願。
 ⑦獨超物外。珠云く、「如來禪に依らず。祖師禪に依らず。」
 ⑧打聽聽馬知。驢は南泉を馬に百丈知識を指す。溪云く、「馬祖三大老を品評して、傍觀の舌をばげまさんことを要す、三師同得同證、豈に優劣あらんや。」
 ⑨嘘一聲。からうそふく、珠云く、「あつばれなり、まだのことたことがある」と。

一二八
 ⑩與日雙運。溪云く、「月なり、全く形容寫して、佛事を作す。」珠云く、「日上り月下る、互に休息はない。」運は運行なり、自己の靈光に比す」と或抄にいへり。
 ⑪靈物無私。溪云く、「瓊樓茅舍天鑑私なし。」珠云く、「光明遍照、十方世界、萬物をてらしめてえこひいきはない、天子將軍のすみかでも、山がつ賤のわらやでも」と。
 ⑫自是暗中人。珠云く、「此の如き明中に居ながら、人々まつくらい生死のちまたにうろつく衆生じや、暗中の人とは本心具足の日月じや」と。
 ⑬貴冬斐比夏葛。珠云く、「一超直入の妙道を呵責して、布施じやの持戒じやの、念佛懺悔じやのと云ふ、方便乘のくらべものにする。」又云く、「面目をみるはむづかしい、心安い

到つて、乃ち問ふ、「天皇も也た、與廢に道ふ、龍潭も也た、與廢に道ふ。」未審し、徳山作廢生か道ふ。徳山云く、「汝、試に天皇龍潭底を舉せよ看ん。」欽、擬議す、徳山便ち打つ、遂に延壽に至る、云く、「是は則ち是、我れを打つこと太煞だし。」嵩頭云く、「爾與廢ならば、他後徳山に見ゆと道ふことを得ざれ。」師云く、「欽山只だ箇れ擬議す、徳山嵩頭俱に、敗闕を納る。若しこれ、龍門の上客ならば、必ず爲に點頭せん。」其れ如し響を聴くの流ななば、區字に墮在せん。」
 ①上堂、「九九の節、之を重陽と謂ふ、陽徳既に剛、元化以て治し。衲子分上、甚麼邊の事をか明め得ん。」柱杖を卓して、「交。」
 ②上堂、「一大藏教、箇の、鴉鳴鵲噪を出でず。」

念佛がよい」と。溪云く、「味者は天真任運、各その時節あることを知らず、漫に中秋を將つて當夜に比するなり」或抄に「冬表は修行に、夏葛は無爲無事に比す。」
 ②當此良夜。中秋明月。
 ③衆星推過。衆星は廿八星、月の光に推されて光を失す、溪云く、「其の明を月過るなり、月明なれば、則ち星稀なる故に」と。
 ④可憐。悲憐すべきなり、珠云く、「此れは虛堂家裏の大事、そそに見るとけがなする。」
 ⑤不見華亭夢。船子徳誠禪師の事なり、前の中秋に見ゆる因縁なり、參照すべし、「那一人を拈出す」と溪は云へり。
 ⑥冷照海濤。冷は清寒、滲は水長、瀾は水の盛なる貌、溪云く、「良夜好月憐むべし、滿船載せかへる底の人を見ず、海

濤の渺瀰たるを冷照するのみ意は深く學生疑々とし、明月に對するもの少しなることを嘆するなり」と。珠云く、冷照はばらばたまでもしみわたるほど照しぬいた、海濤濤はうなばらのすごとくと廣き氣色みながめやる。」
 ⑦資福。資福第二世、名は直達第一世資福の如實に嗣ぐ、仰山四世。
 ⑧望見刹竿。刹竿には刹摩釋して此に土田といふ、竿は梵には刺葱豚、此には竿といふ、幡の柱なり、珠云く、「川向から資福寺じやさうなと見たくらゐ取りてかへるはほんたうに到り得たと云ふものでなし。」一見便見の刹竿の刹竿でも、刹竿ははたをたてるはしらなり、傳灯には「隔江見資福刹」とあり。
 ⑨好與三十。吾が門では三十棒

九經諸史、簡の之乎者也を出でず。會得せば、雲は華嶽に歸り、水は瀟湘に到る。然らずんば、伴あらば即ち來らん、切に須らく記取すべし。

達磨第四忌の拈香、一圓相を打して、香至國王の子、神光斷臂の師、耽耽たる面背、恐らくは亦これ伊、兒孫必ずしも更に疑を懐かざれ、故に我が達磨鼻祖圓覺大師、滄く靈機を發して、有無の宗頼に釋く、廓然無聖第一の義昭然たり、前梁後魏、人我相高ぶり、此土西天、是非競ひ起る。玆の末運に丁つて、選かに餘光を想ふ、藻を列ね藥を陳ねて、用つて慈陰に酬ゆ。

上堂、舉す、南泉因に兩堂首座、猫兒を爭ふ、泉云く、道ひ得ば即ち斬らし。兩堂無語

なくれるによい、況や江を過ぎ来るをやじや。

吳肉來龍。寶福與慶に云ふ、その實は人を引かんとを要す。

聖見雪峰。珠云く「方丈の門にまたけて、ちらりと望み見て、」主事は太原乎なり、前に見ゆ。

何禮漆器。むかし宋朝に何禮といふあり、その下に賣る所の物は虚偽多き故にいふ、今據は廢して語なほ相傳ふと書言故事に出づ。溪云く「虚偽の話、拈出すること休めよとなり」珠云く「安物買ひの錢失ひ、外の町へしつてゆげ」と。

雙楊塔尖。行道が塔尖は末をいふ。

沙裏淘金。沙中に向つて金を求むるときは、永劫それ得べけん乎と、僧の得悟を抑ふ、

珠云く「汝の悟りは沙中に金を求むるが如し、決定之なし」

年老心孤。孤危峭峻、氣が短かになつて。

宣人之過。珠云く「人のあなを云ふ、あんまりできたことでない。」

欽山。名は文選、洞山价に嗣ぐ、年二十七にして澧州欽山に止る。

乃問。珠云く「よい所問、尤の評判。」

天皇。名道悟、石頭遷に嗣ぐこの名の天皇は天皇道悟と云ふ人、馬祖下にあり「くわうとよむべし」と珠は云へり。

興慶道。言外の句を指す。

龍譚。名は崇信、天皇悟に嗣ぐ。

擬議。珠云く「ぐうぐう」と云ふなり、この擬議で、宗旨が手に入る、此の擬議で徳山も存分手が出て。けふの今日

もわがみ奉つることじや。」

徳山便打。珠云く「腰骨を打ちのめした、遂に腰骨を傷損したで、」

延壽堂(病僧寮)へかきこんだ。」

是則是。珠云く、欽山云く、師家の學者を打つは、無理はない、あまりひどい。」

他後徳山。珠曰く「これから徳山の室中へ入つたと云はれぬ。」

欽山只箇。溪云く、「別の造作なし。」珠云く「此の拈語奇妙きいな。」

俱納敗闕。溪云く「強を仰へて弱き扶く。」珠云く「此の拈語を知らんと思はゞ虚堂の堂に上り室に入りて共に行け。」

龍門上客。溪云く「心空及第の上流を云ふ。」龍門とは三級といつて支那の河南省龍門縣に屬し、むかし禹か黄河の大汎濫を治めたとき龍門山の險をうがつて三級にしたところを云ふので、禪宗では悟道上の難關にたとへて云ふ。

必爲點頭。此の旨を領會して必ず首肯すべし。

具如懸磬。溪云く「虚假不實を認めて心間を得ざる底なり」、珠云く「佛法を推量する底。」

一在隔字。境界に墮して別の出身の方なきなり、前の結夏にも見ゆ。隔字は珠云く「迷悟の窠窟」と。

上堂。重陽の節。

九九之節。九月九日、九は陽の數なり。

陽德既剛。忠の曰く「二の九みな陽數故に陽剛といふ。」

元化以洽。元者萬物の始め、化は成なり洽は浹なり、重陽の故に、陽德剛健にして、息むことなし矣、之に依りて、萬機の元化、洽浹周備す、珠云く「乾の四徳の一、」又云く「一元氣の生成。」

拈子分上。珠云く「坊主共此の中坐禪をする、どのやうな坐禪するや。」

交。交參して見ゆと、是れ索語に

似たり「交なり、泰なり」と或抄に云ふ、又鐵櫃子。

一大藏教。珠云く「五時八教三百六十餘會。この上堂は絶妙なり、天魔波旬もきもひやす。」

鷄鳴散。此は抑下して爾が云ふ阿彌陀經の水鳥樹林、念佛念法のやうに。

九經諸史。天下の治亂を記する詩書禮樂三史及び二十一史なり。

不出箇之乎者也。珠云く「本文眞實のことではない、助字じや、舞曲のはやし、淨瑠璃の「ちんてんと」なり。無着忠曰く「内を言へば大藏經、空しく名言音聲のみあり、外を言へば九經諸史、徒に閑文字のみあり、是の故に内外典籍元實用なきなり。」

雲歸華嶽。華嶽は西安府に在り、即ち西嶽なり、此の處を會得すればなり、ひぐれの比ながめやればひらり／＼と雲は西の隅へ收る、又云く「こりや向上の聯句じや。」

- ① 水到瀟湘。瀟湘は長沙府の湘江、永州に至りて瀟水と合して瀟湘と云ふ、日本で云ふならば、さらり／＼と鴨河は浚河へ流れこむ、以上は珠長老の抄なり、溪云く、「物各歸到する所あり、若し上の旨を會得せば、一切の語言に轉ぜられず、自ら歸著あらん」と。
- ② 有伴即來。溪云く、「獨脫無依なること能はず、古人の閑名句を帶び來るなり。」思曰く、「有し語文字に託して義解卜度する處に現し來るの理なり、これ無依獨脫、眞理に非ず、譬へば人の伴あるか待つて取て來ることを得て、伴侶を借らざるが如し、所謂依脚附木の精靈なり、」珠云く、「上古をしる人はあれども、此の句をしる人はまれなり。」
- ③ 切須記取。珠云く、「此の八字は虛堂家裏の大事なり。」
- ④ 香至國王。南天竺國の香至國王の第三子にして、名は菩提多羅とい

- ふ、姓は刹帝利。
- ⑤ 神光斷臂。は前に見ゆ。
- ⑥ 耽耽面背。耽は耳の大に垂るるなり、慈は眼なり、面口の異相を表す、ぶかつかふながほつきなり。
- ⑦ 恐亦是伊。溪云く、「其の人に非ずして誰ぞや、」珠云く、「こりや、なにもぞ、思へばあれじやそうなり、此の通りじやが、此の一圓相の中を出ずじや。」伊は一圓相をさす。
- ⑧ 見孫必更。己上押韻、珠云く、「それじやのにやれ坐禪じやの工夫じやのと、うたがひちらかして」と。
- ⑨ 故我達磨。達磨は通火の義。
- ⑩ 鼻祖。鼻は始なり、人の胚胎に鼻先づ形を受く、故に始祖を謂ふて鼻祖となす。
- ⑪ 圓覺大師。唐の代宗之を諡す。
- ⑫ 滄發靈機。滄は波と同じ、深なり妙靈大機を發揚す。
- ⑬ 有無之宗。有相宗無相宗の事は初

- 思のところに見ゆ、水のとくる如く、ぐわら／＼ととけて見たら。
- ⑭ 廓然無聖。梁の武帝達磨に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義、」磨云く、「廓然無聖」と、これは聖諦は眞俗二諦の中の眞諦を意味すこれはたゞ禪の第一義は根本原理究竟の眞理に如何なるものであるかと磨云く、廓然とて。がらりとした、無聖とて凡聖眞俗を超越したものである」となり。
- ⑮ 前梁後魏。はじめは梁に、後に魏にゆく。
- ⑯ 人我相高。宗風高くなつた故。
- ⑰ 此土西天。支那では光統流支、西天では六宗。
- ⑱ 是非競起。我相は相を斥けて心を指す、他宗は之に反して其の是非優劣天地懸に隔つ。
- ⑲ 丁茲末運。丁は當なり、今季世、衰替の時に當つてなり。
- ⑳ 遐想餘光。追憶懷舊、珠云く、大師の時のことを慕ひます。

- ① 列藩陣營。鹿未ながら、大根やら又芹や水菜を手向けて、「みづぐさしろよもぎじや。」
- ② 用酬慈蔭。慈悲覆蔭に御恩に酬ゆ
- ③ 南泉。名は普願、馬祖に嗣ぐ、唐の玄宗天寶七年に生る、日本の聖武天皇天平二十年に丁る、唐敬宗大和八年、日本の仁明天皇承和元年十二月二十五日寂す、壽八十七池州の南泉寺に住す。
- ④ 兩堂首座。東西兩堂のかしらたる首座たち。
- ⑤ 爭貓兒。東堂の猫の社と、西堂の牝の猫のあひだに出來た兒であるこちらの猫じや、そちらのじやと所有あらそひ。
- ⑥ 道得即不斬。道得よ即ちで即ば則のあて字である。道不レ得斬レ之と珠云く、「佛法の玄妙を脱却して」雪竇も「頼得三南泉能舉令二一刀兩段一任二偏頭」といへり。
- ⑦ 脫脚鞋安。趙州が外よりかへるに

- 因つて、南泉が斬猫の話せられた、さうすると、州は一疋の猫の所有權を大家等が争ふなど愚なことなりと、かれら大家の迷想を表象した。
- ① 子若在。珠云く、「やいばにはかけないものを」と。
- ② 借手拈香。趙州は南泉の手を借りて兩堂首座のためにすと。加は恥なり、雪は洗なり、はぢをすやくことをかすると。
- ③ 殊不知。珠云く、「趙州もとんと氣がつかぬ。」
- ④ 狸奴已死。狸奴は猫なり、珠云く「猫はとつくに、南泉の手にかゝつて死んで仕舞ふたあとの祭。」
- ⑤ 直至如今。珠云く、「斬却してより思量卜度の者多きなり、」又云く、此の語尤も毒なり、意句共に具せり。」
- ⑥ 鼠子多。溪云く、「千古學道の者、偷心歇まず。」この南泉斬猫の話は碧岩六十三と六十四の兩則に出て

- ある、無門圖にも出てある、參照すべし、
- ある日、南泉和尚の寺で、東西兩堂の雲水僧たちが、一疋の猫の兒に就いてその所有權を争つてゐた南泉は最初はこの喧嘩を面白半分に見てゐたが、いよくはげしくなるので、早速にその場に行き、猫をひつとらまへて、おまへ等は猫の兒位について大いに争つてゐるが、常に御悟りひらいたやうな顔してゐるのには不つり合じや、これに就いて何か一つ悟り文句を下してみよ、さもなればこの猫兒を斬り殺してしまふぞ、と叱り付けたが、大家は對ふるものがないそこで南泉は遂に之を斬つてしまつた、これは當頭の第一機を示すなり、一刀兩斷は世界的にやるべきじやと云はねばかり、するとその日の夕方、趙州が外より歸るを見て、南泉はおまへおまへかかへるのを待つてゐた、けふかうか

泉、遂に之を斬る。趙州外より歸る、泉前話を舉す、州草鞋を脱いで、頭上に安じて出づ。泉云く、子若し在らましかば、猫兒を救ひ得ん。師云く、趙州、手を借つて香を拈じて、兩堂の與に屈を雪めんと要す。殊に知らず、狸奴已に南泉の手に死してより、直に如今に至るまで、鼠子多きことを。

冬至小參、陰魔沮伏して、暖氣未だ昇らず。好箇衲僧の消息、若し能く直下に承當せば、四時の消長を逐はず、便ち見ん、深山巖崖人跡不到の處、爛葛藤、枝を抽んで蔓を引くことを。其れ若し未だ然らずんば、且つ舊曆日の上に向つて、指頭子を點じて數過せよ。只だ陰魔沮伏し、暖氣未だ昇らざるが如きんば是れ衲僧、甚の慶消息ぞ。拄杖を卓して、魚

うであつたと趙州の意見なきいた、趙州は早速にはいてゐたわらぢなぬぎ、それを頭の上のせて出て行つた、南泉は「おまへがあのと居たならば、わしはあの猫の兒を殺すのではなかつたのに」と、大悟徹底した趙州ならば、便休せよ、長安城裏任三關遊一すと、無門の云はれし南泉を命なり

① 陰魔沮伏。漢云く「易の泰の卦に陽を君子と爲す、陰を小人と爲すと魔は名義集に惡者と爲す、故に陰氣を謂つて陰魔と爲す、沮は壞なり底理は五陰の魔の消伏するに況へんことを要す。」珠云く「おんまといんまといふがよからう、陰魔の根がされたなり、沮は止なり、過なり、伏は隱伏なり潜なり。」
② 暖氣未昇。漢云く「一陽來復

すと雖も暖氣未だ昇進せず、底裡は醜態現せんと欲して未だ現せず、これ當に精彩を著くべきの時なり、」珠云く「此の通りの時節あると、くわらりと一陽來復す。」
③ 好箇衲僧。漢云く「降魔と成道と交徹、好箇の消息といふべし、珠云く「佛法人を得る底の時節じや。」
④ 不逐四時消長。漢云く「泰の卦に君子道長し、小人道消すと、否の卦に小人道長じ、君子道消す、義は前の冬至の小參に見ゆ、」珠云く「四時にあづからぬ、春は花、夏は冷しき風もなし、秋は月なく冬は雪なしと、とんと逐ひまはるものはない。」
⑤ 深山巖崖。これは玄沙の語、前の顯孝録に見ゆ。
⑥ 爛葛藤。漢云く「一分處盡く陽氣來復して、爛枯の草木一

一枝蔓を生するなり、底裡は一切種智を發明するに況へんことを要す。」珠云く「かれたるつだからつらまで再びしげつてくる、葛藤も全く一枝の佛法、鐵樹抽枝枯木花笑じや」らんかんとは冬葉のおちたぐつ。
⑦ 舊曆日上。陳年の曆は無用處の物なり、從前看過するとこのの公案に況ふ、珠云く「佛祖の勳行、此の則彼の則のと」
⑧ 點指頭子。漢云く「指を點じ唇を數へて、當に時節の遷流を知るべし、底裡は依前工夫提擲するに況ふ、」珠云く「子丑寅卯と指頭を點じてかぞへてみよ。」
⑨ 甚慶消息。再び舉起して激發せんことを要す。
⑩ 魚行水澗。時節至れば則ち自然に蹤跡現成す。
⑪ 向火。「きやん」とよまず、

行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。」復た舉す、瀉山、向火する次で、仰山に問ふ、「終日、向火す、甚に因つてか暖氣なきぞ。」仰向火の勢を作す。瀉云く、「子只だ物體を得たり、能所は未だ不在。」仰云く、「某甲只だ此の如し、和尚作麼生。」瀉も亦向火の勢を爲す、仰云く、「和尚只だ物體を得たり、能所は未だ不在。」瀉云く、「如是如是。」師云く、「盡く謂ふ、瀉仰父子、兩口一舌と、殊に知らず。」風虎威を竊んで能く艸を偃し、水龍臥を欺いて前山を出づることを。」
除夜小參、新底は舊底の已に往くことを知らず、舊底は新底の已に來ることを知らず、新舊相知らず、物物還つて對偶す。衲僧家、以て極則と爲す、殊に知らず、半夜三更、蒲團

火に向ふ、あたることなり。
⑫ 終日向火。珠云く「目をばそめておつほりと。」
⑬ 因甚暖氣。珠云く「こりやどらじや、雪覆三千山、孤峰因甚不レ白、これはどうじや。」
⑭ 子只物體。珠云く、「子(なんぢ)は法窟の爪牙、平等の物體を得て」と、或抄に「仰山向火の勢を作すところの本分のはたらきじや程に、只だ體のみを得て未だ用を得ずじや、」又云く、「柳は軟じや」と。
⑮ 能所未在。漢云く、「只だ體を得るのみ、能緣所緣、具足すること未だ不在なり」と。珠云く、「差別の能所は未だ不在じや」と、或抄に「能所は用を謂ふ、喩へば月の自然明かなるは體なり放光照物は用なり、照に能照所照あり、總べて是れ用なり」と。
⑯ 只得物體。珠云く「陰陽不到

一三五

上に、春梁を堅起して、誰か偏が漏箭の推遷
更點の遲速を管せんといふも、猶ほ人に喚
んで、無轉智の大王と作さるることを。何に況
んや、矮子の戯を見るが如く、人に随つて上
下するをや、然りと雖も、只だ知る。暖日の
芳艸を生ずることを。那ぞ料らん。春風の暗
に人に著くことを。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ
雲門の一曲。」門云く、「臘月二十五。」師云く、「雲
門、汗血の功高し、惜い乎、五日を放過し了
ることを。當時、若し箇の恰好に、臘月三
十夜と道ひ得ば、者の僧、必ず觀つんべきこと
あらん。今則ち既に往きしをば咎めず、只だ
順時保愛することを得たり、雲黃の一曲を
問ふものあらば、只だ他に向つて道はん。」

の處、一片の好風光」と。又云
く、「師資巴鼻を露はさす。」
② 如是如是。珠云く、「さうだ
く」と印可證明めされた。
③ 盡謂揚仰。溪云く、「異説なき
が故に」と。珠云く、「盡謂は
四海五湖の衲子どもが。」
④ 風竊虎威。或抄に、「風は仰山
に比し、虎は瀉山に比す、こ
れは仰山瀉山の語を取りて、
和尚只だ物體を得る等を謂ふ
ところ。」又或抄に、「この二句
は仰山瀉山の威を竊んで、能
く機用を振ふ、瀉山仰山を欺
いて機を藏し、全身を現す」と、
珠云く、「いかなる衲僧も
油をしぼる」と。又云く、「これ
又何ぞ、虛堂これが云ひたい
ばかり、忠曰く、「假草は把住
なり、其抄に、「能く機用を振
ふなり、仰山向火は風なり
と。」
⑤ 水兼龍臥。溪云く、「この二句

は眞妄一致の境界なり、意に
云く、「世間只だ言句の同を知
りて、見處の一致を知らず」と、
忠曰く、「龍臥は仰山の某
甲只だ如此のところなり、水
田三前山は瀉山向火の處。」
此れは是れ放行なり、師資各
大に體用を發揮したるなり、
溪の解註は非なりと。珠云く
「此れ山の景色を云ふた語じ
や、虛堂がこゝへ以て來ては
さとりにくい。」
⑥ 新底不知。新歲舊年、珠云く
「新舊しほざかひ、またなじや
る、午の年は立ちゆく、巳年
をしらぬ、」又云く、「實際地理
においては去る年の來る年の
相貌はない。」
⑦ 新舊不相知。珠云く、「大塊黒
漫漫。」
⑧ 物物還對偶。珠云く、「差別の
中の無差別處で、やつぱりひ
るがあれば夜があり、山があ

れば川があり、知つても知らない
でも、しようことがない、或抄に、
「無心の物と無心の物と、新舊相對
偶なり。」

- ① 以爲極則。溪云く、「新舊相共に無
心自然に相對偶す、這の無心自然
の法を以て極則と爲すなり。」
- ② 堅起春梁。坐禪するすがたを云ふ
枯木や寒岩の如くに。
- ③ 誰備漏箭。珠云く、「誰か管せんと
は、とんとかまひない、心にあづか
ることない」と云ふとも、漏箭は五
つ四つと時刻がおしうつる、ろう
とうじや。漏箭はとけいなり。
- ④ 更點遲速。誰れか此の如くの事を
管せんと道ふて、一向に作し將ち
去るなり、時の太鼓がおそからう
と早やからうと。
- ⑤ 猶被人喚。溪云く、「轉に轉捨轉得
の義あり、所謂八識を轉捨して四
智を轉得する等なり、廣くは性相
の説の如し、今轉智とは一向に習
禪して、轉智の慧なし、是れ則ち

獸を守るの癡禪なり、大王とは其
の黨の首魁なり、珠云く、「人には
明眼の人。」

- ⑥ 矮子看戲。溪云く、「傍家に就いて
解を求む、是れ則ち文を尋ぬるの
狂惠なり、上に併せて又此の類
の徒を戒む珠云く、「せいのひくい
もの狂言を見るとき、せいの高
い者に逢つて、あちらへむき、こち
らへむき、人に隨つてゐて、」又云
く、「未悟とも云はれず、悟は不徹
中間に居てまをあはする、隨人は
人にとりつきてじや、上下するな
り。」
- ⑦ 只知。虛堂底は、珠云く、「此れが
らば虛堂が奥り手。」
- ⑧ 暖日生芳艸。珠云く、「春の日のど
かになると、背いくさがはえる、
現成底なり。」
- ⑨ 那料。なんたることにもしれぬ。
- ⑩ 春風暗著人。溪云く、「この二句は
天眞任運の境界で、甚の新舊禪惠
等の工夫があらん。」珠云く、「春風

がどこともなう身にしみつくこと
はとなり、暗は思す、著の暖なら
んと云ふはなし。

- ⑪ 雲門一曲。溪云く、「史綱の黃帝紀
に大容に命じて成池の樂を作ると
註に帝大容に命じて承雲の樂を作
る、是れを雲門大卷と爲す云云。」
熊氏曰く、「雲門大卷は俱に樂の名
黃帝の作る所、言ふ意は其の德雲
氣の出入に象る、周人冬至に之を
舞ふ、以て天神を祀るなり、今之
を借りて以て雲門の宗唱を探る。」
- ⑫ 汗血功高。溪云く、「汗血は名馬
功高邁なり。」珠云く、「汗血は名馬
なり、おらが先祖じやが、いらぬ
錢があらば、面へぶちつけてやり
たい。」
- ⑬ 惜乎放過。珠云く、「殘念千萬なこ
と、まう五日ゆるめられた。」
- ⑭ 恰好。珠云く、「ちやうど算用して
云はれたなら」と。
- ⑮ 臘月三十夜。「珠云く、「ちがびな
うよい見物ごとかあらうに。」或抄

ば行雲を遇むと。」

元霄上堂。世間の燈は、心燈の最明に若くは莫く、心燈一たび舉るときは則ち、毫芒刹海光明晝の如く、其の間、善く、剔撥せざるものは、有りとも雖も無きがごとし、心燈を見んと要す麼。」拄杖を卓して、仰山、奮を開き、歸宗石を拽く。

に「且く道へ、二十五夜と三十夜とこれ同かこれ別か。」
●必有可觀。珠云く、「大死一番。」
●今則既往。珠云く、「今日ではまう昔しのこと、昔めなどするは詮ないこと。」
●順時保養。珠云く、「暑いときは暑いやう、寒むいときは寒むいやう、病氣でも起らぬやうに大切に身を守る。」或抄に、

一三八
「虚堂は古人の上はともあれかまばぬ、只だ寒氣の時分なれば、我が自分のとりまはしをするぞと」なり、この語は正灯錄に五祖演の語なりとあり
●雲黃一曲。この雲黃山になる虚堂の宗風一著子。
●牛過行雲。これは摩振三林木一譬過三行雲一など云ふ古語よりとりしものなり、列子の湯間にあるなり。溪云く、「汝が

唱和すべきなきの意なり」と、珠云く、「牛はとどめん。」或抄に亡く「亦全體ではない、雲門の玄妙の機を奪つて平常に云ふ。」
●世間之燈。溪云く、「これは達磨大師の寶珠の辨に所謂此れは是れ世明諸明の中、心明を上と爲すの意なり。」珠云く、「日本でいふならば如何なる高野山の百萬燈でも、塙壁をへだててはまつくらい、心燈最明とは、釋迦達磨でも不足のな

い。●毫芒刹海。溪云く、「微塵数の刹界海なりかすかのものまでも(毫芒)處々どこまでのきはまりない(刹海)。」
●剔撥。かきたてるなり、心燈を剔決挑撥するなり。
●雖有如無。心燈をいふ。
●仰山開會。前の解夏の小參に見ゆ。
●歸宗拽石。これは溪云く、格外の

心燈情見を容るへからずじや、珠云く、「仰山が會を開くにも、飯宗が石を拽くにも用はない、虚堂和尚が少しこゝに用がある。」宗門統要に云く、「蘆山歸宗智常禪師、因に普請す、乃ち維那に問ふ、什麼をか作す、那云く、石を拽く、師云く、「中間の樹子を動かすことを得ざれ」と、これは五燈會元の南泉傳にのするといふ。

寶林寺語錄終

國譯虛堂和尚語錄卷之三

慶元府阿育王山廣利禪寺語錄

侍者 德惟、似涇、如阜、編

慶元府の請疏

朝散郎 集英殿修撰 知慶元軍府事 兼管内勸農使 兼沿海制置使陳昉撰

右伏して以れば、尊者光明を放つて、八祥六勝の地を指す。青王、舍利を捧げて十洲三島の區に現す。箇はこれ釋迦の古道場、直に須らく覺士の正文室なるべし。四衆より選んで、

●慶元府。明州、今浙江省の中寧波府。
●阿育王山。鄞縣青王廣利禪寺晉の太康中に井州の人、劉薩訶といふもの、阿育王の塔を此に得たり、因つて名づく。又晉の義熙の初に建つ、一に廣利寺と名づく、梁の武帝

今の名を賜ふ、阿育王の造るところの眞身の舍利塔あり、「妙勝之殿」と南宋第二主孝宗勅額を賜ふ、又宸奎閣あり、宋の仁宗御書を賜ふて、蘇東坡記を作る、開山は宣密素禪師で、虚堂和尚は四十一世である。支那五山の一。

● 德惟似溼。この二人は偽領の部に見ゆ。
 ● 如草。未だ傳審かならず。
 ● 慶元府諸疏。珠云く「疏文は一字位を低くして書すべきなり、これは育王の其所の太守有司前書尙書陳公の請待の疏なり。
 ● 朝散郎。淡云く、「朝散大夫の屬官」と。
 ● 集英殿修撰。集賢は集英と同じき手、修撰は詔書の稿を修撰するの官なり。
 ● 知。主宰なり。
 ● 兼管内勸農使。前の興聖錄に見ゆ
 ● 兼沿海制置使。學を興し士を好み名義を以て重しと爲す。軍民之を愛戴すと、巡見奉行なり。
 ● 右伏以。これより以下、九重に至るまでは育王の壇致を讀して、住持を請するを説く、この三字を置くは、疏の前の序言なれば例語と名づく、前の興聖錄入寺の初に見ゆ、日本の五山では「いふふうい」

と音でよむこともありといふ。
 ● 尊者放光明。佛の滅後百年、中天竺の阿育王、釋迦の舍利を取つて八萬四千の寶塔を作る、時に耶舍尊者、五指の間に於て八萬四千道の光明を放つ、諸天夜叉衆、各光明の中に隨つて四天下に往いて八吉祥六殊勝の地に遇ふ、乃ち一塔を安す、云云、贊寧の舍利寶塔傳に出づ。
 ● 八祥六勝。八祥は八大靈塔處名號經に、第一迦毘羅城彌蘭是佛の生處、第二摩迦陀國尼連河邊、菩提樹下は消果を證する所、第三加尸國波羅城は大法輪を轉する處、第四、舍衛國祇陀園は大神通を現する處、第五、曲女城は切利天從り下降の處、第六、王舍城摩闍分佛爲に化度する處、第七、層巖城靈塔淨量を思念する處、第八、狗尸羅城汝羅林の内大双樹の間入涅槃の處、如是八大靈塔云云、七勝は義楚六帖二十一に曰く「寶

林傳に曰く、耶舍尊者育王の爲に五指輪に於て八萬四千の光を放つ光の盡くる處に隨つて塔を其の地に下す、是れ諸佛入滅と菩薩化度と羅漢神通と導師三昧と修習禪定と賢聖證果と、この六妙の地に塔を安すべし。」按するに六勝の地は皆佛菩薩の聖迹なり、然らば八吉祥亦八大靈塔處乎。
 ● 育王佛舍利。阿育王此には無憂王と云ふ、舍利此には骨身といふ。
 ● 十洲三島。此の利禪寺もその一靈區なり、前の寶林にも見ゆ、或抄に「三島十洲は實に育王の十洲三島あるにはあらず、只だ其の地の靈を言ふ、且つ八祥六勝に對するのみ」と。
 ● 釋迦古道場。眞身の舍利在すが故に珠云く「此の廣利寺は直に取りもなほさず釋迦の衆生を化度なされし祇園精舎なり」と。
 ● 覺士正丈室。今日直に覺士は菩薩なり、佛は所居の正寢殿。

● 九重より斷りたまふ。○ 虛堂愚公長老禪師は
 ● 慧海の慈航、宗門の心印なり。○ 堂虛うして
 ● 明月を貯ふ、○ 片點の塵埃を絶無す。○ 林邃う
 ● して清風を撼す、諸般の障礙を掃ひ盡す。○ 遍
 ● 浙江の名刹を主り、○ 暫く靈隱の閑雲に眠る
 ● 好し玉几峯に向つて、○ 横に一枝を出すに、
 ● 便ち金獅子座に據つて、○ 旁に四句を行せよ
 ● 東歸の衣錦、○ 再び鷲嶺の燈を傳ふ、○ 北面
 ● の瓣香、○ 仰いで
 ● 聖人の壽を祝せよ。○ 謹んで疏す。
 ● 師。○ 寶祐四年四月初七日、○ 靈隱の鷲峯菴に
 ● 在つて請を受けて、○ 十九日に入寺す。
 ● 山門を指して、○ 道不及の處、○ 方便儘多く。
 ● 只だ是れ見易くして入り難く、○ 諸人氣宇王
 ● の如く、○ 門頭戸底を認むること莫し。

○ 蓮從四衆。禪袖毅然として陳べ乞ふ故にと、又四來の大家よりと。
 ● 斷自九重。珠云く「しかるべしと判斷あつて、刺史陳助に勅命あり、已上は靈巖先づ靈地を疏す、九重とは天子の居は禁衛九重と名藍の故に尊重すること是の如し。」
 ● 虛堂愚公。これより以下、「閑雲に至るまでは虛堂を讀す。
 ● 慧海慈航。淡云く「慧海と宗門とは惣べて法中を指し、慈航と心印とは、單に當人を稱す。」珠云く「惠がなくては普く應機はできぬ。」海でなくては廣く衆生を容るゝことはならぬ、慈航は無縁の慈を以て般若の舟をこぎ出づること、宗門は楞伽經に曰く「佛語心を宗と爲す、無門を法門と爲す」と。
 ● 堂虛貯明月。淡云く「暗に處

堂の鐘を打す、兼れて育王の境を疏す、虛堂の眞蹟の末に云く「育王の明月堂に書す」と、その首偈は京都の大本山妙心寺に現在すと、この偈は珠や忠は非なり、何となれば未だ虛堂は育王に住せざればなり」と。珠云く「佛もないが莊嚴もない、或抄に「中に就いていふ。」
 ● 片點塵埃。淡云く「胸字物なければ心月玲瓏清冷たること此の如し」と、或抄に「此の一聯は人境相應の處を言ふ」と。
 ● 林邃清風。淡云く「古寺の翁木等に寄せて道行の塵累なきことを述ぶ、已上は師の徳を嘆するなり。」珠云く「林は梅檀林なり、「清風は無碍辨を振ふをいふ、底意は無量の法は、林樹の叢森の如しとなり。」或抄に、「外に就いていふ。」

●主浙江名利。嘉興府の興聖、報恩慶元府の顯孝、瑞嵩、延福、婺州府の寶林、共に浙江なればなり。
 ●眠靈隱閉雲。鸞峰に閉眠する故に已上は師の化迹を誦す、珠云く、暫時世間を離る、十年の間なり、今請を受くるところは靈隱なり。
 ●向玉几座。富山なり、或抄に「一説に育玉の前に小峰あり、玉几峰と名づく、これより下は虚堂を請するの語なり。
 ●横出一枝。一枝の佛法なり。
 ●據金獅座。便は「すくさま」無畏の座に。
 ●旁行四句。旁は薄なり、あまれくなり、「溪云く、「正提旁按の手段あり、蓋し言句に渉る者は正行に非ず、故に云ふ旁に行なり、四句は汾陽の四句などの類。」珠云く、「廣く言ふときは則ち四字句と爲し、四句を偈と爲すと云ふから、豈に汾陽の句にかゝはらんや。」
 ●東歸衣錦。溪云く、「寧波府は會稽

郡、又吳州に隸す、是れ東吳の地にして、虚堂生縁の郷なり、故に此の事を用ふ。」珠云く、「慶元府は虚堂生縁の郷なり。」
 ●傳鸞嶺燈。溪云く、「再とば此の地師の生縁の故なり、師時に鸞峰菴に在つて、即ち松源祖師の塔なり今再び佛祖の正燈を傳へ来るなり、」忠曰く、「世尊昔靈鷲に在つて法燈を諸人に傳ふ、虚堂今當に育玉に住して法燈を諸人に傳ふべきなり、再の字、松源に約し説くは非なり、鸞峰菴は育玉の境に非ず」と。
 ●北面禪香。北面は詔に應ずる臣僧なるが故なり、珠云く、「天子は南面、之に朝するものは北面なり、」獅香はこの録に前の寶林の達磨初忌に見ゆ。
 ●仰祝。祝延なり。
 ●聖人之壽。今上皇帝の聖壽無疆を祝す、已上は教誨の旨を誦す。
 ●寶祐四年。南宋四代理宗帝の年號

丙辰なり行狀に戊午といふは誤、師年七十二、日本の後深草天皇康元年期ち建長八年の四月なり。
 ●靈隱鸞峰。珠云く、「十年隱遁せらる、鸞峰庵は靈隱にある松源の塔下なり。」
 ●道不及處。溪云く、「道に言なり、妙處は、言はんと欲して言ひ及まず、」珠云く、「不得の處の納僧左右、或抄に「眞路みちたえた處。」方便儘多。溪云く、「得入の方便多きなり、」忠曰く、「行棒下喝、拈錘、豎拂等、悉く是れ方便。」珠云く、「方便とは龍の水を得るが如く、脱洒自在、儘は皆なり極なり」或抄に「一言一句一機一境、」又瀧和俱舍釋此に方便と云ふ、「方便を以て父と爲す」と維摩經にあり、華云く、「方便は即ち智の別用而已。」
 ●易見難入。溪云く、「趙州の云ふが如し、諸方は見難くして識り易し我が這裏は見易くして識り難しと今山門の故に識を入と改む。」珠云

佛殿を指して、老子傍若無人、到る製尊と稱し、今日自ら理虧くることを知らば、我れに一坐具の地を還せ。」具を展べて云く、「大衆退後。」
 ●方丈に據つて、横に拄杖を按じて云く、生れながらにして知れるもの有ること莫し麼。入り來れ我が者裏、帽を買ふに頭を相す、官枷瞎棒するに比せず。」主丈を靠く。
 ●師、法座の前に至つて、香を焚いて闕を望んで、
 ●恩を謝し畢つて、
 ●勅黄を捧げて、衆に示して云く、「萬象を約束し、人天を聳動す、風雲の會合、日邊自ら來る、縦饒ひ海口も亦宣べ難し。」
 ●制府の跣を拈じて、聖人の妙を宣發するこ

●大事は只だ是れじや。」
 ●諸人氣宇。溪云く、「人の兼排を受けざるの義なり、この録の報恩録に見ゆ。」珠云く、「諸人は滿堂の大衆。」
 ●門頭戸底。溪云く、「山門に當つて云ふ、言ふ處は直に須らく入得すべし、外邊を認むることなきなり、」珠云く、「少々入處得力今人皆是の如し、直に八識田中に向つて一刀を下すべし、認三門頭戸底、莫し作二佛殿方丈。」或抄に「直下に道ひ及ぼさざる處に入る戸底は或抄に「元來無門を法門と爲す故なり、内家裏のことと知らればなり。」
 ●老子。珠云く、「釋尊をさす、此の老子、人もなげにどこへ行つてもおれは本尊じやと云ふて」と。
 ●到處稱尊。自ら天上天下唯我獨尊と稱す故に。

●今日理虧。自ら非を知るの謂なり。珠云く、「火ちやくなことは、わるいと思ふたならば」と。
 ●一坐具地。天上天下を占むる故、珠云く、「老子虚堂が。かして於いた地をかへせ。」坐具は前に解す見よ。
 ●展具云。坐具を展べては、ひろげてなり、御拜をするときなり。
 ●大衆退後。速に大衆に歸して宜しく退後して罪を謝すべし珠云く、「虚堂、おれもこなたの處へかしておいた、退後とは何の事じやと云ふものあれかしと思ふてなり、」或抄に、「虚堂の意氣、人を衝く底」と。
 ●據方丈。據室。
 ●生而知之。中庸に或は生れながらにして之を知り、或は學んで之を知り、或は困んで之を知る云云。」論語の述而に子

の曰はく、「我れ生れながらにして之を知れる者には非ず、古を好んで敏にして以て之を求めたるもの也」とあり。珠云く、「悟を添へず迷を添へず、生死を捨てず涅槃を取らず。」

① 入來。さあ、あらばじや、入來れと。

② 買相頭。溪云く、機に應じて物を接すじや。珠云く、「夫れん、三根機に應じて」と、又事に恰好の義又或抄に二説あり、一にははかつかふ相應義、二には帽を買ひて後に頭を相す、その時は鈍のことに用ふ、其の人相應に説き聞かせんとなり。

③ 盲柳防棒。溪云く、「諸方の惡知識の來者を辨ぜず、慮りに令を行するに比せず。」珠云く、「不比は學者の善惡をも見わけず。」或抄に「盲柳防棒はめくらうちにはせぬなり。」

④ 法座。須彌壇上に設けある法座。

① 望。仰ぎのぞんで。
② 閻。北閻なり、官門を云ふ。
③ 謝恩。勅命の恩を御禮申し上げて捧。兩手に捧げ承けて。

④ 勅黃。勅書なり、黄は紙色を云ふ黄色の紙を勅書には用ふる故なり
⑤ 約東萬象。珠云く、「約の音は「よ」東は「しゆ」言語要結戒めて檢束せしむ、皆約束といふ、かくくゝる、それは人王の位に立ち、其の德化を蒙らぬものはないと云ふこと。」或抄に「此の勅黃は（總旨）の中に萬象をとりあつむる義、此れは德をいふ、萬象は世界國王をさす。」

⑥ 聳動人天。聳は驚なり、萬象を約束して放逸ならしめず、人天を驚動して自便せしめず、詔命の嚴肅なることは實に此の如し、珠云く「納子は臂に奉命の符を掛く、聳動は法王の位をいふ、此れは威をいふなり。」

⑦ 風雲會合。溪云く、「君主臣僧道合

するを謂ふ。」珠云く、「佛法と王法との會合じや、」或抄に「勅黃の文章を云ふ、風雲際會時節相應、微塵にかなふて勅黃を下さるゝを云ふ。」雲と風とは相應の物なり。

⑧ 來自日邊。溪云く、「天上の紫綸降り來るなり、」珠云く、「此の勅黃かたじけなくも、九重城裏より來る。」天子の御をばから下されたるなり

⑨ 縱饒海口。押韻なり、たとひ海を以て口となすも、此の恩は以て宣謝し難し、珠云く、「如上の端的は佛法貴しと雖も、國王大臣の荷擔に因らずんば、全う行ふことはいさぬ、今日の寵遇の厚恩は詞ではお禮申しつくしがたし。」

⑩ 制府。制置使陳昉。
⑪ 聖人之妙。贅背云く、「陳氏の德化を述ぶるをいふ。」又天子の妙德化をさす。思曰く、「今陳昉、天子の内德を以て四海に傳布することはじや。」

⑫ 春行萬國。溪云く、「聖人の德化の

と、
① 春の萬國に行くが如く、
② 豈に三寸舌端の重ねて新に點出するに在らんや。
③ 苟し或は尚ほ知解を存せば、
④ 高く聽官を聳かせ。」
諸山の跣を拈じて、
⑤ 刹竿標はるゝ處、
⑥ 鐘梵相聞ゆ、
⑦ 暖氣相嘘することを知らんと要せば、
⑧ 總て裏許に在り。」
山門の跣を拈じて、
⑨ 同門に出入す、
⑩ 未だ嘗て僱諸人を設せず、
⑪ 苟し或は粉飾太だ過ぎば、
⑫ 山僧只だ耳を掩ふことを得ん。」
法座を指して、
⑬ 人人脚跟下に、
⑭ 此の座子あり、
⑮ 何ぞ必ずしも平地に高きに昇らん。
⑯ 僱若し踏得著せば、
⑰ 燈王身を退くに分あらん。」
師、
⑱ 陞座、拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に、
⑲ 熱向して、
⑳ 恭しく爲に
今上皇帝、
⑳ 聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したて

妙を宣説し發揚することば、
譬へば春の萬國に行いて自然に和氣周流するが如し。」思曰く、「言意は到らざるところなしてある。」珠云く、「制府の役人がよいでじや」と。

① 豈三寸筆端。溪云く、「三寸の舌言、筆端文字深く、誑語の聖德、自然の妙化に達する」とか嘆す。」思曰く、「陳昉が疏を撰し、口に之を宣べ筆之を書して點出することか待たず聖德顯然として、世に宣發するなり、重新の二字が眼なり。」

② 苟或尙存。溪云く、「大衆尙ほ知解を存して、之を是非せばじや。」珠云く、「知解は疑惑なり、或抄に筆端の上に向つてじや」と。

③ 高聳聽官。聳は高なり、耳を高くして聴取せよとなり、聽官は耳官を謂ふ、五官は耳目鼻口形をいふ、高聳は維那と

いふ役僧がこの跣をよみあげるをきくとのこと。

④ 諸山近隣。諸山の請狀疏の法は與聖錄に見ゆ。

⑤ 刹竿標處。このこと寶林錄に見ゆ、珠云く、「前後左右、あそこにもこゝにも刹竿立ちなるところ、互に標はるゝところなり。」

⑥ 鐘梵相聞。列刹相望む故に、鐘聲梵音等互に相聞ゆ、珠云く、「互に隣寺のことなれば、鐘をよむ聲じや。」

⑦ 暖氣相嘘。暖氣は隣交の温和の氣を表す、嘘は吹嘘なり、蓋し他に代つて氣を出すの義珠云く、暖和の氣より、一切がそだつ如く、諸山の吹嘘に依つて虛堂もそだつ。」嘘は「よろしい」なり。

⑧ 總在裏許。即ち跣中を指すなり。裏許は這裏の如し、俗に云ふ「つゝ」と云ふことばなり

こゝで維那が宣讀するなり。
 ①山門。山門の兩序、勤番法中の僧の老少ども、住持と同途に進止す山門のゆゑに特に門と稱す、珠云く、「諸役位山門よりの請狀同門相互に出入。」
 ②護備諸人。溪云く、「眼眼相對する故に、未だ嘗て欺謾せず」と、珠云く、「住持するからには誠實敬慎を以て出合ひあしらすことじや、こなたか他をばかにするではない、相互じや」と。
 ③粉飾太過。或抄に、「華藻の文章などが簡り過ぎる。」太過とはほむることがあまりすぎるとなり、粉飾は潤色を加ふるなり、珠云く、「なまじひに。ばかほめにじや、只だ互にあのまゝがよい。」
 ④山僧只耳。溪云く、「若し黠黠の文か以て我が徳を粧飾する太だ過ぎば、我れ耳を掩ふてきくべからず」と。珠云く、「輕薄がざりか過ぎると虚堂はきかぬぞ、此の以後とて

もかまへてなれ、」或抄に「掩耳で逃げ去らん」と、こゝにて又維那宣讀す。
 ⑤人人脚跟下。珠云く、「佛祖に在つても増さず、衆生に在つても減ぜずじや。」
 ⑥有此座子。子は付け字なり、古句に「人人脚跟下に一坐具の地」あり。
 ⑦何必平地。溪云く、「平地上に高きに昇りて甚麼をか爲ん」と。珠云く「虚堂此の度じや。」或抄に「無事を含む、高に上りと云ふもはや。」
 ⑧無若踏得。本有底の一座子、珠云く「背觸或は不入涅槃でも、寺に入れたら、踏得著きもなげ」と。
 ⑨燈王退身。或抄に「使令燈王の座の高廣にして嚴飾第一なるも、備が踏得底の座子に比せば、些子許も較らざるが故に、」珠云く、「是れ虚堂が知見で云ふではない、退身御免なされと云ふて、」又云く、「だれかはらにも備へてある。」燈王の

ことは維摩の不思議品に「文殊師言利く、居士東方三十六恒河沙の國を度るに世界あり、須彌相と名づく、其の佛を須彌燈王と號す、今現在す云云」によるなり。
 ⑩蒸。燒なり、音「ぜつ」なり。
 ⑪堯仁廣被。昔の堯王の如き仁澤廣被、一天下の内に。
 ⑫舜德日新。昔の舜王の徳化の如く今日に至りて相替はらず。
 ⑬大丞相樞。謝方叔なり、歴史綱鑑に淳和十一年、謝方叔を以て左丞相視文殿大學士惠國公と爲す」とあり。
 ⑭同知樞密。賈似道なり、綱鑑に、「寶祐二年、賈似道に同知樞密院の事を加ふ、四年賈似道に參治政事を加ふ」とあり。
 ⑮文武百僚。僚は官僚なり、通じて僚に作る。
 ⑯增崇祿算。爵祿壽算なり。
 ⑰尊崇廟廟。天子の宮、大廟などを。
 ⑱撫鎮華夷。京も用舎もなり、中國

まつる。陛下恭み願はくは、堯仁廣く被らしめ、舜德日に新ならんことを。」
 次に拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に燃向して、大丞相樞使國公、同知樞密參政相公、泊び文武百僚の爲に、祿算を増崇し奉る。伏して願はくば、廊廟を尊崇して、華夷を撫鎮したまはんことを。」
 次に拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に燃向して、
 ①判府制帥集撰侍郎泊び ②郡縣文武官僚の爲に ③祿算を増崇し奉る。伏して願はくば、 ④邦家に ⑤柱石として、 ⑥祖道に金湯たらんことを。」
 「此の香、氣息を絶する者久し矣、端なく冷灰を撥着して、重ねて新に燄を騰ぐ。前住安吉州道場山 護聖萬歲禪寺先師蓮庵和尚の爲に、

夷國の内外を撫育鎮護すること。
 ①判府制帥。これは陳昉が官を擧んで稱す、慶元府の府事沿海の制置使第英殿の修撰朝散郎。
 ②郡縣文武。前は朝廷の文武官僚、此には郡縣に在る文武官。柱石邦家。國のためおもみかなす人。
 ③金湯祖道。金城湯地なり、祖道則ち禪宗の外護たらんことを願ふ。
 ④絶氣息者。珠云く、「これは關香なり、報恩住山の後は拈ぜず、故にしかいふ、」又云く、無事甲裏に久しく、いくらもあげておいた。」或抄に云く、師は靈隱の鷲峰庵に退居するもの十年、今また出世開堂する故に此の法語の中、その意ある乎。」
 ⑤護聖萬壽。十刹の二なり、運

卷録には萬歲寺とあり、湖州烏程縣にあり、開山如訥禪師伏虎と號す。
 ①索話。編者の言なり、學者を呼出す釣語なり、搭索の心。
 ②人天交接。これは法華の授記品に出づる語なり、珠云く、「地獄と極樂と一つになりて」と。
 ③不承云々。珠云く、「一代時教も、一千七百期にも用はない。」句に滯るものは迷ふと、これは俗利の衲僧のり慶と言葉をうけたがふ。
 ④有僧問。溪云く、「頌を以て出陣の句となす。」
 ⑤一般擔板。龍云く、「一般の擔板は虚堂自らを抑下托上するなり、大法の爲めには人情を交へざる故に、」溪云く、「此れは師の一向に本分を守りて人情に順ぜざるを嘆す。」
 ⑥十載深雲。溪云く、「淳祐の本より寶林を退居して、北山の

爐中に熱向して法乳に酬い奉る。

師、衣を斂めて、座に就いて、索話す、「人天

交接、兩得相見、言を承けず、句に滯らざ

る底あること莫し廢」時に、僧あり問ふ、「一

般の擔板、人の憎を得たり、十載深雲獨り局

を掩ふ。今日大方親しく、勅を捧ぐ、阿師

真箇藥頭靈なり、學人上來、請ふ師祝、聖」

師云く、「雲靜にして日月正し。」僧云く、「昔日

梵王、佛を請することは、蓋し羣生の爲なり

今朝、聖主特差す、何の祥瑞かある。」師云

く、「天の高きも蓋し盡さず。」僧云く、「與廢な

らば則ち四衆恩に、霑ひ去れり也。」師云く、「

誰か恩を承けざらん。」僧云く、「只だ判府制帥集

撰侍郎の如きんば、忠正剛大の道を以て、

法の爲に人を擇ぶ。還つて學人が、水を借つて

深雲に居す、今寶祐四年にお

よびてその間十載に當る、と

已上は從前の事を述ぶ。

今日大方、溪云く、「大方は公

界(しよさん)を指す、言ふは

國家勅費を捧げ來りて敦請す

るなり、珠云く、「天子を始め

奉り、慶元府刺史陳昉等。古

抄に諸方列刹の宗師勅費を捧

げ虚堂を請するなり。」

阿師問簡、阿は付け字なり、

師は師を指す、頭の字、心な

し、虚堂をさす、溪云く、「師

の蘊むところの眞藥の靈驗な

るがごとくにして、能く衆生

必死の病を救済することを讚

す、眞藥の語録はこの録の頌

古船子の話に見ゆ、已上は即

今底なり、珠云く、「和上には

煩惱の病、菩提の病迷悟の病

を治するが奇妙じや。」

學人上來。上來は罷り出まし

たとなり。

請師祝聖。臨席の句。

雲靜日月正。溪云く、「太平無

事の境界、珠云く、「雲は群臣

靜は事理貫透の語、日は天子

月は公方(大丞相)。」

梵王請佛。或抄に云く、「人天

眼目下に宗門雜錄上に云く、

梵王、靈山會上金色の波羅華

を以て佛に獻じ、捨身を床座

と爲し、佛を請じ羣生の爲に

說法云云。」拈華微笑の時の事

なり。

今朝聖主。珠云く、「聖主は今

上皇帝。とりわけ、わざん、

大勢の中でなり、溪云く、「差

は初佳の切。擇なり、後録の如

く、いはゆる新衆住持勅差住

持なり、言るは特に爲に差擇

して住持の職に任するなり。」

忠曰く、「首王は本勅差住持に

非ずいま勅命を賜ふて特に虚

堂其の人を賞するなり、故に

特差と云ふ、正字通に差は又

韻音叙。使なり。

有何祥瑞。珠云く、「六種震動の如

く。」

天高蓋盡。溪云く、「眞箇の泉恩、

廣大の祥瑞なるが故に」と珠云く

「皆の咲睡も花柳も、たしかの祥

瑞。」

霑恩。天恩に浴したてまつる。

誰不承恩。四衆のみに非ず。珠云

く、「四衆はいつそのこと、山河大

地もみな」と。

忠正剛大。溪云く、「只だ丹誠のみ

にして邪心なき忠正の徳と爲す

此の徳剛にして息むことなく、廣

大にして容ることあり、故に云ふ」

珠云く、「忠心正直、剛堅弘大なり」

或抄に「忠あれば其の内正なり、

剛はものにくにせぬ、長人を云ふ

大は物にさへられぬを云ふ。

爲法擇人。溪曰く、「上には聖主の

恩命を云ひ、此には賢臣の外護を

云ふ。」珠云く、「爲法は佛法を興隆

し一切を利益せんと、擇人は虚堂

の如き明眼の人をじや。」

借水獻花。溪云く、「これ千歳一遇

の好時節なり、其の便を借りて香

參すべきや、またいなやとなり、方

語に幸に便宜を得。」珠云く、「あな

たに法門を承りたい、或抄に「便

を頼んで事を成すの謂なり、開堂

の次によつて香參を通するなり、

忠曰く、「譬へば佛前に水器あり、

乃ち花を獻するに此の水を借るが

如し、賢臣師を擇び、師來つて此

の寺に住するは水あるが如し。」學

人別に求めずして香參することな

得るは花を獻するが如し。」方語解

には「俗話にしてのもの、あ

ひむこをもてなすの類なり」と、或

抄に「借水は侍郎、虚堂が水を獻

花は見處。」

迦葉門前。迦葉門前は延福錄に見

ゆ、「千聖不傳底なり、今便を借り

て香參することみ許さずの意な

り、方語に「觀面相呈す」と。珠云

く、「畢波羅窟中に於て阿難を捧得

する底、釋宗捧得の始めなり。」或

抄に云く、「迦葉は釋の根本なり、

言るは、宗風はげしきと云ふ義な

り。」或抄に「花を吹き散するなり

向上の門風此の上更に問不問に及

はず。漂漂きびしいこと。

若如是則。如是把住ならば、さや

うなればなり。

名滿天下。溪云く、「祖門從上來の

宗風近傍すべからず。」珠云く、「あ

なたは天下の虚堂、昔しの迦葉と

第二はござらぬ。」名は虚堂の高名

で、去るは托上なり。

備不得忘却。溪云く、「宜しく此の

深旨を記取すべし。」珠云く、「おわ

し、わすれるなよ、室中へまゐら

ば三十棒じや。」

僧禮拜。珠云く、「あつあ、その三

十棒をうけたうござります」と。

黃面老漢。釋尊なり。

末上放棄。溪云く、「未上は最初の

義、放棄は本分の理に背いて謾に

付囑を説くを云ふ、珠云く、「まつ

花を獻ずることを許さんや也た無や。」師云く、「迦葉門前風凜凜。」僧云く、「若し是の如くならば、則ち名天下に滿ち去れり也。」師云く、「備忘却することを得ざれ。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「黃面老漢、末上に放乖して、靈山會上萬百衆の前に向つて、佛法を以て國王大臣有力の檀那に付囑す。今に迫んで二千餘年、代賢に乏しからず、我が沙門釋子をして、以て慧命を流通して、仰いで國風を助くることを得せしむ。若し佛法果して付囑ありと謂はゞ、則ち黃面老子を誘するならん若し佛法果して付囑なしと謂はゞ、則ち今日王舍城中、君聖に臣賢にして、遞に相欽奉して、以て海内の生靈をして、同じく麗正の光、松柏の茂するを瞻すといふことなきこと

さいしよ、靈山會上に拈華微笑、此のしくじりぞめ、或抄に「非道の義、胡亂の義を放垂と云ふ、又道理に應ぜざるなり」と、又云く「抑下なり。」靈山會上。仁王經の囑累品と涅槃經の第三壽命品に説き玉ふ有力の檀那は能く大法を荷擔して佛僧に奉施するの人のなり。

① 追今二千餘年。南宋の今日にいたるまでなり。

② 代不乏賢。歴代の賢王賢臣方の歴歴が出来て、佛の付囑を受くと。

③ 沙門釋子。沙門は華法師の云く「出家の都名なり」と。

④ 流通慧命。龍云く「慧命をして斷絶せしめず、珠云く、佛が入滅して、今日まで展轉して流通す、慧命あれば僧は飢寒はせぬ。」

⑤ 仰助國風。溪云く「示すに因

果等の法を以てして、惡を斷じ善を修し、仰いで國家の風度を贊助する也、珠云く「佛法は暗に王法を助く、けふの今日、日本は別して佛法を以て國風を助く。」

① 佛法付囑。珠云く「知られはこそあれ、無始よりそなへてある。」若し人如來に所説の法ありといはゞ、即ち佛を誘すると爲す故に」と溪は注せり。

② 今日王舍。羅閱城伽羅此に王舍城と云ふ、摩伽陀國中の城の名、今はこの賣前四年の四月十九日みやこにおいてとなり育王は大宋の王の舍つるところの義に用ふ。

③ 遞相欽奉。君臣相尙ふに道を以てするなり、欽奉はつかふるなり。

④ 麗正之光。これは易離の卦の象に曰く「離は麗なり、日月

を致す。畢竟何を以てか據と爲ん。」拄杖を卓して、「南嶽峯頭八字の碑。」

復た擧す、本朝の太宗皇帝、因に僧朝見す、帝宣對す、僧奏して云く、「陛下還つて記得すや否や、帝曰く、「何れの處にか相見し來る僧云く、靈山に一たび別れて自從り、直に今に至る。」帝曰く、「何を以てか驗と爲。」僧對なし。後來雪竇代つて云く、「貧道得得として來る、師云く、垂衣端拱、百國來賓す。者の僧これ對なきにあらず、天威人に逼ることを奈ともすることなし。」

常晚小參、今夜略佛法の玄妙機關を去けて、單單に諸人の與に、此の細大の法門を説いて、以て進寺識面の初を表せん。諸人も又等閑に情識裡に入在して、胡卜亂卜を作す

は天に麗く、百發神木は地に麗く、重明にして以て正に麗く、乃ち天下を化成すと云ふに出づる語なり、星の名といふ説もあり、又美なりで、天子の德を指す、聖德あれば王道正しく行はるを云ふ。

① 松柏之茂。臣の節操をたとふ賢臣忠を行ふの故に、古語に松柏の姿は霜を經て尤も茂るといふ。

② 南嶽峯頭。祝語なり。前の寶林語録の中に見ゆ、これは萬王之を建つるところの碑、神禹の碑なり、天長地久、國泰民安の八字なり、日本でならば「君が代は千代に八千代にさざれいしの、いはほとなりて昔のむす萬傳」なり。

③ 太宗皇帝。趙宗第二代の主、聖德の天子なり、この語はさきの瑞岩録に見ゆ。

④ 朝見。參内なり。

① 宣對。帝宣示して對す、直問せざるなり、宣室は天子の所居を云ふ、宣は召すなり。

② 貧道得得。貧道は謙損して私がじや、得々はわざく、まいりました、得得は自得逍遙の意を以て驗と爲す。

③ 垂衣端拱。溪云く「衣裳を垂れて甲冑を披す、端坐拱手して干戈を把らず、皆至治無爲の象なり。拱はこまぬく、兩方の大指を相拄ふる也、珠云く「太宗は聖德ゆえ、穆々として南面するのみ、」又云く、「雪豆の代語あつた上じや、依つて又々好措語じや。」

④ 百國來賓。みな歸服して命を奉するなり、賓はつく、服従するなり、干戈を動かさず、太平を致す。

⑤ 天威逼人。恐懼戰栗して進語すること能はず、珠云く「天威は德盛なるが故に、無奈は

べからず、若し舍利初め、烏石嶺頭より、飛んで山中に入つて、光を放ち瑞を現することを説かば、此れ又是れ、諸人の共に知ることを出でず、若し六殊勝の地を説かば、寶幢市より四十五里、直に明州に到るまで、此れ又是れ、諸人の共に見ることを出でず、作麼生か知見に落ちざることを得去らん。所以に道法は見聞覺知を離るゝと、若し見聞覺知を行せば、これ則ち見聞覺知にして、求法に非ずと。況んや古鄆の禪叢、俊衲市の如し、箇箇附託するに、人を得るをや。誰か肯て偏が者般の、祭鬼の飯食を受けん。慕に侍者を喚んで云く、「羣縣の茶餅を、收起せよ。」復た擧ぐ。陳操尙書、一日、衆官と同じく樓に登る、遙に數僧を見る、中間の一士云く、「來

だまつたも好い、これは僧をたすけて天子の威勢を云ふ。」玄妙機。珠云く、「不思議希代なことはよしにして」と。或抄に、「細大法門の事相なり、玄妙は理なり。」
① 單々。純にして餘義なきの義なり、獨脫無依の義なり。
② 些細大法門。龍云く、「事相の法門は細あり大あり、蓋し事相を談じて理體に歸す、小參の體裁なり。」珠云く、「細は事觀細戒なり、大は理觀大戒なり。」
③ 進寺。進。始めて入院大衆と相見を表すなり。
④ 等閑。ざつと覺えて、なげやりさまに。
⑤ 情識裡。思量分別の上に。
⑥ 胡卜。胡卜。漢云く、「玄妙にあらざるが故に、胡亂に思量卜度するに及ばず。」
⑦ 烏石嶺。晉の武帝大康二年并

州の劉薩訶代獵を業として暴かに卒す、夢みることあり、阿育王の塔を拜す、頂禮懺悔す、梵僧七人現す、一僧化して、烏石となるによりて名づく。
⑧ 諸人共和。諸人がこの緣起をば共に知りてゐる。
⑨ 六殊勝地。諸天舍利を安するの地をいふ。
⑩ 寶幢市。鄆縣の市場。
⑪ 明州。明州は即ちこれは大明のときは「みんしう」ともむなり、府城鄆州なり、青王は府城の東五十里にあり、この市は山下にあり、みな鄆縣の封内なり。
⑫ 不落知見。漢云く覺知見聞なり、共に知る、共に見る、みな事相の故なり、今微詰して知見に落ちざる底の理體に歸せんことを要す。」

者は總にこれ行脚の僧なり。」尙書云く、「不是。」士云く、「焉ぞ其の不是なることを知ることを得ん。」尙書云く、「近づかんと待つて諸公の與に勘過せん。」須臾にして僧至る、尙書召して云く、「上座。」僧悉く首を擧ぐ、尙書云く、「道ふことを信せずや。」師云く、「盡く謂ふ、清明の下、味者尤も多しと、殊に知らず、盡中の天地別に、日月あることを。山僧此者來つて育王に赴く、首め帥府節、齋陳侍郎に見えて、一問一答するに、和氣前に満てり、要且つ、許多の勘辨なし。且く道へ、陳操尙書と相去ること多少ぞ。」拄杖を卓して、情閑にして嵩樹看れば愈好し、室靜にして礪泉聞けば轉た幽なり。
⑬ 行禮して。大慈に到る上堂を請ふ、不見の

⑭ 所以道。これは維摩經の不思議品に、いづるを以て引證す。
⑮ 法難見聞覺知。この文維摩には「法不可二見聞覺知」となす。
⑯ 非求法也。眞實求法の人に非ずとなり。
⑰ 古鄆。鄆。阿育王山、舊には鄆山と名づく。
⑱ 俊衲。如市。惡辣の俊衲、胡にもわなにもかゝらぬもの。
⑲ 箇箇。どれもく、佛法の大事を。
⑳ 附託得人。學者の附託して教を受くる底の鉅禪碩徳ありと或抄に、「附託は大法を附託するなり、人とは俊衲を指す明眼の子か得たりとなり。」
㉑ 誰肯。珠云く、「どうして、なるほどと納得して」と。
㉒ 備者般。備は虚堂自を云ふ、者般は上の見聞覺知のなんとない。

⑳ 祭鬼飯食。龍云く、「東郭埜問の事前の方の寶林錄に見ゆ、今は言句の餘殘を表す、言ふ意は我が指教を受けざるなり、珠云く、「非禮のそなへ、残りのかひものじや。」忠曰く、「上の所謂舍利放光現瑞や」また六殊勝地やらを云ふ。
㉑ 獲喚侍者。珠云く、「此の上堂始終貫透した。」
㉒ 收起。仕まつておけとなり。
㉓ 羣縣茶餅。羣縣より産するところの茶餅、兩臂あり、多口の義に取る。
㉔ 陳操。陸州の刺史、唐時代で韓退之や柳宗元と同時の人で陸州の陳章宿に參じた、尙書は官名。
㉕ 衆官。並み居る諸侯方と。
㉖ 不是。青い眼では禪宗坊主の目きゝはできぬ。
㉗ 上座。雲水僧を呼んで云ふ禪士といふがごとし。

不信道。忠云く、「左體波古曾じや
俺のいふ通りだらう。」或抄に前に
行脚の僧でない」と。珠云く、「おれ
が言ふことを虚言と思はるが。」
清明之下。日月のごと云ふて、
こゝには陳操を云ふ、陳操はあま
りに清明すぎると。
昧者。衆官并に僧たちを云ふ、淡
云く、「諸方盡くいふ、者の僧、白
日途に迷ふと。」
殊不知。珠云く、「とんとの相違、
その事ではない陳操ごとき人人あ
るを知らぬ」となり。
壺中天地。淡云く、「僧の穩當にし
て首を擧ぐるを扶けて爾云ふ。」壺
中の天地とは後漢の費長房の故事
なり、日、月は清明を請けていふ
或抄に云く、「壺中は此の僧を云ふ
又の義に陳操勤破の處、格外の意
あるを云ふ。」
來赴育王。靈隱の鶯峰菴より來り
て。
陳侍郎。淡云く、「此の公は陳氏に

して且つ尙書なり、故に陳操尙書
が縁を引いて以て結座す。
一問一答。珠云く、「此れや彼れや
と御咄し申すにじや」と。
和氣滿前。時節底と相應和で、
常態じや。
許多勘辨。珠云く、「さま、し
ちむづかしい、首を傾げるやうな
ことばない。」
相去多少。淡云く、「勘辨ありとな
しとを詰問す。」珠云く、「尙書と虚
堂との手きは、どれだけのちがひ
があるぞ」と。
情開當樹。珠云く、「虚堂のところ
からちよつと見てさへよい、當樹
はしなよきはえたありさま、これ
は安閑自適の境界。
至靜源泉。珠云く、「吾が居處は朝
泉、やさしい風流、閑靜幽とはな
んとなくひとしほすみかへり、彼
此無心應緣じや。」
行禮。入寺の後、諸山を巡行して
禮謝を致すを云ふ。

一六
大慈。慶元府明州の東湖に在り、
忠獻史衛王の建つるところなり、
今の住持は物初大觀なり、觀は北
彌簡に嗣ぐ、簡は佛照光に、光は
大惠果に嗣ぐ、大慈の住持觀物初
初め先づ上堂了りて、次に虚堂
の上堂を請ふなり、故に直に物初
上堂挨拶を擧するなり。
見不見之形。珠云く、「大慈と云ふ
から觀音を以て始終を云ふ、不見
の處を見付けると、觀音を見る、
自己をみる、こゝには觀物初を指
して、今虚堂之を相見すと、無相
の眞形をじや。」
對揚有準。淡云く、「言ふは無相の
眞形を見得るときは、則ち自然
に賓主應對之を擧揚するの時に於
て準則の看るべきあり、珠云く、
「よのつれ、衆機に對し、單傳心
印擧揚するに。」
察不察之色。察は明なり、言ふは
不明の本色を察辨するときば、覺
海涯垠なき故に、珠云く、「青黄赤

形を見るときは、對揚するに準あり、不察
の色を察するときば、撈摭するに垠なし。
若し能く那邊に轉向すれば、鶉飛んで度らず
形器を以て拘らず、色塵を以て礙へられず
自然に諸聖の塵を超え、大方の表に出で、
溪山雲月、處處歸を同じ、水鳥樹林、
互に相顯發せん、然も是の如くなりとも雖も、爭
奈せん、我が慈峯老子の、未だ肯て横に點
頭だもせざることあることを。何が故ぞ。拄杖
を卓して、壺中に自ら佳山水あり、終に重ね
て五老峯を尋ねず。」
復た擧す。堂頭物初和尚、五祖の如何
なるかこれ祖師西來意、庭前の柏樹子、恁麼に
會せば便ち不是了也、如何なるかこれ祖師西來
意、庭前の柏樹子、恁麼に會せば、方に始めて

白にあらす、その不察の色を
見付くと重々無盡の境界不
察は本地の風光なり、色は頭
容顏氣なり、不察之色は無相
の本色なり。
撈摭無垠。撈摭はとりとらふ
るを得べからずと、自己受用
と同じ、無垠はすくはれぬと
若し轉向那邊。形色の外を指
す、珠云く、「無形を見無色を
察す、なほこれ者邊の事、轉
ははこぶ運なり、那邊にとは
見察よつくそこへ到ると、天
下第一じや。」或抄にその機
はやきことばじや。」又云く、
「本分向上不見不察を云ふ。」
猶飛不度。淡云く、「見地高邁
心涯廣大の故に、たとひ飛鳥
といへども及ぶべからず。」珠
云く、「如是那邊に轉せば鳥も
かよはぬ。」或抄に「物初和尚
一點のけがれもなし。」
不以形器拘。これは不見の句

一七
を結ぶなり、珠云く、「形器は長
短好醜方圓じや、不拘はと、
こほるものがじや。」
不以色塵礙。これは不察の句
を結ぶ、那邊に轉向する故に
其の功用此の如し、珠云く、
喜怒愛樂等の七情四威儀等を
色塵といふ。
超諸聖塵。或抄に云く、「塵は
市塵なり、今は聚會の義を取
るなり、諸聖は佛祖の境界塵
は上に云ふところの儉納市の
如しの義を云ふ。」
出大方表。一切の界礙なし、
珠云く、大方は萬物の出は此
の天地の内には居ない。」
溪山雲月。これは傳燈にある
樂善の傳に、夾山曰く、「溪山
各異、雲月は同の語にとる、か
の大慈山もこの虚堂、大の
鳴くも猫の鳴くも何もかも普
門圓通じやと珠抄にいへり。
どこでも我他彼此はないと。」

是」と道ふことを舉して、師云く、五祖當時、一時に落艸、自ら謂へり、土曠く人稀なりと殊に知らず、今日慈峯老子に咽喉を拈定せられて、直に得たり。氣を取る處なきことを。育王、此に到つて、客主裁を聴く、只だ放過することを得たり。何が故ぞ、人情傲し得冤家結び得たり。

仗錫和尚至る上堂、「盤山の地の山を攀げて、山の孤峻なることを知らざるに似、石の玉を含んで、玉の瑕なきを知らざるが如し。若し能く是の如くならば、これ眞の出家」といふを舉して、師云く、「盤山其の實は只だ出家兒の萬法相到らざらんことを要す。山僧昔、霞谷に寄せしとき、棘林老子と與にすること、也た是の如し。別れ去つて一十餘年、今日相

① 水鳥樹林。これは彌陀經の「水鳥樹林、悉皆念佛念法」にとり、諸法實相の當位なり、珠云く、「或る時は主となり、或時は賓となる、互に宗旨を顯發する。」

② 慈峰老子。觀物初なり。

③ 橫點頭。首肯せざるなり。

④ 寶中自有佳山。慈峰の自家好風光あり、他の塵阜の佳境を尋ねざるなり、意比知すべし或抄に、「この二句は大意を指して讚歎するなり、重ねてはその上にじや、物初の面前に自ら一段の好消息あり、何ぞ虚堂が懸説話を用ひん、所謂橫點頭だもせざるなり。」

⑤ 復舉。忠曰く、これ必ず物初の引座して此の話を舉すならん、然るに物初の大慈録を検するに、虚堂を請するの上堂引座の語を載せず又曰く他寺の聲宿來訪の時は首座勸請の

説法せしむ、住持先づ陞座して以て聲宿當に衆の爲に闡揚すべきの意を申す、此を引座と云ふて他の陞座を導引する也云云。

或抄に虚堂の來臨に因て物初和尚上堂の法式を説く、然らば則ち物初其日の上堂の拈提也。

⑥ 堂頭。(たうてう)とよむくせなり、その寺の住持の人の稱號。

⑦ 物初。(ぶそ)とよむくせなり、「もつしよ」とよむ人もあり。

⑧ 五祖道。云云不是了也。これまでは此は五祖法演禪師の語方是始。これまでは物初の語落艸。ちぢぶれる、或抄に邪路に入るの義なりと云も非也と濁に下るの義なり。

⑨ 土曠人稀。無知音の義前にも見ゆ、又或抄に向上第一五祖

見するも亦是の如し。且く道へ、其の中の意作麼生、拄杖を卓して、「是の如く是の如き而已矣。」

解夏小參、微を防ぎ漸を杜ちて、深切著明なるも、也た是れ風なきに市市たる波あり、更に若し制を立て、安居せば、何ぞ珠を破つて影を求むるに異ならん。衲僧家、智、象外に遊び、妙、環中に入つて、生佛の未興を點破して、古今の窠臼に落ちず、甚麼の鰓湫清潔、玉几高寒とか説かん。直饒ひ頭を擧得し來るも、早くこれ枯桑水と變ず。育王恁麼の告報、常情を出でず。只だ剋期取證の一句の如きんば、又作麼生、拄杖を卓して、善く柳下惠を學んで、終に其の跡を師とせず。」

は知音がないと思はれたなりと。

① 珠不知。五祖に當るなり。

② 拈定咽喉。拈は取なり授け也今は把定の謂也「のどくびををさへられて」也。

③ 取氣。氣息を出すを謂ふ。

④ 到此。この大意寺にきてじや咽喉を拈定するの處。

⑤ 客聽主裁。裁は判段也客と作ては須く主人の制斷割裁を聽くべし、珠云く、「一句子の五祖をすくべき處見のがしにする處でなければも主人のさばきにしたがはればならぬ。」

⑥ 得放過。自ら行ふことを得ざるなり、珠云く、「此の是非について、金屑は眼中の翳となること、眞金色を失すること、瓦礫光を放つこと、そこばく穿さく、ことあれども容ぶりがわるければ、まあそのまゝよと、石火炎を胸板

へははされたよりえらい。」

⑦ 人情傲得。珠云く、「分明に五祖をすくひえた語乎、主裁に關ふの語乎。」

⑧ 冤家結得。人情は感情なり、却つてこれ眞箇知音の義なり

⑨ 仗錫。仗錫棘林和尚は足庵繼に嗣ぐ、繼は大休狂に、狂は眞敬了に、了は丹霄淳に嗣ぐ、仗錫山は彭縣に在り、延勝院といふ、唐の龍紀元年建つ宋寶元二年額を賜ふ。

⑩ 擊山。日本ならば富士山なり

⑪ 合玉。夜光の玉、この語は會元の盤山傳并に事苑一に出づ又譯林類聚にも出づ。

⑫ 萬法不相到。如是徹底無心ならん則ち萬法何ぞ到らん、信心銘に一心不生なれば萬法皆なしと云ふが如し。珠云く「六塵諸法に不染底の法をえさせんと思ふ。」或抄に「萬事心頭に到らず、無心底なり。」

寄霞谷。珠云く、「このこと延福録に見ゆ、師、瑞岩を退居して霞谷に退居するもの三年、頌古代別を作る、寄は同聚なり、寄跡なり、引込んでゐた。」

輔林。仗錫和尚なり。

也如是。地の山を撃ぐが如し。

其中。珠云く、「昔にも倚らず、今にも倚らず、まづ正中。」

如是如是。彼此徹底無心。珠云く「無事禪を云つたではないぞ、東山下の大事を含んでゐたぞ、無縫禪二龍以争れ珠、然雖も如是少しも無縫禪の名人なり、而已矣は助字なり、決定したることにつかふ。」

防微杜漸。寶藏論の文なり、言るは微細の恣を防護して生ぜざらしむ、漸流の業を杜塞して作さざらしむ。珠云く、「妄想惡業を防ぐこと敵賊の如くす、又秘密をつとめる、漸は事の端、先觀の始め。」或抄に「防微は精僧工夫提擲して妄念妄惑を拂ふを云ふ、杜漸は物の

山なり、高寒は向上を云ふ。
直鏡。珠云く、「このとき如何と見るか、遅八刻、此の處、なる程と契當するものじや。」
舉得頭來。或抄に「もとをとびこえてじや」と、又云く「上の無事と玄妙との二途を脱してじや、」又云く「虛堂虚塵の語下に於て回心し悟り了るも早く是れ遅了也」と、珠云く、「頭を擧得するも遅八刻」と。
枯桑變水。「三たび變するときは海水桑田と爲る」と、麻姑壇の記にあり、桑田海水と爲る、故に枯桑水と變ず。或抄に「枯桑は格外俊邁の機じや、俊邁に没溺せん」と珠云く「年代へだつてふるめかしいといふ事なり。」
虚塵告報。珠云く「だれもく云ふことじや、ふるめかしいと、別なることではない。」
剋期取證。珠云く「なんと大衆たち、一句と云ふに格外のあるありじや、又どうじや」と。

きざす處、一滴の水も漸々多くなるやうなもの。」

深切著明。工夫を著くることは是の如く、明白なるものと能々十二時中深切著明なるも。

無風市市。この語寶林錄にもあり前に見ゆ、也是とほ消僧の上よりみればなり、珠云く「本來微の防ぐべきなく、漸の杜づべきなり、動を止むれば止に歸す、止更に彌ふ動すじや。」

立制安居。九十日の制限を立て、なり。

破珠求影。喻は即ち解くべし、未だ所出を審にせず、或抄に「影は光影なり、又の義に珠中に現するところの物象の影なり、珠を破つてひかりをみんとするの義、愚痴の至りなり。」

智游象外。これも寶林錄に見えたり、珠云く「見性の大智を以て象外に遊び差別の玄妙を會して向上宗乘童子の環中に入つてじや。」或

善學柳下惠。柳下惠の故事は孔子家語の好生篇に詳し、魯人曰く「柳下惠は則ち句なり、吾れは國に不可なり、吾れ將に吾れの不可を以て柳下惠が可を學ばんや」と、孔子之を聞いての玉はく「柳下惠を學ばんと欲するもの未だ此に似る者あらず、至善を期して其の爲ることを要はず、智と謂ふべけんや」と。溪云く「善を期して要はざるの義なり。」珠云く「善學三柳下惠」とは聖制に隨ひて聖制の所繫を受けずじや、又云く「九十日安居して、たゞ修證の大事が肝要、古人今人の行履を必としてまればせぬ、虚堂何をいひだすか是れ什麼ぞ、饒湫玉几と説きあげて来た上のとよめに以て来た語じや、或抄に古人の迹を踏まず、剋期修證の解縛を受けず、又云く「善く如来の大法を學ぶものは、聖制安居の跡を師とせず、これ即ち取證の處

抄に萬象の外じや、至道の環中じやと、妙は無窮義なり。自由自在なり。
生佛未興。衆生諸佛の一機、未だ興起せざる已前を點破するなり、珠云く「混沌未分をも點破するなり、未興はわからぬなり。」
古今窠臼。古今の葛藤の窠窟に落ちず」と。珠云く「佛祖の窠臼にじや」と。或抄に「結夏解夏、或は言語葛藤の窠窟じや。」
饒湫清澗。育王の境致なり、育王の鎮守なり、又は聖井魚と云ふ、鄒山舍利寺の東一里に聖井饒饒あり、川でんと欲するときは則ち二紅蟹あり、前區の者の若し湫は北人水池を呼んで名づく、澗は兩深なり、さくも深い清澗なるものなり、これは淨穢々洒々落落々を云ふ玉几高寒。玉几は玉几峰、玉几亭とてみな育王の境致なり、これは當山の境致に寄せて、是の法平等無有高下の境界を示す、門前の小

平地土死。數縛せらる底なり、無事の坑に墮する底なり、珠云く、「無事はれ貴人と留めて居る、さろかわく、有氣の死人無數じや。」

出得荆棘林。荆棘は所謂縛なり、珠云く「金剛王を以て難透の話をきつて、きりぬいて出る、これ好手と、てぎはものじや、發明ものじや、荆棘は或抄に「向上の一路じや」と。」

堂中第一座。雲門下の首座。

有長處也。珠云く「何が長處じやせいが高いか鼻がたがいか、人に過ぎたる處があるか。」

蘇囁々々。或は蘇囁に作る。所謂一道の眞言、義解すべからず。或抄に「荆棘林中一條路を開示す、この解は或人は蘇は「よみがへる」虚は「かたる、をしむ」ことで、即ち甘露の水を洒がれて、蘇るを云ふと。」

任公子。これは雲門の意は鉅禪碩

復た擧す、雲門乘に示す、「平地上に死人無數、
 荆棘林を出得するものは好手」と。時に僧あり、
 出で、云く、「慚麼ならば則ち、堂中の第一座、
 長處ありや。」門云く、「蘇噓蘇噓。」師云く、「
 雲門は大いに任公子が、設くるに五十の槽を以てして、竿を技じて東溪に釣るに似たり
 山僧尋常、包荒を善くす、人の過を宜ぶること
 を欲せず、甚に因つてか此の如くなる。」拂子を撃つて、
 何の官にか私なく、何れの水にか魚なき。」
 次の日上堂、長期百二十日、短期九十日、夏月
 蟲蟻多し。黃面老子、爾が東走西走して、殺生
 害命せんことを恐る、故に制を立て、以て之を禁す。
 今朝期滿す、鄧峯門下、未だ嘗て一人も敢て
 容易に脚を下すものあらず。何が

徳を索むるに在り。莊子の外物に任公子の故事出て詳し、竿を東海に投じて且且(あまな)釣る、期年まで魚を得ず、已にして大魚之を食ふ云云。噓は牛なり。五十の槽を餌にして無類の大魚をつらんと、格外の一物を得ん爲め東海に釣るなり、これは大機大用なり。
 善包荒。易の泰の九二包荒と云ふより出づる語なり。珠云く、「人のあらかくすがすきじや、大抵見ぬふり聞かぬふりする、胸中の廣きを云ふ。」
 宣人之過。死人無數と道はす或抄に「平地死人あらば、あるまいに拾ひおぎはせぬで、いらぬことよとなり。」
 何官無私。珠云く、「人のあらと云ふこと乎、平地上死人無數と云つたところに能くあひますがおほく、あうとらく」
 無私じや、見たふり聞いたふり、それで一切がそだつてゆくと、無私の處。或抄に「畢竟皆荆棘林を出でざるものはなき」となり、公儀のことにし私なくては叶はぬで、それと同じで雲門にとがはあるも云はぬとなり。
 何水無魚。上の句の喻へなり珠云く、「魚は水に住めども住むとも思はずしてなる。」
 短期九十日。圓覺經の四覺菩薩章には、下期八十日と作す與聖錄に見ゆ。
 夏月蟲蟻多。報恩の禁忌護生の下に見ゆ。
 容易下脚。締密に制を守りむべきところをぢつとふんでなる。
 恐踏者。珠云く、「ふみあてたならば、破戒しきうなと、脚を下さなんだと云ふことか。」
 或抄に「外面は蟲蟻を踏殺す

故ぞ、「拄杖を卓して、恐らくは踏著して、
 突吉羅罪を犯さんことをと。」
 徑山の石溪和尚の遺書至上堂、雞足峯前、
 黃梅渡口、冷泉に返到して幾か肘を撃く。
 若し凌雪正傳に非すと謂はゞ、畢竟衣法誰が手にか屬す。野狂鳴獅子吼、虚空昨夜筋斗を翻す。
 上堂、擧す、讓和尚、馬祖に問うて云く、「汝坐禪を學ぶか坐佛を學ばんと爲るか、若し坐禪を學ばゞ、禪は坐臥に非ず、若し坐佛を學ばゞ、佛は定相に非ず、無住の相に於て、取捨すべからず」と。師云く、「南嶽、馬祖を引いて、牛角裏に入つて老鼠の活計を作す、忽然として箇の出路を得ば、却つて南嶽の裏許に坐在することを笑はん。」

と言ふ底の意、底意は黃面を弄しての言ひなり。又云く、「わづかに足なふみ出したならはじや。」
 突吉羅罪。一觀をも踏著せず地を掘り舂み抜く等の小罪、その數一百、突吉羅と云ふは突に惑なり、吉羅は作なり、胡僧は守戒と翻す、此の罪微細、之を持つこと極めて難し故に隨ひ學び隨ひ守る、以て名を立つ、梵翻には輕垢罪といふ律には突吉羅といふ。
 石溪。名は心月、掩室開に闢ぐ、開は松源岳に闢ぐ、虛堂とはまたいとこでである、石溪は西蜀の人。
 遺書至。與聖錄に見ゆ。
 雞足峰前。此の二句は石溪正傳衣法の由を述ぶ、屈屈叱播陀唐には雞足山と言ふ、峻起する三峰あり、迦葉既に入り玉ふとき三峰欽覆せり、三會
 説法の後餘に無量愍慢の衆生あり、慈氏將に此の山に登らんとす、彈指すれば峰開く、迦葉衣を授けて火化して入滅す。
 黃梅渡口。黃州府九江城にあり、黃梅縣の西南七十里にあり、これは六祖壇經に因緣委はしく出づ、溪云く、「石溪曾て正傳の衣を拈す、今其の事を拈んで正傳の宗師なることを讚嘆す、故に此の兩句は衣法の源委を標す、黃梅は五祖弘忍大師の居るところ、夜中に五祖の六祖能を送られしころ。」
 返到冷泉。冷泉は松源、靈隱に住して正傳の衣法の主なるが故に、肘を撃くと人をして情亂せしむるの義なり、忠曰く、「白雲の傳衣松源に到りて少しき留得あり、此れを撃肘と云ふ。」透は物相投合する

上堂、天寒人寒、大家者裏に在つて、
 與麼に會得せば、鐵板障も也た須らく退經す
 べし。然らずんば、本龍を屠らんと擬し
 て、翻つて虎を射ることを成す。一
 上堂、舉す、嵩頭、徳山に見えて、便ち問ふ
 「是れ凡か是れ聖か。」徳山便ち喝す、頭便ち
 禮拜す。後來、洞山聞いて云く、「當時若しこれ
 巖公にあらずんば、也た大いに承當し難から
 ん。巖頭聞いて云く、「洞山老漢、好惡を識ら
 ず、錯つて名言を下す。我れ當時、一手擡
 一手搦」師云く、「巖頭大いに明上座が、
 應行者を趁ふて、大庾嶺頭に到つて、却回
 して同伴に向つて、此去つて杳として消息な
 しと道ふに似たり。」
 上堂、舉す、雪峯衆に示す、望州亭にも

なり、製肘は人のさばりにな
 るを云ふ、返到は的々相承し
 て、冷泉は亭は還隱にあり、
 松源を指す、逗ばもらすなり。
 ① 凌雪非正傳。凌雪は徑山なり
 今石溪此に住す、故に指して
 稱す、的々正傳なり。
 ② 衣法懸難手。深く其の正傳を
 明すの言なり。此の石溪がか
 けたからば。
 ③ 野狂鳴獅子吼。大活自在、或
 抄に云く、「正傳の證據を示す
 此れ生前の説法の大活自在な
 り。」
 ④ 虚空昨夜翻斗。上の句は石溪
 平昔の説法を讀し、此の句は
 遷化轉身の活三昧を述ぶ、珠
 云く、「虚空がくらがりでさ
 るがへりをしたと、石溪の遷
 化を見ごとく活三昧見物じ
 や。」この語は寶林録にも見
 ゆ。

慧能に嗣ぐ、南嶽は今の湖南
 省の一名衡山五岳の一なり、
 石頭もこの山にあり、一番高
 きを祝融峰と云ふ。
 ① 坐禪。中峰和尚坐禪論に曰く
 何をか坐禪と名づく、「外一切
 善惡の境界に對して、心念起
 らず、名づけて坐と爲す、内
 に自性を見るに動ぜざるを名
 づけて禪と爲す云々。」又「諸
 法空を坐と爲す、證得を禪と
 爲す。
 ② 非坐臥。坐臥の上にあるもの
 でない。
 ③ 爲學坐佛。珠云く、「無二無
 三、唯一佛體を得たいと思ふ
 て歟。」
 ④ 非定相。禪定の定にあらず。
 ⑤ 不應取捨。無住の相に於て云
 云は金剛經に見ゆ、一切の凡
 聖定亂等に住せずして、此の
 眞如の本相に於て、或は聖を
 取つて凡を捨て或は定を取つ

て亂を捨つとなり、珠云く、「佛ば
 よいで取る、凡夫はわるいで捨て
 るの」と。取捨は計較安排なり。
 ② 入牛角裏。小機圓機を作すとなり
 語録は顯孝錄に見ゆ、珠云く、「狭
 小の處に入りて、伎倆盡き偷心盡
 く。」後へも前へも行きやうがない
 觸摸を見んと要す。
 ③ 得箇出路。珠云く、「馬師牛角に引
 き入れられたば引き入れられたが
 箇の出路を得て見れば、却つて南
 岳の窠窟に坐在することを笑ふ。」
 裏許は牛角裡なり、取捨の處はな
 い。
 ④ 上堂。鶴林(白隱)曰く、「此の上堂
 は虚堂深き心ありてしたか。」
 ⑤ 天寒人寒。珠云く、「京もさむけれ
 ば田舎も寒し、人天一夜寒氣。」
 ⑥ 大家者裏。珠云く、「僧俗男女舊く
 新到、なんとさむいじやないか。」
 ⑦ 與麼會得。珠云く、「雪のふる夜は
 なるほど寒いと合點せば」と。
 ⑧ 鐵板障也。たとひ鐵板障之堅固な

るも當下に便ち寒裂せん、也た須
 らく退歩して縫合すべし、これ徹
 底大悟の端的なり、忠曰く、「鐵板
 障、障は屏風の類、鐵を以て造る
 なり、退經の退は縮退なり、縫は
 鐵板の合ひたるところ、二鐵のつ
 ぎめ退縮は凍裂の狀なり。」珠云く
 「煩惱障、所知障も、五欲八風もら
 りこつばい、はりりん〜。」或抄
 に法座の後の障子を云ふ。
 ⑨ 不然。上の句で見得ずんば、ふ
 んべつがちがふ。
 ⑩ 本。始あらずといふことなし、素
 の志には違ふなり、言句の上に向
 つて求めんとせば。
 ⑪ 飛居龍。言ろは修行の本志に違背
 すとなり、翻つては能く終あるこ
 と鮮し、えいやつと、やぶになる
 虎を射るなり、莊子の列禦寇に朱
 泮漫の居龍を學びし故事あり。
 ⑫ 嵩頭見徳山。この話は傳燈の十六、
 聯燈二十一に見ゆる語、珠云く、
 徳山は衣被けだかくつくるふてひ

かへた。」
 ⑬ 便喝。珠云く、「棒が出ると思ふた
 ら存外。」
 ⑭ 頭便禮拜。珠云く、「してやつた、
 有りがたし」と。
 ⑮ 洞山。僧禪師なり。
 ⑯ 大難承當。受取にくい處、さへ
 にくい處を、よくもさへなほせ
 た。
 ⑰ 不識好惡。洞山老漢、よい年をし
 て居て物のわきまへらない。
 ⑱ 錯下名言。とりちがへて銘をうつ
 た、名言は註脚の義。
 ⑲ 我當時。洞山、嵩頭同じやうな。
 ⑳ 一手擡一手搦。全く背はざるなり
 珠云く、「一手ではかひなを取つて
 ひきあげた、一手ではくびをおさ
 へて、さあぬかせ〜と。」
 ㉑ 明上座。蒙山道明、五祖弘忍大師
 に嗣ぐ。
 ㉒ 虛行者。六祖能大師なり。
 ㉓ 大庾嶺。南安府にあり前に見ゆ。
 ㉔ 却回。かへりきたるなり。

汝と相見し了れり也、鳥石嶺にも汝と相見し了れり也、僧堂前にも汝と相見し了れり也、師云く、「惟しむこと莫れ坐來頻りに酒を勸ることを、別れて後自從り、君を見ること稀ならん。」

上堂、元宵に知事を謝す、僧問ふ、「有句無句は、藤の樹に倚るが如しと、此の意如何。」師云く、「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に満つ。」僧云く、「樹倒れ藤枯れば、句何れの處にか歸せんといふ。」師云く、「黄金を抛却して碌轆を捧ぐ。」僧云く、「鴻山泥盤を放下して、呵呵大笑す、又作婆生。」師云く、「天堂未だ就らざるに地獄先づ成る。」乃ち云く、「今歳元宵、州家十分の燈を放つて民と樂を同じうす。唯だ鄧山の堂殿廊廡の

●此去杳無消息。これは明上座が五祖大師の密に衣法を付して、盧行者に與ふときくに及んで、即ち同志數十人を率ゐて、跡を隠して追逐して大庾嶺に至りて、已に開示を得て大悟證謝し、遽に還つて嶺下に至つて衆人に謂ふて曰く、向きに崔嵬に陟つて遠く望むに、杳として蹤跡なし、當に別道に之を尋めべし」と、皆以爲らく、然りと、この事は傳燈錄の道明の章に詳なり、巖頭已に喝下に機を投ず、却つて云ふ一手撥等とその機相似たり。
●雪峰示衆。珠云く、「此示衆は實に古今無雙。」
●望州亭。雪峰の境致なり、雪峰は福州侯官縣にあり、開山は眞覺禪師なり支那十刹の一なり。
●與汝相見。珠云く、「出逢ふたが、兩鏡相照すが如く、見事な出合ひ。」
●鳥石嶺。雪峰にあり。
●與汝相見。亭(ちん)でも出合ひ山でも堂前でも全體肩か交へ肩を結んでなる、汝はこれ阿誰ぞとなり。
●莫能坐來。この二句は杜牧が王十五判官を送るの詩に云ふが如し、「野騎信使應稀少、莫怪頻頻勸酒盃」と。今は雪峰重重の町壘を曉さんことを要す。珠云く、「莫れ惟坐來とは、ずわるやいなや、もの、一つくと、なぞめつたに、すゝめると思ふておくりやるな、けふ別れてからは、又お目にかゝることは、めつたにならぬと、又云く、「けふ別れて又いつあふもしれぬ、いやでも一つ呑んでたも。」虚堂此のやうなことをひつつけおいた、前断はならぬ。」

みありて、半明半滅す、往來のもの、露柱と肩を交へ、燈籠と頷を聞はしむ。燈明王聞き得て、出で來つて、本光を顯發して、大佛事を作さんと欲す。山僧之が與に、威を震つて一喝す。何が故ぞ。自ら僧の事を知るあり何ぞ強ひて出頭するに勞せん。」
●雪竇和尚至る上堂。「金輪峯頂、鏡鏡亭邊に一句子あり、天下の衲僧を殃害す、未だ一人も點校得出するあらず、育王、久日の構來唇、豈に緘黙を容れんや。且く道へ、是れ那一句ぞ。」拄杖を卓して、「見説らく前村風更に悪し杏花春寒を避くるに處なし。」
●佛涅槃上堂。大覺世尊、衆生の妄を執して本と爲るを見るが爲に、百花明媚萬葉敷榮するに當つて、示すに入滅の相を以てす。汝等

●謝知事。珠云、「勤勞の挨拶かめさる上堂。」
●有句無句。これは高山と懶安の語、此の語はこの録の立僧普説に詳かなり、或抄に、「有句無句は有無の上共に無心にして、喻へば藤の樹に倚るに藤も樹も共に無心に相立する如くなり。」
●掬水月在手。これは子良史が春山月夜の詩なり、「春山多三勝事、賞玩夜忘歸、掬水月在レ手、弄花香滿衣」と、自然得妙の義なり、言ふ意は語に參するは則ち自然に意を得るなり、珠云く、「有句無句の徹底が、いかぬと、此の句がでるものでない、或抄に本分を用ひ得た上なり、本分を知らせん爲なり、句の字に心なし。」
●御倒藤枯。珠云く、「疎山布單を賣却し、三千里外、特に來りて、和尚に見ゆるの一句じや。」
●鑿。すこしははせろなりと、前に解せり、見るべし、物を指す貌。
●抛却黄金。語に依つて意に依らず、珠云く、「鷲目を以て玉と爲す、結構な寶をうちやつて、大切さうに小石碌轆を捧ぐと、これは疎山に當るなり、ろくせんば言語にたとへる、眞旨をしらす閑言語を弄することなり、又或抄に「抛却黄金」とは、樹倒藤枯といふをさす、捧碌轆とは句何れの處に歸すといふをさす。」
●放下泥盤。泥盤は、泥をぬるこ手なり、放下はすてる、ほりすてる。
●天堂未就。此の笑、活人の機少く殺人の機多き故なり、珠云く、「天堂の普請できすして焦熱大焦熱の苦患が一身に集

めてきた、こゝがたじげないといふこと。或抄に云く、「好いことは出来ず、悪しきいやなおそろしい事が出来たとなり、此れ大笑の處に、殺人刀の機鋒にして賊意あるを云ふ。」

② 州家。知州の府事で、太守の家會でなり。

③ 放十分之燈。この上なき結構な燈籠なともしてと、放は放置つくりおくすべおくなり。

④ 唯有鄧山。廣は堂下の周屋であるこの青玉山は油が高いのでなり、鄧山は青玉の別名。

⑤ 牛明牛滅。ちよろ／＼燈十分ならざる故になり。

⑥ 往來者。これは本分底を指す、暗きゆみに往き來のものが、露柱とこつつりこをする。

⑦ 燈明王。日月燈明佛、これは寓言。

⑧ 聞得出來。衆人のこまるをききだしてきてと。

⑨ 本光。燈明佛の本光なり、これは

ふ意は陳久の禪來唇は乾燥不仁(かはききつたるくちびる)で、誠對默合するに堪へずと、畢竟口を合することを得ずとなり。或抄に「禪來唇は多口の義、來は成の誤か。」

① 是那一句。發頭を回照す。

② 見說前村。禪林風月集中に法俊春日の詩に曰く、「堤雲漠漠雨漫漫、楊柳如絲不厭看、見說前村風更惡、杏花無力耐三春寒。」珠云く、「昔が云ふには、北山邊は日にまし風がひどいと、餘寒のひどさに花もえさかぬとなり。」今は雪覆門風の凜冽たるを表す、この詩の題は春日とあれども、詩の心を以て之を見るに、題は新春雨申となすべしと云ふ、法俊自ら退巻と號す。杜詩に曰く、「春寒花較遲」と此の一聯は風と雨と相互續して見るべしと注に見えたり。

③ 大覺世尊。釋迦老子を指す、感じて通ず、大覺世尊と名づく。

延福錄に見ゆ。

② 震成一喝。天地も震動する位、吹滅のところ。

③ 自有僧知事。珠云く、「知客の副司の知殿のと、役があつて燈明佛が出て、せわやかないでもよいと。人本具底の世話人がある、佛の神のと他力をうけずとも、悟明を得る、知事附の上堂の故に云ふ。」

④ 何勞強出頭。知事に結屏す、或抄に「人人會具足してある」と。

⑤ 雪寶。大敬仲謙、松源に嗣ぐ、此の錄後面に遺書至るあり、虛堂和尚の法叔なり、雪寶は明州慶元府にあり、東は雪寶、西は虎丘なり開山は常通禪師趙州に嗣ぐ。

⑥ 金輪峰館。ともに雪寶の境致である。こゝにはたゞ雪寶を指していふ。

⑦ 未有一人。説法人の點檢計校に落ちず、珠云く、「萬人の内一人もつくり吟味仕出來るものがない。」

⑧ 久日禪來唇。來は語助である、言

比丘、若し能く此に於て 一隻眼を着け得ば、

釋迦は自ら釋迦、波旬は自ら波旬ならん。」

上堂、擧す、藥山 看經する次で、僧あり問ふ

「和尚尋常、人の看經することを許さず、其麼

としてか却つて自ら看す。」山云く、「我れ只だ

眼を遮らんことを圖る。」僧云く、「某甲還つて看

し得てん麼。」山云く、「爾若し看せば、」牛皮も

也た須らく穿つべし。」師云く、「師も弟子に加

かじ。」

茶を摘む茨で、 清涼和尚至る上堂、僧問ふ、

「瀉山茶を摘む次で、仰山に問ふて云く、「終日

只だ子が聲を聞いて、子が形を見ず」と、仰山

茶樹を撼す、意旨如何。」師云く、「錢は急家の

の門より出づ。」僧云く、「瀉山云く、「子只だ 其

の用を得て、其の體を得ず」と。」師云く、「門

① 衆生執妄。妄に四大井に六塵の縁影を認めて、自らの身心の本相と爲す、珠云く、「四大虚假の身安を執して、眞實堅固とする。」

② 百花明細。桃櫻の百花がきれいにさきそらふて、よめな、たんぼののいろ／＼の草までもみさかゆるにとなり。

③ 示以入滅之相。衆生顛倒して無常の妄幻を執して、眞常の本相もなす、故に二月十五日に當りて入滅の相を示す、昔方便の故に、世の無常をば示し玉ふとなり。

④ 著得一隻眼。言るは若し妄想の倒見を遮りて、自分の隻眼を開くときは、則ち天はこれ天、地はこれ地、佛はこれ佛、魔はこれ魔、甚麼の安排があるんと珠云く、「山能が諸曲に邪正一如と見る時は、色即是空其のまゝに、煩惱あれば善

提あり佛あれば衆生あり、衆生あれば山能あり、柳は緑花は紅の色々、又云く、「精僧の一隻眼は肉眼をはなれてある、」或抄に「長者は長法身。」

⑤ 波旬。正しくは波擲夜と言ふ此には惡と云ふ、釋迦出世のとき、魔王の名なり、羅什云く、「秦には殺者と云ふ、常に人の惠命を斷ぜん」と欲するが故に。」

⑥ 看經。珠云く、「未到のものは古教を以て心を照す、已到の者は心を以て古教を照す、用心の次第なり。」

⑦ 圖遮眼。別に功驗を求むる所なきの義。珠云く、「藥山はおれはどうぞ見のこを工面する、」或抄に云く、「此れ謂つべし、看經分あり、若し文を追ひ句を尋れば、これ經に轉ぜらるるものなり。」

⑧ 牛皮也須穿。言るは若し是の

を出で、用ひず、頻に叮囑することをも。僧云く「仰山云く、『未審し和尚作麼生』と、嵩山良久す、仰山云く、『和尚只だ其の體を得て、其の用を得ず』と。師云く、『子は父の爲に隱す。』三云く、『嵩山云く、『子に二十棒を放す』と。師云く、『手臂終に外に向つて曲らず。』乃ち拈じて云く、『趙州曾て問ふ、南泉老、禮拜燒香、只だ舊時、若し是れ清涼の萬菩薩ならば、等閑に聞き著て眉を擡めん。』結夏小參、旃檀叢林、旃檀圍繞す、之を析くときは則ち、片片皆香し。荆棘叢林、荆棘圍繞す、之を揀ぶときは則ち、枝枝畏るべし。故に我が釋迦老子、平等性智を以て、諸の比丘を攝し、同じく大圓覺海に入れて、一百二十日長期の内に於て、撈摺澄濾して、

如く看じ去らば、たとひ頭皮が牛皮の厚きが如きも、也た須らく穿透すべしとなり、珠云く、『佛の皮祖の皮、金輪奈落の底までも看つくぞ。』或抄に云く、『汝經を看るならば牛皮を穿つほどに看ぬかんぞとなり、其れほどに見ることばならぬ也。』師不如弟子。師責一般の義、上の引く所を以て理會すべきなり、韓文に『弟子も必ずしも師に如かずんば師も必ずしも弟子に賢らず』とあり、珠云く、『師は已到底なり、弟子は未到底なり、やつかひものを云ふ、不知はわなじからずなり。』或抄に『藥山を抑へて虛堂の腕力、山もこの僧におとつた。』清涼和尚。南叟茂禪師、石溪月に嗣ぐ、松源四世。提茶樹。嵩仰宗の風彩なり、

こゝにのみするなり。錢出家門。急家は貧急家なり、嵩山の責を得て債を償ふ間はれて、大事の寶物を取り出した、富貴のものは何もかもだくはへおく故、平生錢をださぬが、貧乏のものはせか／＼と平生だす、俗にいふかはくに追付くびんぼふなしの義なり。得其用。珠云く、『用は差別の用なり、體は根本の體攝と動とは用に屬す。』出門不用。鄭重に教授する故なり。珠云く、『いとまごひして行くものには、婦女子をあしるふ如く、あまつこい鼻紙扇子、草履の鼻緒のことまで氣か付けるには及ばぬ。』或抄に云く、『門内に居るは體なり、今門を出づと言ふは用なり、言ふ意は用の處に嵩山か此の

如く丁寧云ふたは、入らざることをと抑へた、人と別れざまに門を出でても、又なにやかやと云ひ付けるなり、今は嵩山の抄處の重々丁寧なるを云ふ。子爲父隱。これは論語の子路篇にある語、「直在其中」とあり、これ嵩山の家私を覆隠する故なり、其の實は全體即用、甚の得ざることかあらん。珠云く、『すなかなな挨拶、互に密察は見せぬ。』或抄に、『嵩山の家醜、外に向つて揚ぐるところを、仰山が隠した。』放子二十棒。或抄に體用の上をえ離れぬ程に棒するぞ、珠云く、『此の義叶からず、只だ此の處置するが罰するが、如何を見よ。』放は放置なり。手臂終。嵩山此の合を行す、實に理の當然なり、手臂の外に向つて曲らざるが如し、珠云く、『手臂云云は理の當然、あたりまへとほど云ふこととじや、さうありさうな

ことさ、それほどたはごと云ふてあとではさう云ふてしまはればならぬこと乎。乃拈云。古德師資會遇の縁を拈起して特に頌用す。趙州會問。珠云く、『師責向上の合ひ、會問とはまへつかた問訊なり、趙州は清涼に比し、南泉は自らに比す。』或抄に云く、『趙州の南泉を問訊の時、何さま快活奇異なこと有らんと思はるれば、何の事もなく只舊規の如くに禮拜燒香せられたまでなりと抑へた。』只舊時。珠云く古則公案の唯もなはい只よのつれの。くうつんのんつのはなし、しかし浅いか深いか佛祖もせぶみはならぬところ萬仞崖崖鳥飛不淨。若是清涼萬菩薩。六十華嚴第三十一菩薩住處品に云く、東北方菩薩の住處あり、清涼山と名く、過去菩薩の眷屬常に中に於て住す、彼こに現に菩薩あり、文殊師利と名

く一萬の菩薩の眷屬あり常に爲に説法す、これは清涼の縁を用ふるなり、珠云く、『根々大智まふ此の上は無いと法柄を取て應接せば此の虛堂が心には叶はぬ、再び花嚴法界に入り四法界細大の法門底を盡し、宗門向上の抜きを得てこそ少林の春を回へす眞の種草とも云ふべきに、或抄に、萬菩薩は明眼の納僧じや、清涼和尚は云に及ばずその會下の大衆までも趙州の如くにはなくて活脫儉邁の漢なれば趙州南泉の體を聞いては眉を擡むそと也、清涼を褒美せんために趙州を抑下す、萬菩薩會下の大衆に比す。等閑聞者也擡眉。等閑は格外なほどにいやだ／＼くさい菩薩くさいと珠は云へり、言は佛の一字吞れきくことを喜ばず、況んや萬菩薩をや、宜しく眉を擡むべし、趙州を以て清涼に比す、南泉を以て自當る趙州曾て清涼の行あり、

故に此の縁を用ひ。事は趙州の傳に見ゆ、撒眉は廬山雜記に遠法師書を以て淵明を召す、明遂に白蓮社に来る、鐘聲をきいて曰く、これ何人の鐘ぞ、答て曰く酒を誂むる鐘と淵明眉を擡めて歸り去る。珠云く趙州南泉の如き問答若し此等の漢あらば、淵明の如く眉をおつめ去らん、只舊時とは今日の相見と舊時の相見と異なることなし

- ① 旃檀叢林。珠云く、「佛境界善知識、これは育王を指す、師家。
- ② 旃檀圍繞。珠云く、「學者亦水晶の珠敷、えりぬいたる如くせんだんより出た、學者は荊棘に入れたらちがあかぬ。」好きものあつまるを云ふなり、學者。
- ③ 片片皆香。珠云く、「佛くさい菩薩くさい、こつばまでにほふ、」師學共に旃檀の故に。
- ④ 荊棘叢林。珠云く、「魔境界、虛堂

即ちさうだよ、參天はへあがる、さるとりばらでなければならぬ、是をこぎぬけると、まあ手足にかゝるものはない、此のばらへかち込みく、」法度きびしいを云ふ。棟之則杖。珠云く、「肝もはらわたまでみなさしぬく、」共に荊棘の故に、漢云く、「今諸方坐夏の中、師學共に好き處あり、又師學共に好からざる處あり、之を擧ぐるなり」

- ① 以平等性智。珠云く、「四智の一なり、同一體味、日の中するが如く普照の大智を以てじや、これは無差別智なり。
- ② 攝諸比丘。諸とは或は旃檀、或は荊棘なり、珠云く、「上中下根、聲緣善の三乘をさへに諸比丘を攝してひつとらへて、捕なり收なり。」
- ③ 大圓覺海。所説は興聖錄に見ゆ、海は體深く用ひろき故、海の如し

珠云く、「九聖同じく、同時成佛、一片の覺海に入れて」。これは安居制禁を云ふ。擄獲澄潭。圓覺海に約して再三擄獲して之を澄し、之を濾して始めて得べしとなり、猶ほ切破琢磨の如し。擄獲はかきまぜたり澄潭はすましたり、えりにえつてなり。成就慧身。佛身に同じ、華嚴經に曰く、「一切の法は即心自性なりと知りて、慧身を成就して他に由つて悟らず。」

- ④ 要且禁足。圓滿智慧の報身を成就するときは、則ち坐夏の相あることを見ず、これ其の取證なり、珠云く、「打成一片なれば禁足じや、安居じやと、覺えはない。」禪堂に居るも常住に居るも、獨居する如く、不見有とは或抄に「有らば定相住相ぞ。」
- ⑤ 今正是時。法度のときなり。
- ⑥ 合作麼生。珠云く、「上三件の子細をひつからげた處はどうじや、或

慧身を成就せしむ。要且つ禁足安居の相あることを見ず。今正に是の時なり、合に作麼生。」拄杖を卓して、竹杖龍と化し去る、癡人夜塘を辱む。」
復た擧す、永明の壽禪師、天台の詔國師の會中に在つて、普請の次で、隨薪に聲あるを聞いて、豁然契悟す。乃ち云く、撲落他物に非ず、縱横是れ塵にあらず、山河并に大地、全く法王身を露はす」と。師云く、「壽禪師、大いに窮儒の翠玉の府に登つて、心に稱ひ意に満たすといふことなきに似たり。只だ是れ中間に一字子未だ穩ならざるあり。」
上堂、乘拂の夏齋を謝す、一稱南無佛皆已成佛道、若し説いて金輪水際崑崙、山椒に到るとも、功何れの所にか歸せん。」拂子を擊

抄に「合はしづかと云ふ義。」
① 竹杖化龍去。竹杖は費長房が靈翁を辭して歸るときのご故事後漢書列傳七十二に出づ、化龍とは成昔已前より大活龍と化し去る、無佛無祖の見識なり。
② 癡人辱夜塘。これは碧岩の頌に「三級浪高くして魚龍と化す、癡人猶ほ辱む夜塘の水」とあり、評に云く、「癡人向二言下咬嚼す、夜塘の水を辱んで魚を求むるに相似たり、これは錯で教述を守ると也。」
珠云く、「竹杖龍と化し去り、そこらなさがさげ龍去つて久し矣。」虛堂、荊棘林から出てしことだで、又云く、「やい馬鹿め、なにをする、そこはせよら水だ、そこにはない」と。禁足安居の相を認むる底の漢なり、或抄に、「癡人(まぬけもの)、辱は涙と同じく魚をと

るために水をかへだすと、古來之を「くむ」と訓してあるがくみほすの意である、夜塘は夜中に魚をばいらせるために河邊にこしらへてある小さいつゝみの如きもの、日本の田舎でもこれに類似したものをこしらへて、川魚をとる。」一生懸命に夜塘の水をくみとつて、その魚をえやうとしてゐる癡人の情れさまなり、辱斗は舟中に水を汚むの器なり。
③ 永明壽。これは傳寫の誤なり興教洪壽に作るべし、五燈會元并に禪林類聚等に出づ、杭州興教に住する洪壽禪師は德州に嗣ぐ、詔は法眼に嗣ぐ。
④ 隨薪。これは叢林で普請作務のとき、薪作務のかりに、薪をになふてきておくときに大悟したこと、ぐわらぐわら音のするなきいてなり。
⑤ 撲落他物。珠云く、「自己分上

のありさまじや、あまりよき頌でない」と。撰はうつこと、或抄に云り、

① 縱横是塵。一眞法界の故。珠云く「上下四維、人が一人居はせぬ、雀がつひに鳴いたことばない。」或抄に「外塵の境にあらず。」是れ塵は六塵など目前底なり。

② 山河大地。始めて佛身法界に充滿することを見得すべし、或抄に「大悟の用、安居休歇の處を述ぶ。」珠云く、「前日どのが髪をなで、飛んで出た。」

③ 窮儒。貧乏學者。

④ 翠玉府。今の圖書館なり。

⑤ 稱心滿意。貧乏學者なるが故、書籍に乏しく、今翠玉府の書庫に登りて心のままに博覽することが出来るやうなもの、平生の志願満足なり。

⑥ 一字子。師故意に之を言ふて、人をして疑著せしむ、玄沙が靈雲の投機の頌を聞いて未徹底と曰ふが

如し皆宗師の手段なり、白隱和尚も曰く、「虚堂の評の中に一字詳ならざるあり、若し言句の細密に達せずんば、幽看しがたきことあり」と。或抄に云く、「眞箇那一物は何ほど言句を盡すとも、辭には述べられぬ處を云ふ、諸人みよ、節目なきところ節目を添へ、學者入得のためにす。」珠云く、「此の一字子眞實擇法相のものにあらずんば見がたし。」

⑦ 夏齋。或抄に、「夏僧乗拂して後、堂頭和尚を(主席住持)請して齋す故に上堂して之を謝す。」

⑧ 一箱南無。法華方便品の偈。

⑨ 若説金輪。俱舍論に云く「器世間を安立すること風輪最も下に居り其の量廣きこと無量、厚きこと十六洛文(億)、次の上に水輪深きこと十一億二萬、下の八洛文は水輪凝結して金となる、此の金と水と輪との廣さ概十二洛文、三千四百半、周圍これに三倍せり。」

⑩ 山嶽。山の頂を嶽又は巔といふ。

⑪ 功歸何所。言るは已にこれ一稱の間に皆成佛たとひ説法天下天外に到る甚深高廣を極むとも、何の功の歸する所がある、是れ本分に約して開示して謝を致す也。已上は乗拂なり珠云く、「どのやうに説きたて、もむだ骨じや、根本功の歸する所は外にはない、一稱南無佛の首座でなくてはなんとしやう」と。

⑫ 聖拂子。珠云く、「初に法華を論じ末には拂子を撃つ是れ什麼ぞ。」

⑬ 咩々。恐怖の義と譯す、吼亦作レ咩、許後切、厚怒(こうこう)の聲で又牛鳴なり、うめめ、にくいやつなどとなり。

⑭ 御備童子。小夢園子かどらやきもち「ひつら」は餅のたぐひ、「たい」は蒸餅を云ふ、忠曰く、「今言ふはたとひ無量恒沙の功德盡く運び持ち来るべきも、還裡收歸の處あらん、この語に托し都寺の夏齋を謝するなり、吐腸甚だ大なり、凡そ

つて、① 叫呼、甚の ② 御備童子の、③ 快に下し將ち来るかあらん。」

上堂、擧す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ室内一盞の燈。」香林云く、「三人龜を證して龜と成す。」師拈じて云く、「香林二十年、雲門の侍者として、紙衣録中に向つて、此の句子を得たり、育王は則ち然らず、忽ち人ありて問はゞ、只だ他に向つて道はん、皇天私なし惟れ德是れ輔くと。」

④ 石帆和尚至る上堂、擧す、雲門行脚して九江に到る、陳操和尚、請じて齋せしむる次で問うて云く、儒書は即ち問はず、三乘十二分教は、自ら講師あり、如何なるか是れ禪僧行脚の事。門云く、「曾て幾人にか問ひ來る。」書云く、「只だ今上座に問ふのみ。」門云く

食物あらば盡く將ち來れ香噉を勞せず。」

⑤ 快下將來。言ふ意は甚の句味の快然として云きあらん、是れ則ち一氣轉藏の眞旨なり已上は夏齋を云ふ。

⑥ 香林。この語は寶林録に見ゆ紙衣録中、これは禪門類聚の侍者の部に、香林遠禪師久しく雲門の侍者たり、門説法雨の如し、絶えて人の其の語を記録することを喜ばず、見れば必ず罵逐して云く、「汝が口用ひず、反つて吾が語を記す異日に我を裨販し去らん、今室中對機録みなこれ師紙を以て衣となす、所聞に隨つて即ち之を紙衣の中に書す」と也。三人等は雲門の氣脈の中より得となり。

⑦ 得此句子。珠云く、「なみ大抵の一句子ではない。」

⑧ 育王則不然。珠云く、「虚堂は

古の紙子のうらへ書いて付くるやうな佛法ではない。」

⑨ 皇天無私。これ書經の蔡仲之命に出づる語なり、私は親に作るなれども拈の意に云く、「惟だ證道の者あり、或抄に云く、現前す」となり。或抄に云く、「一盞の燈、誰人の手前にかながらん、人々皆具足す。」皇天といふ燈は私照なしとなり。

⑩ 石帆。「じばん」とよむくせなり名は惟衍、運卷に關ぐ、天童に住す、虚堂の法弟なり。

⑪ 雲門行脚。この語は聯燈二十四に出づ、雲門録下にも出づ九江は江西の九江府。

⑫ 陳操和尚。雲門がまた文偃の時分、行脚中陳操が師を請待して齋をふるまふて。

⑬ 儒書即不問。儒書は手前御家のもの。

⑭ 三乘十二。顯孝録に見ゆ、如來の一代時教なり。

「只だ今は且く置く、作麼生か是れ教意。」書云く、「黄卷赤軸。」門云く、「此れはこれ文字語言、作麼生かこれ教意。」書云く、「口談せんと欲して辭喪し、心縁せんと欲して慮亡す。」門云く、「口談せんと欲して辭喪することは、有言に對するが爲なり、心縁せんと欲して慮亡することは、妄想に對するが爲なり、作麼生かこれ教意。」尙書對なし。門云く、「聞く公曾て法華を看すと、是なりや否や。」書云く、「不敢。」門云く、「經中に道く、治生産業、皆實相と相違背せずと。且く道へ、非非想天、今日幾人あつてか退位す。」書又對なし、門云く、「尙書且く、艸艸なること莫れ。」師僧家、十經五論を抛却して、特に叢林に入つて、十年二十年するすら、尙ほ奈何んともせず

●自有講師。とりさばさする法師達がありと。講師なり、經論のかうやくする人。
●曾問幾人。珠云く、「あぶないいかな陳操もこれには」と。
●今問上座。珠云く、「此れで始終がした。」又云く、「南無三寶、聽過了也、早々合點、睦州のてんさくを盡さなんだゆゑ。」
●黄卷赤軸。これは遜齋問覽といふ書に云く、「古今書を寫すに皆黄紙を用ふ、葉を以て之を染む、蓋を避くる故に、黄卷と曰ふ。」珠云く、「陳操おけはよいにまう、柳は緑花は紅とか。」
●此是文字。おさだまり、南無からたんのうなり。
●是教意。佛のときたてた本懐の口談。珠云く、「はあ、そのことなら、口はむぐついても、言はれるものでない。」

●心欲縁。珠云く、「心で鬼や角する内、分別の緒がきれる。」この二句は華嚴演義鈔一二、摩公云く、「口欲レ談而詞喪、心將レ縁而慮亡、則適出於言象之表一矣」より出づる語なり。
●爲對有言。珠云く、「よいのわりのと云ふことを向ひ合つて云はるゝことで、教意でない。」
●爲對忘想。珠云く、「たゞ凡夫の煩惱がなくなつたと云はるゝことで教意でなし。」
●無對。珠云く、「とつく、よしにすればよいに、問ふ人がちがふ、三步に活すと雖も、五歩に死に類す、機關にとちられた。」
●不取。さやうでもござらぬ、ちとはみますの意なり、急度見たとは云はぬ、尙書も少々しりこそぼうなつた。

尙書 爭か會することを得ん。」書云く、「某甲が罪禍」といつて、便ち作禮す。師云く、「陳操尙書、前面の數語は、雲門を勘すること未だ盡さず、後面の數語は、雲門を勘し盡す。今日忽ち人ありて育王に、如何なるかこれ行脚の事と問はゞ、只だ他に向つて道はん、我れ石帆老子と十餘年、天涯海角に走遍するだも、尙ほ自ら知らず、今日再會、又これ二十年、羸ち得たり牙疎に鬢白きことを。甚麼の行脚の事とか説かんと。他の擬議せんを待つて、便ち一喝を與へん。何が故ぞ、竟火和煙 得擔泉 帶月 歸。」
上堂、空山人無うして、水流れ花香し、鶯子 滿慈、其の智辯を泯し、離婁 師曠、其の聰明を黜く。何ぞや、法を識るものは

●治生産業。珠云く、「治生は身命を養ふ、産業はすきはひ、大工は木工、左官は左官、妙法蓮華と少しも相違せず、皆佛性のしわざにて、少しも違はぬ。語黙動靜、舉足下足、本地風光なり。」
●皆與實相。珠云く、「上王侯より、下萬人に至るまでそれぞれ。」或抄に「極頂の定なるが故に、別して之を擧ぐ、四禪八定も亦兼れて中に在り、これは有相の上なり。」法華の法師功德品に出づる語に依る。
●非非想天。無色界の第四天なり、法相宗の八定を釋するなり、珠云く、「音聲が止らぬ、背觸がいけぬ、そりや此の天に、やつぱり遺留しては四弘願に欠け目が出る如來の本懐でない。」非非想天は二乘の行者の窠窟、細想あるが故非非想と云ふ。

●今日幾人。治生産業みなこれ實相なる時は、則ち當に頼らく非非想天の定位を退して人中の散地に來つて度脱す、且く道へ、即今幾人あつてか彼の天位を退かんとなり、珠云く、「これききて、何人ほど、却來底髮髮へ出でくるがあらう」と、筋斗をさせたがつて。
●莫艸艸。まあ、ざつとおぼえさせるな、卒爾の義なり。
●師僧家。行脚の僧、禪學者。
●抛却。十經五論、碧岩には三經五論と作す、みな數卷の經論の義なり、ひつくるめて濟世の醫法表顯の説なり。
●特入叢林。わざ／＼叢林に入りて師を擇ぶ。
●爭得會。珠云く、「手の入れやうも脚の入れやうもない。」家に在りて飽食安眠、いかで合點まらうぞ。

懼る。」
 上堂、擧す、**①** 龐居士因に、**②** 漣灘を賣る、**③** 橋を下らんとして、**④** 擲に遭ふ、**⑤** 女子靈照一見して、父の身邊に就いて臥す。「士云く、「甚麼をか作す。」女云く、「爺の地に倒るゝを見て、**⑥** 急に來つて、**⑦** 扶起す。」師云く、「**⑧** 虎、**⑨** 雞鶩を憎む、聞くものは之を畏る。**⑩** 後人術鑑高からずして、喚んで、**⑪** 二り俱に險を弄すと作す。」
⑫ 結夏小參、**⑬** 破有法王、**⑭** 大陀羅尼門あり、名づけて、**⑮** 圓覺と爲す。**⑯** 能く一切の種智を成就し、**⑰** 一切の法門を破壊す、**⑱** 夢幻影邊に於て四方の衲子を聚集して、**⑲** 九十日の内、**⑳** 期を立て限を立て、**㉑** 決めて漆桶を打破し、**㉒** 慧身を成就せしめんことを要す。然りと雖も、**㉓** 只だ西天の**㉔** 制令の如きんば、**㉕** 還つて、**㉖** 者の消息ありや

① 某甲罪過。陳操雲門に把定せられて、一重好きものになられた、已上は雲門錄に之を載す。
② 前沙數語。これは曾問幾人來といふより、尙書對なしといふまでを指す。
③ 未盡。半信半疑。
④ 後面數語。これは開公會看法花經といふより某甲罪過に至りて大いに根がある。
⑤ 勸懲。見はされた。雲門許多の辨論を領會して、某甲が罪過といふ。
⑥ 走遁。かけりまげつたれどと
⑦ 大海滌角。天涯は此の界のなはり、遠方のこと。
⑧ 尙自不知。十餘年の間、同道行脚の事だも、尙ほ自ら知らず、或抄に「知らざる最も親し」の意あり。
⑨ 贏得。珠云く、「まうけにはじや、たつた一つのとりえには

じや、互に出合ふた處はなんのへんてつもなけれど、きつう年をよせた。」
⑩ 甚麼行脚。別れてより今日再會に至るまで、又二十年其の間は衰老し去るのみにして別事なしと、珠云く、「**⑪** なんの死んだわこと、行脚の事など、云ふもので」と、又云く、「**⑫** 今日幾人あつてか退位すと云ふのは是れとは、どうじや、ばかりにかけてみよ、重いか輕るいか。」
⑬ 便。やにはになり、突出になり。
⑭ 竟火和煙。同伴同門、火と煙と泉と月との如し、自然に和氣投合すと報恩錄の無準至る、落句に「花を移しては蝶の至るを兼ねと云ふが如し」、**⑮** 鶴林大師云く、「**⑯** 活め活め活め吾れば價を待つもの也。」珠云く、「**⑰** 虛堂の御はことつておき

じや、**⑱** 又云く、「**⑲** 嗚呼、げすくわすじやきよてがない、**⑳** 或抄に云く、「**㉑** 竟火擔泉は行脚に比す、和煙帶月は行脚の事に比す。」
㉒ 空山無人。人跡不到の處、自然の好風光、珠云く、「**㉓** 脱體現成用ふる底は、殺人刀、活人刀、水流花香で、觀音普門三昧。」
㉔ 鷲子。舍利弗、智慧第一なり。
㉕ 滿慈。富樓那、辯舌無碍なり。
㉖ 泯其智辯。智は舍利弗、辯は富樓那、如上の端的はなり。
㉗ 離婁。寶林錄に見ゆ。
㉘ 師曠。寶林錄に見ゆ。
㉙ 黠其聰明。聰は師曠、明は離婁、黠は賢なり。
㉚ 識法者懼。珠云く、「**㉛** 識れば云はれぬ、識らばめつたにじやべる。」又云く、「**㉜** 未到底はやれ現成公案じやのなんのと、**㉝** 已到底は法をしろものは懼るじや」と。
㉞ 龐居士。この話は傳燈錄の三、又稽古略三に出づ。

㉟ 漣灘。いかき、又あじか、又みそこしいかき。
㊱ 下橋遺擲。御は蹟に作るべし、つまづくなり。
㊲ 急來。急にかけ付いてたすけおこす。
㊳ 扶起。おこしほしないで伏して居る。
㊴ 虎憎雞鶩。「**㊵** 靈照が意の如く尅對して、爺を看盡さんことを要す、**㊶** 淡注に見ゆ。或抄に云く、「**㊷** 先づ本則の意地をよく見るべし、**㊸** 靈照は父の倒れたを眞實に扶起したもので、**㊹** 虎憎雞鶩とは十二辰の相尅の歌の語なり、**㊺** 虎は寅にして木雞は酉にして、**㊻** 金これ金、尅木なり、**㊼** 不祥不吉の運なり、**㊽** 聞者畏之とは不吉の運の様子を聞いてきづかひする體なり、**㊾** 今ば靈照父の倒るを見て、**㊿** 此れは不慮の福よと畏るとは氣の毒に思ふた、**㊽** それ故に急に扶起したとなり、父の身邊に就いて臥したば扶起のし様なり、

それなば後人が會せずしていふは靈照が臥して扶起もせず、**㊽** 扶起すと云ひたる機圓のはたらきにして、**㊾** 機鋒險峻なるところを擬舞ふたものなりと云ふなり、**㊿** 淡抄は何とやら似たやうなことで、**㊽** 本期の意地に徹せざるなり、**㊾** 又其の同抄に玉浦云く、「**㊽** 虎憎雞鶩は寅年に生るゝ人は、酉の時慎み畏るるなり、**㊾** 此れ相尅なり、**㊿** 此の二句は相尅の義なり、**㊽** 靈照が居士を扶起すと云ふて、**㊾** 却つて臥すを云ふ君は西秦に向ひ我れは東魯に行くの義、**㊿** 相尅の處、**㊽** 眞箇の智音底なり」と、**㊾** これは古抄にいふところ。
 逸堂の講に、**㊽** 今言ふは靈照爺の藏くか見て、**㊾** 怒ちおどろき扶起せんと欲すのみ、**㊿** 虎の雞鶩を憎むの相尅歌を聞いて、**㊽** 驚き思む者の如し」となり、**㊾** 又或抄に「**㊽** 照女居士を勘辨せんとす。」**㊿** 鶴林華語して云へり「**㊽** 鬼一指を立つ」と、**㊾** 珠云く、「**㊿** 此の間で類の有り評列。」

也た無や。挂杖を卓して、李廣が神箭、張顛が草書。

復た擧す、朱行軍、一日南際寺に入つて僧に齋す、香を行く次で、手爐を以て搖曳して云く、「直下是、直下是」と時に僧あり云く「直下是、箇れ甚麼ぞ。」行軍便ち喝す、僧云く、「行軍は是れ佛法中の人、問着すれば便ち惡發す。」行軍云く、「爾惡發の會を作す那。」僧便ち喝す、行軍亦喝して云く、「不疑の地に鈎在す。」復た「左右、者の僧を認取し着せよ」と喚ぶ。師云く、「人は言ふ、王母池邊、一株樹あり、名づけて蟠桃と曰ふ、三千年に花を開き、三千年に果を結ぶ、更に三千年を待つて、方に纔かに成熟すと。且く道へ、行軍と相見の分あり麼。」挂杖を卓して、「參。」

後人稱讚。珠云く、「ばかりさばきが手に入らぬ、かゞみがくもつてあるから」と。
二俱弄險。今父子俱に平處に於て險を弄して相難遣せしむと爾が云ふ、珠云く、「父子二り」とに是のふみ立てられぬあふない、なぐさみをする。」
向上險峻じや、虛と靈との孤負の處、或抄に見ゆ。
破有法王。圓覺經の首章には「作無上法王」有三大陀羅尼門。法華經の藥師喻品には破有法王、出三現世間」とあり、茲に文を轉換するなり、有を破したまふ法の王なり、有とは生死の因果、相續する世間を有と云ふ。二十五有りて一切の生死流轉を收む二十五有とは三界を二十五に分つなり、如來は二十五有を破したまふなり。珠云く、「佛如來三界二十五有を破除するな

り、又云く、「人人はてつばらにある面目じや。」或抄に「一切虛妄の有相を破するなり。」
大陀羅尼門。譯して悲持といふ、珠云く、「日本でならば歌じや。」
圓覺。圓覺體中塵沙の徳用あり、從本已來之を持して失はざる故に、陀羅尼と云ふ、珠云く、「大圓滿覺とて山河大地一全身じや」と。
能一切種智。珠云く、「かの圓覺は能く佛の一切種智を成就す、活人劍じや。」智度論八十四に曰く、「一切種智は是れ佛智なり、一切種智を一切三世法中通達無碍智と名づく云云或抄に「一切の善法を建立するなり。」これよりは虛堂の云はふことば、種智は悟得智なり。
一切法門。珠云く、「四諦十二因緣六度等及び斷證證理の隔

歷の法門を破壊するの殺人刀じや。又云く、「濟度の門戸をとざして居ては役にたよめ、ふみ破り濟度の門をおつびらくしじや。」溪注に「陀羅尼の微用を標顯す。」智度論二十七によると、即ち云ふ、「陀羅尼、論に自ら翻して能持と爲す、亦能遮と云ふ、いはゆる種の善法持して失せざらしむ、惡不善の心遮して生ぜざらしむ、能く一切善法の種智を成就し、一切不善の法門を破壊す。」破壊は或抄に掃蕩するなりとあり。
夢幻影邊。教述中を謂ふ、楞伽に「所謂實の聖智は言説に在り、故に言説を以て夢幻泡影の虛假の法に喩ふ。」前の寶林錄にある結夏の次の日に云く、「二千年前底の影子を踏著すとは是なり、珠云く、「夢幻泡影の如き婆娑において」或抄に「佛の言説のあとをとむるなり」又云く、「影邊は世間法なり、建立なり。」こゝでは三期の禁制を云ふ

なり。
決破漆桶。決は定なり、漆桶は膠粘の無明なり、珠云く、「無明煩惱の暗窟じや。」又云く、「無分じや。」成就慧身。珠云く、「色の外に慧身をばじや、見聞の上直に背觸の端的となる。」
制令。天竺の制度法令。
有者消息。珠云く、「こんな様子があらうか。」或抄に「打三破漆桶」成就慧身「底の吾が宗の那一著があらうか。」
李廣神箭。史記の李將軍傳に「廣、人と爲り、長發臂、其の射を善くする亦天性なり、蓋し天性の故に神箭の故なり。」珠云く、「石をも射とほすやうな射手の名人」と。
張顛舞書。事文類聚の書法に「張旭舞書を能くす、大醉呼叫して狂走す、乃ち筆を下す、或は頭を以て墨を濡して書す、既に醒めて自ら視て以て神と爲す、復た得べからず、世に張顛と呼ぶ、張旭が舞書

は驚蛇の舞に入るが如し、飛鳥の林を出るが如し。」又「張旭三歪神聖傳ふなど杜詩にあり、溪云く、「この二公は修練を假らずして其の技神に入る底なり、以て無修の火行を證す。」珠云く、「醉いたくつてゐて、不思議の能書。」鶴林齋語に云く、「魂飯來兮不レ可レ往」上方一魂也飯來兮。」或抄に「物は共に物を忘る、物我雙泯の處、此の妙處あり、虛堂遺簡の消息を自在に受用する底なり、いはゆる我れを忘れて、則ち法を忘れたる境界を云ふ。」其の妙處法を忘るるなり。
朱行軍。廣燈十四、又は類聚の一に出づ、涿州の人、尅符道者の法嗣の居士なり。克符は濟に嗣ぐ、朱は姓で行軍は唐の諸州總管と云ふ普軍の役なり、會元にも出づ。
行香。行は「びく」、忠曰く、「官人あり、寺に來る、香を行くを行香といふ、施主あり、自ら寺に來りて行香するを云ふ、僧史略に詳な

り音で「あんかう」とよむ。
 ①南際寺齊僧。南際は類聚の賢臣井に會元等には皆南禪に作る。蓋し洛京の南際にあり、故に之を稱する乎、齊僧は大家に御ちそをふれまふた。
 ②搖曳。手爐は柄のついてある香爐柄香爐を左右に動搖引曳してと。
 ③山下是。此の端的がさうじやぞよ直下是箇。まつすぐならばとなり又云く、探竿影草と。
 ④行軍便喝。こりや罵つたか褒めたか、探竿を截斷す。
 ⑤惡勞。はらたつとじや。
 ⑥僧便喝。このくたうさむらひめ。
 ⑦不疑之地。眞實底を釣得するの謂なり、珠云く、「不疑は微證の位を云ふ。或抄に、「釣在は彼此一間一答商量の上に、兩方の手段が忽ち見えてなり、又の義に此の僧が從來我れを疑着して居たか、今一喝の下、此の僧を疑ふことなき處へつりつけた、」珠云く、「つりさがつ

てゐたを、行軍とつくりに見ておいた。
 ⑧認取者僧。此の僧をよく見知つておけとなり、稱美して言ふなり、珠云く、「皆の衆、この僧をよく見しるしておけ」と。これまで會元等に詳し。
 ⑨王母池邊。珠云く、「桃はめづらしいものじや、朱行軍が見地に譬ふ」或抄に「二人一間一答の上、世に希有なり。」
 ⑩蟬桃。行軍が峻機妙用、世に希有にして又遇ひ難きに喩ふるなり。漢武故事に「東都より短人を獻す東方朔を呼び至らしむ、短人曰く「王、母桃を種う、三千年一たび花を開き、三千年に一たび子を結ぶ此の兒不良なり、三過之を偷む矣」云々と。池邊は瑠池を謂ふ、「周の穆王西王母と瑠池の上に觸す」と事文類の仙部に詳なり。蟬桃は其の樹大にして風聲すればなり。蟬は「ちよつくり、」方は「はじめて、」

そこでやうくまことにめづらしきもの、たつといものと。
 ⑪有相見分。珠云く、手をとれ合ふて話がならうか。」或抄に「上件の如くの行軍と、世に希有の桃とじや、人々相見の分量があるであらうか」と。
 ⑫參。更に參ぜよ、三十年又鐵櫃子珠云く、「參禪のことと云ふ、そのことではない能く虛堂のねどこへ入りてしれ。」
 ⑬雪竇謙。大猷謙、松源岳に關ぐ、師の法叔なり。
 ⑭敲雲夢破。漢注に夢破舟移ば遷化の意を述ぶと。
 ⑮漱玉舟移。舊説に二亭の名、共に雪竇に在り、敲雲は雪竇の方丈の額、漱玉は雪竇の境内の水の名なり、言ふ意は雪竇尋常敲雲に於て爲人説法して、夢中に夢を説いて居られたが、いつしか夢もさめ去つたとなり、又平生漱玉に舟を浮

雪竇謙和尚の遺書至る上堂、敲雲夢破れ、漱玉舟移る。時に乗じて虚空を撥轉す、大地了に寸土なし。故に我が妙高孤頂の大歌老人、麩に和して麵を糶つて、中峯已墜の宗を起し、土を嗅ぎ沙を吹いて、松源爲人の眼を瞎す。秤槌汁を覓む、涙は痛腸より出づ。箇般の生滅惡冤家、萬古千秋終に死せず。」
 上堂、諸方多くは見地を説く、鄮峰は只だ宗旨を論ず。見地明かなることは則ち見地の爲に奪はるゝ宗旨通するときは則ち宗旨の爲に執せらる。如今、一箇の見地明かならず、宗旨通せざる底を討ね、出で來つて松源直下の火種と做さんことを要す、亦難からず乎。」
 解夏小參、二百二十日の長期、孜孜矻矻、俊

べ往來を度して安穩の彼岸に到らしめたが、今は舟も移り去たとなり、夢破れ舟移るとは遷化の意を述ぶ。珠云く、「この和上の遷化したと云ふも、舟がどこかへいつた、往來の人の渡を失す。」
 ①乘時虚空。珠云く、「こゝを最後と時に乗じて撥轉すとは、とつてかへした、」或抄に「没蹤跡。」
 ②大地了す。珠云く、「世界国土ちり一つなくなつた。」漢云く活機輪を撥ふときは則ち天荒地老い、これ大人入寂の瑞なり。」或抄に云く、「遷化の當體、大機大用を云ふ。」
 ③妙高孤頂。雪竇の境致。
 ④大歌老人。續傳燈三に傳あり但だ二頌を載す。
 ⑤和鼓響。鼓は粗、響は精、合和して寶與す、これ賊の手段宗師爲人の體裁なり。珠云

く、「羊頭を掛けて狗肉を賣る底、たぶかさや、鬼ても凡を轉じて聖となすことはならぬ。」或抄に「商に手をして賣ること」と。
 ⑥中峯已墜。密菴を中峯といふ密菴、淳熙十一年老を天章に歸し、既に葬りて遺すところの尙髮多く、舍利を生ず、本山の中峯に塔す、密菴錄に出づ、中峯は天童の山中にあり。
 ⑦嗅土吹沙。説法の様子をいふ江湖集に、「更抛レ沙才口叨叨」といふが如し。珠云く、「師子の鬚のあはれるけしきを云ふ、」又云く、「落花狼藉。」古抄に云く、「能く物を辨ずるの義」と。
 ⑧松源爲人。故に我れ已下は平昔祖考の道を振起することを嘆ず「珠云く、「瞎とはふつつぶしたなり、松源の宗旨を盡しぬいて、超師の作あり、松

源の目の及ばぬ處履踐する故に瞎すと云ふ。

●秤提覺汁。珠云く、「是の如き又々得がたきことは秤提に汁を覺むる如し。」或抄に「鈍漢の謂なり、言ろは大歌老人の分上心に思議すべからず、今妄りに之を談じて強ひて義味を著く、これ亦零涙痛腸の堪へざるに依つてなり。」

●涙出痛腸。珠云く、「目からはでぬ跡の下からでる。」溪云く、「此の二句は畢竟なり、言ふ意は此の如く痛哭して欽慕すとも、それ又得べからざることを、秤提に汁を覺むるに似たり。」

●箇航生滅。珠云く、「凡夫の生滅とはちがふ、護法の心強き故に、生滅は煩惱なり。」或抄に云く、「如上の生前滅後の惡辣は活手段のところ。」又一義に云く、「生滅なきところ假りに生滅を示す、此れ實に惡冤家なり。」

●出衆。無心大解脫底が。●松源直下。松源門下のもの種となさんことをとなり、火種は續焰の種族又は慧命とも云ふ、種類種族の義ではない。

●不亦難乎。嗚呼かたい、みにくいものではあるまいか。●孜孜乾乾。勤勞なり、つとめつとむ。

●俊鶴巢雲。蹤由を見るべからざるの境界なり、これ勤勞して本分を踐む故に、珠云く、「俊鶴で自然と氣が高い。」或抄に、「これは上の句の着語なり、納僧が向上に坐在してよく離れぬと抑へた、巢の義は住在といふことなり。」或抄に「此れは夏中、孜孜乾と勤勞の當體なり。」

●二千年舊語。古佛の制禁を興復する故に、珠云く、「迦葉微笑以來、一大藏經面前ぐわらりと最初からあらたにとなり。」或抄に云く、「虚

孔を回轉して本地に衝入す、言ろは萬古不生滅の法にして、却つて箇れ般の生滅を示す、謂つべし惡冤家、人を礙礙殺す。」

●諸方多説。自己の能證の智也、珠云く、「三十あまり、われも面目透過の端的をとく。」或抄に云く、「嚴陽尊者の一物不將來、又甚麼をか放下せんと道ふ底なり。」

●只宗宗旨。法體を指す、所證の法所謂佛祖の大宗正旨なりと。珠云く、「不疑の地の見得では、虚堂は賞玩はせぬ、參天の荊棘をば、ぼつこへへ。」

●所察。珠云く、「見地のくさみにうははる」と。●所執。或は悟處に滞り、或は法體を執す。●一箇見地。珠云く、「一箇半箇でもだじないが眼見耳聞訊來れば喫し漏し來れば飲む、なんのこともなき無粘底を討ねだして、祖翁直の子孫と仕たいと思ふ、こりや日

鶴雲に巢ふ、●二千年の舊語従つて新なり、

●黑牛水に臥す。●與麼に會するときは則ち●龜

中の細、猶ほ易と爲、●細中の細、猶ほ難しと爲。●故に●我が竺土老師、●身を檢すること謹

ます、●己を以て人に方ふ、●末代の比丘をして●太半●蝦を以て目と爲さしむることを致す。●育

王の一衆は、●善く時の變を觀て、●盡く●規矩の外に在り。●何が故ぞ。●拄杖を卓して、「●有る

時溪頭の石を拾ひ得て、●蘚を帯び雲に和して●綠陰に枕す。」

●復た擧す、●翠岳の靈修禪師、衆に示して云く●「一夏●兄弟の與に、●東説西話す、●看よ翠岳

が●眉毛在り麼。●保福云く、「●賊と作る人、●心虚る。」●長慶云く、「●生也。」●雲門云く、「●關」師

云く、「●三大老、●各隻手を出して、●翠岳の門

堂自分の上なり、二千年以前のの法要を、虚堂今日拈起して示すなり。」

●黑牛臥水。無分曉の境界なり水色黒き故に、是の新舊生佛一致の義、上の俊鶴に通じて著語の體。珠云く、「日月星辰一時に暗し、大地も載せ起さず。」又云く、「てまのか、釋迦のか、どつちかこつちかしれん。」或抄に「黑牛は水は黒色に取る、此の句は無分曉の義又濁を下るの義、此の如く擧話するは無分曉にして、落草して濁に下つたと、虚堂の自分をも抑へた、上の俊鶴の句は向上を抑へ、此の句は向下第二義に下るを抑へた、臥水とは、此の途徹に涉らずじや。」二千年前世尊の擧著する所の一句子、更に法規に拘はらずの當體なり。

●與麼會。今日規矩の中長期を

●守る。●龜中之細。六龜は見聞覺知を云ふ、その六龜の中の起衆相等は、龜中の龜、智相等は龜中の細。珠云く、「見聞覺知に就いて、暫起するを六龜といふ、直當流注重濁を透過するに隨つてなくなり。」又云く、「境界を縁と寫して六龜を起す、見思惑と名づけ、これ枝末の惑、其諸の理を障ふ、宜しく、空を修して之を破すべし。」或抄に「龜中の細は俊鶴巢雲を指す、細中の細は黑牛臥水を指すなり。」六龜は衆轉現の三細に由つて生ずる故に六龜と名づく。

●細中細。三細の中の轉相等は細中の龜無明業相は細中の細なり、故に難易知るべしと、珠云く、「微細の流注じや、更に向上一段の事あり、宗旨の子細なり、些子の大事を傳ふ

或抄に云く「無相方便、至佛知得。」
 我竺土老師。尋迦老師なり、或抄に「私に云ふ鹿中の細じや」と。
 檢身不謹。本分を守らず、漫に教網を張る。珠云く「法身上上を守らず、漫に出世放行、」又云く「自分の身の上を引きしめることとせぬじや。」
 以已方人。世に天生自然智あることを知らず。珠云く「皆も我れと同じやうに一統に思つて自らの斷惑證理を以て方比して、余人も亦然りと爲す。」
 以假爲目。三分の二を太半とす、假は蠟に作るべし、前の延福録に見ゆ。珠云く「五千四十餘卷、經教に取り付ければ、獨りはたらしのなちらぬやうに仕なした。」
 善觀時變。固必なしとなり、珠云く「鶴足の眞風地に墜ちた時の變をよく觀念して」と。或抄に云く、「青王の一衆とは細中の細じや」と規矩。孟子離婁の注に云く、「規は

圓を成すの器なり矩は方を成すの器なり、」或抄に「細惑を掃ひ盡して、一點の塵埃なき境界じや、外にありは禁足護生に拘らず。」
 有時溪頭。珠云く「理ではあるとき思はず、鹿末ながら安逸の物を拾ひ得、蘇や雲と一つにぐうぐもやつてある事では風塵世外、人のうかりひ知ることならぬ處に、れたりおきたりして居ると、師の意は別に參決すべし。」又云く「今まではよかつたが、こゝで異なるものになつた。」
 帶蘇和雲。蘇雲の二つのものは石に縁す、これ無心解脫の行履、豈に規矩を存せんや、懶瓚の所謂臥藤蘿下、塊石枕頭の境界なり。
 翠岩。令修和尚は雪峰存に嗣ぐ、翠岩は明州にて化導しゐたので、翠岩と云ふやうになつた、その生死は詳でないが、令參永明といふ、安吉州の人なり。保福從展は漳州の保福禪院に住して居ましたか

ら、通名が保福になれり、參徒七百有餘と、實に盛なり、後唐明宗天成三年に示寂す、日本の醍醐天皇延長六年に當る。長慶慧皎は長樂府(福州)の長慶院に住してゐたので通名となつた、泉州の招慶寺にも住したので、招慶とも云ふ、ともに接近した寺であるから兼帶二十七年間で、參徒は千五百人もあつたと云ふ、この人は杭州の産後唐明宗長興三年示寂す、日本の朱雀天皇承平二年に丁る、翠岩もこの頃の兄弟弟子なれば年代考へつべし。
 夏安居なり。
 吳兄弟。云ひまじきことまで兄弟のためにと。
 東說西話。あゝ説きかうはなしす眉毛在慶。佛法をあまり俗向きにとくと、その罰によりて眉も變もおちてしまふと云ふこと、在慶は有慶ではない、あるかないかの意、在慶はまだついであるかどうかの

意珠云く「賊意と見たら大ちがひ此等が奪命の符じや」と。
 作賊人心處。平らたくいへば、泥坊をするやうなやつに正直者はないの意。珠云く「大だはげの大ふめけどもが、翠岩が賊意じやなんどと」鶴林曰く「此の翠岩眉毛の則は就中の奪命の符、向上の秘曲かうより外、辨はない。」同じく曰く「判語分明、臨濟德山亦及ぶべからず」と。
 生也。眉毛がまだついてゐるも居らぬもない、のびてゐるの意。
 雲門云關。雲門はやはりこの同時である、保福の寂した翌年長興元年に韶州靈壽寺に住す。
 關はこれは唐宋時代の俗語で、本來の意義は菴谷關、箭根の關、白河の關などの字と同意義であるが唐宋時代に於ては、この語を警戒を意味する間投詞として使用した日本の俗語で云ふと、そらばじまゐるぞ、そらあぶないといふ意なり、

雲門は翠岩の説話を關所と見たのである。この話は翠岩が九旬の夏末に於て解制の日となり、これから送行すると云ふ時に、みなの大衆たちに向つて「夏入以來みなの大衆のために第二義門へ下り、いろ／＼と説話して、佛がどうの祖師がどうのと申したが、回顧すると聊か世話をやきすぎた感がある、どうですか、翠岩の眉毛はまだ大丈夫ですか、なくなつては居ませんかと云つた、すると弟子兄弟の保福は「泥坊をするやつに、ろくなものはない、翠岩の言葉に油斷するな」と云ふ。長慶は「眉毛がのこつてゐるところでない、火のびにのびて居るよ」と云ふ、雲門は「あぶない、あぶない畏にかゝるな、關所があるぞ」と勘破した、それで雲賢も「千古對なし」と頷してゐる、千萬年たつてもこれに應答するものはない。
 三大老各。三人の老師が力をそへ

て腕力をふるつた。
 翠蓋門戸。珠云く「將に倒れんとする門戸をたすけおこして、雪峰老漢の師恩を報ぜねばならぬ。
 爭奈同心。志は心の之く所なり、鶴林語して曰く、「有れ母子寒、無れ母子寒。」珠云く「第一義諦は相替らぬやうにやることは合點して用ふるときはどうぞと思つてそれはかなはぬこと、是れ什麼ぞ」
 龍得雲靈。雲は學者にたとへる、珠云く「大小の身を現じ、荒草を救ふ、法を護すれども雲がなければならぬ。
 虎得風威。易の乾卦に「雲は龍に従ひ風は虎に従ふ」と。
 叢林得人。喻を以て人に歸す、人とは大名聲の高士なり、珠云く、徳山臨濟を欺く底の人も、その下にあれば」と。
 則綱目正。大綱條目、禪語證案等を謂ふ、珠云く「叢林では老成の人を重んず、法式威儀正しくなれ

戸を扶樹して、以て雪峰に報いんことを要す。争奈せん、只だ心を同じくすることを解して志を同じくすること能はざることを。

兩班を謝する上堂、龍、雲を得るときは則ち靈あり、虎、風を得るときは則ち威あり。叢林人を得るときは、則ち綱目正しく、法令嚴なり、自然上下其の居を安す。然る所以の者何ぞ也。拄杖を卓して、歲寒うして松栢の後に凋めることを知る。

中秋上堂、「人間には無、天上には有、往往に人の窠臼を脱するなし。四海娟娟として玉魂を洗ひ、九野茫茫として白兔走る、寒山子口を關さず、也た馬駒群隊の後に落つ。」

上堂、舉す、徑山の法濟和尚、因に僧問ふ、

「掩息灰の如くなる時如何。」濟云く、「猶ほ是れ時の人の功幹。」僧云く、「幹くして後如何。」濟云く、「耕人田種をす。」僧云く、「畢竟如何。」濟云く、「禾熟して場に臨ます。」應菴和尚拈じて云く、「鳳閣香沈んで、雪巢夜冷じ半窓の明月、和氣藹然。」師云く、「一人は貧しからん事を要すれども貧しきこと得ず、一人は富まんことを要すれども富むこと得ず。貧富相當らざることを知らんと要せば、且く請ふ、各年位に歸して立て。」

らく月は只だ天上のみに在りて人間に在らず」と。

人脱窠臼。有無の窠臼に墮して皆光影を弄する底なり、珠云く、「暗といへば暗の窠臼明といへば明の窠臼、無といへば無の窠臼、有といへば有の窠臼。」

四海娟娟。上の端的作應生々生々鐵鬼もなれども益も正月も互に分明、八臘をふみ破ると此月は現在す。玉魂は月をいふ、四海は人間に就ていふ。九野茫茫。天に九野あり、天をいふ、九天に彌しと、茫茫は方量もない大ざら、兩句は月明の普きことを述ぶ、四野は四夷八蠻の外でも、一輪の白兔照りかゞやく、九野は天上に就ていふ。寒山子口。「吾が心秋月に似

ば」と。

法令嚴。規矩等が嚴重なれば自然上下。非法行はざる故に心よく辨道修行する、居は居位なり。

歲寒松栢。論語の子罕に「歲寒くして然る後に松栢の後に彫むことを知る。」注に「ト人の治世に在る、或は君子と異なることなし、惟だ利害に臨み事の變に遇ふて、然して後君子の守る所見るべし。」真正の謝を致す、餘は此の條初めに見ゆ。珠云く、「春秀てた時は見わけ手はなれども、寒中になると餘の雜木と分ちがしれる。」或抄に云く、「外面兩班の人節操丈夫の氣、後はおくることとなり、凋は凋せぬなり。」

中秋。このとき無月乎。人間無。中秋無月の故に、或抄に人々眞箇の月あり、以爲

たり等と前の興聖錄に見ゆ、是れなり、珠云く、「此の白をこえたがつて詩を作りて高聲によばはつた。」

馬駒群隊。馬駒は六祖大師、南嶽に謂ふて曰く、「爾後一馬駒を出して天下の人を踏致し去ることたらん。」羣隊も亦羣なり馬駒が既月、知識、百丈南泉相乘りて群を成すなり、緣はこの條の續輯等に出づ、緣は此の條の續輯等に出づ、緣は此の條の續輯等に出づ、緣は此の條の續輯等に出づ、

何説。是の如く讚歎し得て、口を關さざれども、也たみな人後に落づ此の兩句は既月の故事を述ぶ、全篇押韻。

法濟和尚。洪諷は徑山第三世法濟大師といふ、吳興の人、馮山に嗣ぐ、唐の昭宗光化四年九月二十八日示寂、日本の醍醐天皇延喜元年に丁る。掩息如灰。氣息を掩閉して死灰の如くなるなり、大無心の

儀狀を表す、珠云く、「身心共に休罷、大死底隻手の聲をすつかりきいた當體じや。」或抄に「全體念を止め無心になるを云ふ。」

功幹。幹は事を能くするなり是れ有功用の事なり、珠云く、「大いに骨折苦勞するどき幹後如何。功能の事了りてのち如何。」

耕人田種。無修を表すなり珠云く、「なはしろはかいたが田は種えぬ、こゝでへんてつがはづれたか、取合ひぬけて」或抄に「無功なり、純功耕因分修行。」

禾熟不臨場。字彙に場は禾を收むる圃、もみをこなすところ、無證を表す、已に種えず又收めず、無修無證、眞箇無功用の義なり、珠云く、「畢竟如何と僧がおしとふてくる、

有無功に涉らぬときばどうじや、と濟は不熱不臨場と無功川を第一とし書を聴せて家に到らずじや、これは悟道の當體じや。」

⑦ 風閣。この拈語、應菴錄の再住、歸宗寺錄の上堂にあり。風閣は禁關御所を云ふ、閣は小門。

⑧ 香沈。深夜の義、これ達士の直宿するところなり、所謂有用功邊、珠云く禁關の牛みつ時、又云く、「正位心王を云ふ、蘭爵をそらたきみたしたまう夜ふけがだ。」忠曰く風閣香沈は王者の富貴。」この四句は法濟の答話を拈ず、窮途の有功用無功用を以て解するもの取るべからず。

⑨ 雪裏夜冷。此の窮士の宿る所なり所謂無功用邊珠云く「鳥もいぬ、ものすごい、本分只だしづかのありさま。」忠曰く「雪裏夜冷は野犬の貧態、雪のときは果を明くるほどに。」「菓の字は家宅の意にみよと或抄にあり。

⑩ 半窓明月。珠云く「ちらりと半ばさし入つた處、なにとなく心の和ぎわたつて、歌にも連歌にもよまれぬ、佛祖も説き及ぼすこと能はず。」又云く「この魂膽は知つたものでなければ知られぬ。」

⑪ 和氣藹然。藹然は當に藹然に作るべし、雲の貌、言ふ意は半窓の明月に對して、則ち自然に和氣藹然而して風閣禦果その榮差異なし、是れ有用功無功用、恁麼と境界に到つて、畢竟一般の義なり、此話兩般あるに似たり、故に此の如く拈破す。

⑫ 一人要貧。一人は法濟を指す、貧者無功用珠云く「一人は正中偏、一箇打着、一箇打不着の義、又云く「隨分はまちぎり、さつばと洗いぬいてうるほひないやうにすれども、さうでからうあかぬ。」忠曰く「謂ゆる此の一人は應庵を指す、言ふは意應庵有功無功を拈じて一般と爲す、其の富己甚だし、貧な

らんと欲すと雖も、貧得べからず、一人は貧を要すとも貧なること得ずと點するがよしとなり。

⑬ 一人要富。一人は偏中正一人は應菴を指す、富者有用功なり、珠云く「無味の處へ味をつけたがるに依つて、なんぼうでも付かぬ。」忠曰く「此の一人は法濟を指すなり言ふは法濟は一向に功用を掃蕩す貧窮徹骨、富まんと欲すと雖も、而も富み得べからず、一人は富を要すとも富むことを得ずと點するがよし」となり。

⑭ 貧富不相富。有功無功、共に立たざる境界、珠云く「貧は彼中至、不相富は相等しからずで、正偏があつては眞實祖師門下の宗匠とはならぬ。」

⑮ 請各歸本位。法濟は僧の有功用を奪ふ、應菴は法濟の無功用を奪ふ、故に應庵に拈ず、珠云く「それその通り、男に非ず、女に非ず、佛に非ず、衆生に非ず、土民をつか

薦めて、① 少しく追遠を伸ぶ、霜大野に飛んで、木崇崗に落つ、② 膽裂け心摧けて、未だ話らざるに先づ咽ぶ。

冬至小參、③ 一氣潜に回る、④ 八角の磨盤空裏に走る。⑤ 六交織に動ず、⑥ 無毛の鷄子天に貼いて飛ぶ。⑦ 是れ他の時節因縁にして、⑧ 四時の消長を逐はず。⑨ 衲僧家、⑩ 眼瞼地に於て、⑪ 者裏に坐在す。⑫ 直饒ひ、⑬ 葭灰未が動せざる已前に向つて、⑭ 西川の鄧師波の、⑮ 東山下の左邊底を會得するも、⑯ 也た未だ是れ枯木花を開く底の時節にあらず。⑰ 何が故ぞ。⑱ 主杖を卓して冬寒からずんば臘後に看よし。」

復た擧す。⑲ 古徳因に僧問ふ、「如何なるか是冬來の事。」徳云く、「京師 大黃を出す。」師云く、「朕聞く、上古其の風朴略にして、

まへて天子とするは、」又云く「佛祖も手をさしはさむことならぬ處が知りたか。」この語は始終洞下偏正の意を以て、見は則ち解し易し」と或抄に見ゆ、或抄に云く「本位とは外面は上堂の時、大衆立班位、此の句は退歩の義なり。」

⑲ 赤橋隨行。赤橋は碧岩十三則の評に「西天(印度)では論議して勝つものは手に赤橋を執ると、今言ふ意は祖師嘗て六宗に勝ち、赤橋常に行に隨ふ自ら謂へり、神機妙用、辯に當るものなしと、其の感想に見るべし。珠云く「紅の大幡灰ぼうきを一本たてずして、なぜ佛祖も跡をひそむる、自謂へり、大入道のかすなくらふ如くに、のつさく」と。」

⑳ 白雲洲。應天府、晉には建康府と名づく、則ち梁の武帝の

都する所、白雲洲は府の西南の江中に在り、李白の詩に「三山半落青天外、一水中分白雲洲」武帝の内裡なり、十萬里の波濤を感えてこゝに到る。

㉑ 老蕭言下。梁の武帝は蕭氏なれば、之を以て老蕭と云ふ、祖師初め對談して契はず、故に爾か云々。

㉒ 摩訶羅。略に江を渡り、北魏に到る、其の聲價沈埋して顯發せず、珠云く「九年西壁の當位、ななくさもなくなつた。」

㉓ 影脫孤龜。形影脱去して棺中隻履を存するのみ、已上は事迹を述ぶ。

㉔ 法門垂秋。今祖風零落するなり、珠云く「今秋の木の葉の落ちる如く、法のおとろへたるとき。」際時は時なり。

㉕ 已往之蹤。痛は心切に、珠云く「六宗説破のことやら、皮肉骨髄のことやら。」

● 鹿此溪毛。これ前の實林録のところに
もに見えたり、疏菜るるを獻じてなり。

● 少伸追遠。おそまつなか、わづかの追慕の供養を致しますと。

● 霜飛大野。十月なれば初冬祖忌の景慕を擧げて、門下暖氣なきことを感ず、珠云く、「時節がら霜が身にむる比ほひ、いとあはれは増すばかり、崇崗はたかき山

● 磨裂心摧。下衰に依つて懷舊甚だしきなり、已上は弔祭を述べ、珠云く、「秋すがりになつたら、佛法も零落したと思へば」と。

● 一氣潜回。一氣は陽氣なり、珠云く、「一則の公案、打成一片になる、其の時陰陽一枚になつた時大死一番、蘇息するときに、一氣ひそかに回るのじや、我れを知らずと。

● 八角磨盤。これは一氣の着語なり珠云く、「冬至はそんなこともある

● 王言絲の如しと、誰か敢て聴かざらん。忽ち人ありて、鄧山に問はゞ、只だ他に向つて道はん、風門海口、風に當り浪を抵くと。也た須らく是れ箇の人にして始めて得べし。」

● 新天童、蔣山自ら來る上堂、鏡容鷹爪、面目憎つべし、南嶽を掉發して、山を下つて教化せしめ、檇林を從與して、御に對して講經せしむ。彌界を守らず、清平を干犯す。

● 中峰の正法眼を滅得して、破沙盆子の話、方に行す。」

● 上堂、擧す、長生、靈雲に問ふ、「混沌未分の時如何。」雲云く、「露柱懷胎。」生云く、「分れて後如何。」雲云く、「片雲の太清に點するが如し。」生云く、「未審し、太清還つて點を受くるや也た無や。」雲答へず、生云く、「

云く、「納僧骨を折りて如何に我れもしらず、いつともなしに」と。

● 四時消長。或は陽消し陰長じ、或は陰消し陽長ず、八角無毛の不遷底、これ世間相常任の故なり。消は寒なり、長は春夏。

● 眼瞠瞠地。は目汁の滾るところ目やになり、言ふ意は兩眼瞠瞠にして不遷底の本分に存在すと、珠云く、「聰明機智を賞ばず、昏蒙として坐在するなり、正眼不活開を云ふ。」

● 者裏。珠云く、「大圓鏡中にいふこと、如上不遷底じや」と。

● 覆灰未動。好箇投機の時節なり。覆灰は陰陽未發已前なり、この語は報恩錄に見ゆ、直體は恰利の納僧あり、師の面前に。

● 四川鄧師波。四川は蜀なり、五祖演、綿州鄧氏の子なり、師波は師伯なり、伯は長なり、崇敬して云ふ。

● 東山下左邊。五祖演初め四面山に住し、白雲に遷り、晚に東山に居

ものか。或抄に云く、「本分不遷變遷變の上に於て不遷變を見る。」又云く、「外面は冬至一氣發動の勢を言ふ、下の無毛の句も亦同じ、」又云く、「此れ或説なり、是なることを知らざる乎、實意は一氣潜回は時節遷變じや。」葛藤集に「八角磨盤穿裏に走るは本分の語、路理は付けぬ、没巴鼻」とりつきのところなしじや、」又沈まぬ一機じや、又或抄に「現成底じや。」

● 六爻機動。六爻は皆陰、今下の一爻陽に變ず、故に動と云ふ。

● 無毛鷓子。一氣の陽回復する故に六爻の陰變動するを潛と曰ひ、機といふ、其の始の謂なり、八角無毛の句共に譚話没巴鼻、これ推遷底に於て不遷底を示す、納僧の用處當に是の如し、これは六爻の着語なり、珠云く、「八角も無毛も面目のすがた、無毛は陽爻動の端的一機未發の時に比す。」

● 是他時節。一氣六爻の推遷底、珠

れり、左邊底は那邊の謂なり言ふ意は五祖下の那事を會得す也、珠云く、「蕪棘參犬の白を推し破り知らせた。」或抄に「東山年老い心孤にして這邊にも亦一句を言ひ、那邊にも亦一句を言ふ、峻峻の手段なり」と。

● 也未是枯木。未是れ分外奇特の事に非ず、枯木の花は覺華開發に喩ふ、是れ五祖演の所謂黃梅の花は雲中に向つて開くの謂なり、徑山の後録に見ゆ珠云く、「まだ、別の生涯靈妙の處がある、此の處を識得しても、鍊りきたへて穿鑿せねばならぬことがある。」或抄に「大悟の時節なり、これ冬至の緣語。」

● 冬不寒風。前面は本分の事を別決し、落句は現成天眞の事を指出す、珠云く、「前頭大に事の在るあり、わかいときつ

らをつまかして骨を折らねば知れぬこと。」或抄に「餘寒甚だしきを云ふなり。」

● 古德。跋山仁禪師。

● 冬來事。珠云く、「寒うなつたとき、一大事はいかゞでござる。」

● 京師出大黃。珠云く、「末代輕薄のものにはげすくはず。」

● 朕聞。もと唐玄宗皇帝注の孝經序首語を以て跋山の答話に比す、即ち答話の端的なり、京師と言ふに就いて、跋山を以て玄宗と爲して拈するなりと或抄に見ゆ。

● 上古其風。質朴省略にして文飾詳密ならず、風は風俗、朴略はかざりない、簡略にして事少し。

● 王言如絲。禮記に「王言絲の如し、其の出づること綸の如し」とあり。珠云く、「綸如は四海に入りわたる。」

●誰敢不聽。王命を聽かざるものな
し、これ昔初の納子、順直の故に
能く此の如くの答を聽受するに比
するなり、今時の者はざるに比
知るべきのみ、珠云く、「四海八蠻
たれでもうけたまはらぬものはな
い誰敢は僧の會したところ。」

●風門海口。寧波府は東の方互海に
漸る所謂海口なり、冬に到らば則
ち寒風出入故に風門と云ふ、珠云
く、「おらが寺は大海に臨んだとこ
じやで大にさむい、冬になつたら
なほ寒い。」

●當風抵浪。抵は富なり、山は即ち
風門海口の國故に冬來則ち風に當
り浪に當る、此の任運境界を以て
來問に應ずべし、珠云く、「北風は
吹きあて、浪はうちかけるじや。」
●也須是箇。珠云く、「その土地の人
はよく知りてをる、是れ箇の納子
でなくばいくまい。」或抄に「これ
般の人でなくてはえ爲まいぞ。」
●新天童。珠云く、「蜜菴の孫、無準

の法嗣なる別山祖智、蔣山に在り
て新に天童の請を受くる暇乞の心
にて、過訪ありしものならん。」此
の上堂は寶誌和尚は蔣山の開山な
れば、それに託して別山を請する
なり。

●蔣山。一名鐘山といふ、南京の東
北にあり、一名良岳と云ふ、周廻
六十里と云ふ、王安石荊公が(半山
居士)、宋のとき中興す、漢の秣陵
の尉繚子文盜を逐ふて此に死す、
吳の大帝爲に廟を立つ、子が祖の
諱は鐘因つて蔣山と改む、同じく
靈谷寺は鐘山の東南に在り、晉の
建つる所なり、宋には太平興國寺
と改む、殿堂の後に寶誌和尚の塔
を立つ、今は蔣山と曰ふ、即ち太
平興國寺なり、十刹の一、一名鐘
阜とも云ふ、極絶の塔もありとい
ふ。
●鏡容鷹爪。編年通論に云く、「宋の
太始二年大士寶誌は西方にして盤
微すること鏡の如し、手足皆鳥爪

初め金陵東陽の民、朱氏の婦、上
己の目、兒の鷹の巢の中に啼くを
聞いて、樹に梯して之を得、舉げ
て以て子となす。」珠云く、「面が鏡
の如くすきとほつて、ぎら／＼仕
てある、手足の爪は鷹の如し、或
抄に「龍馬鬚と同じ、にく／＼
しい。」これは寶誌を稱揚して新天
童に比するなり。

●掉發南嶽。其の定心を掉舉發動す
るぞ、誌公和尚が南嶽惠思をなり
掉は思曰く、和語の「そゝのはか
す」なり。

●下山教化。五燈會元の應化に南嶽
惠思の章に、因に誌公人をして傳
語して曰く、「何ぞ山を下りて衆生
を教化せざる、日に雲漢を視て甚
麼にか作さん」と、師曰く、「三世の
諸佛、我れに一口に吞盡せらる、
何れの處にか更に衆生の化すべき
あらん」と。考ふるに梁の天監十三
年に誌公は化し去る、同天監十四
年に南嶽は降生す、其れ實には此

の事あるべからず。

●從史楊林。楊林は傅大士を云ふ、
從史はすゝめる、猶ほ勉強といふ
が如し、これは誌がすすめて梁の
武帝に對御講經せしむ、事は寶林
錄の入寺小參に見ぬ。

●不守疆界。吾が自分の封疆を守ら
ず、下山の句を結ぶ。珠云く、「自
らを捨て、他は爲し手前一分を守
らず。」又云く、「蔣山の疆界斗を守
らず。」

●干犯清平。他の清平世界を干犯す
るなり、他は梁朝なり、對御の句
を結ぶ、此の兩句は暗に今の來降
を對す、已上は蔣山より來る故に
誌公の事を用ひて比擬して德を讚
するなり、珠云く、「干犯清平は自
受用三昧、清濁平穩で居らるゝ宗
師連を、いらざる世話をやいて、
下化七顛は倒さるなり。」

●中峰正法眼。中峯は密菴成傑禪師
を指す、密は天童の中峯に在りし
故なり、珠云く、「少しは手前、虛

堂の事正法眼を減得すとはかけが
へのなき大切なを無くして仕まつ
たと。

●破沙盆子。此れは天童の錄を用ふ
言ふ意は密菴の話方に天下に行ふ
べし、此の話、後の頌古の部に見
ゆべし、珠云く、「破沙盆はわれす
りばちなり、寶志和尚のことかと
思へば、新天童のこと實に語言三
昧じや、」云く、「なんぞとりえがあ
るやと思へばわれすりばちが大に
重寶になつて、世界に流布するや
うになつた、」この話の本は應菴室
中に密菴に問ふ、「如何なるか是れ
正法眼」と、密菴云く、「破沙盆」と。

●長生。福州長生山の皎然禪師、雪
峯に嗣ぐ、傳燈十八に出づ、珠云
く、「古德は是れを床の掛け物とせ
しよし。」
●靈雲。志勳、福州靈雲動禪師、前
の報恩錄に見ゆ、嵩山大安に嗣ぐ
因に桃花を見て啓悟す。

●混沌未分時。混沌は陰陽未分、或

は渾沌を作る、こんどんは元氣な
り、珠云く、「威音已前の今日のこ
と世界のはじまらぬさきじや」と。
●露柱懷胎。禪話不可談。珠云く、
「大黒柱が子をはらんだ。」又云く、
「混沌未分でも陰陽具足。」或抄に
云く、「一機未發といふ處に、はや
なにやらはらんだ。」

●分後如何。珠云く、「大鐵圍も小鐵
圍も、世界國土草木それ／＼に分
れて、後はどうじや」と。
●片雲太清。楞嚴の九に、「當に知る
べし、虛空汝が心内に生ずること
猶ほ片雲の太清裏に點するが如し
況んや諸世界の虚空に在るを耶。」
珠云く、「雲のおほぞらにたなびき
たる如く、」或抄に云く、「たとひ天
地がいかほど廣大に開けたりとも
向上からみれば、一片の雲の空に
點するが如く小し、きなり大清は
虚空なり、珠云く、「本より分ちへ
だてもないことを、さま／＼と妄
見する。」

恁麼ならば則ち合生不來なりや。○雲亦答へず、
 生云く、「直に 純清絶點を得る時如何」雲云く
 「猶ほ是れ 眞常の流注。」生云く、「如何なる
 是れ眞常の流注。」雲云く、「鏡の長明なるに
 似たり。」生云く、「向上還つて事ありや也た無
 や。」雲云く、「有り。」生云く、「作麼生か是れ向上
 の事。」雲云く、「鏡を打破し來れ、汝と與に相
 見せん。」師云く、「天下大眼目を具する宗師、
 盡く鏡を打破し來れ、汝と與に相見せんとい
 ふを謂つて、之が極則と爲す。殊に知らず、
 山深く水寒うして、客程稍遠きことを。
 二老の膠漆相投することを知らんと要せば、
 先づ須らく兩處の不答を會取すべし。」
 除夜小參、舊去り新來る、送迎するに懼し。
 巖間塚下枯形を見る、忍んで殘臘半宵の夢

① 受點也無。珠云く、「けがれを
 うくるかどうじや」と、又云く
 「太清がけがされるものか。」
 ② 不答。珠云く、「なぜ答へぬぞ
 なぜでも、長生と靈雲と共に
 知音なる故。」或抄に云く
 「不答のところ、そこばく答へ
 たなりされどもわづかに知解
 を入れ、言句を用ひば、大に
 不答の處に相違せん。」
 ③ 恁麼合生。或抄に云く、「恁麼
 とは上の不答の處を掃蕩と見
 た故に、此の如く問ふなり。」
 ④ 珠云く、「合生不來也とは三界
 二十五有の度すべき衆生もな
 いじや」と。漢注には「羣生を
 包含せず」と。
 ⑤ 純清絶點。珠云く、「生死の炎
 もない乎、一點の無明もなく
 ぬりつけた」又云く、「松は松
 竹は竹、其の身其のままなる
 ところ少しもかけきはりはな
 い。」

① 眞常流注。眞常は涅槃なり、
 流注は煩惱なり、牛頭法融の
 所謂心正受の爲に縛せらる、
 之を淨業障と謂ふの類なり、
 珠云く、「眞常は不生滅なり、
 八識なり、流注は生滅なり、煩
 惱なり、注は地獄天堂の水口
 みな悟の上の妄想、古來なや
 むこと。」或抄に「佛見法見に
 滞在する處なり。」又云く、「淨
 觀々赤洒々じや。」
 ② 似鏡長明。珠云く、「胡來れば
 胡現じ、漢來れば、漢現ず、
 火は暖に水は寒し、少しも私
 はいれぬ。」或抄に云く、「昭昭
 顯顯たるところ、それをとめ
 たとなり。」
 ③ 向上還事。珠云く、「向上とは
 あたまの上かと思ふたら欄の
 下にある。」或抄に云く、「上に
 段段きりあげて云はるゝ程に
 此の如く問ふぞ。」事は珠云く
 「子細の事じや」と。

を作す。○坐ながら寒寒兩歲の燈に對す。○恁
 麼の告報、已に今時に落つ、○功勳に涉らず、
 如何が舉似せん。○老僧今夜、忍俊不禁にして
 爆竹未だ鳴らざる已前に向つて、諸人の與に
 一條の活路子を開いて、也た諸人をして、
 來日は定んで是れ大年朝なりと道ふことを知ら
 しめん。○其れ或は未だ然らずんば、○西河に
 獅子を弄す。」
 復た擧す、○米胡、○王常侍を訪ふ、○判事に
 値ふ次で、常侍纒に見て、○筆を擧して之に示
 す。○胡云く、○還つて虚空を判じ得てん麼。○侍
 筆を擧つて宅堂に歸る、○米胡、疑を致す。
 次の日、○華嚴に憑つて、○茶を置いて問を設
 けしむ、「米胡和尚、何の言句あつてか、相見す
 ることを得ざる。」侍云く、「獅子人を咬み、韓

① 打破鏡來。珠云く、「たゞはぶ
 ちくだけのものでない。」或抄
 に「その秘藏のかげみ」と。
 ② 珠不知。珠云く、「なに〜ま
 だ〜。」
 ③ 山深水寒。行路難を謂ふ、越
 えも山又山である、或抄に「破
 鏡を打破する底、未だ極則の
 處に到らず、又云く、「兩度不
 答の處に至極とす。」
 ④ 客程稍遠。如上の見地終に家
 郷に歸ること能はざるなり、
 珠云く、「行けば行くほど次第
 に遠くなる、やつぱり旅路じ
 や。」或抄に云く、「境界深遠の
 處を云ふなり。」
 ⑤ 二老。主客機機、一味相
 應、珠云く、「二老の機機の合
 ふた處。」或抄に云く、「知音底
 のところ同氣相應じ、機機相
 投するの義なり。」
 ⑥ 先須兩處。しまへの巻にある
 師の行狀に、「二十年常に要處

の兩處不答を擧して、納子に
 徵問す、其の意に契ふ者ある
 こと少なり、今切に須らく參
 究すべきものとあり、珠云く
 「雲の兩處の不答は尤も好答
 ならん、併し祖翁、わりを入
 れられた、これでは一生死水
 裏ではたす故。」鶴林曰く、「虛
 堂は語言三昧を得て居るから
 どうなりとも云ふがよいが、
 恐らくは後人錯りて會せんこ
 とを、鶴林はさうでない、古
 人云く、「吾れば愛す詔陽新定
 の機、一生人の爲に釘を抜き
 槓を抜く」といはれたり、鏡
 を打破し來るが賞讃なりと云
 ひ添へらる。或抄に云く、「兩
 處の不答が此れ極則なり、膠
 漆相投は二物一色なり、知音
 底の義なり。」
 ⑦ 舊去新來。或抄に「除夜の故
 に、舊歲は去り新年は來るが
 虛堂は世上の如くに、條例を

攀ちて舊を送り新を迎ふるにも、ものむづかしい」となり。

③ 蘭・珠云く、「山寺に引き籠つて居れば」と。

④ 巖間塚下。巖間塚下は沙門行道のところ、十二頭陀に塚間樹下と云ふが如し、又枯形とは其の形相、元として枯木の如しとなり、珠云く「あそこにもこゝにも、よこによこ只だ坐禪してゐる枯木の如きものばかり見る。」或抄に云く、「會中の除夜の生涯は、いかやうぞとなれば、かじけはてた、なりふりで岩の間や塚の下のおそここで、坐禪修行して諸方のやうに賑々しく年をとることも無い」と。

⑤ 忍・珠云く、「虚堂も皆の坐禪するのを見ては、ねられもすまい、皆が辨道に骨を折るもの、ぬくぬく、枕を高くしてねもせられぬ」と。或抄に云く、「此の三四の句は夜もふけゆけば、會中の衆がめん／＼思ひ

とは一機未發、已前にはや説きたつたが、會したかとなり。

⑥ 其或未然。或抄に云く、「戲論にし了るな、道理をえしらずばじや。」

⑦ 西河獅子。汾州を西河と名づけ、汾陽と名づく、蓋し西河の人、好んで木を刻んで獅子を造つて之を戲弄するなり、本朝にも亦此の戲あり、汾陽昭師垂語して云く、「汾陽門下に西河の獅子あり、門に當つて據坐す、但だ來るものあれば即便ち咬殺す、其の物に託して佛事を作すなり、其れ或は未だ會せずんば、徒に戲を爲す耳。」西河弄三獅子は方語に咬人太急、古抄に云く、「一山云く、「西河に師子をまはすなり」と。或抄に云く、「西河弄三獅子はもし悟らずんば、虚堂が垂手もあだことに成つたものぞ。」珠云く、「本朝の伊勢大神樂と云ふのおなじじや、弄すとはもちあそばせそれが何の用に立つことじや。」鶴林曰く、「是れはおれも

／＼に、或は忍んで夢を成すもあり、或は終夜坐して燈に對して居るもあるなり、忍は枯淡寂なり、凍を忍んで寝るなり、殘臘は十二月なり。

⑧ 寒・珠云く、「舊歲より新歲に至るなり、頰を以て越し來る、頰意は大無心の境界なり、珠云く、「すごい燈籠のびか／＼に打ち向ふて、新舊のしほさかひ一燈にて。」寒・珠云く、「掛行燈なり、兩歲燈はあかつきまでなり。」

⑨ 懸・曹洞宗には水分を以て空劫の正位と爲す現成を以て今時の偏位と爲す、宏智覺、正中來の間に答へて云く、「霜眉雪鬚火中出、堂堂於不落三今時」と、珠云く「そんならなげだまつてゐない、そうでない、今時におつるか、どこへ落つる乎、見よ」と云ふ、又云く、「一頓の明珠のやうなことを云ふて、おい今時に落つるとはなんのことじや、」或抄に云く、「落二

始どこまつた」と云はれた。

⑩ 米胡。京兆府の米和尚、亦七師といふ、又米七郎といふ、俗會第七なるをいふて米胡と曰ふ、髯はしき故なり、篤海に云く、「胡は領の鬚なり」とあり、王常侍と同じく、嵩山靈雨に嗣ぐ、常侍の傳に此の縁を載す、然も皆米和尚と稱す、蓋し米は即ち師の姓、この話大光明藏にも載す。

⑪ 王常侍。名は敬初嵩山に嗣ぐ、襄州府主。

⑫ 値判事。今日は裁判のある日なり

⑬ 擧筆示。珠云く、「どなたでもござれと筆頭に點却した。」或抄に云く「このところに全體都露してはたらき出たぞ。」

⑭ 還判虚空。珠云く、「ぬからぬかほで門ちがひ、米胡早やしくじつた」或抄に「虚堂に祖師西來意の五字を書すと云ふ類なり。」

⑮ 擧筆歸宅堂。宅はやどころ、室宅内證べや、私宅なり、堂の牛已後

今時には有功用。」

⑯ 不涉功勳。正位は君なり無功用爲す、偏位は臣なり、功勳邊と爲す、言ろは如上の閑説已に偏位に落つ、本分の事、如何が擧せんとたり、珠云く、「今時那邊正偏にわたらず、はなれ切つて。」或抄に云く、「功勳も今時も同じじや、洞下偏位現成底なり、擧似せんは虚堂が大衆一同に。」

⑰ 老僧今夜。珠云く、「老僧忍袋の緒が切れたから、まゝよ安賣りまけに」と。

⑱ 爆竹未鳴。珠云く、「貧乏神を退ひばらふ、」已前は歲越え、儀式の初まらぬまへに、今は一機の未發を表す、爆竹は「さざちやう、」これは前の興聖錄にも見ゆ。

⑲ 一條活路子。手を打ち拂ふて。大年朝は正朝なり、三始と云ふて正月の一日を歲の朝、月の朝、日の朝と爲す、或抄に云く、「大年朝

をいふ寢室を云ふなり、舌うちして寢室へ歸つてしまふた。

⑳ 米胡致疑。珠云く、「おれは隨分あぢやつたが、機嫌そこねた。」

㉑ 懸華嚴。珠云く、「常侍をとなりへよばせた、」懸はたのむ、あつらへるたのでやとつてなり、華嚴は會元や大光明藏に鼓山の供養主となす惟みるに王常侍は襄州人なり襄州に華嚴和尚あり。

㉒ 設茶設問。珠云く、「何を以てかお氣に入らぬことがござりましたか華嚴に問を設けさせた。」

㉓ 獅子咬人。珠云く、「胸中は見ないで筆頭ばかり見た、獅子咬人じやばかものふゆゑに韓獝逐塊じや、この語は川の寶林録に見ゆ、今米胡の閑機境を逐ふことを責む、この二句は大般若經に出づ、獅子咬人は常侍の擧筆韓獝逐塊は米胡の沒蹤跡。

㉔ 米胡聞得。珠云く、「米胡多年の鐵鍊昨日よりまつくらになつて居た

猶塊を逐ふ。米胡聞き得て、出で來つて大笑して云く、「我れ會せり也。」侍云く、「誠に道へ看ん。」胡云く、「請ふ、常侍舉せよ。」侍乃ち一隻筋を舉起す、胡云く、「野狐精。」侍云く、「者の漢徹せり也。」師云く、「米胡當時纔に筆を擧するを見て、便ち客位に入らば、席上の珍たることを管取せん。端なく再び茶筵を設けて、他の華嚴を累はして、腦門着地ならしむ。只だ常侍の者の漢徹せりと道ふが如きんば、那裡か是れ他の徹する處、試に一轉語を下せ看ん。」

① 請常侍舉。今一返どうか。
 ② 一隻筋。珠云く、「何ぞ葛餅でも食つてゐたか。」
 ③ 野狐精。珠云く、「古狐箇のばけもの。」又云く、「したけれどもほうとうではない。」ばけもの。
 ④ 者漢徹也。珠云く、「此れも和上じやと思ふて、このやうなことを云ふ。」はじめてのみことだ。
 ⑤ 入客位。或抄に云く、「おしなほつて居たらば。」
 ⑥ 席上之珍。珠云く、「よき馳走にならうものを」と。管取は結構、尊客あしらひにせらるべきものを残念など、又或抄に云へり、「俗人にまじはつてなり。」
 ⑦ 腦門着地。珠云く、「降參の義又兼地は頭を地に着けさせて致敬の義なり。」又云く、「きげ

んとり業をさらす者がじや。無端。やくたいものない。果。いとしまうにとなり。他徹處。珠云く、「なんたることにうけとられぬ。」
 ⑧ 革。變革なり、物を革むるものは罪に若くは莫し、又云く、「罪の名は正なり、古人方と調ず方は實正なり。」
 ⑨ 土膏未動。膏は土潤なり、立春の日未だ來らざるなり、草木のあぶらつくなり、春の催すなり、又は春次第に融して來るなり、動とは陽氣生じて土が融してゆる／＼となるなり、今は元日の故に、一機未發の處。
 ⑩ 商量打春。言はるは春未動已前に好し、新春佛法の商量を打するに、珠云く、「取り越して日出度いな、諸農相議し同じく早春より佛法の商量接皮を作すなり。」商量ははかりはか

上堂、擧す、藥山、道吾、雲岳と遊山する次で、樹の兩株あつて、一枯一榮なるを見て、山乃ち問ふ、榮者が是、枯者が是、雲岳云く、「榮者は。」山云く、「若し慙慙ならば、一切處、光明燦爛し去らん。」道吾云く、「枯者は。」山云く、「若し是の如くならば、則ち一切處、放教あれ、枯淡にして去らん」と。忽ち高沙彌至る、山亦是の如く問ふ、彌云く、「榮者は他の榮に従せ、枯者は他の枯に従す。」山乃ち道吾、雲岳を顧みて云く、「不是不是。」師云く、「藥山、箇の不是不是を道ふて、他の道吾雲岳の多少の威光を減す。」上堂、各各本より靈覺妙明の眞體あり、但だ已見の所障を以て、戈を横へて、直に不疑の地に造ること能はず、蓋し萍廂の工切なら

る、中平を失はざるをいふ。
 ① 太公垂釣。史記の齊の世家に「太公望呂尚蓋し嘗て窮困して年老いたり矣、漁釣を以て周の西伯を好す云云。」忠曰く「上の商量の語を承く、謂はる師承學者の爲に釣竿を垂れて之を勘辨す、猶ほ太公が釣をたれて西伯を干さんと欲するが如し。」珠云く、「肝ふとく志あるゆゑに、ちつと打成一片に渭水をにらんでゐて、とう／＼大ものを釣り出した。」これは學人を接待するが爲めにいふ。
 ② 天子獲麟。左傳「哀公十四年春西の方に狩して麟を獲たり」と、傳并に註に詳なり、又孔子家語の辨物に之を載す。龍溪云く、「意あると心なきと各各差別の境界、これ所謂商量底の様子なり、又一義に鉅禪を釣るに意あり、祥瑞を獲る

に心なし」となり。珠云く、「夫子はたゞ大道一片であられた故、希求するところなきが故に、ひよつこり祥瑞があらはれた。」或抄に「文王は學者をつらんと思ふ心あり、出格の人を得やうと思ふ心はなし、年始に豫あるゆゑ、此の處に云ふ、二句共に天下無事底を云ふ。」忠曰く、「師家の勘辨嚴鍊するに依つて、自然に英靈の納子を得るなり、猶ほ孔子の強く求むるに意なくして、自然に麟を獲るが如し、又麟の字は正且の説語なり」と、これは仕度を罷めて休し去るをいふ、鶴林拈じて曰く、「君子は思ひ刑小人は思ふれ惠。」
 ③ 藥山。名は惟嚴、石頭遷に嗣ぐ。
 ④ 道吾。潭州道吾山の宗智。
 ⑤ 雲岳。潭川雲岳の曇巖、この二人とも藥山に嗣ぐ。

- ① 兩株。一根二幹の木。
- ② 榮者是。或抄に云く、「建立門度生爲人を肝要と思ふ。」珠云く、「入都恁麼かよいや。」
- ③ 枯者是。珠云く、「不施、不恁麼かよいや。」或抄に云く、「掃蕪門なり。」
- ④ 雲。云榮。珠云く、「一切無盡の法門を生ずるが故に。」
- ⑤ 一切處。珠云く、「人のためにせん、瓦礫光を生ずる底。」
- ⑥ 光明燦爛。「家國興盛の境界で、ひかりかゞやく」と珠はいふ。
- ⑦ 遺吾云枯。珠云く、「點滴も施さず。」
- ⑧ 一切處。珠云く、「眞金色を失する底。」
- ⑨ 放教。さもあらばあれとは、さうあらうとまゝよと、打ちすてたる詞なり。
- ⑩ 枯淡去。「家國衰亡の境界なり、それでは相似の人も得まい」と珠は云へり。

- ⑪ 高沙彌。澧州の蘄山高沙彌、藥山に嗣ぐ、沙彌は比には息慈と翻す小僧の法階なり。
- ⑫ 顯道吾雲前。或抄に「高沙彌の答話藥山の機にかなふや、遺吾雲岩に當てたと。」
- ⑬ 不是不是。珠云く、「うちやつてしまへ。」
- ⑭ 多少威光。珠云く、「莫大のいきほひひかりをなくせられた。」
- ⑮ 減。珠云く、「まう口のきけぬことにせられた。」この評判は虛堂が藥山と一つねどころから出た評判なり。
- ⑯ 本靈覺妙明。楞嚴の四に「性覺は妙明」と、疏に云く、「體相寂滅心言ひ及ぶこと能はず、故に妙と稱す靈鑑不昧昏暗すこと能はず、故に明と名づく」と、又云く、「寂にして常に照す、故に妙明と稱す。」珠云く、「久遠劫來、山もうつり川もうつり、本のわれと云ふものを具有してゐる。」或抄に「本有の佛性

- ⑰ 人々其足の上なり。
- ⑱ 但……謂く、推求推度邪心觀理是れ則ち所知障なり、珠云く「自己に見を立つ、眞の知見に障子をたつるやうなもの。」或抄に、「己見好惡。」
- ⑲ 橫戈。快活自在の義なり、珠云く「關羽が七十二斤の青龍刀を提げて、百萬の軍兵の中へ入つたやうなことができた、しかし不能とは本分へふみごむことならぬとなり直不疑之地。實地を謂ふ、あとさきをかへりみず。」
- ⑳ 淬勵之工。勵は當に礪に作るべし磨なり戈の言葉を受けて工夫錬磨を謂ふ、珠云く、「不入涅槃に骨折りがたらぬ。」
- ㉑ 墮在滲漏。見地にとゞこぼるるを云ふ。洞上に三種の滲漏あり、滲漏の事(報恩錄に見ゆ)、己見の所障を以て本有靈覺現前せず、これ見滲漏なり。
- ㉒ 靈鑑現前。大智用、珠云く、「法性

ざるに由つて、所以に滲漏に隨在す。作廢生か、靈鑑現前することを得去らん。老僧眉毛を惜まず、汝諸人の與に、此の見障を去らん」といつて、拄杖を擲下す。

① 事に因る上堂。「天の雲ある也、以て日月を蔽ひ、甘雨を降しつべし。地の水ある也、以て舟楫を濟し、焦枯を潤しつべし。人の心ある也、以て禍福を興し、剛柔を制しつべし。三才既に明かにして、理一揆に歸す、然る所以は何ぞや。」拄杖を卓して、「大鵬展翅蓋三十洲、籬邊燕雀空啾啾。」

上堂、擧す、趙州、沙彌の喝參するを聞いて、侍者伊をして去らしめよ。沙彌、珍重して使ち行く、州旁僧に謂つて云く、「沙彌、門に入ることを得、侍者は門外に在り。」師云く

- がぐわらりと大地山河と一體となること。」
- ② 不惜眉毛。忠曰く、「謗法の者は眉鬢墮落す、今離言の正法に於て才に言説あれば、皆是れ謗法なり、眉毛墮落すべし。」又眉毛在廢も同じく謗法者を云ふ。
- ③ 去此見障。珠云く、「見障は滲漏じや、己見の所障を去らん。」擲下主丈。珠云く、「主丈を擲下した處に許多くの工夫あり是れで滲漏は除けたか、のぞけぬか、おれはかまはぬ。」或抄に云く、「見障を除却するの機用、拄杖子を守らざる底。」
- ④ 因事上堂。或抄に云く、「吳制相讓するに因つて、退院する時の上堂なり。」按ずるた因事とは夫れ宗師の唱道、此の事に因つて語言偈頌ありて、以て學者を接引するにあらずと云ふことなし、豈に誠を世諦

に存ずる者ならんや、若し宗師世諦の彼非此是に因つて以て出して人天に示さば、又何ぞ後世の法と爲るに足らんや乃ち洞山、慈明、九峯の事に因つての頌を引いて以て證す焉然りとはいへども諸錄往往に雜事に因つて、衆を辭するものを皆因事上堂といふ。

⑤ 天之雲有。忠曰く、「天地人の三に依つて各吉凶あることを論ずる也なり、先づ雲をは人臣に比す、日月を君の智に比す、甘雨は君の澤に比するなり、言ろは或は人臣あり、讒を構へて君の智を掩ひ、惡政を行はしむ、或は君を扶けて恩澤を降して、窮乏の民を救はしむ、一是一非、皆人臣の爲(しわざ)に依る。」珠云く、「晴れとほうしでは一切が焦枯する。」又云く、「也是則の意なり。」

⑦以藏日月。珠云く、「結構なものじや。」或抄に「藏は慈なり、降は善なり。」

⑧地之有水。忠曰く、「此れ又水を臣に比す、是れは但し善徳を言ふなり、謂く、能く君の事を成す、水の舟楫を浮べて海を渡るが如し、又能く窮乏を恵むこと、水の焦枯の草木を潤すが如きなり。」珠云く「害をなすこともあれども、乾き切つてもならぬ。」

⑨以舟楫枯。珠云く、「調法なものじや、草木の焦枯をうるほすべし。」

⑩人之有心。忠曰く、「人は但心の向ふ所の善惡に因つて、或は福を興し、或は禍を生じ、或は剛柔を制伏し、或は柔能く剛を制す。」珠云く、「貴ぶ可く恐るべきは心じや」と。

⑪以興福禍。珠云く、「惡行あれば禍仁徳あれば福、剛強柔和を制しつべし。」龍溪云く、「興起制斷、二の者は有心有爲の甚だしきなり」と。

⑫三才既明。文心雕龍に曰く、「仰いで吐耀を觀(天才)、俯して合章を察(地才)、高卑位を定む、故に兩儀と曰ふ。」儀既に兩矣。唯だ人之に參はる、性靈の宗とする所、是れを三才といふ。淮南子十一齊俗訓に曰く、日月明かならんと欲して浮雲之を蓋ふ」とあり、珠云く、「明は正明なり。」

⑬理歸一揆。揆は度るなり、上の三節を結ぶなり、或抄に「揆は趣なり、」珠云く、「三即一、一即三、べつたり中よくなつて。」

⑭大鵬展翅。師自らに比す、これは莊子の逍遙遊篇に見ゆ、「珠云く、「此れには虛堂そこばくの工夫あり、」忠曰く、「大鵬展翅の二句、卓主丈の當位なり、息耕大師現在より」と、或抄に十州は世界中じや、卓拄杖は、天地人別れぬさきを指示」と。

⑮離邊燕雀。燕雀は譏者及び吳制相に喩ふ、事は後面に見ゆ、獻獻は

小聲なり、雀などの、ひちよ／＼なり。珠云く、「ぐじや／＼云ふても正途にたぬ。」龍溪云く、「三才有爲の轉變此如きもの知るや否や、我れ此の理を知る、故に時變の爲に繫縛せられず、大鵬の寰海を翼蔽して世間の燕雀の如き底は嚇々として是非を議するに一任す、」或抄に「大鵬のいらぬこと、燕雀は云ふ、大鵬は虛堂主のことに云ふ大人境界は、此の如くとの教化なり又云く、「三才ある體なり其のほど、」分際あり、下心は我れは退院する、世上の者何と云ふとままよとなり。」

⑯趙州沙彌。忠曰く、「此の話は趙州録の下にあり、祖忌の喝參あり、訓道の喝參あり、今此れは訓誨を聽かんと欲して喝參するなり、各々座前に參候すと喝參するなり、」百丈清規上の二の住持章に詳なり、珠云く、「喝參は放參なり、今夜は晚課放參坐禪放參と云ふて觸れて

①「生靈を逼めて藪を作さしむることは、則ち易く、特牛を要して兒を産せしむることは、較難し。」

②師、寶祐戊午、六月十四日、難に罹れり、七月十三日、恭しく

③聖旨を奉じて、辜なきことを、與免せられて、事を謝する上堂、「都省の羅太尉、緻上して、謹んで

④奏して以て謝す。去時曉露消、神暑、歸日秋聲滿、夕陽、恩渥重、重何、以報、望、無、雲、處、祝、天、長、

あるいたるなり、或抄に云く「大衆方丈へ參ぜよと唱ふるを云ふ、或抄には「喝は唱ふる心、喝參は放參の時、沙彌の役に參にあがれと喝するなり、」私に云く、喝參は放參なり、放はゆるすなり、曰く、無參、無參の時、放參の額を掛け、且つ放參を唱ふ、參のあるときは參一字の額を掛け、放參は晚參を放すなり。

⑤侍者教伊去。珠云く、「此の一句子宗旨がこぼれてゐる、」伊は沙彌。

⑥珍重便行。忠曰く、「清規に規誨を聽き畢つて珍重して退く今此の沙彌未だ訓誨を聽くに及ばずして、即ち珍重して出づ。」

⑦沙彌得入門。珠云く、「州の家常茶飯なり、趙州の門内に、」

⑧通生靈。珠云く、「なぜかう云ふた、きなふやけふ、桑も

ろくにくれないで、やれ／＼とせつきぬいで、」或抄に「過は侍者を云ふ、難易なき處に於て難易を立て、此れ一手擲一手擲、趙州と一般。」又云く「二人の上を云ふ、無理なることなり、わかき置はまゆはなすまい。」

⑨要特牛兒。この語は報恩錄に出づ、共に不可得の中に就いて難易を立つ、趙州の底裡、之を以て見るべし」と龍溪は云へり、「珠云く、「こりや出来ぬこと、」或抄に「男牛は兒をばうむまい、人を接すること大義なり、二つとも不成の義をしひた義なり、」要は沙彌を云ふ、要は求むるなり。」

⑩寶祐戊午。六年なり。

⑪羅羅。掛なり、遺ふなり、師の行狀に「王王に住して三年吳制相譏を信じて隙を懐いて師を辱めて、其の徳を損せん

と欲す、師怡然自若として始終拒抗すれども、略々變色なし、古抄に「翁云く、育王に難に罹り、免ぜられ、再び育王に住す、事を謝して退院す、知事と塔頭の地を論じ、知事の訴を被る。」
① 與免。與は増韻に許すとあり。
② 謝事。古抄に「一山云く、多くは退院を言ふなり、吳陸は慶元府の太守となる虚堂の口語に因つて、故に之を追ひ獄に入れんと欲す、晦岩物初の數老宿、特に皇帝に奏するに再住を蒙る、今又事を謝して退院す、住持の事を辭退するなり、この上堂は聖旨を奉じて歸山する謝恩の上堂なり、けれどもこのとき退院するなり。」
③ 都省。事文類聚尙書省の下に云く「尙書省亦録令僕射あり、惣べて六尙書の事を理す、之を都省と云ふ内官なり、」これより以下虚堂の謝

語なり。」
④ 羅大尉。羅は姓なり、大尉は官、傷頰の部に之に寄するの頰あり、句意を推するに名徳ありて人主の寵渥を得る人なり。
⑤ 上。經ふ也。紛して争ひ言ふ、争諫の義。逸堂曰く、「羅は封の義。」忠曰く、「此の頰を完結して天子に上るなり。」
⑥ 謹奏以謝。奏聞して天恩を謝し奉る。
⑦ 去時曉露。珠云く、「去る時とは六月十四日退きの時分、曉露夜の中に出てて符鬚は煩海なり、近身衣なり。」
⑧ 歸日秋聲。然に罹りて退去する時即ち六月、旨を奉じて來り歸る時即ち七月、その景象知るべし、珠云く、「御教を蒙りてかへる、秋聲(ひぐらしなど)夕陽に滿つとは日の西の山けなを照す時分」或抄

に「ざんげんの言葉が休みぬ、夕陽は衰微の義なり、今言ふは讒聲漸く衰へてなり。」
⑨ 恩渥重々。渥は深なり、一に曰く厚漬のこと、珠云く、「立つかたもなき勸勤の身の上、いかゞとなるべきに、斯く暇住するとは、」又云く、「如是四時行はれるは、皆天子の恩じや。」
⑩ 望無雲處。三四の句は全く天恩を謝す。珠云く、「天子に讒言して雨が降つたり霧が降つたりしたが清明のそなた、
⑪ 皇天長久を祝したてまつる。」又云く、「生死涅槃、讒者賢者ば雲なりそのなき處が納僧の持ちまへ、」或抄に云く、「無雲は則ち直に青天を看るなり、讒言歇むときは親しく天恩を望むの意。」

廣利寺語錄終

栢巖慧照禪寺語錄

師、^①景定元年八月二十五日に於て入寺、^②上堂、僧問ふ、曇華は見易く、^③知識は逢ひ難し、^④學人上來、請ふ師祝聖、^⑤答へて云く、「威音那畔に突出して看よ。」^⑥問うて云く、「寶壽開堂、^⑦三聖、一僧を推し出す、寶壽使ち打つ、此の意如何。」^⑧答へて云く、「劍關路險しと雖も、^⑨夜行人更に多し。」^⑩問うて云く、「三聖云く、「恁麼に爲人せば、^⑪惟だ者の僧の眼を瞎却するのみに非ず、^⑫鎮州一城の人の眼を瞎却し去ることたらん。」^⑬寶壽拄杖を擲下して、^⑭便ち方丈に歸る、^⑮又作麼生。」^⑯答へて云く、「更

侍者

似藻編

① 栢巖慧照。忠曰く、「末だ何の州郡に在るを詳にせず、浙江の寧波府に白岩といふあり、恐らく是なる乎、拍訛りて白に作る耳、龍溪抄は「溪が胸臆の杜撰は、後の雪蓬に與ふる語に和して、妄に解したるなり。」
② 侍者。これは即ち書狀侍者なり、五侍者の一手、傷頰の部に内記の簿侍者に示すものあり、是なり。
③ 似藻。舊說に似藻は南嶽と號す、顧東叟に嗣ぐ、文章を能くするに因つて、虚堂に在りて書狀侍者と作る、然るに續傳燈を考ふるに、之れを載せ

④ 景定元年。南宋理宗の朝、日本の龜山天皇文應元年に當る師年七十六なり、日本の南浦和尚入宋の二年目なり。元年は庚申なり。
⑤ 入寺。育王を退いてより二年目なり。
⑥ 曇華易見。優曇鉢華、此には瑞應と譯す、珠云く、「世間の上では、どのやうな希有なることでも、見易く知りやすいと。」
⑦ 知識疎達。法華方便品に云く「佛、舍利弗に告ぐ、是の如き妙法、諸佛如來時に乃ち之を説く、優曇鉢華の時に一たび

に金鍼を把つて、密密に縫ふ。問うて云く、「和尚今日開堂祝聖、忽ち人ありて、一僧を推し出さば、又作麼生。」答へて云く、「牛屎香を焼いて、他を供養すとも、未だ分外と爲す。問うて云く、甚に因つて此の如くなる。」答へて云く、蓋し、他は是れ本色の衲子。僧禮拜す。師乃ち云く、「天理還すことを好む、是の處の溪山笑眼を舒ぶ、羣心響のごとくに應ず。信に知んぬ此の道、人を誣ひざること。所以に、眞偽を掩はず、曲直を藏さず、自然に艸偃し風行いて、太平路を得たり、只だ親しく栢巖に到る一句の如きんば、又作麼生。」拄杖を卓して、青松不礙二人來往、野水無心自去留。」

復た擧す。

須菩提、

巖中に宴坐す、

諸天

現するが如き耳、又楞伽の四に云く、「佛は值遇すること難し、優曇鉢華の如し」と、珠云く、「最極大因縁なくしては、眞正の知識にはあはれぬ。」
 ② 學人上來。珠云く、「さるに依てわれら如きも。」
 ③ 威音那。實際理地を表す、説は延福録に見ゆ。珠云く、先づ隻手の聲を聞くと云ふこと、やい、ばかものめ、父母未生已前に立ちかへつてみよ、上諸佛なく、下衆生なし、即今直下に看よ」と、或抄に「不變不易の處、突出はとび出すなり。」
 ④ 寶壽開堂。五燈會元十一に、臨濟下の寶壽出の法嗣寶壽和尚、(第二世)壽德化に臨むとき、三聖に囑して師を請じて開堂せしむ、師の開堂の日、三聖一僧を推出す第二世の寶壽は失名。

① 三聖一僧。珠云く、「上堂してまだ一言もいはざるとき、推出は取り持つ。三聖の惠然、臨濟に嗣ぐ。」
 ② 劍閣路險。四川保寧府の劍閣は劍州の北三十里に在り、兩崖峻拔、石をうがち閣を架して棧道と爲し、連山絶險なり故に之を劍閣といふ、珠云く、「向上宗乘は中々足ぶみもならぬが、併し寶壽三聖とすさまじいものがでて、」又云く、「すさまじいものがでて、」又云く、「すさまじい往來のなるものではなけれど。」
 ③ 夜行人更。夜行の賊更に多しとは、三聖、寶壽に當つ、珠云く、「三聖の巾着をきりたがつて、寶壽門庭檢しと雖も、三聖夜行を打す。」
 ④ 慙慙爲人。珠云く、「なぜかう云ふた爲人でさふらうと。」
 ⑤ 瞎却。日くらにしてのけるで

① 傾州。寶壽は傾州にあるを以てなり、今の河北省にあり。
 ② 擲下。ぶつころばして。
 ③ 把金鍼。寶壽、把住綿密にして縫罫を露さず、珠云く、「二人の合も水ももれん、さて見事じやどうにらんでも手日は見えぬ。」或抄に「綿密把住、密室に風を通ぜずの義じや。」
 ④ 燒牛屎香。珠云く、「五百年間出とも云べし、世に希有の香寶壽は打し虚堂は供養す。」
 ⑤ 供養他未。他は推出の僧、又推出せられた僧なり、楞嚴の七に「佛、阿難に告げての玉はく、若し末世の人願はくば、道場を立て、先づ雪山の大力の白牛の、其の山中肥膩の香脾を食するを取れ、此の牛唯だ雪山の清水のみを飲んで其の糞微細なり、その糞を取りて旃檀を和合して以て其の地に泥るべし注に云く、「雪山の牛乳、純らこれ

醍醐有らゆる茹蕪最も香潔たり。」牛屎香は蓋し之を謂ふ乎。分外は托上のやうにしてちと此の僧を弄する意。

① 他是本色。道理なき故に、珠云く「彩畫した臨濟の子孫ではない、」又云く、「推し出したものも、推し出だされたものも、他は是れ本色の衲子、」又云く、「めつぼうかいになぶつたなあ」と。
 ② 師乃云。提綱なり。
 ③ 天理好還。昨日は黜加せられ、今又出世す、所謂天運循環、往いて復らずと云ふこと無きなり、已下皆この旨なり、珠云く、「これは虚堂和尚の生國。」或抄に「四季巡行止まず、」日月行みな好還也。珠云く、「葉落ちて根に歸するが如く一切草木等まで」と。
 ④ 是處溪山。合前珠還つて雲山觀を改むるの意なり、珠云く、「栢岩は明州で、虚堂の生縁の處、」又云く「おれがもどつたればじや、舒三笑

眼」とは相迎ふるが如し、」或抄に云く、「入院儀の説語なり、」又云く「我れを知音の如くにして溪山までも」と。

① 群心響應。衆議一同して此の請を致すなり、珠云く、「四衆等一切が歸仰する。」
 ② 信知此道。惟付するに此の道天眞終に無を以て有と爲す、故に群心應ずること此の如し、珠云く、「信は天の道なり、無理はないぞ、私にはならぬ。」誣ひずとは欺かず、人をおしそこなふことをば云ふなり。
 ③ 眞不掩偽。五祖の戒禪師の語なり正しく護者及び吳刹相等に當る、或抄云く、「其の差異分明にして、相混ぜず本分の家範。」
 ④ 自然神僞。論語の顔淵篇に君子之德風、小人德神、神上之風必偃、此況自ら分明、珠云く、「自然の道理なれば骨折りにしにすら」と。或抄に云く、「説語相應の體なり、天子の號令は萬民をして相隨はしむ

華を雨して、讚歎す。尊者云く、「空中華を雨して、讚歎するは復た梵れ何人ぞ。」云く、「我れは是れ 梵天。」尊者云く、「汝云何が讚歎する。」天云く、「我れ尊者の善く、般若 波羅蜜多を説くことを 重んず。」尊者云く、「我れ般若に於て、未だ曾て一字をも説かず、汝云何が讚歎する。」天云く、「尊者無説、我れ乃ち無聞、無説無聞是れ眞説の般若波羅蜜多なり」といふて、又復地を動じ華を雨す。雪寶云く、「喧を避けて静處を求むることは、世未だ其の方あらず、他品中に在つて宴坐す。也た者の一隊の漢に伊を塗糊せらる。更に者の老把不住なるあり問うて云く、空中に華を雨して讚歎する、復た是れ何人ぞ、早く敗闕を見了れり也。我れ尊者の善く般若波羅蜜多を説くことを重んず、

るなり。
① 大平得路。處として太平ならずと云ふことなし、珠云く、「亂世には則ち開闢難き、太平には則ち路通を得て自在往來滑すぢきはりなしじや。」
② 親到栢巖。珠云く、「とつくりこゝへ落ちついた、一句またどうじや。」
③ 青松人來往。礙ふること能はざるものは、境界の別なるに依つてなり、珠云く「礙は障礙なりわきから看ればすきまはないやうなれども、ゆくのもかへるのも、いやがりも好みもせぬ。」或抄に「青松は松原なり、青玉をあいもなく、退き栢岩へ入院せらる自らに比して去留に拘らざるを、物の爲めに拘せられぬを云ふ或抄に云く、「青松は栢岩の境致なり、松原なり、その中あるけばさはりないぞ、わきから

四

みればあるかれさうもない」と云ふなり。
④ 野水無心。退院蓮寺は野水の自ら無心なるが如し、珠云く、「野水は師自らに比す、流せばながる、せけばとゞまる。」或抄に云く、「栢岩に住するに障礙なきなり、天然自在の體なり。」
⑤ 須菩提。これは碧岩の第六期の評にも出てゐる、須菩提、此には空生亦善吉、善現等と譯す、釋迦の十大弟子中に於て、解空第一と稱せらる、支那語で學生(空から生れた兒)の意と譯す、須菩提が巖の上に端坐して、般若哲學(空理哲學)の冥懐に耽つてゐると、一人の帝釋天が現はれて來て空中から花を散して讚美の歌をうたつて居た、須菩提がそれを見て何故にそんなことをするのかと問ふと、帝釋天は

惡水驀頭に潑ぐ。我れ般若に於て未だ曾て一字を説かず、艸裏に走る。尊者無説、我れ乃ち無聞、甚麼の好悪をか識らん。總に者般底に似たらば、何れの處にか今日あらん。」復た大衆を召して云く、「雪寶 幸に是れ無事の人、爾者裏に來つて、箇の甚麼をか竟めんといつて、拄杖を以て一時に起ひ下す。」師云く、「雪寶 其の兵機を善くせずと雖も、要且つ帽に孫吳に合へり。今日栢巖、開堂祝聖 甚に因つてか人の華を雨し供養する無き。」拂子を撃つて、賊は愼家の門に入らず。開爐上堂、舉す、古徳道く、「法昌 今日開爐、行脚の僧一箇もなし、惟だ十八の高人あつて、口を緘ち爐を圍んで打坐す。」師云く、「法昌 使を解することは、家の富貴に由らず、

「あなたが般若の眞理を説法し居るからだ」と云ふ。須菩提が、「私は空の眞理なんか説いたことはない」と云ふと、その帝釋天が「あなたも無説私も無聞、無説無聞これが般若(眞の空)である」と云ふて顔に花を雨らしたと云ふ。
① 巖中宴坐。珠云く、「人境共に寂靜、般若波羅蜜の端的。」
② 雨華讚歎。珠云く、「さても、とあがめられた、雨華のこと(後のところ見ゆ)。」
③ 梵天。梵迦夷、此には淨身と譯す、初禪梵天淨名の疏に云く、「梵は是れ西音、此には離欲と云ふ、或は淨行と云ふ、尸棄大梵なり、光明大梵は二禪天なり。」
④ 重。尊重なり。
⑤ 般若。智慧と譯す。
⑥ 波羅蜜多。到彼岸と譯し、亦事究竟とも譯す、或抄に「生

死海を波瀾多き海に喩へ、寂靜安樂の涅槃を彼岸に喩ふ、即ち彼の生死の海を超えて、涅槃の彼岸に到るの意。」
⑦ 動地雨華。これは法華の序品にある譬佛世界六種震動の類なり。雪寶後録、此の縁の下に、巖中宴坐は即ち分別功德論に、佛・蓮花色比丘尼に謂つて言はく、「須菩提、巖中に於て衣を補ふ、最先に我に見ゆ」と、(且つ宴坐の縁なし)。雨華は即ち大般若八十四に須菩提偈戸迦に謂へらく、「是の花は生花に非ず、赤心樹の生に非ず」と、(且つ讚嘆の縁なし)。未だ曾て一字を説かずと、即ち大般若八十一に、善現諸天子に告て曰く、「我れ曾て此に於て二字を説かず、汝も亦聞かず、當に何の解する所あらんや」と、之を以て考ふるに、之に兼結、共に此の意ありと

雖も、而も此の縁なし、實に恐らくは後世の宗匠、借つて此の説を爲すならんと、祖庭事苑にもこれを引いて辨ぜり。

① 避喧求静。二乗聲聞の分なり、珠云く、「古來修行の了簡とは大いに違ふた、是れ實の修行者。」或抄に云く、「大いに聲聞の修行を抑下すこの雪竇は終にきかず」となり。

② 世未有其方。珠云く、「佛在世より方は方術、」或抄に云く、「世間すら其の道理あらず、是の處ことほり有ることなしの義なり、」これまでが總論なり。

③ 他在巖中。静處を求むるが爲めなり、珠云く、「他は須菩提をさす、日本でいふならば印籠の内の富士山をながめてじや。」

④ 也。一隊。雪竇の着語なり、還つて諸天に喧雜せらるるなり、是れ世に未だ其の方(みち)あらざるなり塗阿は汚穢の謂。珠云く、「一隊の漢は梵天帝釋など、伊は自性じ

や、除障は面目をのりこべたにあはせらる、」又云く、「活脱自在の真人を無相の無説の如くにしなざる、無分曉にぬりこめらるじや。」

⑤ 更者老把。著語なり、本分を守ることを能はざるを云ふ、珠云く、「老は須菩提を云ふ、把不住はとりとめもない、内空外空、内外空空、空大空云々と、眞の火我をとらへまへぬうろたへものじや、」だれじやともしらぬなり。

⑥ 早敗闕了。著語なり、雪竇於句下一に拈破す、珠云く、「問ふ處が直に手前と仕そこなひを見たじや、」にがくしい。

⑦ 惡水驚頭。著語なり、空に糞講の機なるべし、珠云く、「せまなきじるを頭から梵天にあぶせかけられた。」或抄に、「讚嘆にて却つてじや。」

⑧ 舞裏走。著語なり。其の聲雷の如し、早く落舞し了れり、珠云く、「向上に云ひ持ち來れ、」又云く、

「むさむさしい蛇が、なにそのやうに、もそつと舌へやうもありさうなもの、」或抄に「落草の義なり、」けがらはしい、須菩提にあたるなり、早般若を漏運し了る」と。

⑨ 甚麼好惡。著語なり。一向に無分曉の故に、珠云く、「なんのそんな泥山棒なんの役にたつことじや。」

⑩ 總者般底。珠云く、「總べて修行するもの、前をひつくるめていふ。」

⑪ 何處今日。日は即ち出身管説の期なり。此の兩句は總べて此の縁を判ず。

⑫ 雪竇幸是。天花動地等の擾亂なき故なり、珠云く、「天の讚歎することもなく、一字を説かず、いろく云ひわけすることはいらぬ、無事人じや、飢ゑ來れば喫飯し、渴し來れば飲水す、」或抄に云く、「吾れは元來無事の人じやに、何ゆゑ汝等は此へ來たぞ」となり。或抄に云く、「花をふらすの無聞無説のとて雪竇の祖英集に道は如愚を貴ぶと

⑬ 爾來者裏。珠云く、「梵天、須菩提

の頰に云く、「雨遇雲霧曉半開。數峯如畫碧崔嵬。空生不解巖中坐。惹得天華動地一來」とあり。この頰を譯すると、道は如愚を貴ぶ、これは老子經の大知は愚なるが如しとの意をとる、孔子も我れと回と言ふ、終日愚なるが如し、雨過雲凝曉半開、どうもこの氣色は云ひやうもない、數峰如畫碧崔嵬とは言端語端なり、この境は愚なるが如しと、空生不解巖中坐とは空生は須菩提を云ふ、昔し説法するとき、天華亂墜す、惹得天花動地一來とは、知見を以つての故なり、猶ほ愚ならば天花も落ちんが佛祖も來し、智恵か愚かと云ふてゐる、又云く、「須菩提ば智恵を以て觀照するがゆゑに、天花亂墜した、我れは馬鹿な貌で見て居たゆゑ、天人も氣が付ぬか、天花も動地もすきとないものぞ」と云ふてゐる。

どもが來て。」

⑭ 覓箇甚麼。以主丈一昨趁下。復召より以下は雪竇別に大活機用を施す、珠云く、「一時に趁ひ下すとはこれ雪豆何のきちがひだ、般若手、天花乎、」或抄に云く、「これ即ち雪豆眞箇無説の般若を指出して示すなり。」

⑮ 不善其兵機。兵術の機要なり、珠云く、「法戦には得ていぬが、」或抄に云く、「雪豆を讚歎するなり、手づから使ふて、することはせねども、善くするは鍛錬せねばどもじや。」

⑯ 要且暗孫。孫子、吳起、各兵書あり、盛に世に行はる、七書の二なり、又史記列傳六十五にも見ゆ、珠云く、「きつとまあどこやらが孫吳兵法に合ふ、これは臨機迅速を謂ふなり、」或抄に云く、「暗には自然なり。」

⑰ 因甚。珠云く、「こりや、又どうしたものか何ひ見ることにはならぬ。」

⑱ 聖佛子。珠云く、「寶の趁下とはどうじや。」

⑲ 賊憶家門。把住護嚴の故に、諸天窺ふに門なし、珠云く、「亭玉の心立性根に依つて、家内のしまりがよい、盜人も入ることはならぬ、」或抄に云く、「我れ憶んで居るゆゑ諸天も花を捧ぐるに路なく、外道も見ずじや。」

⑳ 開爐。十月一日。

㉑ 古德道。會元の法昌倚遇傳に此の縁を收む、僧寶傳二十九にも出づ、

㉒ 法昌。續傳燈十五に洪州の法昌遇は北禪賢に嗣ぐ、賢は洞山初に、初は雲門に嗣ぐ、法昌は漳州林氏の子、法昌は分寧の北にあり。

風流豈に着衣の多きに在らんや。栢巖今日開爐、泥像を聚集することを用ひず、暗地裏に他に勝ること一籌。何が故ぞ。版齒生毛老古錐、夜深聽レ水爐邊坐し。

首座を謝する上堂、主丈を卓して、「天下の衲子の偷心を死盡して、方に此の題目に稱はん。」主丈を卓して、「天下の衲子の偷心を死盡して、那邊に轉向するも、猶は功勳邊の事に墮す、作麼生か、恰恰に相應し去ることを得ん。」主丈を卓して、「人天の眼目、堂中の上座。」

正且上堂、「一年又一年、循環數へ足らず、本分面上の人、猶ほ羅穀を隔つるが如し。惟だ南極老人のみありて、天鼓を扣くこと三下し、北闕を望んで祝す。何が故ぞ。」主

者亦宜しく自ら勵んで、怠惰して非を爲すことを得ざるべし、恐らくは現報を招かんとみ。十八高人とは一に美音、二に梵音、三に天鼓、四に鼓妙、五に歎美、六に摩妙、七に帶音、八に師子、九に妙歎十に梵響、十一に人音、十二に佛奴、十三に歎德、十四に廣日、十五に妙眼、十六に微聽、十七に微視、十八に遍視なり。

解使家。使を解することは豈に肥馬輕裘の富に由らん乎或抄に云く、「よそへ使にゆくには富貴ななりで、肥馬輕裘で行くには及ばぬ、只だ口上をよく覚えて事の持さへ明かればよいぞ、其の如く度生爲人抄に云へり。

風流豈著衣。解すべし。法昌を喚んで之に告ぐ、言ふ意は多數の高人を用つて甚麼をか爲さんと也。珠云く、「錦綉を著飾つたにもよらぬ。」又云く「かう云ふた虚堂がき、法昌の上堂乎、評判乎、是がさ々々々。」風流とは忠曰く、「醒藉風流の、態度自ら尊貴凡ならざるものあり、必ずしも好衣を著することの多きにあらざるなり、法昌枯淡、泥像の爲めに説法す、其の高風を仰ぐべし、必ずしも千百の大衆を

頷するに由らざる耳。

●聚集泥像。十八の高人。

●暗地裏他。他は法昌を指す、籌は投壺の矢なり、又算なり、珠云く「暗地(とこやみ)に、ひとしれずに

覺えぬ知らず、法昌に勝ること少しある、勝他は一と面而しがふた膚がある。或抄に「暗地は自然に、一籌は人人一手かつことを云ふ。」

●版齒生毛。版齒は富門の兩齒なり毛を生ずとは老成の奇を表す、老古錐は即ち老成なり、惟は顯脫の義を取る、忠曰く、「版齒生毛は方語に説不得とあり、久默の故に毛を生ずるなり、」珠云く、「師自ら言ふなり、そなた虚堂のはなんぞござるは、版齒毛を生ずじや。」或抄に「むかばなり。」或抄に「不言の貌なり」忠曰く、「老古錐は惟はもと顯利にして古錐は則ち尖り、退き鋒き秃つぶる」復「ふく」顯脫の能なし以て老來聰敏の機智なきに比する也、今は虚堂自らを稱する也」

●夜深聽水。龍溪云く、「幾多の塑像を築めず、只だ林下の老成、耳爐邊に打坐す」と、珠云く、「中夜の夜ちんつん／＼水聲を聞いて爐邊にほや／＼御茶がわくか」と、又虚堂門下の一僧言なり、江湖集四、聽水の題下に爐間の韻也と、唯菴恭上人の頌に曰く、「聞處何二如日處深」(きくとところけんしよのふかきにいづれ)、耳根の開處の境界は眼根の川處の境界とは、何如と比べて見たれば、見處が深いなりと、紅爐焙碧波生とは爐間に聽水と韻を打つたところに見處が深いに依つて、活と燒き立てたる火中に碧波が生じたと見出し

た夜來話々清三人耳」とは、話は話の字ならん、水流の聲、夜來に水の流るゝ聲を聞いて、人耳を清淨にする。不正是因敲三火筋一聲とは話々たるは水流の聲にてこそあはれと、紅爐焙碧波の眼處に聲を聞いて取つた、爐間ちやとて話々

は火筋を拈弄し、敲着する聲にても有らうかと耳根の開處には悉はぬなり。

●首座。百丈清規に「前堂首座は叢林に表率として人天の眼目なり、分座説法、後昆を開鑿す」とある實に能く天下の衲子の無明の偷心を死盡して、方に人天の眼目の名題に稱はん、偷心、珠云く、「面目をふみくだかねば皆偷じや。」煩惱賊なり、大惠武庫の序に「常し偷心盡く死せば急に銀刃上に於て身を纏するときは、則ち死せる諸葛も以て走らしむべく、生ける仲造をばじや、さうでなくは觀去りて久し矣」といふである。

●稱題目。首座と云ふ題目。

●偷心。珠云く、「坐禪誦經皆妄想じや、佛法を以ておし計り、かうしてよからう、猿がへりしてよからうかじや。」

●那邊。或抄に云く、「格外。」

●猶功勳邊。更に無功用的第一義を

丈を卓して、願はくば我が王の萬福ならんことを。

「第七地迄は有功川功勳、第八地からは無功川」或抄に云く

有功川にして第一義にあらず第二義門なり、俗語なり。恰恰相應。珠云く「ちやうど

無上道と不二體なることを得ん。恰は適當の辭合好義、或抄に云く、「別のものでない、堂中の首座じや。」

①堂中上座。即今の上座相應底の人なり、昔五燈會元に、雲樹敏(長慶大安に嗣ぐ、安は百丈海に嗣ぐ)雲門と稱す、雲樹は韶州なり、廣主將に兵を興さんとす、射ら院に入りて師に誠否を決せんことをこはんとす。

師先きに已に知りて、怡然として坐化す、主、知事に怒りて云く、「和尚何れの時か疾を得たる、」對へて曰く、「師曾て疾あらず、」過々一函子を封じて王の來るを伺ふて之を呈せしむ、主函を開いて一帖子を得たり、書して云く、「人天の眼目は堂中の上座」と、主師の旨を

悟つて遂に兵を寢む、乃ち第一座を召して開堂說法せしむ、即ち雲門偈和尚なり、この縁は傳燈錄の十一に雲樹の傳にも出づ、事苑に云く、「首座は即ち古之上座」と、珠曰く、「眼目は目あかしなり、」鶴林曰く、「此れは稻荷の鳥居じや、」珠曰く、「上座は法、手本、ちやうど相應するの人。」

②正且上堂。珠云く、「絶妙の上堂、盤に走る珠の如し。」

③數不足。珠云く「つくされぬ。」古句に「千手大慈數不足、」或抄に云く、「無盡無窮の故に三句に所謂境界にはたとひ本人もなほ親契と爲さず、」又の義に一二句に謂ふところの境界には猶ほ未だ本人の人契はず、本人の體足らずじや。」本分面上。時節遷流に於て、縱ひ

本分の漢面上も猶ほ一分の隙あり宗鏡錄二十三に「等覺未だ一分の無明を盡さず、猶ほ微煙の如し、」或は云ふ、「羅鼓を隔つるが如し、」珠云く、「本分面上人とは要津に坐する羅鼓はうすぎぬなり、はつきりと見えわかぬ、なにがみえぬ、一年又一年。」又云く、「一年三百十日、面前了々とははつきりを見ることはならん、」或抄に「直下に見ることとはならぬ、」本分面上は向上の人と云ふ義。

④南極老人。壽昌星(前の寶林錄に見ゆ)、これより下は皆祝聖なり南極星は虛堂自らを指して暗にいふ。

⑤扣天鼓三。事苑五二、天鼓の注に諸佛境界三昧經に云く、「三十三天善法堂の前に妙法鼓あり、諸天帝

釋、樂を著欲する時、其の鼓自然に聲ありて、無常の法を説く、若し修羅至らんと欲すれば、即ち宛來ると報ず。今南極星に依つて天

鼓を用ふ、「天鼓は天樂なり、三句の天樂をきいて」と或抄にみえたり。望北闕。禁庭の方に向つて。

①祝。今上皇帝、聖壽萬安を祝し奉る。
②願我王萬。理宗皇帝の事。

栢巖寺語錄終

臨安府淨慈報恩光孝禪寺語錄

侍者至源文衡編

師 景定五年正月十六日入寺。

山門を指して、外圍閉ぢず、天下に跨つて薪むることなし。

會得せば、偏に許す、其の堂に陞り、其の室に入ることを。」

佛殿を指して、「巍巍たり、萬徳の尊、券舒出沒、方便惟れ多し。是れ汝諸人、甚に因つてか、如來の頂相を見ざる。咄。只だ太ぞ近きに縁つてなり。」

師、法座の前に至つて、香を焚いて、闕を望むんで、

恩を謝し畢つて、

國譯虛堂和尚虛錄 卷三

臨安府。一統志に「杭州府は宋の高宗、南渡都を杭に遷し、陞せて臨安府と爲す。」

淨慈。方輿勝覽淨慈は西湖の上在り、周の顯徳中に建つ祥符に今の額を改む、寺に五百羅漢あり、各身の高きこと數丈、大なるは數圍、又大鐵鑊あり、蘇東坡淨慈寺に遊んで本長老に講するの詩に云く「臥聞禪老入南山、淨掃清風一五百間」と支那五山第四に位す。

報恩光孝。報恩とは與聖錄に見ゆ、名藍圖に「臨安府の南山淨慈報恩光孝禪寺は、開山は永明壽禪師、宗鏡堂、枯木

堂、南屏山、南高峰、惠日山、千峰閣、六橋、西湖、六和塔、羅漢堂の正偏知閣、踏華岩、雙井等の境あり。宗鏡堂は法堂、枯木堂は僧堂なり、或抄に云く、「山號は南屏山なり、古の國分寺の事なり、徽宗皇帝、北人の爲に生擒せられ、其の次の王、先帝の死生を知らず、料るに謝徳の爲めは(若死爲)、延命は(若生爲)諸寺に詔して一寺ごとに天寧と賜ひ(若生爲)、祝萬壽、報恩は(若死爲)、祝萬壽と、四字各謝徳と延命との行を修せしむと云ふ。」光孝は孝養の謂なり、徽宗皇帝の北人の爲に試せらる

るを退思するなりと。
 ①至道文衛。二人共未審。
 ②景定五年。甲子、師年八十。
 ③指山門。脱體現在、四方八面。
 ④外闈。門扉なり、珠云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門とおつひらいておいた。」闈とぼそなり、八字打開なり、此の門に入得して、たんのうしたらば。
 ⑤跨天下語。新は求むるなり、二句共に荀子の語、皆太平の謂なりと「門闈の縁に寄せて無爲無事の本法を示す」と龍溪はいへり、珠云く、「大千沙界に跨りて、ふつくりくひふくれて、ぬらりと出たばけものせともかいても本具の佛性外に何をか求めん。」或抄に「言ろは箇の一門を跨げ得ば、天下の門に跨つて何に求むることあらん。」
 ⑥會得。此の門を透得せばと。
 ⑦毘其堂。若し無爲の法を會得せば何ぞ只だ門限に止まらん、直に須らく堂に陞り室に入るべし、これ

は入道の次第に喩ふ、珠云く、「頂門の隻眼が手に入つたなら、末後の大事も手に入る。」或抄に云く、「此の門を透得する底。」備とは學者(修行者)をさし、堂は虛堂自らをいふ。
 ⑧巖巖萬德。高人の貌、惟みるに三祇羅輝、萬德圓成、天上人間、唯我獨尊の故なり、珠云く、「中々丈六のは眼量はない、人天の中、比類はない。」或抄に「威のたかきこと」と。
 ⑨券舒出沒。券は把住、實際理致、舒は放行、佛事門中、出は降生、應苑に生を度し、沒は涅槃、摩竭窟を掩ひ、或は別別に解すべからず、惣べて一代の事を擧す、或抄に云く、「自由自在佛の上なり、婆娑往來八千返の體なり。」
 ⑩方便惟多。皆これ開導方便なり、或は其の間の方便多し、珠云く、「衆生の爲の故に、一大藏教。」
 ⑪如來頂相。眞容の無見、頂相を提

誨す、頂相の事は楞嚴一の跋并に第七に見ゆ、珠云く、「如是面目は見るものか見ぬものか。」
 ⑫唯。唯は上に見ゆ、委曲に眞容の所在を顯示す、是れ眼鼻孔を見ざるの意、珠云く、「目で目を見られた如く、あんまり目前にありすぎに依つてよう見ない。」或抄に云く、「眞箇如來の頂相を唯出して、諸人をして見せしむることを唯出するなり。」一説に如來の頂相を唯破す、又の説に、如來頂相を唯破し、又の説では我が落舞の處を唯破すと、並に非なり、唯は方語に沒巴鼻なり、默破と同じとあり。
 ⑬恩。天恩。
 ⑭世尊三昧。正宗記に、「和修(商那和修尊者)、魏多(優婆塞尊者)に謂ふて曰く、如來三昧、辟支三昧、辟支三昧、羅漢三昧、羅漢三昧は此に調直定と云ふ(これは前に見ゆ)。珠云く、「面目じや、淨無垢

勅黃を捧げて衆に示して云く、世尊三昧、金口玉音親しく付囑す。紫泥芝檢、九重城裏より鳳衛み來る、再び雨露の恩に霑ふて光一法門の盛を聞く、聲前妙證、聳動羣心。」
 諸山の疏、煙慘淡として、石玲瓏たり。面面厮覷る、千峰萬峰、一團の和氣、其の中に在り。
 法座を指して、「法は空を以て座と爲す、歩を擧ぐるときは、則ち釋迦前に在り、彌勒後に在り、且く道へ、中間底、甚麼の法をか説く」驟歩して座に登る。
 師、隱座拈香して云く、「此の一瓣の香、爐中に熱向して、恭しく爲に
 今上皇帝の聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延した

三昧の中、或抄に「世尊身をうごかし」
 ①金口玉音。佛祖統記の五に、「金口の記する所」とあり、輔行に云く、「如來黃金色身口衆の記する所云云。」珠云く、「國王大臣、有力の檀那に囑すじや。」
 ②紫泥芝檢。統宗故事三に紫泥芝檢は漢書の舊儀に曰く、「天子信置六あり、皆武都の紫泥を以て之を封む、青蘆白素をもつて兩端を裹んで縫ふことなし、尺一の板中皇帝と署す芝檢は紫芝を泥と爲す」、説文に檢は書の署なり、徐曰く「書函の蓋なり、三へに其の上を刻み、繩をもつて之を緘ず然して後填むるに泥を以て題書して之を印す」と。珠云く、「靈山付囑を忘れずじや、紫泥は紫でつゝんたこと、繪旨なり、芝檢は紫芝を泥と爲す。」

或抄に云く、「芝、此の方には任くると云ふくさなり、すつて粘じて用ふるなり、今芝粘を以て之に對する乎、又云く「檢は箱のふたの上、檢束の心箱へ入れて、其の上をからげる。」
 ③九重城裏。むかし陳搏、華山に居る、宋の太宗再び召す、辭して曰く、「九重の仙詔、丹鳳をして衛み來らしむることを休めよ、一片の野心己に白雲に留住せ被る」と云ふ、珠云く、「禁庭より勅使を立て、賜はりたる御宸翰係ない」と。九重は禁庭はここへの門あり之を云ふ。
 ④再雨露之恩。前に勅を奉じて育王に住す、故に再びと曰ふ三體詩經「聖代祗今多雨露」その注に「詩の蘆蕭の注に曰く、雨露は天の萬物を潤すところ、王者の恩澤に喩ふ。」

① 光法門之盛。光は大なり、闇は閉なり、珠云く、「盛とは勸請住持の故に、世出世の盛事を云ふ。」

② 聲前妙證。勸請を畏敬するが故に未だ讀まざる已前に羣心聳動す謂つべし聲前の妙證ありと、珠云く「まだよみはせれど、聲前の一句、玄妙の證據、群衆の心を驚動す、維那未だ勸請を宣讀せざる已前なり。」

③ 慘淡。感何なり、歐陽修の秋聲の賦に、「其の色慘淡として煙霏雲歛まる」とあり、今は山寺炊煙の幽微なるを表す、珠云く、「傷むことにも用ふ、盧同が月蝕の詩に、光彩未三餘來、慘淡一片白」と。色慘淡は氣色すみわたつてなり、煙霧の淡は山山の景色なり、諸山を望み見るに、どれはをろかはなし尋常ならぬ寺寺ばかり、或抄に、「列刹相望むの體。」秋の悲しいことにも用ふ、こゝでは煙のたなびいたとなり。」

④ 玲瓏。明なる貌。二句共に禪寺所見の物色を擧す、或抄に云く、「玉の聲、諸山の體なり。」

⑤ 面々斯觀。珠云く、「あなたを見こなたを見るに、」又云く、「山と山見合はせて、」或抄に「直に相見たやうなり。」

⑥ 千峯萬峯。列刹相望むなり、珠云く、「千峯萬峯相並んである諸山じや、龜奥不可測じや。」

⑦ 一團和氣。性理大全程明道の下に云く、「上蔡の謝氏が曰く、先生坐すること泥塑の人の如く、人々接するときは則ち渾べて是れ一團の和氣。」珠云く、「互に會合の交りの好いことは、或抄に云く、「諸山衆と虛堂と溫和にあしらふなり。」

⑧ 在其中。言ろは諸山列刹の中、渾一にして他心なし、互に相融和するなり、珠云く、「其の疏中にありじや。」

⑨ 以空爲座。法華の法師功德品に、如來座者、一切法空是」と。珠云く

心法は諸法空を以て、座と爲すの義。

⑩ 釋迦在前。「法空の座を歩するときは、則ち諸如來、實に其の前後に在るべし」と前漢は云へり、珠云く、「擧歩」は緣起法界じや、着語して云く、「空著礎石。」梵天璣の證道歌の注に云く、「念々釋迦出世備勸歩々下生、分別現ニ文殊之心、動用運ニ普賢之行。」

⑪ 中間底處。前後二佛の中間珠云く「虛堂はなんの法を説く。」

⑫ 驟步登座。自ら今日の教主に當る珠云く、「傳大士ならば大士講經善んぬと云ふべき、或抄に云く、「虛堂畢竟、釋迦蓮華にもはじからぬ一物あり。」

⑬ 天基永茂。理宗皇帝の生日を天基節と曰ふ、之に託して皇基の盤固運祥の永茂を祝す、珠云く、「彼若無窮の天の基本じや。」

⑭ 舜日長命。舜日長命は天子の徳を

てまつる。陛下恭み願はくば、天基永く茂し、

舜日長へに明かなり。載び周雅の詩を聯ひ

三たび華封の祝を聴し、ましまさんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に熱

向して、恭しく

中宮皇后聖躬萬福の爲にす。

此の一瓣の香は、恭しく

皇太子殿下の爲に、福壽を増崇したてまつ

る。

此の一瓣の香は、

太傅 宮師 樞使大丞相國公 大參相公

大參相公 樞密相公合朝文武 百僚の爲に、同

じく祿算を増し奉る、伏して願はくば

高く堯舜を扶け、下伊周に視へ、千載の雅

風を集めて、萬邦の春色を鎖したまはんこ

云ふ。載は恐らくは貳に作るべし。詩の大序に雅は正なりと、朱子の序に「若し夫れ雅頌の篇は則ち皆成周の世、朝廷郊廟樂歌の詞なり、其の語和にして莊に、其の義寛にして密なり、其の作者往往に聖人の徒なり、固に萬世の法程と爲して易ふべからざる所以の者なり。或成周正雅の治を復しつべし」となり。珠云く、「周雅はふるいしらべ、太平の訓なり。」

① 三聽華封。莊子の天地の篇に「堯華を觀る、華の封人の曰く、嗚呼聖人なり、請ふ聖人を祝せん、聖人をして壽からしめん、堯の曰く、辭す、聖人をして富ましめん、堯の曰く、辭す、聖人をして男子多からしめん、堯の曰く、辭す。」堯の辭する所の壽と富と多男子と三の者、願はく此の祝を

聽許し玉へ。

② 中宮。「皇帝の正嫡を皇后といふ、天子の配之を后といふ、后は君なり」と「白虎通に見ゆ。」

③ 皇太子。世子を稱する尊號、儲君を云ふ。

④ 太傅。日本でならば左大臣にあたる、賈似道を云ふ。

⑤ 宮師。未嘗、蓋し太師を謂ふか、東宮の太師か。

⑥ 樞使大丞相國公。日本の太政大臣、時にこの次の官は此の官人二人あり、故に之を言ふ

大參相公二名。

⑦ 大參相公。徐清叟を云ふ、相は輔相の義なり。

⑧ 大參相公。何夢然。

⑨ 樞密相公。馬光祖。

⑩ 百僚。珠云く、「つかへびと、官なり、ともがら、同官を尊と云ふ。」

⑪ 高扶堯舜。珠云く、「堯は皇帝

とを、此の一瓣の香は、判府安撫提領大卿都運殿撰大卿、泊び郡縣官僚の爲に、同じく祿算を増し奉る。

次に拈香し云く、「此れは是れ門司提舉太尉恭しく、

聖旨を奉つて、送つて寺に入れしめて、趙

州八十行脚の因縁を問ふ。用て祿算を賣く。

此の香、多くは是れ貴く買ふて賤く賣る、

南番の舶主に遇ふこと罕なり。今日人天普

く會す、敢て囊藏せず、爐中に熱向して、

前住安吉州道場山護聖萬歲禪寺先師蓮菴和尚

の爲に、用て法乳に酬い奉る。

師衣を飲めて、座に就いて、乃ち云く、「大覺

世尊、靈山會上に在つて、人天性命の道を

以て、國王大臣有力の檀那に付囑して、外護

流通して、斷絶せしむること母らしむ。今則

ち人天普く會して、祝

聖開堂す。此の旨を領得する者あること莫し

廢。時に僧あり問ふ、頂門に眼を具して乾坤

に耀く、聲價轟轟として四海聞く。丞相

面に

天子の間を承つて、九重より詔を飛して深雲

を出づ、祖道を中興すること、正に茲の時に

在り、一句機に投ず、願はくば、祝聖を聞

かん。師云く、「南山北闕に朝して、夜夜明

星を觀る。僧云く、「只だ一味無心の法を將

つて仰いで堯天舜日の明を祝す。師云く、「風

靜にして日月正しく、雪晴れて天地春なり。」

僧禮拜す。

師乃ち云く、「春湖山に入る。先放の花御苑を

に、舜は太子に、仁徳ある父子。

下祝伊周。祝は比なり、伊尹

と周公且とに、珠云く、「仁慈

忠節徳義ある二賢臣、萬民を

撫育す。」

千載之雅風。詩經の國風の注

に、「風は民俗歌謡の詩なり、

之を風と謂ふことは、其の上

の化を被むるを以て、言ふこ

とあり、而して其の言、又以

て人を感ずるに足れり、物は

風の動に因つて以て聲あるが

如くにして、其の聲又以て物

を動すに足る」と。千載已往

の雅正の風化を集大成せんこ

とを願ふなり。珠云く、「左あ

るときは上古三代の雅しき風

教を集め布き播して、自然に

民にならしめて」雅は正な

り、風雅と云ふは則ち六義あ

り、雅風と言ふは則ち正風な

り。

新聖に、左右監門下、唐凡そ

東宮の諸司、籍を以て宮殿に

入るべきものは、皆本司其の

官爵姓名を具して門司に送

る、之を會して同じければ則

ち聽入す、衛士長のやうなも

のか、太尉は武官の稱、提舉

は上に見ゆ。都知楊は後錄に

見ゆ。

送入寺。珠云く、「御門を送り

て寺に入れしむ。後錄の偈頌

に見ゆ。忠曰く、「日本でも大

徳、妙心、天使先づ進んで寺

に入り、新命を導引す、此れ

を送りて寺に入れしむと謂ふ

者なり。」

趙州八十。或抄に、虛堂八十、

萬邦之春色。鎖は或は鎖に作

る、管領の意なり、春色は温

和慈仁の徳儀を表す。珠云く

「いつがいつまでも、鎖しもら

さず」鎖は納むるの意春色と

は正月十六日の入寺なれば偈

か云ふ。

判府安撫提領太卿。臨安府劉

良貴太守なり、安撫は蓋し兵

馬を安鎮し、飢饉を撫育す。

提領は提舉なり。大輔は蓋し

管稱なり、提舉は米穀を司る。

都運は都轉運使なり。殿撰は

蓋し馬賢殿の修撰乎。右玉錄

にも見ゆ、都運は米穀を運轉

するを司る、大卿の人二人あ

り、重ねて擧ぐ。

郡縣官僚。郡奉行、町奉行な

り。

門司。楊都知なり、所領の官

一人にて三官を兼ぬるなり、

門司は天子の門司なり、事文

貴賤賤賤。珠云く、「身命を抛

つて買つて思はぬものどもに

おし賣りする。」或抄に云く、

「運卷下に於て千辛萬苦して、

拄杖頭拂子邊に勤勞して、之

を得る故に、賤賣とは二義門

に下りて垂手の故に。或抄に

云く、「うり手は運卷じや、智

音なきゆゑやすく賣る。」貴賤

は向上、賤賣は向下。

南番船主。一統志に「廣州府

に南海番通縣あり、人物富庶、

商賈阜いに通ず。」船は音白

鹽夷海に汎ぶ、舟を船と曰ふ、

海中の大船なり。言るは大船

に、主の良師に遇はざるが故

久年囊藏するなり。珠云く、

「よき買ひ手が来たたら、高

値にうらんと思へども、」又

- ① 會。音「くわい」とよむがよし。
- ② 不敢。珠云く、「堪忍袋の緒がきた、取りてはおかぬ」と。
- ③ 乃云。案話なり、釣語なり。
- ④ 性命。珠云く、「人々本具底。」或抄に「心の身體簡要。」
- ⑤ 有力。珠云く、「威力財力じや。」以上之因縁は育王の語録に見ゆると同じなり。龍溪云く、「今正法を以て王臣四衆に付囑すと云ふは、此れは是れ旁付、法官に在りて、能く人を治め法を護するを以てなり」と。
- ⑥ 今則。珠云く、「今はすなはち、」
- ⑦ 虛堂和尚が勅を受けて。
- ⑧ 會。「くわい」前に同じ。
- ⑨ 領得此旨。珠云く、「釋迦如來、國王大臣に付するの端をがてんするがあるならば、」人天性命をばじや」と或抄に云へり。
- ⑩ 頂門具眼。或抄に云く、「出陣の句に頷を呈したのじや。」頂門上に眼を

- 具して、四天下を照破す。
- ⑪ 聲價。或抄に「聲價は世に鳴ることじや。」龍溪云く、「この二句は師の德實嘉名、轟轟として群車の聲の如くなるを、嘆美するなり」と。
- ⑫ 聖相。天子。問は聘なり。珠云く、「楊都知が天子の虛堂八十住山の問を傳へ来るなり。」
- ⑬ 九重飛。公選の鄭重なることを述ぶ、深雲は山を謂ふ。珠云く、「飛詔は雲井を出でて淨慈へ入り来る。」深雲は天上春雲、これまでは頷にのべたるなり。
- ⑭ 中興祖道。珠云く、「津磨の大法を中興するは。」
- ⑮ 一句投機。忠曰く、「投機の二字二義兩點あり、機を投ず、謂ゆる學者の機を師家に投ずるなり大悟を投機と言ふ、亦これ機なり。機に投ず、師家學者の機に投ずるなり、今此の義を用ふ、謂ふ意は請ふ師一句學者の機に投ずべしとなり。」

- 凡そ問答往復を言ふなり。
- 珠云く、「投合なり、總じて禪門に生死の根元をきる人の論心を奪ふ底の機に投ず。三根機上中下根機なり、投は早なり、投合契投の義。
- ⑯ 南山朝北闕。南山は淨慈なり。
- ⑰ 夜觀明星。是れ觀聖の言なり、南山は淨慈、南屏山といふ、以て南極星の北辰に朝するに比す、論語の爲政に「政を爲るに德を以てすれば、譬へば北辰の其所に居て、衆星の之を共(むかふ)が如し」とあり。珠云く、「北闕は天子に朝するを云ふ、夜々は豊年の義なり觀三星」は君臣相合、清平の象。」或抄に云く、「北闕と北斗に比し、天子の事を云ふ、明星は北極星ながら明星を觀る、北斗は王者の位に比す、衆拱北は百官の朝宗に擬す。」
- ⑱ 只。托上なり。
- ⑲ 一味無心法。珠云く、「一心不亂の意、邪智なし。」又云く、「きたない

明かにす、人上國に歸す。南山の鶴青松に嘆る。皇都を壯にして人傑に地靈なり、紫府を窺ふときは洞天風月あり、聲を透り色を透り、類を絶し倫を離る。妨げず、手を垂れて廊に入るも、畢竟至化を逃れ難きことを且つ闕を望んで恩に酬いんとする如何なるか祝贊せん。「拂子を撃つて、」版圖遠奏堯天關萬物呈祥樂聖情。

① 復た擧す、本朝太宗皇帝、因に僧朝見す、帝、坐を賜ふ、問うて云く、「卿甚れの處よりか来る。」僧奏して云く、「廬山の臥雲庵。」帝云く、「雲の深き處に臥して天に朝せずと、甚に因つてか者裡に到る。」僧對なし。後來、雪竇の明覺大師、代つて云く、「至化を逃れ難し」と。師云く、明覺は固に是れ、食息にも忘れず、

- ① 風節日月正。珠云く、「太平の氣象。」又云く、「事では風、條(えだ)を鳴さず、理では八風寂靜じや。」或抄に「世淨く天子正しく。」
- ② 雪晴天地春。正月十六日入寺の故に、多く其の節に託す。或抄に「聖人か小人か春のけいきを。」或抄に「雪は小人に比す、春は天子の恩德に比す」と。
- ③ 春入湖。これは隔對の句なり。湖は西湖なり、淨慈寺のある處なり、杭州府の西湖は府城の西にあり、宋高宗已下皆杭州に都す。
- ④ 先放花御苑。あたかであるからに、今春信の早を以て吉慶と爲す、先放ははやさきに、二十四番の花の中で、先づ開く花なり、梅を百花の魁とす御苑は集芳御園、或は南園なり。

- ① 集芳御園。後に買平章に賜ふ内に假山洞あり、通じて湖濱に出づ、名づけて後樂園と曰ふ、蟠翠、雲香、翠峯、倚巖、拋雪、玉蕊、清勝あり、已上皆高宗の御題、亦集芳の舊物なり、西湖一曲、奇助理宗の御書云云。
- ② 人歸上國。人は師自ら謂ふ、上國は此の地、皇都の故なり。珠云く、「師來て上國の官寺に住す。」或抄に云く、「盛なるけしきを云へば。」
- ③ 南山鶴。南山淨慈の所有の物色、又延長を觀しつべし。珠云く、「此の度淨慈も虛堂來りて開堂すれば、鶴も龜も萬歳をととなふ、鶴は壽あり、以て祝語に入る。」或抄に云く、「句面祝語底の意、虛堂自らに比す。」
- ④ 壯泉都人。これは直對の句。

當時若し 臣僧に、雲の深き處に臥して天に朝せず、甚に因つてか者裏に到ると問ひたまはば但だ 鞠躬近前して、奏して云はん、請ふ陛下高く天鑑を垂れたまへと、皇情大いに悦ぶことを 管取せん。

當晚小參僧問ふ、佛法の混濫、今日より甚だしきはなし、正人一たび出づれば、天道還すことを好む。如何なるか是れ爲人底の句。師云く、劍は飯人の手に握る。僧云く、只だ徳山小參 答話せず、趙州小參 答話せんことを要すといふが如きんば、此の意如何。師云く、布袋鄭頭にして相似て重し。僧云く、學人今夜、小出大遇、師云く、備箇の甚麼をか得たる。僧使ち喝す、師云く、果然。僧禮拜す。

- ① 版圖遠奏。版は戶籍、圖は地圖なり、領地の義、人の地を説ふるものを聴くに、版圖を以て之を決す今遠方來歸の視を致す。珠云く、「四夷八蠻、國の圖をさしげ、幕下に屬し、帝都に朝す、遠奏は遠方より進め上り、圖は太平廣大の義。」版圖は四海來伏の體。
- ② 萬物呈祥。珠云く、「有情非情、祥瑞を上り、麗情は天子の御機嫌を榮ましむ。」情は音「ぜい」とよむがよし。
- ③ 太宗皇帝。北宋第二主、この縁は聯燈二十九、普燈二十二、並に收む、類聚第一にも用ず。
- ④ 朝見。參内なり。
- ⑤ 臥雲深處。これは所出を審にせざるも、古詩ならんか。珠云く、「層もない處、安逸であてはじや。」
- ⑥ 雪竇明覺。明州の雪竇山資聖寺に住す、諱は重顯、字は隱之、勅賜號は明覺大師、雲門派にして、この人は宋の太宗皇帝の太平興國五

王勃が滕王閣序にこの言あり珠云く、「いよ、勢がよくなる、たゞ皇都であるに、よきすぐれものがをるとなり。」
④ 窺紫府洞。紫府は神仙の所居なり、洞天は道士の遊ぶところ、禁闕を以て紫府洞天と作して、以て祝壽を致す。珠云く、「窺はうかひひらむ、尊むの意、紫府以て帝居を稱す、壺中の天地、人のしらぬ景色」人倫不到のうづだかい天子の仁徳をうかひひのぞむこと。
⑤ 透聲透色洞天の風月の故に聲色を透脱す。珠云く、「音聲を止め風の色を見徹する」と、これより虛堂の體なり、祖宗門下の受用。

⑥ 絶類離倫、人傑地靈の故に、類倫を超越す。韓文にも「絶類離倫、倫、侵入レ城」とあり珠云く、「絶は上下四維無等なり。」或抄に「上の人傑を受けてじや。」
⑦ 不妨。かまふことでないが、挨拶に云つたなり。
⑧ 垂手入鄧。珠云く、「虚堂は衆生の爲に方便とでかける。」
⑨ 畢竟至化。至化は皇化、此の二句、正に出世の本志に歸す言ふ意は好箇の時節、出來りて鄧中の佛事をすも、何ぞ妨げんと。畢竟至治の徳化を逃れ難きが故に、聖旨を奉じて特に此の地に住すとなり。珠云く、「畢竟君の風化太平の至化に依つて、是の如く法もおこなはる。」或抄に「隱逸至化とは外面に謂く雲に臥すも天に朝するも、進退出入都べて天子の徳化を蒙るに非ざることなし、實意に謂く、舉動進止、全く主人公の徳用を離れず。」と
⑩ 祝贊。祝は頌、贊は佐なり、頌なり。

年、日本の國體天皇元年三年に支那遂州に生る、宋の仁宗皇帝の皇祐四年、日本の後冷泉天皇永承七年に入寂せり。
① 至化。珠云く、「皇化を云ふ、率土の濱までも玉土にあらずと云ふことなし。」
② 明覺。珠云く、「虚堂和尚の意では雪竇は差別智を明し、法理を分つこと古人にも少れなり、との賞讃の意じや。」
③ 食息不忘。食息は頌古の跋に見えたり。念念相續不斷の義なり、珠云く、「大法を食息の間も忘れず、食ふもいきするも、法道一片、變色なき大治精金じや。」或抄に云く「飲食寢息で、寢食の義なり、外面には謂く、日用皇恩を忘れず實意には謂く、日用此の事を離れずじや。」或頭註には「終食の間出入息の間なり。」増註に「一呼一吸を一息と爲す」と。
④ 鞠躬近前。鞠躬は身を曲げるなり

身をかゝめて近く寄りて申し上げるなり。或抄には「鞠躬近前の端的、是れ何物ぞと眼を著けよ。」端的は見識とか理想とか着眼點とかなり。
⑤ 臣僧。虚堂自らを云ふ。
⑥ 高垂天鑑。珠云く、「何卒あなたの目がねを垂れさせられよ。」又云く、「かくちかより参つたは、なぜじやと御推察なしたされ」と。
⑦ 管取。珠云く、「俗語で領得の義、字書には未だ領得之義を見ず。」うけあらの意、又配するの義もあり。
⑧ 佛法混濫。邪師混雜して分たず、異說混雜して正しからず。珠云く、さまざまの風情をする禪僧が出て。
⑨ 正人一出。しかるべき人出づれば天も同心なり、こゝには虚堂を指す。
⑩ 天道好還。珠云く、「自然と天道は古風に還ることを好む、佛法の衰を引き還すことを云ふ。」

師、主丈を拈じて云く、「者裏使ち是れ妙高孤頂、何ぞ須いん、別峰に相見することぞ。」
 風、水冷冷、稍僧家、蹉眼せば得じ。若し江を隔て、手を招けば、使乃ち横に趨すと説かば、已に是れ他の影子に落つ、更に今夜答話不答話と云はゞ、漫天の網子、阿誰か知らざらん。既に知得分曉ならば、只だ都城に十二座の門あつて、朝従り暮に至るまで車馬驕闌として、衣冠の文物、出入間なきが如きんば、且く道へ、各各持する所の者何事ぞ。若し也た知得せば、今夜相見て、功浪りに施さず、其れ如し然らすんば、主丈を卓して、凌空の鐵塔鎮長に存す、夜深けて誰か聴く風甌の語ることぞ。」
 復た擧す、慈明因に、泉大道來り參す、明云

① 劍・擧人。前の賣林録にも見ゆ。珠云く、「殺活自在なり殺活時に臨んで、こつちの勝手次第。」
 又云く、「人の爲なら身命をすててかゝる飯入じや。」
 ② 不答話。いはぬと。
 ③ 要答話。さあさあ、問へ〜。
 ④ この二條共に報恩録結夏小參に見ゆ。
 ⑤ 布袋師頭。鄭は平なり。曰く「前も一斗入りの布袋、後も一斗入りの布袋。」又云く、「徳山趙州同じようなものさ。」相似重とは一分一厘違ひなく重いならばひき上げて見い。或抄に鄭頭は同じおもさのふくろ布袋頭の重きなり、一荷にかつぎても同じ重きもの」と。
 ⑥ 小川大遇。前の一の巻に出づ。

⑦ 偈得箇甚麼。偈得便と叫ぶが故に、珠云く、「其方になにをくれた、得たとはなんじや、或抄に、「どこだらうりに向つて得た。」
 ⑧ 僧使喝。所得底を喝出す。
 ⑨ 果然。珠云く、「そりや、みたか、云はぬことか。」
 ⑩ 僧禮拜。珠云く、「中々手ぎはのよいやつ、俊逸の漢じや。」
 ⑪ 者裏便是。これは碧岩の第二十三期にも、「保福長慶、遊山次、福以レ手指云、只道便是妙高頂、慶云、是則是」とあり。珠云く、「者裏とはこゝがとりもなほさず、別峰相見もいらぬ、個中正の假語門の死にたはこと、妙高孤頂とは大毒海言語道斷能見所見を斷じた妙高孤頂佛祖もつに見たことない、菩薩の願心あつても、こゝに居れば、聲聞の裏窟じや」と。又云く、「貴い

處で恐るべき處じや」とは、或抄に「今様にいへば、宇宙の實體とか神の姿とかの意に用ふ」華嚴經入法界品から出てゐる、華嚴の入法界品に、善財童子と云ふ一學生が、文殊の指圖によつて、徳雲比丘といふ佛教のものしりを尋ねて、妙峰山の頂に登つたと云ふ譬喩話がある、これ華嚴の入法界品を一讀すべしといつてゐる。
 ② 別峰相見。珠云く、「別別の智」龍溪云く、「今は常盤現前の眞際を示す。」或抄に云く、「直下に此の處にて相見。」珠又云く、「百轉頭上差別の上に徳雲比丘を見た、遍一切處の徳雲比丘じや、眞實背觸が手に入つたら別峰相見がとつくり有りがたうなる」と。
 ③ 風颯々。亦颯々に作る。珠云く、「たゞなにとなく風はどう〜。」或抄に「直示現成なり、直相見底を再擧す、好箇の妙峯頂。」
 ④ 水冷冷。指して常盤現前の證と爲

す水がひや〜流るゝことなり。
 ⑤ 蹉眼不得。蹉は過なり、言ふは眼目定動せば、即ち不會得。珠云く、「蹉眼はまた〜き、不得いひちがふ見そこなふなり。」
 ⑥ 隔江招手。高亭の縁、報恩録の退院に見ゆ。珠云く、「隔江招手、此のやうなちよるいことを、横趣は高亭が徳山に出合ふて早や合點。」或抄に云く、「頓機靈利、一見便見の義。」
 ⑦ 已是影子。縱ひ是の如くわづかに見て便ち悟り去るも、猶ほ是れ他の影響を見得ずとなり。珠云く、「かげばらしをかついでありく。」
 ⑧ 徳山招くところの扇子の影。
 ⑨ 答話不答話。珠云く、「趙州と徳山答話は妙高孤頂も別峯も皆ここに有る。」
 ⑩ 漫天網子。老子經に「天網恢恢にして失はず。」珠云く、「けやぶつて出るやつがあるかと張つた。」又云く、「いかな〜、佛祖と云へども

出ることならぬ、あみよ。」趙州徳山の手段は網を張る、學者にひつかけんとした。
 ⑪ 阿誰不知。それほどの事は誰も知つたとなり。溪云く、「二大老漫水の網を張りて、學人を籠罩す各所レ知。」珠云く、「身ぬけのならぬこと、いづれも知つてをらぬことじや。」漫は遍なり、あまねし、或抄に云く、「盡天下の人をあみの中に入れることは」と。
 ⑫ 既知得分曉。珠云く、「漫天の朝子を合點いつたならば、既に知得はあみがはづれたかなり、分曉ははづれまうしたなり。」或抄に「上件の様子をよくがつてんしてあらば。」
 ⑬ 都城十二座門。都城は杭州府の古蹟に、宋の大内は鳳凰山の東に在り、高宗南渡州の治を以て行宮と爲す、皇城を増築す、十二門は面に三門、四面に十二門、座は箇なり、十二箇なり。

く、片雲谷口に横ふ、遊人何れの處よりか来る。泉云く、「夜來何れの處の火ぞ、古人の墳を焼き出す。」明云く、「未だ、更に道へ。」

泉、慈明を推倒す、明、亦虎聲を作す。泉、退身して笑つて云く、「我れ、七十餘員の善知識に參す、惟だ師のみ、以て臨濟の正宗を繼ぎ得べし。」と師云く、「叢林の中、往往に道ふ慈明當時、未後に更に一喝を與へば、泉大道をして、立地の處なからしめんと、是は則ち是、殊に知らず、際天の洪濤あつて、以て吞舟の魚を容るべきことを。」夜深久立。」

結夏小參、竺土の大仙、九夏の月に於て、漫天の網子を布いて、天下の衲僧を籠絡す。之を禁足護生、尅期取證と謂ふ。南山の内堂外

車馬群聞。群驛なり、園は香田盛なる貌、車馬往來絶えず。珠云く、「朝から晩まで車馬ぐらりぐらり。」群園とてひきちぎらず、これはにぎはふところ云ふ。

衣冠支物。珠云く、「公卿大夫諸官、人皆文華のれきく。」出入無間。珠云く、「ではいりひききりなしじや。」所持者何事。所持は即ち人人本具底の事。珠云く、「操持、もつてをるもの。是れがき、虚堂どうともかうとも。」

知得今夜。或抄に云く、「知得は我れに知得相見は虚堂」と。功不浪施。虚堂爲人の垂手なり。

渡空欄塔。外面、六和塔に託す。珠云く、「空を渡いでつゝ山が見えたら見えべいじや、鐘長存とは昔しからまめでを

いやる。」山云く、「淨慧の法堂の傍に下重の塔ありて、無は爲無事、閑なる體なり。」夜深誰聽。珠云く、「ものさびわたつた、風騒は風鈴の聲、さりとは、閑せいにあまつた人の語るに似たり。」

慈明。楚圓、汾陽昭に嗣ぐ。大道。谷泉、汾陽に嗣ぐ、南嶽芭蕉庵に住す、法中で強たかな衲子、慈明の師弟なり。

片雲横谷口。來參路なし」と。龍溪は六へり、珠云く、「凡そ佛祖も脚を挿むところ雲でたち切つた。」把住なり。

遊人何處來。珠云く、「名のれきかんと、呼ばはつた。」大把住なり。

夜來何處火。火は野火なり。珠云く、「くらやみゆゑ、どこからともわかたぬ火が、ひよつくり出てまゐつた。」

燒出人墳。椽柴を焼き盡して

古墳を露出するなり。自然現成し來るの意なり、珠云く、「やきはらつて死人をやり出した、片雲谷口に横ふとは、死人の居處平大いにあてたな。」或抄に云く、「いづくの火やら、墳の邊を掩ふたものを燒きはらふた程に、墳がきらりと露出した、把住綿密にせらるれども縫罫が見た」となり。

未だ更道。珠云く、「まだくさうでない、どこからじや、さあ云へ。」便作虎聲。珠云く、「うふ〜とじや、威を現してじや。」打一坐具。珠云く、「うぬはよい年かけて居てと、打つこと一坐具す」或抄に云く、「猛虎の勢を一刀兩斷す、猛虎の活處をはたらいた。」推倒慈明。珠云く、「泉、青龍に騎つたが、やせがれの和上を力にまかせて。」明亦作虎聲。珠云く、「こゝじや〜と、虎聲を作す。」龍溪云く、

雙放雙收、主と作り伴と作る。」退身。珠云く、「甲を脱ぎすて、あとへさつて。」

七十餘員。珠云く、「あれやこれやと參じて見しが。」臨濟正宗。讚嘆するに分あり、珠云く、「あぶなげもない、おれのとこの骨腸も大慶じや。」

立地處。珠云く、「をりどころ、足の指きどころはあるまい」と。

殊不知。珠云く、「とんと御不案内御存じない事、火鷲のふるまふ、鳥雀の評判するやうなもの。」

際天之洪濤。珠云く、「際天は天にわたる、高き浪を言はんと欲するなり、慈明波瀾廣大なことは外ではしらぬ、慈明の廣大の禪機を云ふ、洪濤は慈明の言句を云ふ。」

吞舟之魚。泉老の竿魚を入れた、龍溪云く、「慈明にして乃ち泉大道を接すべく、彼の尋常汗漬、豈に吞舟の魚を容れんや、寶主相應何の議すべきことかあらん」となり、

吞舟魚の故事は莊子七庚桑楚篇に出づ。

夜深久立。小參の禮話。

竺土大仙。佛を稱す、石頭の參同契に、竺土の大僊心、東西密相付すと、梵語は天然此には月といふ謂ふ、佛日既に没して諸聖の法教月の如しと、般若論に云く、「聲聞菩薩も亦仙と名づく、佛、中に於て最尊上の故に、已に一切波羅密多、功德善根彼岸あり、故に大僊と名づく。」事苑二に詳なり。

漫天網子。珠云く、「禁足期證の接心だのと、かごの中へ追ひ込む。」南山内堂。南山は淨慧なり、堂中僧多きゆゑ、外に前堂のかけだしをする。

排單下榻。珠云く、「排は排別、榻は坐禪榻長連床などの類、行狀に詔して淨慧に住せしむ、衲子奔集堂單以て容るゝことなし、半は堂外に居る」とあり。忠曰く、「名を以て單片紙に書す、故に單と言ふな

堂に於て、^①單を排し榻を下して、^②筒箇生鐵
 概の如くなることを致す。^③期滿するに推得せ
 ば、各人箇の^④禪鈔子、これを以て賞勞に憑
 らんことを要す。然りと雖も忽ち若し^⑤箇の網
 を漏る、底あつて、未だ^⑥制を立てざる已前に
 向つて、^⑦山邊水邊、東を説き西を語つて、暮
 然として^⑧蹊口に爺の名を道著せば、又作麼
 生。^⑨急急に出で來つて、^⑩一轉語を下せ。拄
 杖を卓して云く、「^⑪收功較易、^⑫補過
 較難。」

復た擧す。^⑬雪峯、^⑭衆を領じて、浮江に到つ
 て、乃ち問うて云く、^⑮二百の僧を寄せて夏を
 過さしめんと欲す。得てんや否や。「浮江拄杖を
 以て、^⑯畫一畫して云く、「著不得。」師云く、
 「奸峭互に陳べて、^⑰對面千里、人あつて僧を寄

り、僧堂の單は紅紙小片に各
 位の名を書し、一紙一名、各
 位の床上の壁の外面に貼す、
 又僧床前の板を單と云ふ、所
 謂九尺單前、謂ふ意は床後よ
 り前に至る六尺、更に單板一
 尺を加ふるなり、今已に排と
 いふときは、則ち單に名づく
 而已。
^①筒箇生鐵。沒巴鼻の定相を
 表す。珠云く、「吾梁を壓起し
 て勤むる坐禪の形相。」
^②推得期滿。推は音運、延推と
 私に延は及なり、到及を云ふ
 きたりきはむなり、至り得て
 あらばなり。
^③禪鈔子。禪苑の語柄、鈔録し
 來る底の策子なり、臨濟の所
 謂大策子上に死老漢の語を抄
 すと云ふが如し、今は夏中、
 工夫するところの提撕するこ
 ころの公案を謂ふ、珠云く、
 「お示しをねがふな」と、
 鈔は策子なり、學者が學得す
 る語言を記して持つたり、こ
 の解非なり、忠曰く、「古今鈔
 子の字を解することを得ず、
 故に強ひて枉解を作す、語脈
 に背むくことを覺えず、大れ
 學得底の語を鈔録して、夏滿
 して師家に證明を得んと要す
 蒙味の愚漢と雖も、此の模様
 あるべからず。況んや復内外
 の堂、専ら禪坐を修して、生
 鐵概の如きもの、何の暇あつ
 てか學得の語言を鈔録する耶
 故に此の解、甚だ語脈を得ず
^④以て賞勞。是れ常式なり、珠
 云く、「軍中などにもあること
 じや。」或抄に「^⑤言詮の證據に
 せんと思ふ。」或抄に「やくに
 たつことはあるまじい、去り
 ながら。」
^⑥筒箇網底。禁網を守らざる底
 の大根の漢なり、網をけやぶ
 り、規則に拘はざるを云ふ。

① 立制。九十日の制限。
 ② 山邊水邊。酒々落々の活納僧、便
 に從つて横説豎説す、珠云く、「明
 師に踏んづ蹴られつゝ、これで命
 根がきれる、どん底がぬける。」
 ③ 躋口。珠云く、「ひよつと、口がす
 べつて、口を失するの義なりとあ
 り。」
 ④ 道著。道名。道の名は那一人なり、
 臨濟の所謂備紙一箇の父母あつて
 更に何物をか求めん、爾自ら返照
 して看よと是なり、道著は悟處な
 り、珠云く、「諺に觸れたならば」
 と。
 ⑤ 急急出來。道の名を道著する底の
 者あらば。
 ⑥ 下一轉語。上の二人の境界なり、
 一轉語を下すことなればねば、其
 のとがで尅期修證は用いたまはず。
 ⑦ 收功較易。功課を收む、願境界の
 故なり、珠云く、「手柄高名を擧ぐ
 ることはやすい、」又云く、「一旦踏
 み込むことになりやすい。」或抄に

云く、「^①規矩を守るものを云ふ、排
 單下榻を修練する底。」
^②浦過較難。過非を補ふは邊境な
 り、珠云く、「見そこなひ、しそこ
 なひを取りつくらうことはむづか
 しい。」又云く、「^③悟後千銀百鍊、養
 ひそだつることはかたい、」或抄に
 云く、「^④漏網底、大用現前、規則を
 存せざる如くに規矩に拘はらざる
 ものを云ふ、如來の禁網を漏せて
 夏制をも守らず、彌天の罪過補ひ
 難し、此れ本色の衲僧快活の手脚
 なり。」
^⑤雪峯。名は義存、徳山に嗣ぐ、雲
 門の師なり、雪峯山は福州の附近
 にあり、雪峯は唐の穆宗の長慶二
 年、日本の嵯峨天皇の弘仁十三年
 に、支那福建の泉州に生れ、唐の
 哀帝天祐五年、後梁の太祖開平二
 年、日本の醍醐天皇延喜八年に入
 寂す。
^⑥領衆到浮江。雪峯の會下は常に一
 千五百と云ふ、中の二百を領して、
 浮江は夔州の浮江和尚長安火安に
 嗣ぐ、五燈會元本傳之を收む、珠
 云く、「浮江は雪峯の法孫、此の因
 縁で見れば、油斷のならぬ浮江じ
 や。」類聚十四にも出づ。
^⑦寄二百僧。或抄に云く、「^⑧底意は二
 百僧を置いたほど胸中のひろきか
 と試むるなり。」過夏は夏をわたら
 せてたまはらんか。
^⑨畫一畫云。或抄に云く、「^⑩雪峯の賦
 意は中々許さぬぞと、畫して鎖斷
 した、著不得はその衆を我が道に
 著ることはならぬと把住しつめた
 一箇もおくことはならずと把住す
 畫するはずつきりと罷りならぬ。」
 珠云く、「^⑪おこうと云ふたら峰がお
 と、ひまみらうと云ふて、いのら
 に浮江が仕合に、此のようちなこ
 とを云ふた。」
^⑫奸峭互陳。雪峯奸犯を要す、浮江
 は直に峭密、共に不知音の故に對
 面すと雖も千里を隔つるなり、忠
 曰く、「^⑬雪峯磁物を用ひて、他人の

せて夏を過さしめば、^①南山大いに東閣を開か
ん。何が故ぞ、^②彼此出家兒。」

屋裏に寄せんと欲するが如し
是れ奸邪賊意、浮江は暗峻
急なり、正字通に曰く、「姦は

奸と通ず音韻行義に合はざる
を姦と曰ふ、又暗音愔念なり
と嚴厲なり、珠云く、「奸は雪

峰すなほにない、暗は(浮江)峯峻
あぶない。對面千里そりがあはん」
或抄に云く、「こちからは使さんと
し、あちからはおかさされずとす。」
對面千里、各自に封疆を守り、放
開の手なし、二人ながら不放行な
り。
①南山大開東閣。珠云く、「南山は淨
慈寺開ニ東閣は客寮をたてゝもて

なさう、延接すべきなり、或抄に云
く、「虚堂の全樓廣大、善く含容す
る底、開ニ東閣、は戸を開いて宿を
かさんとたり、排闥九に、公孫弘が
傳に「數年にして宰相封侯に至る
是に於て客館を起し、東閣を開い
て以て賢人を延ぐ、師古曰く、「開
は小門なり、「東向、之を開く、當
庭の門を避けて賓客を引く、以て

據史官屬を別つなり」と。
②彼此出家兒。珠云く、「此れが云ひ
たいばかり、前ことを百もぶふ
ておいて皆の出家たちおれも同じ
如來の御弟子でないかと、こりや
どうじや、」或抄に云く、「かれもこ
れもみな佛法中の人、なんの拒む
ことなし、眼を着けてみよ、與奪
の義あり。」

淨慈寺語錄終

臨安府徑山興聖萬壽禪寺語錄

參學 惟份 文愷 編

師、咸淳元年八月二十五日、辰初に於
て進寺。

山門を指して、此の山路なし、門に及ぶも
のは誰ぞ。會得せば、手を擺つて同じく歸れ
然らずんば、我れに隨ひ來れ。」

佛殿、釋迦室を摩竭に掩ふ、甚に因つてか者
裏に坐す。炷拜、勤渠、之を齊しうす
るに禮を以てす。」

方丈、虎頭燕頰、烏背魚頭、盡く者裏
に向つて歎を納る。「且く道へ、者裏是れ甚麼
の所在ぞ。」拄杖を卓す。」

①徑山。一統志に「杭州府徑山
は天目の東北にあたる、路あ
つて天目に通ずべし、故に徑
山と名づく、五峰周抱、奇勝
特異、唐の時吳郡の僧法欽(唐
の代宗、號を國一と賜ふ)、此
に至つて庵を結ぶ、後師あり
告げて曰く、「此れ神龍の據る
所、願はくば住すること無け
んことを、」欽聽かず、忽に素
衣の老人あり、前に拜して曰
く、「我れは龍なり、師此に至
るより、吾が類安んぜず、願
はくば讀りて錫卓するの所と
爲さん。」欽靈難あり、嘗て法
會に隨ふ、今靈難存す焉、」
名藍圖に、「臨安府徑山興聖萬

壽禪寺或は楓場と曰ふ、又雙
徑と曰ふ、開山は國一、天下
徑山(總門)、清涼法海(山門)、
龍井(一穴)、龍潭室(方丈)、楞
伽室、御愛峰、靈雞塚、萬年
正續院(無準塔)、五峰、基盤
石、福池、喝石岩、凌霄閣、
凌霄峰(主山)、含輝亭、五鬢
峰、不動軒、不動巖、淨髮閣
流止亭、鉢盂峰等の境致あり」
又後錄に大覺寮、千僧閣あり
行狀に泉雲亭、天澤庵あり。
支那五山第一。
②惟份。份は彬に同じ、後錄の
偈頌に「寄三通彬侍者一の頌」
あり。
③文愷。偈頌の部に、「愷藏主號

三・庚・一・頌あり。
 ③成淳元年。南宋度宗の年號、元年は乙丑、日本の龜山天皇文永二年に當る、師年八十一。
 ④辰初。忠曰く、「晝夜十二時の一時を八刻有奇に分つ、今は辰の初刻なり、上刻なり。」
 ⑤此山無路。路あり、通ずべし、故に徑山と名づく、今翻轉して本地の孤山を的示す、珠云く、「しかも天日へも通ひ路があるに、或抄に云く、「本分の家山、路の入るべきなし、邊過するに路なし。」此の境界を會得したらば入るに及ばぬ、此の山は雙徑山に當つて。
 ⑥及門者誰。珠云く、「及は至なり、天下徑山と顔をばうつたればなり
 ⑦會得攝手。或抄に「汝等若し會得せば、門に入り來りて虛堂に參するに勞せず、須らく同じく歸り去るべし、然らずんば入り來れ、汝が爲に接待せん、」又の義に云く、「汝等若し會得せば、虛堂と其の趣

を同じうす、然らずんば同行に非ず、我が後に隨ひ來れ。」不然とは或抄に云く、「無路の門を透る底のものあらばなり、さもなくば、」云く、「會得攝手とは大に眼を着けよ臂をふつてと、同じく是れからかへれなり、然らずんばとは不會なり、其の上を用ひた、」珠云く、「虛堂、おれがしつばについてこい、しようことがない。」
 ⑧掩室於摩竭。報恩錄に見ゆ、或抄に「蓋し指す所あり、門を出てきていは困甚じや、」
 ⑨坐在。或抄に「出頭し來る。」
 ⑩柱拜。柱は香「しゆ」ともいふてよし、柱香展拜なり、或抄に云く、托けて人情に隨ふ故に、」又云く、汝こゝに居らうとをるまいと管せざじや、」
 ⑪動渠。勤動渠渠なり、渠も亦動なり、敬飲の至りなり、請問動渠といふこと、普燈錄六祖の章に出づ。
 ⑫齊之以禮。論語の爲政篇に出づる

語なり、或抄に云く、「摩竭と耆裏と齊一にして、隔禮なからしめて之を禮するなり、」珠云く、「禮儀をなされば心ばかりでは誠がとよのはん、身心ともにこぼさこや、眞實でない。」
 ⑬虎頭鳥驚。後漢の班超字は仲升相者あり、曰く、虎頭燕頰、肉を食ふは萬里侯の相なり、明章の兩朝に出でて西域を征す、五十餘國を安集す。定遠侯に封ぜらる鳥驚魚頰は共に靈利なる學人の畫相を表す、越王句踐此の相ありと云ふ、珠云く、「虎頭燕頰は僧僧の奇相、叢林のあふれもの、」或抄に「川格の異相、おそるべき學者の畫相を云ふ。」
 ⑭畫向耆裏。珠云く、「虛堂、法窟の爪牙に入つた故に、頭を下げさせ自然をして見解を早せしむ、なにとぞ命は御助け下され」と。
 ⑮是甚所在。珠云く、「まあ、此の虛堂が處は、どう云ふ處であらうぞ、」

勅黃、退欄するに意あり、耕牧するに心なし。

九重より勅を降す、萬國の春の回るが如し

一道の恩光、千日の並び照すに似たり。

門煥を騰げ、巖壑秋を生ず。

府の疏、日出でて作き、日入つて息ふ、

照熙然として春臺に登るが如し。且く道へ、

誰が恩力をか承く。」疏を拈起して云く、「聴

け。」

諸山の疏、山を出で、見、戸に入つて知る。

雞鳳巢に棲む。隣壁の輝、何ぞ必ずしも

區區として、伊を點綴せん。」

山門の疏、勤儉して家を起す、叢林の麟鳳

門に入つて一見すれば、和氣掬しつべし。

知心は頻に叮囑するに在らず。」

或抄に「なんの子細じや。」

退欄。靜退の謂なり欄圍は牛馬を繋ぐの處堅居なり、皆自身に比す。

耕牧。出世の謂なり、皆自己の水牯牛に託して佛事を作す或抄に説法爲人底を云ふ、それには心なしと云ふ、世間へ出る心はないぞと。

九重降勅。しかるに九重より徑山へ出でてと繪旨を下されたにより。

萬國春回。盤居を出でて秋風に沐するなり、和氣熙然たり。

一道恩光。透空一道の恩光一道は一筋なり、天子御恩に入り渡つて。

法門騰煥。珠云く、「帝王の息がかゝつた故、一入法門はひかりをあげて。」

巖壑生秋。禮記に「夢秋至つて」と云ふ、注に「凡そ物熟するを以て秋となす」と。珠云

く、「岩壑たにあひの佛法まで大法の業實が成熟する」と、龍溪云く、「勅黃の恩に依つて法門煥を騰げ、山林巖壑までも佛法成熟することを得るなり、」或抄に云く、「岩谷に引込み居る虛堂も、萬事成熟するなり。」

府疏。臨安府の牧主よりの請疏なり。

日出而作。太平の時節、事事追切せず、この語は延福錄にも見ゆ。珠云く、「府主の仁政徳化にあづかるともしらずに暮すを云ふ。」或抄に云く、「上古無爲無事の體。」

照熙然春。熙熙は和樂の貌、老子經の絕學無憂の章に、「衆人熙々として太宰を享くるが如く、」春の臺に登るが如し。」

珠云く、「なにも心にかゝることなく、民人和悦の謂なり。」

承誰恩力。衆人此の如く無爲

法座、諸佛出世、祖師西來、總に者の座子を離るゝこと得ず、若し信得及せば、各自に散じ去れ。然らずんば、更に登ること一遍して、諸人に供養せん。」

師、陸座拈香して云く、「此の香、爐中に熱向して、恭しく爲に
今上皇帝の聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭み願はくば、金輪統御、三代の淳風を躰み、寶曆祥を開いて、萬年の景運を享けましまさんことを。」
次に拈じて云く、「此の香、爐中に熱向して、恭しく、
皇太后の爲に、上聖壽を資けたてまつる。恭み願はくば、
天下の母儀として、生靈を子とし育す、

安樂、誰が致す所ぞや、須らく知るべし、府主の徳化なることを、この太平のたのしみは、
拈起疏云、府主の徳化、分明に聴取せよと、珠云く、「おれも知らぬが、今聞いて讀むぞ、さあ皆のものもきけ、」又云く、「天子の恩、脱體現成してゐるか聴たか。」
出山而見、其の境を見る。珠云く、「山を出ればまじかく見えわたるで、諸山の住持各各山を出でて虚堂を見る。」或抄に云く、「諸山の人が山を出て望めば、徑山並にその餘の諸山見ゆ、徑山の人も山を出づれば諸山を望み見る、此れ諸山列利、互に相望むの體を謂ふ。」
入戸而知、其の人を知る、夫れ知見此の如くなることは刹刹相望むが故なり、珠云く、

「又徑山の戸に入りて能く我れ虚堂を知る。」或抄に云く、「今日開堂の故に、諸山の衆徑山の戸に入りて未だ虚堂が生涯を知らざるなり。」知の字は下にかゝる、
繼接鳳巢。雞を以て自らに比す、鳳巢を諸山に比す、言ふ意は其同類と爲り難しなり、珠云く、「虚堂がやうな雞のやうなものが徑山と云ふ、鳳巢のやうな處へ諸山の吹嘘に依つて来た。」或抄に云く、「虚堂自ら謙退して云ふなり。」
蘭麝之輝。漢の匡衡、字は稚圭家貧にして、學を好み、常に隣壁を鑿つて光を引いて書を読む、延初三年相に拜せらる、珠云く、「盡く諸山の光輝を假る。」或抄に云く、「吾が徳なうしてすむゆゑに、諸山の御蔭じや」と、餘光をかりてなり。

區區點綴伊。區區は分別工夫を謂ふ、伊を點綴すとは疏文を裁成するを謂ふ、言ふ意は諸山の下風餘光自然に衣被す、何ぞ用ひし特に疏を製することを、珠云く、「伊は疏を指す、虚堂自らを稱す、粧點補綴せん。」或抄に云く、「區區はこそく」とする義、ちくくとした義、又區區はつとむなり、つとめて隣壁の衆疏をかくに及ばざるにかゝれた」となり、或抄に云く「疏までも及ばぬとなり、吾れは隣峰の威光を借りて住持するほどに何ぞ煩しく疏を書せん。」
勤儉起家。公務に勤勞し、己身を儉約して家門を興起することは、兩序の職分なり、珠云く、「身を費めて吾が家の宗旨を扶起す、」或抄に云く、「山門衆僧に當て、云ふ、精勤儉約にして此の寺をそだて、自己が事はけんやくに。」
叢林颯風。直に其の皆英靈たることを稱美す。

入門一見。兩序の役僧たち、門に相迎ふるが故に、珠云く、「佛界魔界を透過して。」
和氣可掬。掬は撮なり、和氣前に滿つたり、珠云く、「其の氣まへのうつくしさ。」或抄に「掬は手にとるやうな」と。
知心頻叮嚀。面友は或は疏語に憑らん、夫れ知心の人は目撃して遺存す矣、豈に叮嚀に在らん、珠云く、「格別の知心に至りては、なんのかのと疏狀等に及んだことではない。」或抄に「知心は知音なり、言葉を以て委囑することではない互に通じた疏のうちにはない。」
諸佛出世。珠云く、「釋尊の鹿苑にせよ、祇園にせよ。」
祖師西來。珠云く、「達磨の十萬里を歴て、梁武の朝にもせよ。」
總者座子。座に托して本地を示す珠云く、「總には虚堂が即今徑山に住持をするもじや、諸法虚空座面前了了。」或抄に云く、「外面は佛

祖の説法の時、必ず座に昇るが故なり、底意は指す所あり、衆生化度利益の爲め。」
若信得及。珠云く、「此の端的を信得及せば」と。
更登一遍。法供養なり、珠云く、「さうなくんば虚堂が此の座に登り、一説法して聞かさう、口に食ふばかりが供養ではない、耳目にききこんで味ふて見よ、」或抄に云く、「無位の法施をば供養するに、座子をはなれざる底の一句をいふ。」
金輪。寶林録の臘八に見ゆ、統は總御なり、願會に、天子の止まる所を之を御と謂ふ、前を御前と曰ふ、書を御書と曰ふ、服を御服と曰ふ、皆四海を統御するの義に取る。珠云く、「分國の帝王でなく、一天四海をしるめす金輪天子。」
三代之淳風。夏殷周の三代、淳厚の風化を躰む(つぐ)なり。
寶曆開祥。咸淳は度宗昨年即位せ

社稷の功を扶持し、^①聖明の化を毘贊したまは
んことを。此の香、爐中に熱向して恭しく、
今上と^②皇后との^③兩宮の天眷の爲にす。
恭み願はくば、
萬年の松壽、千歳の鶴齡、道、
明君を賛け、^④功、
帝業を資けたまはんことを。

此の香、爐中に熱向して、
太傅大丞相樞使國公、^⑤大參相公、^⑥大參相公
樞密相公、^⑦合朝文武、^⑧百僚の爲に、同じく祿
算を増し奉る。伏して願はくば、
德四海を安んじ、^⑨威三邊を肅ましめたまは
んことを。

此の香、爐中に熱向して、
判府安撫提領大監侍郎、^⑩都運敷文提領侍郎

郡縣官僚の爲に、同じく祿算を資け奉る。伏し
て願はくば、
清朝に股肱とし、黎庶に^⑪稔籥たらんことを。
此の香、

前住安吉州道場山護聖萬歲禪寺先師運菴和尚の
爲に、用て^⑫法乳に酬い奉る。
師、衣を斂めて座に就いて、乃ち云く、^⑬絃
を動すれば曲を別つて、^⑭落葉秋を知る。是
れ^⑮禘子^⑯有ることを知る邊の事なり、^⑰甚に因
つてか^⑱黃河北に向つてか流る、^⑲會得せば^⑳物
理^㉑疏通せん。然らずんば、^㉒疑^㉓あらば^㉔請問せ
よ。時に僧あり、出でて問ふ、「^㉕金雞^㉖曉を唱
へ、^㉗玉鳳花を^㉘啣む、^㉙一句機に^㉚投ず、^㉛請ふ師
祝^㉜

聖」答へて曰く、「^㉝洞底の青松に^㉞茯苓あり。僧

られた建元故に。之を祝した
てまつる、今年に改元したる
なり、^①珠云く、「^②度宗皇帝は諱
は禛、^③榮王與芮の子なり、理
宗の姪なり、初め忠王に封ぜ
らる、理宗子なし、立て、皇
太子と爲る、在位七年、壽三十
五にして崩す。
④萬年之景運。日景の運度、珠
云く、「^⑤宇業に景は大なり、大
なる運度を受くるなり、享は
受くるなり。」
⑥皇太后。理宗の皇后、謝氏な
り、忠曰く、「^⑦按ずるに謝皇后
咸淳三年に太皇太后と爲る、今
咸淳元年に皇太后と稱するは
國人の通稱に依る乎。」^⑧嚴原よ
みは、「^⑨くわらだいこう」といふ
母儀天下。儀は儀法なり、の
り手本なり、天下に母たるの
のりを施し玉ふ。
⑩子育生靈。萬民百姓を子の如
くに育つる。

られた建元故に。之を祝した
てまつる、今年に改元したる
なり、^①珠云く、「^②度宗皇帝は諱
は禛、^③榮王與芮の子なり、理
宗の姪なり、初め忠王に封ぜ
らる、理宗子なし、立て、皇
太子と爲る、在位七年、壽三十
五にして崩す。
④萬年之景運。日景の運度、珠
云く、「^⑤宇業に景は大なり、大
なる運度を受くるなり、享は
受くるなり。」
⑥皇太后。理宗の皇后、謝氏な
り、忠曰く、「^⑦按ずるに謝皇后
咸淳三年に太皇太后と爲る、今
咸淳元年に皇太后と稱するは
國人の通稱に依る乎。」^⑧嚴原よ
みは、「^⑨くわらだいこう」といふ
母儀天下。儀は儀法なり、の
り手本なり、天下に母たるの
のりを施し玉ふ。
⑩子育生靈。萬民百姓を子の如
くに育つる。

て至尊と稱す。眷は屬なり故
に天眷と稱す、天子の外戚方
④萬年松壽。萬年の如く、千歳
の如く。
⑤功。つとめ。
⑥太傅大丞相。買似道なり、太
傅は日本の太政大臣に相當す
⑦大參相公。賴鐵に曰く、「この
年二月姚希得を參知政事とす
同五月、江萬里を參知政事と
す。」日本の參議なり。
⑧樞密相公。馬光祖なり、「忠曰
く、「^⑨王楙なり、宋元通鑑百一
に曰く、「^⑩咸淳元年二月壬戌王
楙を以て食書樞密院事とす。」
⑨德安四海。珠云く、「^⑩天子の德
は仁心なり、五倫五常を堅持
する徳なり、文徳なり、「^⑪四海
は九夷、八狄、七戎、六蠻之
を四海といふ」と爾雅六にあ
り、上に在りて道徳を持すれ
ば則ち自然に四海を有つ。
⑩威肅三邊。三邊は三垂ともい

ふ、四方南方東方なり、説文
には垂は遠邊なり、四海九州
の意、肅は敬畏せしむるなり、
をさむるなり、しづめるなり、
武威を云ふ。
⑪判府安撫。判府は臨安府の大
守なり、安撫は日本の按察使
提領は藏人、大監侍郎は兵庫
頭、圖書の文庫を奉行するな
り、安撫提領は劉良賞が經る
所の官なり。
⑫都運敷文。都運は日本の太宰
帥、敷文は史生、兵食の奉行
なり、兼學士なり、又撰御書
なり、吳勢と云ふ人、この役
に當る、淨慈録にも見ゆ。
⑬股肱清朝。珠云く、「^⑭股肱は動
用の干要なり、「^⑮天子の股肱ど
もなり、清朝の御代に。
⑭稔籥黎庶。老子の天地不仁の
章に、「^⑮天地の同其れ猶ほ稔籥
屈せず、動いて愈々出づ、」

社稷之功。宗廟社稷は天下の
機務なり、忠曰く、「^①社稷を祭
るは天下の要務なり、故に天
下を治むるを泛く社稷と曰ふ
なり、今皇太后内に在つて天
下を治むるの功勳を扶翼する
なり、「^②百虎通一に曰く、「^③稷は
五穀の長、故に稷に封じて之
を祭るなり」とあり。天下の事
を略して社稷と云ふ」と或抄
に見ゆ、「^④又云く、「^⑤社は土地神
稷は五穀の神」と。
⑥聖明文化。毘は輔なり、賛は
佐なり、珠云く、「^⑦無私の聖明
の風化をたすく。」
⑧今上。度宗なり。
⑨皇后。妃全氏は咸淳三年正月
癸卯冊命、爲二皇后」と宋史本
紀にあり、このときは未だ妃
なり、しかれども尊んで皇后
と祝壽するかと、忠と珠兩師
の抄に見ゆ。
⑩兩宮天眷。天は至高無上、以

られた建元故に。之を祝した
てまつる、今年に改元したる
なり、^①珠云く、「^②度宗皇帝は諱
は禛、^③榮王與芮の子なり、理
宗の姪なり、初め忠王に封ぜ
らる、理宗子なし、立て、皇
太子と爲る、在位七年、壽三十
五にして崩す。
④萬年之景運。日景の運度、珠
云く、「^⑤宇業に景は大なり、大
なる運度を受くるなり、享は
受くるなり。」
⑥皇太后。理宗の皇后、謝氏な
り、忠曰く、「^⑦按ずるに謝皇后
咸淳三年に太皇太后と爲る、今
咸淳元年に皇太后と稱するは
國人の通稱に依る乎。」^⑧嚴原よ
みは、「^⑨くわらだいこう」といふ
母儀天下。儀は儀法なり、の
り手本なり、天下に母たるの
のりを施し玉ふ。
⑩子育生靈。萬民百姓を子の如
くに育つる。

て至尊と稱す。眷は屬なり故
に天眷と稱す、天子の外戚方
④萬年松壽。萬年の如く、千歳
の如く。
⑤功。つとめ。
⑥太傅大丞相。買似道なり、太
傅は日本の太政大臣に相當す
⑦大參相公。賴鐵に曰く、「この
年二月姚希得を參知政事とす
同五月、江萬里を參知政事と
す。」日本の參議なり。
⑧樞密相公。馬光祖なり、「忠曰
く、「^⑨王楙なり、宋元通鑑百一
に曰く、「^⑩咸淳元年二月壬戌王
楙を以て食書樞密院事とす。」
⑨德安四海。珠云く、「^⑩天子の德
は仁心なり、五倫五常を堅持
する徳なり、文徳なり、「^⑪四海
は九夷、八狄、七戎、六蠻之
を四海といふ」と爾雅六にあ
り、上に在りて道徳を持すれ
ば則ち自然に四海を有つ。
⑩威肅三邊。三邊は三垂ともい

ふ、四方南方東方なり、説文
には垂は遠邊なり、四海九州
の意、肅は敬畏せしむるなり、
をさむるなり、しづめるなり、
武威を云ふ。
⑪判府安撫。判府は臨安府の大
守なり、安撫は日本の按察使
提領は藏人、大監侍郎は兵庫
頭、圖書の文庫を奉行するな
り、安撫提領は劉良賞が經る
所の官なり。
⑫都運敷文。都運は日本の太宰
帥、敷文は史生、兵食の奉行
なり、兼學士なり、又撰御書
なり、吳勢と云ふ人、この役
に當る、淨慈録にも見ゆ。
⑬股肱清朝。珠云く、「^⑭股肱は動
用の干要なり、「^⑮天子の股肱ど
もなり、清朝の御代に。
⑭稔籥黎庶。老子の天地不仁の
章に、「^⑮天地の同其れ猶ほ稔籥
屈せず、動いて愈々出づ、」

曰く、「是の如くんば則ち九州四海、雷の如くに動じ、風のごとくに馳せん。」答へて曰く、「巢は風を知り、穴は雨を知る。」僧曰く、「如何なるか是れ。」第一句。答へて曰く、「却つて是れ第二句。」僧曰く、「如何なるか是れ第一句。」答へて曰く、「須彌山。」僧曰く、「恁麼ならば則ち葵心日に向つて傾く。」答へて曰く、「恩を知る人得難し。」僧問ふ、「太宗皇帝、因に僧朝見す僧奏して曰く、「陛下還つて記得すや否や」と。此の意如何。」答へて曰く、「經を將つて寺裏に彈す。」僧問ふ、「帝の曰く、「何れの處にか相見し來る。」僧曰く、「靈山にたび別れて自從り、直に如今に至る」と、還つて端的なりや也た無や。」答へて曰く、「來風鑑つべし。」僧問ふ、「帝の曰く、「何を以てか驗と爲ん」と、僧無語、又作麼

註に「箭は葉の管なり、葉箭は用て風生ず、其の體虛なりと雖も、之を用ふるに屈せず、動ずときは則ち風生ず、愈々出づれば愈あり、葉民庶物を生化せんことを願ふなり。葉は假治屋のふいごなり、箭はふいごの中の吹き革なり、葉は民の總名なり、たくやくとなりは、廣く民を惠めかしとなり、珠云く、「萬民無爲の化育を蒙り。」

⑦法乳恩。珠云く、「世間では母の乳血養育、出世間では師家の捧喝、職掌これを法乳の恩に酬ゆと云ふ。」

⑧乃云。案話なり。

⑨動絃別曲。伯牙絃かに絃を動ずれば、期便ち曲を別つ、事は報恩録に見ゆ、珠云く、「琴絃を動ずれば、歌曲の別調を分つ、絃をばちんとすると、此れは何の曲じや、何の歌じ

やと見わけ、又云く、「拂を擧ぐれば火吹き竹なることを知る、目を解けは勝粉木なることを知る、又取り違へまいぞ、歌に云く、「勝り粉木と火吹き竹をば取り違へ、吹くに吹かれず勝るにすられず、知音底の出合なり。師家の爲人底なり。」

⑩落葉知秋。一葉落ちて天下の秋を知る、上と共に頓機獲利此の句兼ねて入時の時景を序す、鶴林(白隱)大師云く、「おれはこよみで知る」と頓機擧着すれば落處を知ると語語なり。

⑪是箇衲子。珠云く、「ぶしやうもの骨をらぬやつはくやしくおもへ。」

⑫知有邊事。頓境界、珠云く、「知る輩のものがたり。」

⑬因甚。珠云く、「なんじや、あれは禹王去つたゆゑと、阿呵

箭新羅を過ぐ。

①黃河向北。邊境界。河源は崑崙積石より發して、漸くにして、中國に入り、九千餘里を経て北海に入る、禹貢の注、并に一統志外夷西蕃の崑崙山黃河の注に見ゆ、定水の波なり、活境界なり。

②物理疏通。逆順等に礙塞せられず珠云く、「合點したならば祖師門下の事を豎から横から見抜いたやつ印をおしてやる。」頓境共に會得せばとなり。

③石疑請問。珠云く、「死何れの處に去る、是れいくまい、南泉庭前の一株花、これいくまい。」

④金雞唱曉。辰の初刻、入寺の故に珠云く、「天上に金雞星あり、今日出世開堂、一切が夢をさます。」

⑤玉鳳啣花。この二句は報恩の入寺に見ゆ、珠云く、「まことに未曾不思議なり、鳳は瑞鳥、何ぞ止だ百鳥啣むのみならん、日出度き御出世。」

①一句投機。珠云く、「師家學者の機に投ず。」

②潤底青松。爾雅翼に云く、「松栢の脂地に入りて千歲茯苓と化す、珠云く、「潤底はおいせぬきみ、人に具足じや、青松と古今四時、ついに風一つひいたことない、日出度いことが。」祝語なり、天子萬年の祝詞なり。

③雷動風馳。祝盤是の如く、則ち天下速に德化に赴かんとなり、珠云く、「萬里衲僧を走らしむ、九州四海と天子の號令なり。」

④果知風穴。各各自ら盛徳の變化を知る、事は寶林錄にも見ゆ、珠云く、「およく知つた、へびの道は蛇がしると云ふ、或抄に、「己が分量を知り、格外の處を知らず、抄とは異なり。」

⑤第一句。或抄に云く、「首句に涉らず、聲前の那一句なり、臨濟の三句と別なり、自己分上に付つて問ふ。」

⑥却是第二句。此の句の上に第一句を答へ得るなり、珠云く、「はや第二に落つ。」

⑦須彌山。珠云く、「そんならば、日と山とは天子を取るなり、衆山の王なり、備が攀緣の所なしじや。」珠又云く、「これが合點が入つたら第一句が合點行かう、直に第一句を示す。」

⑧契心向日傾。物々全眞の義なり、珠云く、「格外の衲僧、やれ標山徑山と走り着く義でござらう、あふひのはなの心は日光にむかつてかたむく、日車ともいふ、或抄に云く、「自己分上にあるかとなり。」歸仰の義、承當底なり、天子に對して忠を存する義なり、日は天子、契は忠臣に取るなり。

⑨知恩人難得。自ら知を守るが故に珠云く、「寄り傍ふ人はあつても、眞實恩を知る人は千萬にもない、或抄に云く、「須彌山と云ふ處に恩あり、然るにじや。」

生。答へて曰く、「生鐵の秤鏡、蟲に蛀まる。」
僧曰く、「只だ今日の如きんば、祝聖開堂、何の
祥瑞かある。」答へて曰く、「秋花眼を照して明
かなり。」僧曰く、「泉聲中夜の後、山色夕陽の
時。」答へて曰く、「錯つて定盤星を認む。」僧禮
拜す。

師 乃ち云く、「時康く道泰に天清み地寧し。
一人端拱して無爲なれば、萬物各其の所
を得。」巖間の野客までに、悉く皇恩を荷ふて
太平の歌を唱へ、村田樂を和す。何ぞ必ずし
も、麟麒麟を現じ、鳳凰來儀するのみならん
但だ類はくば、帝道平平として、自然に風
物楚楚たらんことを。且つ恩を知つて恩を報ず
るの一句作麼生。」拄杖を卓して云く、「妙唱以
資天子壽。」爐煙爲瑞國風清。」

復た擧す。本朝の太宗皇帝、因に大相國寺
に入つて、僧の看經するを見て、問うて曰く、
「卿、甚麼の經をか看す。」對へて曰く、「仁王
護國經。」帝の曰く、「既にはれ寡人が經、甚に因
つてか卿が手裏に在る。」僧鞠躬退身して對へ
ず、雪竇曰く、「皇天親なし、惟れ德是れ輔く。」
師云く、「太宗、古鑑高く懸く、私として燭さ
ずといふことなし。者の僧鞠躬して對へず、
經旨歴然たり。雪竇道く、皇天親なし、惟れ德
是れ輔くと、又作麼生。」拄杖を卓して、「四海
盡く皇化の裡に歸す、三邊誰か敢て封疆
を犯さん。」
當晚小參、僧問ふ、「言言言、飄風灑雪、
默默默、雷轟轟、電掣く、藕絲孔裏、大鵬に
騎つて、等閑に拈し落す天邊の月、未審し

太宗皇帝。この因縁は育王緣
に見ゆ。
將經寺裏彈。香を弾じて授く
るなり、水を撥つて河頭に賣
るの類なり、珠云く、「經は寺
裏にあるものに舌を弾して
誦するなり、無用處なり。」或
抄に云く、「靈山の付嘴があれ
ば、陛下もと御迦摩裡の人
なるに、還つて得ずやと問
ふたならば、雪上に霜を加ふ
るやうな無用處じや。」
靈山一別。語、人を驚かす手
どうだか。
來風可憐。僧の來語の機勘破
すべし、珠云く、「此の僧の云
ふ口先き、とつくに見て取り
てをる、能く勘辨してみよ、
此の僧徳の語話、其の來機
早く鑑知すべし。」或抄に云く
たしかにさういふか、此の僧
の來機は鑑みつきことじや
ほどに。

いか、或抄に「錯つて答話を
認むることなかれ、定盤星はは
かりの目なり。」
乃云。提綱なり。
時康道泰。張羅古が大寶箴に
「天之經地之寧、王之貞」とあ
り、珠云く、時康は時世民和
樂、道泰は王道寛大にしてな
り、所謂天下太平。
一人端拱。一人は君を謂ふ、
端拱は端坐拱手、穆々として
南面するのみ、育王緣に見ゆ。
萬物其所。共に安寧の義、民
禽獸に至るまでも。
巖間野客。隱遁者までも、山
林のなり、その内に虛堂も。
唱太平歌。目出たの若松
さまよ、よおい、よいやな
はれはいなと、興聖錄の除夜
に見ゆ、和調「さまようた」。
麒麟現瑞。これも興聖の入寺
縁に見ゆ、吉祥ばかりではな
い、一切舍生、和樂せぬはな

生鐵秤鏡。蛀は香註、木を食
むの蟲なり、茲は龍頭蛇尾の
意なり、珠云く、「結好な道具
に蟲が入つた、蟲蛀は抑下。
秋花照眼明。現成直示、八月
を以て入寺すればなり、珠云
く、「其の祥瑞が知りたいが、
目には一ぱい、耳に一ぱい、
ぎら／＼あるは。」或抄に「秋
の最中、これほどな祥瑞があ
るか」となり。
泉聲中夜。虛堂和尚の徳を讃
し、答話の嗜好を嘆ず、この
後には淨慈後録にも出づ。或
抄に「這の僧別に又祥瑞を呈
して、師の答話を拈ふたのじ
や。」或抄に云く、「泉聲は中夜
の後、あかつきごろ、此の時
分が、別して泉の聲が面白い
ぞ。」
錯認定盤星。答話の奇を嘆ず
る故に抑逼す、珠云く、「世間
云ひならはしのお定りではな

何人か此の機用を得たる。○「答へて曰く、」頭の
長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ、相對して無言
獨足にして立つ。○「僧曰く、」恁麼ならば則ち九重
城裏、大に芳猷を播す。○「答へて曰く、」也たこ
れ、波斯、鬧市に入る。○「僧曰く、」王常侍、臨濟
を訪ふて僧堂に遊ぶ次で曰く、この一堂の僧、
還つて看經すや否や。○「僧曰く、」看經せず」と、
此の意如何。○「答へて曰く、」酒は知己に逢ふて
飲む、常侍曰く、還つて看經すや否や。○「僧曰
く、」習禪せず」と、又作麼生。○「答へて曰く、」乾
坤を撥亂して、太平を致す。○「僧曰く、」常侍言く
「既に看經せず、又習禪せず、畢竟箇の甚麼をか
作す、」僧曰く、總に伊をして成佛作祖し去ら
しむ、此の意如何。○「答へて曰く、」臨濟老兒の
性命、常侍が手裏に落在す。○「僧曰く、」今夜

● 靈燄爲瑞。説香の靈燄、瑞氣
となつて國風清寧なり、珠云
く、「四海九州の風俗、清寧な
り、國へ大きな報恩なり」と。
● 太宗皇帝。諱は吳、太祖の弟
太平興國元年即位す、日本の
圓融天皇貞元元年に當る、北
宋第二主。
● 大相國寺。大明一統志に、「開
封府の相國寺は府城内東南の
隅にあり、北齊天保の間に魏
建道宋初め此の地に都す。
● 仁王護國經。姚秦鳩摩羅什と
唐の不空と異譯同本二卷あり
珠云く、「これは童子坊主では
ない、この對はなか」と。
● 鞠躬退身。珠云く、「此の僧あ
ぢをやつた。鞠躬は恐る體を
なす。
● 皇天無親。珠云く、「皇天には
疎親はないと、雪竇の代別な
り。或抄に云く、「皇天は太宗
に比し、高天とみよ、對し得

てあらば、皇天は私親なし、
惟れ德是れ輔けて、此の經只
だ受用し得る底のものは、其
の手裡に歸す、珠云く、「德あ
る底のものをたすける、龍溪
云く、「拈の意味ふべし、此の
落句をばじや、」語錄は育玉に
見ゆ。
● 古鑑高懸。古鑑は本覺の智照
珠云く、「日輪當午の如くじや
或抄に「明眼の天子じや、天
鑑無私。」
● 無私不燭。私は陰僻の地を謂
ふ、公界を燭すこと知るべし
或抄に云く、「太宗、智識明徹
の故に、微細なるところまで
も意を付けて、既に是れ寡人
の經等と抄せられた、好一抄
ぞと云ふ義なり。」
● 經旨歷然。仁王は乃ち般若部
なり、無説を以て眞説と爲す
今不對の處、此の經の旨要明
歷然たり、者の僧を扶けて云

ふ、珠云く、「仁王經の意旨見事な
り、歷々とあらはるるなり。」
● 卓拄杖云。或抄に云く、「手裡に歸
する底の一着」と。
● 靈歸皇化裡。或抄に「不苔の處皇
化をたすく、太宗の底意は主人公
の心じや、」これば祝語なり。
● 三邊誰取。此の兩句を以て雪竇の
意を會すべし、蓋し皇天より德を
輔く、故に其の化此の如く遍し之
を以て林下も亦之を被らしむるに
分あるなり、珠云く、「幽井涼の三
邊じや、天子の居所をのけて三邊
の夷じや、しかしどこに敵國があ
らうぞ」と。
● 言言言兮。言處は却つて色なく聲
なし。珠云く、「言言言は横説堅説
大と説き小と説く、」風風酒雪は逸
堂云く、「沒蹤跡」或抄に云く、「語
默の上に於て大活自在を言言言と
いふ、説の時、默の義、爾雅に飄
は回風なり、つじがせ、酒はきよ
むるなり、酒雪はみぞれなり。」

● 默默默兮。默處は却つて聲あり、
色あり、語默不二、無礙自在の境
界、永嘉の所謂默時の説、説時の
默、大施門開無礙塞の意なり、或
抄に云く、「默の時説の義。」
● 藕絲孔裏。珠云く、「此の如く妙用
を以て」と。或抄に云く、「自由自在
を得、大小の上か、はらぬを云ふ
禪話なり、衲僧の活機用上の句を
受く、禪話なり。」
● 閑院落。珠云く、「無造作に妙用
を働く、」按はうつなり、龍溪云く
「大小一致、神用活脱の境界。」偈を
以て出陣す、一二句は八言、此の
格多し。
● 何人得此機用。或抄に「底意は虛
堂をさす、此の大機大用を得たる」
● 頭長六々。那一人を指出す、碧巖
五十九問の頌なり、この頭長きは
趙州が百二十歳まで生きた、福祿
壽の先達じや、これば誰じやと云
へば趙州じや、長頭は長命なり、こ
まるで福祿壽の立像じやもの、こ

ちらが何を云ふてもあまり不得要
領である、丸で無言同様、つくね
んとして起立して居ると云ふこと
獨足立ば「ひとりそくりつ」とよむ
べし、足立は竦立の意で、ぬつく
と立つて、立姿を形容したものだ
り、珠云く、「是れ何ぞ、是れ本来
の面目。」或抄に云く、「此の人こそ
此の機用を得るなり、畢竟虛堂自
らに比し、自負するなり。」
● 大播芳猷。杭都に於て大道を播揚
すればなり、猷は道なり、珠云く
「和尚の道徳はびこりませう。」文
選に美稱なりと、畢竟大道を云ふ。
● 波斯入鬧市。外夷なり、此には大
秦と云ふ、(頌古の部に詳なり)此
の僧人の語言を通曉せず、外夷の
中國の鬧市に入るに似たり、珠云
く、「方語東西を辨ぜず、又落處を
知らず、又分曉なし、」又云く、「誰
もきよてがない、今は僧の承當の
處を抑下するなり、らぬがやうな
やつは、祖師門下のものがたりは

忽ち箇の衲僧あつて、出で來つて、捉敗了也と道は、又作麼生。答へて曰く、「備、常侍を捉敗するか、臨濟を捉敗するか。」僧曰く、「總に不恁麼。」答へて曰く、「畢竟作麼生。」僧便ら喝す、答へて曰く、「甜瓜、苦葫蘆を生じ得たり。」僧曰く、「天目の近きに因らざるは、那ぞ斗牛の寒じきを覺えん。」答へて曰く、「切に思む、亂りに針錐することを。」僧禮拜す。師乃ち云く、「五峯孤峭に、萬壑雲寒し、人佛祖の恩を報せんことを懷ひ、箇箇龍蛇を辨するの眼を具す。全寶全主、全放全收、威音那畔に向つて、別に生涯を立し、空劫已前に於て、自己を突出す。日機鉢兩、舉一明三、化儀に涉らず、如何が相見せん。」主丈を卓して、白鳥望中に没し、青山

むだごとじや波斯の人のやうに言葉も通ぜぬに何を云ふとなり。」
 ①不看經。珠云く、「千鈞の弩手。」
 ②酒逢知己。珠云く、「臨濟がここへがほ、よき知音に出合ふた、一つささうと蓋をもつた勢じや、浪注に云く、「常侍は這中の人なる故に、此の答へあり。」
 ③還習禪否。珠云く、「箇已離レ弦、無三返回勢、臨濟のとやめをささんとかうつたところが、臨濟は習學悟證せずやつた。」
 ④撥亂乾坤。撥亂の二字、共に治むと訓ず、無修無住なれば胸界直下に安平なり、珠云く「看經習禪は太平を得たさのこと。」又云く、「臨濟の胸中看經にも習禪にもかかはりはせぬ、天下太平、をさまり切つ

てをる。」或抄に云く、「若し習禪せば、是れ干戈を動するなり、今習禪せざるの故に」と、忠曰く、「公羊傳廿八に亂れたる世を撥め諸れを正に反へず春秋より近きは莫しと、註に撥はなほ治の如しとなり、撥は絶なり、除なり、亂は治なり、理なり。」
 ⑤總伊成佛作祖。珠云く、「好い答話、身をすばめて切りこませる。」又云く、「勝負が付かぬこゑ、關門を開けて切り込め切り込め」と。
 ⑥臨濟老兒。珠云く、「臨濟はさすがの老武者なれども、性命は(のどくび)こゝに至つて此の世あの世の界じや、或抄に云く、「兒は翁ほ子のごとし、男子の通稱なり、又云く、「去死十分なり、殺活まゝないのちと云ふ心ばかりなり。」性命とは或抄に性根をひきしめら

るると臨濟を抑下す。」
 ⑤常侍手裏。常侍に抄倒せられて把住することを得ざればなり。珠云く、「あぶない處じや、常侍の了簡一つでいかさうとさうさう。」と
 ⑥捉敗了也。珠云く、「狼藉ものをくみとめた」となり、又云く、「奇異の者を云ふ」と、或抄に云く、「好箇の老賊をとらへた」となり、賊は虚堂を指す、虚堂の性命、某が手裡に落在す、之を虚堂の性命を捉敗すと云ふなり。
 ⑦捉敗常侍。或抄に云く、「此れは虚堂そらとぼけぶりて、我が身の上をうけはづして、ちよつと常侍と臨濟とにゆづつた。」
 ⑧捉敗臨濟。或抄に云く、「勘辨の手を下す」と。
 ⑨總不恁麼。和尚とは云はずして。僧便喝。或抄に云く、「捉敗をとり出す、捉敗の機用なり、此の僧作家なり、上にて捉敗了より此のた互に敗の事に付いてばかり商量

して、休す期なき程に、一喝して賊の寤寤をずんど截つてはなした命剛王寶劍の喝なり。」
 ⑩甜瓜。葫蘆。前味已に失するの義今同意、相續せざる故に、珠云く、にがしいせつかくあまい瓜を喰はんと思ふて作れば、案外のまぢがひ。或抄に云く、「甘い瓜かと思ふたれば、存じの外苦いやつじや」となり、證明の句なり。新抄の義は非なり。
 ⑪不因天目近。徑山は即ち天目の東北の峰なり、天目に近き徑山へ上らずばとなり。
 ⑫覺斗牛寒。この山絶高の故に、星漢の寒きを覺ゆるに堪へたり、託して以て虚堂和尚の高邁を嘆ず、斗牛は北斗、七星九星の義、或抄に云く、「本分向上の處を得難しとなり、斗牛も手にとるやうに覺ゆる、虚堂の答話の向上を云ふなり切忌亂針。人を喝喚すること莫れの類なり、僧の讚嘆を容れず、珠

云く、「くそてんごうしをつても亂針錐で、好肉上に痔を刺るまいぞ。」或抄には「病をもみず、みだりに。」
 ⑬五峰孤峭。當山の境を擧す、五峰峰といふあり、向上の峻峻にたとへる、珠云く、「此の徑山は五峰高くとりかこんで、谷には雲がたなびいて、おくふかく見ることならぬものすごい。」又云く、「虚堂、鳥居を立てて飛べよ越せよはせむる、こゝを越したやつは天下第一人じや。」
 ⑭萬壑雲寒。或抄に「把住綿密、この二句は地盤を叙す。」
 ⑮人々佛祖。珠云く、「四弘の誓願にむち打ちてじや、」又云く、「虚堂會下のものうつかりとならぬ。」
 ⑯箇々。人々なり、みなくを云ふ。
 ⑰辨龍蛇眼。龍蛇は擇法眼で、この二句は人傑を云ふ。
 ⑱全寶全主。この二句も對機を謂ふ、尖れ一寶一主、一放一收、機に臨んで缺くることなし、皆全と曰ふ

斷處に幽なり。」

復た擧す、當山の國一禪師、因に馬祖、僧をして書を馳せて至らしむ。書中に「圓相を作す國師、絨を啓いて之を見て、遂に圓相の中に於て、一點を著けて封回す。師云く、「可惜許當時只だ好し。案上に留在して、日炙り風吹くに一任するに、唯だ馬祖の舌頭を坐斷するのみに非ず、亦天下の衲僧をして、摸索の處なからしめん。事既に往んぬ矣、還つて國師の爲に、拔本する底あり麼」といつて、主丈を卓す。

上堂、山高うして水深く、雲閑にして風靜なり。佛法至妙、妙は中和に在り、中和は則ち且く置く、賓主歴然、又作麼生、主丈を卓して、薪を拾ひ洞を汲んで茶を煎る外、杖に

珠云く、「實は總に賓、主は總に主、互塵光を生じ、眞金色を失するじや、或抄に云く、「虚堂と大衆となり」と。
威音那那。或抄に、「以下は衲僧の行履を言ふ、威音は本分の家體なり、珠云く、「威音那那とはどこじや、鼻のさき舌のさき」。
別立生涯。珠云く、「佛祖の間でもない。或抄に、「手立てをするなり」。
空劫已前。珠云く、「正中偈なり、威音那那よりさき其のさき」。
突川自己。此の二句、操履を謂ふ、皆實際に立存するなり。珠云く、「背觸の中から面目どのをつきだす」。
日機鉢雨。機は會なり、十鉢を鉢と爲す、十鉢を分と爲す十分を兩と爲す。珠云く、「ちらりと見て、文目をちがへぬ

なり、或抄に云く、「機は動の微なり、ちらりとみるとは、輕重を知る俗利の漢を云ふ」と、或近代抄に云く、「鉢雨を日機すと讀むべし、鉢雨の二字で、一分一厘ほど極少量の重量、日機は目分量で、その重量を推定すること」。
舉一明三。これは近代鈔に云く、「一をあげて三をあきらかにすと調じてよい、徳利を持つて来いと云はれて、蓋も御馳走も持つてゆくといふやうな氣轉利きたる類なり」。龍溪云く、「此の二句は頓機靈利今は作家の相見を表す」。
不涉化儀。化儀は建化門の儀式なり。珠云く、「本地のまゝ、如來の儀式にもよらず、祖師の分皮分髓にもよらず、世諦の上の建立の邊のじや」。
如何相見。此の二句は本分の相見を要す、珠云く、「まつか

う是の如きとき、どうみなと出合ふたものぞ。」

白鳥塚中。水邊なり、珠云く、「白鶴(さき)が飛んでも雪のやうなとみる中に、どこかへ行つた、又云く、「虚堂何の爲にこんなことを云ふた、境を以て云ふた乎、惡水窟頭にそゞぐ、徑山より遠く見わたす境致なり」。

青山斷處。山邊なり、珠云く、「この二句は現量の性境化儀に涉らず日本でならば比叡山、愛宕山、ながめ見るところに甚深の意味がある、或抄に云く、「今時の上に就いて、直に威音那那化儀に涉らざる底を示す」又云く、「相見脱迹を止めず、是れ衲僧の境界なり」。

國一禪師。開山道欽は牛頭下の鶴林玄素に嗣法し、唐の代宗、號を國一と賜ふ、傳燈の本傳此の縁を取む、禪師は蘇州の崑山の人、姓は朱氏、年二十八にして出家し、玄素の弟子となる、唐の大曆三年

代宗詔して閣下に至らしむ、親しく瞻禮を加ふ、後特に國一と賜ふ、貞元八年十二月(日本の桓武天皇延暦十一年)寂す、壽七十有九、數して證して大覺禪師と曰ふ、鳥窠道林の師で、法系は。

四祖道信一牛頭法融一牛頭智岩一牛頭慧方一牛頭法持一牛頭智威一鶴林玄素一徑山道欽一鳥窠道林、國一の入寂は臨済の入寂より六十二年前なり。

是圓相中。或抄に云く、「馬祖の意はたとひ三世諸佛、歴代の列祖も馬祖圓相の圓圖を出づること能はざるなり、國一一點を着くるは馬祖の圓相是れ甚慶の閑消息の直下坐斷して出頭に路なからしむるなり」。

封回。圓相を封破す。
可惜許。をしむべきかなじや、まだなかの意なり。
留在案上。机の上のうちすてゝをいて。

一任。日灸風吹。珠云く日があたらうが風が吹かうがほこりがかゝろうがそこにあるともせず、見向きもせずんば。

非唯坐斷馬祖舌頭。他の來書虚説と作る故に。
無機索處。珠云く、「とりつきやらももがきやうもあるまいものを」。

事既往。論語に云く、「既に往をば咎めず、珠云く、「くやんでもせんないが」。
拔本底。本利を拔得するものありや、珠云く、「後ち過たことではあれども國師の爲めに「本手をとりに回へす」者があるう乎、拔本は「もとを取かへす」の意なり。或抄に「かたうとするありや、拔本は郷談俗語也、買人得利の謂ひ也」。

山高水深雲閑風靜。現成法爾珠云く、「山高は妙峰孤頂じや、佛魔も窺ふこと能はず、水深は法性海中じや」。
妙在中和。本分の中和じや。珠云

倚つて閑に雲の去留するを看る。」

兩班を謝する上堂、擧す。石頭、衆に示して

云く、「言語動用、交渉没し。」薬山云く、「言

語動用に非ざる、亦交渉没し。」頭云く、「我が

這裏は、針割不入。」山云く、「我が這裏は、石上

に花を栽うるが如し。」師云く、「智師と齊しき

ときは、師に半徳を減す、智、師に過ぎて、

方に傳授するに堪へたり。且つ、中に於て優劣

の處、還つて人の緇素得出するあり麼」とい

つて、主丈を卓す。

開爐上堂、擧す、百丈因に瀉山、深夜に侍立す

丈云く、「看よ、爐中火ありや否や。」瀉之を撥つ

て云く、「無し。」丈、躬ら之を撥つて、小火を得

て云く、「爾無しと道ふ、是れ甚麼ぞ。」瀉山、當

下に悟り去る。師云く、「洞房花燭夜、金榜

挂名時。是れ則ち一時の快意、當時若し、馬祖に再參する底を用ひば、瀉山の門戸、未だ寂寥に至らず。」

上堂、擧す、仰山、瀉山に在つて、牧牛、時に

踢天の泰上座、問うて云く、「百億毛頭、百

億の獅子現するとき作麼生。」仰答へず、歸つ

て瀉山に侍立する次で、忽ち泰上座來る。仰云

く、「適來百億毛頭の百億の獅子を問ふ、豈に是

れ上座にあらずや。」泰云く、「是。」仰云く、「

正當現する時、毛前に現するか毛後に現する

か。」泰云く、「現する時、前後あることを説か

ず。」仰山、拂袖して便ち出づ。瀉山云く、「

師子腰折れ了れり也。」師云く、「仰山、祇だ瀉

山の證明せんことを要す、自ら謂へり、暗地

裡に便宜を得と。泰上座當時、他の毛前に現す

く、「其妙處は懸倫の中に在り

それならば孔子さまの執事に

でもなれよう乎、」中和は儒道

の中庸に曰く、中は天下の大

本也、和は天下の達道也と今

は中道實相をいふと、龍溪は

いへり、中は一概未發、和は

一概已發なり。

實主歴然。即今目前、實あり、

主あり、自ら分明也、珠云く、

「臨濟が實主歴然と云ふたが、

これがいけない、根本差別が

分明ならぬ。」

參巖波瀾。珠云く、「これが實

主歴然か、日本で云ふならば

千家の宗匠、遁世の趣きのや

らなものと。」此の句は山高

水深より出づるなり、自得道

邊の境界なり、又云く、「中和

四融の上に於て更に一圓を設

け、差別を辨知するの旨を提

く、」

倍杖閑看。この二何も大無心

るし。

針割不入。割はけづる、把住綿

密、珠云く、「綿針を入るゝす

きまもない、これはみそくさ

い。」或抄に云く、「竹のへらの

針じや、風吹けども入らず、

水洒けども着ずとなり。」針割

不入は或る新抄に云く、「針の

さきでさしこむほどのすきも

ないところ、議論の餘地はな

いとの意味なり。

石上栽花。没蹤跡の處、却つて

蹤跡を示す、會元に薬山の章

の此の語の次に云く、「頭然レ

之」とあり、珠云く、「是れ甚

麼ぞ、そだゝばいくらなど裁

えて見よ、こちからいやとは

三昧、はじめの兩句と相應し

て結ぶ、珠云く、「洞明の南山

を見る底のやうな。」或抄に云

く、「倚杖閑看は主なり、雲は

賓なり無心の現成。」

石頭。希遷、青原行思に嗣ぐ

珠云く、「青原下の一人で、に

きはふた、馬祖と録を交へた」

又云く、「車輪の如き目を見開

いて。」

言語動用。珠云く、「佛教祖錄

神通自在、又云く、「佛と云ふ

ても如来と云ふても、川向ひ

のせんさくじや、」或抄に「佛

語祖語、金語妙句、舉足下足

行住坐臥。」

没交渉。佛法と没交渉、珠云

く、「ぞんじもよらぬ、そんな

ことではない。」

亦没交渉。無業と白雲と情念

未だつきざれば、情念頌に盡

くの話の如き、賢林録に見ゆ

珠云く、「千山萬水へだて、居

用ひざるなり。」枯れるともま

ゝか、つばませるか、柳も花

もう五ますか、我が這裏乎没

交渉乎。」

智與師齊云々。或抄に、藥山

といふものはさて、

智過於師。百丈に此の語あり

碧岩十二問の評に見ゆ、瀉山

亦此の言あり、臨濟録に見ゆ、

智を見に作り、受を授に作る

珠云く、薬山は石頭の弟子な

り、智とは薬山を指す、臨濟

録の夾山抄に謂く、弟子の見

地師と一般なるものは必ず師

匠の半徳あり、これ傳授する

に堪へざるものなり、弟子の

見地師に過ぎたるものは多く

る、或抄に云く、「石頭と藥山との中に於て、人の分別あり麼。」
 ⑦ 還有人稱素。黑白分曉にし去る麼或抄に云く、「虛堂自ら稱素得出するの機鋒なり。」
 ⑧ 卓拄杖。珠云く、「是れを究めねは優劣はわからぬ。」溪云く、「此の上堂、超師の縁を擧して以て兩班を謝す、其の底裡は主伴優劣なきことを辨せんことを要す。」
 ⑨ 待立深衣。珠云く、「古徳の隨從脇席に至らず、夜もすがらおそばさらずと見へた。」
 ⑩ 富下悟去。珠云く、「虚空消殞し巖山碎く、晝夜の依立の潛密のおかげ。」
 ⑪ 洞房花燭夜。洞は深なり、深宮暗室などを云ふ、花燭は歸川録に所引、鄂州の花燭の類、其の華麗を謂ふ、此の句は暗室に燭を得るの快意なり、忠曰く、「洞房は婦人の居處、花燭夜は婚姻の期なり、珠云く、「婚嫁祝言の座敷なり、」或抄

に悟りて歡喜踊躍の體なり、これは夫妻婚嫁の喜なり。」
 ⑫ 金勝挂名時。問見録に、「張文定公延試に赴く、金勝の通判と稱す。」此の句は窮士登第の快意なり、古詩に「久旱逢甘雨、他鄉遇舊知」、洞房花燭夜、金句挂名時、未だ所出を詳にせず、蓋し毎句一時の快意なり、忠曰く、「此れを四喜の詩と名づく、」珠云く、「金勝は及第して名を金勝に題するも喜なり又云く、「頼に祿位を得て、榮幸涯りなし、」又云く、「一時の快意で、萬劫の餘殃を受け去る」と。
 ⑬ 再參馬祖。寶林錄に見ゆ、珠云く「馬祖威を振つて一喝、百丈三日耳鬢する底の手段を用ひられた、この受用底は三十年後漸く合點のいくことじや、」或抄に云く、「此れ嵩山の去り去つたところを抑下して云ふ、未だ十分に徹底せずと抑へた宗師の活手段なり、」言ふ意は嵩山十分の所得に非ず、若し百丈の

再び馬祖に參じて、祖の喝下に四日耳鬢すと云はれたほどの徹底ならば、かやうに嵩山の門風は衰へまじきものを」となり、嵩山は七世にして滅する故にいふ。
 ⑭ 未至寂寥。衰微すまいものを、殘念なりと。
 ⑮ 牧牛。或抄に云く、「悟徹の後の體長養を謂ふ、」この話は聯燈第八に出づ。
 ⑯ 賜天泰上座。或抄に「百丈に闢ぐ」とあり、賜天は蓋し號に非ず、此の後録に「賜天弄井得三人僧」の句あり、彌天道安、賜天大惠等の如き乎、賜は字彙に他歴の切、足を以て物を賦るなりとあり、珠云く、「賜天は蓋し雅號なり、俗語に賜天弄井を以てと西遊記に見ゆ活納僧を稱するなり、大惠を果罵天と云ふに同じ、機鋒發の故に此の如く云ふなり。」
 ⑰ 百億毛頭。華嚴宗の十支門の第四因陀羅網境界門などより出づる話

るか毛後に現するかと問はんを待つて、但だ天に仰いで大笑一聲せば、仰山拂袖して出で去らんと要すとも、也た未だ得ざることを在らん。」
 ⑱ 上堂「人人、此の一段の生死底の語頭あることを知る、進退揖讓、言語酬酢するに至るまでに、歴歷分曉なり。甚に因つてか、困じ去れば、便ち落處を知らざる。設ひ能く夢中の佛事を作す者あるも、猶ほ暗中に物を取るがごとし。且く道へ、病那裏に在る。今日、徑山、眉毛を惜まず、普く諸人の爲に、此の障礙を去けて、俱に平實の田地に到つて、受用無窮ならしめん。還つて信得及す麼。」主丈を卓して、自携瓶去沽二村酒、却著衫來作主人。」

なり、珠云く、「仰山牧牛するの何のと云ふが、正當與慶の時、又百億の師子だまるものではない、百獸身のかくし處はない。」
 ⑲ 仰不答。珠云く、「此の處丈夫なところがある、」又云く、「句につまつた、後に若へんと云ふ乎、但し分明に答へ得た手。」
 ⑳ 是。いかにも。
 ㉑ 毛前。珠云く、「一寸とつて見た。」
 ㉒ 現時不説。珠云く、「泰上座、是に於て腰がぬけた、果然としてこれは散々の若なり、毛前毛後の句にはやとり付く狂狗逐塊の漢なり。」
 ㉓ 正當現時。或抄に、「直下に活師子を現じて見せた、さて此の獅子は毛の前に現じたか、毛の後に現じたかと一揆するなり、勘辨の手を下すとたり」

⑳ 拂袖使出。或抄に「首座を背はざる此なり、全體作用、眞箇の獅子を現出す。」
 ㉑ 師子腰折。泰上座の撻折せらるゝを判す、珠云く、「こりや喧嘩のあとの撻撻乎、威を失つた猫にもおとつた。」或抄に云く、「みごとな師子でありしが、拂袖することゆゑに、」又云く、「抑下の托上なり、拂袖の上を褒美するなり。」
 ㉒ 嵩山證明。故に適來若へず、珠云く、「天晴れ一とはたらきしてみせん」と、或抄に云く、「適來若へずして、嵩山の前に於て商量す、其の意此に在り。」
 ㉓ 暗地裡。珠云く、「人のしらぬまにどこやらが、かちずもろと見えたが、傾宜はかつてなり、これは適來若へずして嵩山の前で答ふるを云ふ乎。」
 ㉔ 仰天大笑。珠云く、「そら、むいてあきれ果てた、のつけか

へりてじや。
 ② 要拂袖出去。珠云く、「あぢだらうと思ふた、かなはばこそ。」
 ③ 此一段生死。生死大事の因縁、珠云く、「一段とは出息入息、油斷のならぬ大事じや、識得せざれば生死、識得すれば即ち大圓鏡、智識得せざれば即ち大圓鏡智、識得すれば即ち生死底。」
 ④ 過退掛議。珠云く、「仁義道中、日用自己、受用を離れて外にあるではない、語言醒酢とは寒温安否じや。」
 ⑤ 歴歴分曉。魏府華嚴、長老示衆に云く、「佛法の事は日用の處にあり、備が行住坐臥の處、喫茶喫飯の處、語言相問の處に在りの意なり。」珠云く、「歴々分曉は、さらさら、さつと面前了々分明なり。」
 ⑥ 困去便落處。困は困睡を謂ふ、珠云く、「ぐうぐう、前後不覺にねいつたときはじや。」或抄に云く、「落處は主人公なり。」

⑦ 夢中佛事。夢に佛事に奉じて雜緣なきを謂ふ、珠云く、「今寤寐合一を謂ふなり、正念相續の事夢中の西來意とも云つた。」
 ⑧ 猶晴中取物。明了著實ならず、とぼくとしてたしかにないこと。
 ⑨ 具道病那。珠云く、「此れを一旦苦にせぬものはない、身共も大いにためられた、只だ難透の語に參ぜよ、只だは三生六十劫にも得られぬ、是れはいかうづなかつた、大惠などもきつう病んだ、古人も皆々さうじや。」或抄に云く、「寤寐合一にあらざるの病。」
 ⑩ 徑山眉毛。或抄に「口業を惜まざるの義。」
 ⑪ 平實田地。珠云く、「眞實の義なり、そのぬ背がましじやもの。」或抄に「寤寐合一の田地、又は本分の田地を云ふ、歸家穩坐の地なり。」
 ⑫ 受用無窮。珠云く、「佛界に入り魔界に入り、一生受用じや。」
 ⑬ 自携瓶去。珠云く、「たすきがけま

へだれがけで、徳利をひつさげ、これは意味密密。」或抄に、「上の句は伴を謂ひ、下の句は主を謂ふ。」言ふ意は賤民が晝一日瓶を持ちあゝるいて酒をうるなり、さて我が家へかへれば、のつしりと主人になる此れ主伴異なりといへども、もと一人なり、今所謂寤寐合一にして平實の處なり。
 ⑭ 却著彩來。珠云く、「當世風の長羽織で、のさと座敷に坐して禮那がほ。」天慧が訓達訪佛、墮獄の因縁を拈じて、此の兩句を著く、頌古の部に評なり、龍溪曰く、「主伴自在の境界なり、以て困覺不異の義を曉す、是れ平實底なり」と、或抄に云く、「主伴無碍、自由自在なる境界なり、如此ならば死生に大自由を得るなり。」
 ⑮ 佛法在正。正は邪に對し、盛は衰に對す、珠云く、「此の句は今時に辨じにくい。」「在」正は一把茅底、折脚船内、煮三野菜根一喫し、

上堂、佛法正に在りて盛に在らず、正に在るときは、則ち鬼神も其の由を測ること莫し、盛に在るときは、則ち鬼神も能く其の福を妬む。五峯は固に是れ、其の間に屬せず、甚に因つてか終日區區地なる。」拂子を擧げて、「霜葦岸頭雙屬玉、一聲清響忽驚飛。」新薦嚴、寶葉長老を謝する上堂、崑山の片玉、桂林の一枝、貴しと爲るに足らず。水邊林底、三四年、東を説き西を語る、此れ之を貴しと爲也。」更に松源の三轉語あり、此れを茂苑に行つて爲に流通せよ。」上堂、擧す、紫胡和尚、衆に示して云く、三十年來、紫胡に住す、二時の粥飯氣力粗なり、無事にして山に上つて行くこと一轉す。借問す時の人會すや也た無しや。」師の云く

をかぶつて正念相續して、辨道の世話をやく、是老僧と日々相見報恩底の人なり」と、大燈國師も遺レ誠せられた、盛は多衆閑然なり、或抄に云く、「正は正知見本色の衲僧の境界なり、盛は臨濟の所謂道箇機縁を具ふと云ふものなり、時に逢ふて繁華の地に住して富み榮えて時を過すなり。」
 ② 在正。鬼神。由とは珠云く、行山縦由なり、正念工夫相續して道心あつければなり。」
 ③ 在盛則鬼神。珠云く、「鐵棒を提げ、しり目でにらみ、ひまをうかがう。」
 ④ 五峰閑是。珠云く、「五峰は徑山、もとより正にも盛にもよらず、中が間はづれ、溪まく「邪正盛衰以て懐とせず」と。
 ⑤ 因茲終日。區區として小事を管む、珠云く、「此れにもうまい處がある、虚堂がよく料理

をしておいた。」或抄に云く、「虚堂は正盛に住せざれば、高事休すべきが、何とて日日區區としてと事をとやかくやと管むは何としたことぞと、諸人に一擲するなり。」又云く、「區區は些子の義、なにとして吾れは些小な物であるといふなり。」
 ⑥ 霜葦岸頭。屬玉は鳥の名、張母が曰く、「鶴に似て頸長く、赤目紫紺也、屬骨燭なり。」珠云く、「あしの枯れ葉をたよりにて、ぐうぐうとつれだつて居た。」或抄に云く、「雙の字、正と盛と二つにかゝる、屬玉は日本のあをさぎの類、水鳥なり。」
 ⑦ 一聲清響。清閑自得の境界、珠云く、「なにかがたらんとした、えへんとせきばらひ、登飛はとびあと没蹤跡。」或抄に云く、「一聲は擧拂の聲なり、

「紫胡 年老いて心孤なり、東行西行して、又人に問うて、會すや會せずやと道ふ。徑山は崇岡峻嶺、面前に列在す、又雪の寒きに値ふて、但だ未だ去ることを得ず。春の融せんを待つて、也た須らく行くこと一兩遭すべし。只だ是れ人に會すや會せずやと問はじ、何が故ぞ」拂子を撃つて、「水月以喻兮、古來已多、我今不レ然兮、所レ陳伊何、參。」

冬夜小參僧問ふ、「冬至一陽生ず、東山水上に行く、時節因縁、願はくは法要を聞かん。」答へて云く、「也た、只だ是れ一定の法。」僧云く、「既に是れ東山水上に行く、甚麼に因つてか却つて一定の法と成る。」答へて云く、「老僧口は是れ禍門。」僧云く、「洞山冬夜の果子の次で首座に問ふ、「一物あり、黒うして漆に似たり

常に動用の中に在り、動用の中收不得。且く道へ、過什麼の處にか在る。」座云く、「過動用の中に在り。」洞山、果卓を撥退せしむ、此の意如何。」答へて云く、「官馬厮踢む。」僧云く、「今夜和尚、忽然として首座に問はん、一物あり黒うして漆に似たり、常に動用の中に在り動用の中收不得。」且く道へ、過什麼の處にか在ると。徑山の首座も、亦過動用の中に在りと云はゞ、又作麼生。」答へて云く、「也に兩盤の果子を與へん。」僧云く、「只だ洞山の如きんば、果卓を撥退し、徑山は又一盤を添ふ、還つて優劣ありや也た無しや。」答へて云く、「蓋し、他はこれ箇の擔板漢なり。」僧云く、「學人今夜、大衆の威光を借つて、別に一間を置かん、得てん麼。」答へて云く、「偷心の鬼子、人の憎を得た

驚飛は正と盛との二位に住せず、故に云ふ。① 眞嚴。眞山は蘇州にありこゝに眞嚴あり。② 寶業。續集傳燈五に「虛堂禪師の法嗣、因明定水寶業長老道源禪師」とあり、蓋し新に眞嚴の請を受け来て、師を省訪す、故に上堂して之を謝す。③ 崑山片玉。忠曰く、「崑崙山は蘇州なり、一統志八引に曰く、「昔の時陸機、陸雲、此に生る時人之を崑山の玉を出すに比す、因つて名づく」と、今は崑山の縁に托して此の事を用ひて、其の所得の貴を表す、珠云く、「これは寶業の寶の字を打す。」世に希なことを云ふ。④ 桂林一枝。これは葉の字を打す、松源も眞嚴に住したゆへ不足貴、珠云く、「此の寶業長老、法財無量なり、世寶を以て比すべけんや。」

府にあり、眞嚴も平江府にあり云云、松源眞嚴に住す、故に此の囑あるか、茂苑は長洲苑なり、蘇州長洲縣に在るなり、崑山亦蘇州崑山縣に在り、已にこれ隣近の名勝、故に云ふ、長州茂苑に於て松源の三轉語を流通すべしと、茂苑は野客叢書に杜牧之が詩に曰く「長州茂苑草蕭々、暮烟秋雨過二楓橋」と、長州と楓橋と共に蘇州に在り、今其の地に據つて流通を作す。⑤ 紫胡。會元に、南泉願の法嗣衢州子胡、巖利蹤禪師、澧州の人なり、姓は周氏、幽州開元寺に出家す、この話傳燈十に出づ、唐の咸通年中の人、廣明中寂す年八十一。⑥ 三十年來。傳燈十の師の傳には子湖とあり、これは偈頌なり。⑦ 二時粥飯。粥飯は齋粥、粗は麩と作す、漢注に、「辰午粥飯の氣粗なり、微なり、略なり、自ら、からだもかひなほねもよはい。」⑧ 無事上山。珠云く、「自適逍遙の意薪拾ふでもなく、只だ杖をついて、一轉は一返あるいて來申した。」⑨ 借問時人。借問は問汝に作る、此の頌は無爲の作爲を示す、會なり、なんとこゝろへたかと云ひかけるなり。⑩ 師云。拈提なり、珠云く、「評列をつけ、三昧をしたらば、手をやぶらふ。」⑪ 年老心孤。孤峻にして人を抑遏す、珠云く、「氣みじかになつて、いつともなくさびしくなつた。」⑫ 東行西行。珠云く、「うろく／＼してゆくまゝに、又はぢかくして人に問ふ。」⑬ 崇岡峻嶺。珠云く、「天をつき

り。僧便ち喝す、答へて云く、「果然。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「日短く夜長し、暑運新に一線を添ふ。高く來り低く去る、洪釣九淵より轉ず。陰魔潛伏して道芽生ず、陽氣發する時硬地なり、十二時辰を使ひ得る底は、元酒大美、聊か薄禮を旌さん。十二時辰に使える底は、漏卮瓦缶をも、尙ほ且つ甘ばす。任教あり、葭管灰を吹くことを。箇の裡本遷謝なし。驀然として箇の漢あり、出て來つて老師情景未だ脱せず、二十四氣に使ひ得られて、七顛八倒すと道はしむ。山僧只だ休し去ることを得ん、何が故ぞ。家肥えて孝を生じ、國霸あつて謀臣あり。」

復た擧す、馬大師、藥山に問ふ、「子近日見ぬく餌の峰、雲をひき切る鷲ヶ嶽。」又云く、「餌をうゑた如く見てもぞつとする。」或抄に「紫胡のやうに山へ上ることとはならぬ。」

く、「是れ歌行體なり、言ふ意は水月鏡像等の比喩、方便古より儘多し、我れ今然らず、指陳するところは伊何なり、伊は發語なり。」

① 又値雪寒。珠云く、「身がすくんで、紫胡の如くえのぼらぬ、避山せんとすれどもじや。」
② 釋春融也。珠云く、「此のやうな言句の密などと云ふものは是れを見ても前を用きなれば日多の孫とはいはれぬ、紫胡にまけはしない、一返二返もまはらう、なんの用じや、同じ穴の狐ではない乎。」
③ 遺は。遺なり。
④ 水月以喻。珠云く、「水中の月の如く、物に照じて形を現するなど、或抄に「紫胡の示衆を抑下するなり。」
⑤ 我今不然。珠云く、「おれはさうでない、どうじやなんじや陳ぶる所はどうじや。」龍溪云く、「是れ歌行體なり、言ふ意は水月鏡像等の比喩、方便古より儘多し、我れ今然らず、指陳するところは伊何なり、伊は發語なり。」
⑥ 參。上に陳ぶる所は乃ち佛祖不傳底、聲前の妙旨なり、人の漫に聽過せんことを恐る、故に之を言ふて苦口に參尋せしむ。珠云く、「是れは雲門の善の字、露の字と同じ、或抄に云く、「漫巴鼻沒滋味なり、強ひて解せば、虛堂が今禪佛のところは水月の幻炎か、諸人參じて見よとなり、或抄に「參じて知れ、分上に會せよ。」
⑦ 珠云く、「此の上堂は絶膠なり。」
⑧ 冬至一陽。珠云く、「平生心意識情、都て行はれず、天地ひへかへつて、噴崖撒手、虚空消殞冬至一陽生ずるの端的、東山水上行。」

① 東山水上行。或抄に云く、「外面は一氣を言ふ、發動の勢、陽氣動くが故に、溪注に云く、「雲門の語、標山後錄に見ゆ、是れ禪話不思議解説の境界、今の意は百王錄に所謂一氣潛回、八角の磨盤空裡に走ると云ふが如し。」
② 時節因緣。珠云く、「一日一日一時一時と遷謝して、此の時節に至つた。」因緣はわけ。
③ 一定之法。定法は思議すべし、今は僧の故意を抑へていふ、珠云く「それはおぬしたちが定りじや、みんな云ふことよ、」或抄に云く、「時の人の窟窟のるゐる。」
④ 因甚慶却。珠云く、「希有不思議でないとは、なにをたてに左やう仰せらる。」
⑤ 老僧口是禪門。箇の老賊、珠云く「一千五百人の知識、これ又すまじい語じや、贊嘆し及ぼさず、われも口はきけども、さてく、」この語は頌古の五祖演の話に見ゆ

① 洞山冬夜。首座は泰首座なり、この語は報恩錄に見ゆ。
② 黑似漆。珠云く、「無形無相、なんともしれぬ。」
③ 常在動用。珠云く、「行住坐臥、六根門頭。」
④ 動用中教。珠云く、「見るものがさうかと仕ても、とらへられず、聞かうと仕ても手元へまはらず。」
⑤ 過在動用中。珠云く、「洞山に三十棒打たれるならんと思ふて、それでは、閻中慶界に入ることとはならぬ。」
⑥ 官馬厮脚。方語に八兩半斤、賓主互換、今首座を扶起す、珠云く、「洞山と泰とは只だの間答ではないが、併し勝負ある、又云く、よりつくともならぬを云ふ、」又云く、「なにも是は公事のさばきやうはない。」
⑦ 兩籃菓子。珠云く、「それこそ駭河屋の羊羹か、龜屋の蒸菓子でも、二た皿がそへて馳走してやらう、」
或抄に「大放行なり、これは標山の首座をほめてなり、」
① 還有優劣。珠云く、「洞山は果卓を授退し、和上只一盤を添へなんと、」
② 他是箇擔。一向に作し將去る底なし、宜しく供養すべしと、珠云く、「生死涅槃にか、はらざる擔板漢。」或抄に云く、「他は洞山を指す抑下の托上なり。」珠云く、「如來禪祖師禪、最初末後、とんと見向かぬやつかいものを、擔板漢といふ。」
③ 人今夜。珠云く、「某甲不肯ものなれば、大家のいきほひおかげを借つて。」
④ 偷心鬼子。早く其の賊精を知る、珠云く、「うぬは内心にはつまみぐひせうと、わるこんじやう、油斷のならぬこせがれめ、人がかはゆがらぬやつ、」或抄に云く、「全機抑下。」
⑤ 果然。そりやこそ、そのことよ
⑥ 日短夜長。或抄に云く、「冬夜の小

参より已前を云ふ。」
 ② 昇運新添。昇は日かげ、この語は報恩録に見ゆ、今日より新に一線を添ふは、唐の官人、日の長短を撰る、各日後は一すぢを増すと、これより出し語。
 ③ 高來低去。高は陽を云ふ、低は陰を云ふ、猶ほ報恩録に「小去大來」と云ふが如し。
 ④ 洪鈞轉自九淵。洪鈞は造化なり、洪は大なり、杜詩に「八方開三壽域」、一氣轉三洪鈞」と、九淵は至深をいふ、前の興聖錄にも見ゆ、珠云く、「洪鈞は造化の一元氣抄して云く、竹篋背觸と。」九淵はどんぞこより一陽來る、或抄に云く、「元氣なり、陰氣來りて地下に發するなり、九淵はきはめてふかきふちなり。」列子に九種の淺淵の事出づ。
 ⑤ 陰魔潛伏。陰魔は(前の寶林に見ゆ)六陰の魔潛伏するときは、則ち無上の道芽生長すべし、珠云く「一陽の大光明が出づる」と、古則

公案は鬼に煎餅。
 ⑥ 陽氣發時。慧日の陽氣發する時、凝結水の如くに解け、雪の如くに消して、自然に堅硬の地なし、硬地は凍つたところなり、珠云く、「凡そ萬象の内、蟻のひげほども目にかゝらぬ、大鐵圍山小鐵圍山、くづ餅みたやうになる。」
 ⑦ 十二時辰。この語は寶林の冬至に見ゆ、珠云く、「片時もあらざれば死人に同じき如く、硬地なき屍を全體受用し得る。」或抄に云く、「道眼圓明なれば則ち日に斗金を費すも情外とせずじや。」
 ⑧ 元酒大羹。元は當に玄に作るべし禮記の樂記に曰く、「大羹の禮、玄酒を尙かみ」にして腥魚を粗にす大羹和せざるは遺味ある者なり、矣鄭玄が注に、「大羹は肉清、調ふるに鹽菜を以てせず、玄酒は水なり、旌は表なり、珠云く、「世界では元酒大羹は莫大な饗應なれども是の如き人へは十分でない、」聊はお

もんじやうのしるしがないから、菲薄の禮儀、或抄に「元酒は上古のまつりのうすい酒、大羹、野菜薄禮はなにほどちそうしてもたらぬ」と、これは若し如上の人あらば虚堂は沒滋味の那一物を以て供せんとなり。
 ⑨ 十二時辰。珠云く、「自己を捨て、物を逐ふ底。或抄に云く、「道眼清明ならずんば、滴水も消し難し。」
 ⑩ 漏卮一瓦折。われさかづき、かはらけのるい、淮南子泥倫訓に云く「江河不能實三漏卮」と、卮は瓦器、皆賤物なり、卮は杯四升を容るゝ大きなもの、珠云く、「かけがうして雜水一桶くれることではない、一缶は説文に「瓦器、酒甕を盛る所以なり、或は瓦に作るべし。」口小にはら大なる器一石六斗を容るると。
 ⑪ 任教。珠云く、「こちらはかまはぬ。」
 ⑫ 葭管吹灰。この語、前の報恩録に

あり、或抄に云く、「世相は遷變するに依つて。」
 ⑬ 箇裡本遷。箇の裡急に眼を著くべし。珠云く、「威音以前今日に至るつひに盆のあつたことなし、正月のあつたことなし、或抄に、「虚堂が這裡はもと遷變なしじや。」
 ⑭ 老師情分。珠云く、「老師は虚堂もと謝遷なしと、巴鼻が見える、ぐちかわく、分別だらけ、情量は見地なり。」
 ⑮ 二十四氣。報恩録の七十二氣候に見ゆ、珠云く、「やれ立冬だの冬至だのと、或抄に云く、「畢竟時節に使はるゝなり。」
 ⑯ 七顛八倒。顛倒極數。珠云く、「すゝはきだの餅搗きだのと、七てん八たうしてをじやる。」
 ⑰ 山僧得休去。珠云く、「それなら大ひまあきしてやつたものじや。」
 ⑱ 家肥生孝子。珠云く、「家が繁昌すれば、大舜の如き漢武の太子文帝の如き孝子ができる、家が衰微に

及ぶと、不孝不仁がでゝくる、或抄に「虚堂が點胸なり、吾が會下に我を罵る者あり」と。
 ⑲ 國朝有謀臣。珠云く、「智仁勇兼備權柄職の人あれば、左輔右弼與國の人が出る、」謀臣は龍の如く虎の如き衲子をいふ、」朝は國語の註に「朝(はたがしらは)把たり、諸侯の權を把持す。」龍溪云く、「今の皇は標山は地、靈なるの故に、人傑もありとなり。」
 ⑳ 見處如何。珠云く、「このごろのみすえた處はどうじや。」
 ㉑ 皮膚脱落。珠云く、「法も非法も佛法も祖道も、今時那邊向上向う下、こつばざらひなくなつて。」
 ㉒ 唯有一眞實。珠云く、「色も香もなくなつた處で。」
 ㉓ 協於心體。珠云く、「心に得て手に應ず。」或抄に云く、「通身是れ遍身と同じき褒美なり。」珠云く、「布二於四肢一は、全身に充塞するをいふ。」溪云く、「解行相應なり。」

⑳ 何將三條。衲衣を被りて、竹篋を佩び上古住山の模範なり、言ふ意は撥草參支を罷むべきなり、古來此に於て鐵腹外道の事を引く、未だ川處を寄にせず、故に取らず珠云く、「三條篋は三ぐりに竹なはおびでもしていへをもて、東取肚皮一は、はだをきつとひつしめて、東取は珠云く、「自身にみがまへしてといふ程のこと、他を希ふに及ばぬ、自己をひつしめて、隨處は機縁あるところになり。」
 ㉔ 退言住山。證據を謝す。
 ㉕ 未有長行。珠云く、「上求菩提と一志に進むときは、竟には毘盧頂額上を究むる所で、とつくり長養する。」行不行住非住と云ふ義なり。
 ㉖ 珠云く、「そこに留つては二乘窠窟下化衆生の頭輪に鞭つて、はげみ修するのじや。」溪云く、「行住窮通時あつて拒くべからず、」此れは自利を謂ふ。

處如何。山云く、「皮膚脱落し盡して、唯だ
 一眞實のみあり、祖云く、「子が所得、謂つべし
 心體に協ひ、四肢に布くと。既に然く是の如
 くならば、何ぞ三條の箴を將つて、肚皮を束
 取して、隨處に住山し去らざる。」山云く、「某是
 れ何人ぞ、敢て住山と言ふ。」祖云く、「未だ
 長く行いて住せざるものはあらず、未だ長く
 住して行かざるものはあらず。益せんと欲して
 所益なく、爲さんと欲して所爲なし、宜し
 く舟航と作すべし、久しく此に住すること勿れ」
 師云く、「馬大師、手を借して拳を行じて、
 他家の兒女を咒詛す。且く道へ、藥山 甚に因
 つてか肯て馬祖に承嗣せざる。出で來つて一
 轉語を下せ看ん。然らずんば、來夜首座を請
 じて、衆に對して説破せしめん。」

① 欲益無所益。珠云く、「一切を利せんと欲して利する衆生はない、一切が目に入る分齊では、善隣行ではない。」又云く「手前から人の爲にならんとしてはならぬもの、時節至れば自ら人がそだてる。」
 ② 欲爲無所爲。珠云く、「行はんと欲して行ふべき法はない。」
 ③ 溪云く、「施爲の間、所相なきなり。」此れは利他を謂ふ、四句共に付囑の言なり。
 ④ 宜作舟航。濟度を以て事と爲よとなり、世の爲めに舟航となつて。
 ⑤ 借手行拳。毘陀羅尼の印を結ぶの謂なり、珠云く、「馬大師己が手を石頭に借して以て藥山を拳す。」又云く、「馬師、石頭の手を借つて藥山を拳す。」
 ⑥ 忠曰く、「馬祖己が手を其の師石頭に借して、以て藥山を拳して警策するなり。」借は音、

「しや」なり。
 ⑦ 咒詛他家。子を咒詛することは寶林に見ゆ、他家とは藥山終に石頭に承嗣す、日本では東福の虎關、五家辨あり、馬祖に系く、然れども今論ずべからず、珠云く、「他家は石頭を指す、兒女は嗣子に比す」咒詛は「のろふ、まじなふ」借「以て」の心なり。
 ⑧ 因甚肯承。己に馬師の句下において悟り去る、なによつて去つて石頭に嗣ぎ去る。
 ⑨ 下一轉語。或抄に云く、「畢竟馬祖の力を假らざるなり、是れ虛堂學者への爲人。」
 ⑩ 來夜請首座。珠云く、「虛堂和尚どうもいへぬ。」
 ⑪ 慧命。珠云く、「最上乘の禪、別傳の妙道。」
 ⑫ 危若懸絲。弘忍大師の所謂授衣の人は、命懸絲の如きなり皆危きこと甚だしきなり。」糸

首座を謝する上堂、佛祖の慧命、危きこと懸絲の若し、開士の垂範を求めずんば、後昆何を以てか、叢林の元氣を挽回せん。南巖老子鏡空禪師、鏡本私なし、形に因つて顯はる、空本跡なし、象に因つて彰はる、衆徳の歸する所を知らんと要せば、此の羣情の鶴望を慰せよ。龍驤雲起、虎嘯風生。
 除夜小參、僧問ふ、年窮り歳逼つて、烏龜壁に上る、豈に是れ和尚の語にあらずや。師云く、年老い心孤にして暫時の狼藉なり。僧云く、還つて轉身の處ありや也た無しや。師云く、「有ることは則ちあり、爾が脚を著くる處なし。」僧云く、「大いに徑山門下の客に似たり。」師云く、「多少の人錯つて話頭を領す。」僧云く

一すぢかけた、あぶない。
 ① 開士垂範。開士は釋氏要覽に經の音疏に云く、「開は途なり明なり、解なり、士は則ち士夫なり、經の中には多く菩薩を呼んで開士と爲す。」範は法なり、首座は衆中の綱頭の故に珠云く、「開士は首座を謂ふなり、明眼達道の士、重範は垂誠規範なり、法度なり。」
 ② 後昆。のちの代なり、子孫などにかくることば、昆は嗣の如しと、この二字は上の句に附くべし、今且く古來の句讀に隨ふ。
 ③ 叢林元氣。元氣は元は始なり今は叢林の古風に回復するを云ふ、珠云く、「禪林上古朴略の風、元氣根元、色香の付かぬ根本のもの。」或抄に云く、「元氣は古風なり、天の元氣佛祖の慧命。」
 ④ 南巖老子。光孝の鏡空普心は

無準に嗣く、この人の事は、徑山後錄にも出づ、珠云く、「本光孝に住す、此の光孝は四川成都府の南岩に在り、故に云ふ、宗派圖には鏡空普心となす、首座たるによりて喚び出すなり。」
 ① 鏡本無私。鏡の字を打す、珠云く、「胡漢擇ばず」と。
 ② 因形而顯。鏡本私已なく、形を照すに因つて鏡體顯はる、珠云く、「人人の法身も此の通りなり。」
 ③ 空本無跡。空の字を打す。
 ④ 因象而彰。空本跡なし、象に對するに因つて空體彰なり鏡空の鏡に寄せて、蘊む所の徳實を讚歎す、彰は珠云く、「鷲が飛べば鷲、鶴が飛べば鶴。」
 ⑤ 衆徳所歸。鏡體空體、能く諸般の形色を容る、謂つべし衆徳所レ歸と。珠云く、「鏡空と

●「北禪露地の白牛を烹て分歳す、和尚今夜、什麼を將つてか、諸人の與に分歳せん。」師云く、「東山下の左邊底。」僧云く、「慇懃ならば則ち大衆、徳に飽き去れり也。」便ち禮拜、師云く、「貧多僧不細。」

師乃ち云く、「年窮り歳盡く、東村の王老夜錢を焼く。服盡き春回る、樓上に人あり、頻に酒を勸む。此を以て、佛祖不傳の妙を發揮し此を以て、衲僧衣下の功を契證す。革故鼎新を論することなく、只だ時を知り節を識らんことを要す。且く結交頭の一機、如何が顯露せん。」主丈を卓して、「惟だ愛す清臺の新曆日、韓子が送窮文を觀るに懶し。」

は衆徳のあつまる處を賞くわんして付く。
●草情。鶴望は延福錄に見ゆ。有徳の故に衆望を厭するに堪へたり、珠云く、「人にも知らせたい故、大義でも一服をしてたもれ。」或抄に云く、「説法を首座にせよとなり。」
●龍驤雲起。驤は擧するなり、古には驤と作す、珠云く、「龍が由てくると自然と雲が起る甘露の法雨を湖ぐ。」又云く、「すくられたものがあると、法は自然と起ると。」
●虎嘯風生。其の峻機成川、徒衆を接引するを表す、虎の如き衲子が出ると、邪黨のもの其の威におそれる、これは首座の機用也。
●年窮歳過。也た是れ冬至一陽生ず、東上山水に行くの機なり、珠云く、「參禪の衲子も、此の場處がなければならん、」

又云く、「衲僧の節季は老鼠牛角に入る時節、冥途のまつくらやみをふみ破る下地じやものを、それを知らぬと、ほへづららさげらる。」烏龜は行きつまつたなり。
●年老心孤。箇の老賊、珠云く「おれも年老いて氣短かに成つた、ちよつと暫時のありていを云ふた。」心をとみだしたとなり。
●還看轉身。珠云く、「究り通つたとき、還つて成佛作祖の場がござるか。」
●備著脚處。珠云く、「熱鐵櫃の如く、火火驟の如し。」或抄にこれ轉身の處。
●大似徑山。珠云く、「こいつも大抵なやつではない、さてもへすまじいものじや、和尚會裏の衲子のありさま。」龍溪曰く、「脚を著くる處なし」と、是れ即ち眞箇の容接の處

故に云ふ、大いに師の門下の客に似たりど。
●多少人錯。只だ偏耳錯りて領話するに非ずとなり、珠云く、「みなのものが、了節ちがへをするよと。」

●北禪。この語、與聖殿に見ゆ。
●東山左邊底。この語も育王錄に見ゆ、珠云く、「お、ある、此れを」とほらばりほらばれ、それは煮て食ふものか焼いて食ふものか、或抄に云く、道邊那邊の機なり、一口の太刀、この語南堂静より創る、東山左邊に南東あり、故に静を東山左邊底と云ふ、爾後静に限らず、演の子孫皆相擬して東山左邊底といふ。或抄に云く、「五祖演師、嘗て東山左邊に菴を占めて、元靜禪師を居らしむ、之を南堂と云ふ、其の後を東山下左邊底と云ふ」と、此の説は不可不可、これは牛過三志橋、疎山壽塔に骨折らねばゆくことでない」と珠は付け加へたり、珠又云く、「佛祖不傳、

妙は難々と、一休和尚の云はれたもこゝじや。
●飽徳去也。珠云く、「展待の恩徳どら食つたどう賞讃した。」

●貧多僧不細。更に須らく子細にすべしの意なり、五祖の云ふが如く更に須らく細嚼すべし、多くは見る是れ渾圓に吞却することを、圖「まどか。」珠云く、「いやしんばの大ぐらひかみもせいで、味はわかちぬ。」少を得て足れりとす。
●燒錢。珠云く、「錢を焼いて先祖の亡靈を祭り、きげんとりていんでもらう。」
●臘盡春回。珠云く、「今夜一夜かぎり、明朝は春じや。」
●以此佛祖。珠云く、「世諦門を以て衲僧向上宗乘の境界となして、發越揮散、今擧揚の義。」此れはこの處なり。
●以此衲僧。珠云く、「衲僧骨を折りて見出した證據。」而溪云く、「此れとは時節因縁の到來を謂ふ、この

語は百丈、滄山に示すの語、傳燈の十一に出づ、或抄に云く、「衣下の功は年來袈裟下の工夫の功動なり、契證はかなひさとる。」

●革故鼎新。差別智に喩ふ、或抄に云く、「上の句は差別智を、下の句は自然智なり、言ふ意は諸人が差別智を論ぜず、只だ自然智をばかり求むるなり、又の義に、虛堂は世間のやうな故きを革め新きを創め、或は錢を焼いて鬼を送る、或は酒を勸むるやうなことは論ぜず用ひぬ、只だ時節因縁の到來を知るまでなりと、此の義、末の二句に相應して好し。
●知時識節。自然智を謂ふ、珠云く「今夜は除夜、明朝は大年朝と云ふことを知れたしとこそ思ふ。」
●結交頭一機。年尾年頭、結交彼此混雜の一機、珠云く、「誠のとどくく、リはどうじや、」又云く、「三百六十日、結算仕をおせた處はどうじや、どうみなに見せたものじや

頭の字は付け字。

●惟愛清臺。清臺は司天臺なり、禮記には「夏には清臺と爲す、商には神臺と爲す、周には靈臺となす」龍溪云く、「清臺は氣侯を望象し、

以て調曆を考ふるの處なり。」面白く建立門なり。
●韓子送窮文。韓退之の送窮文、元和六年正月乙丑の晦云云の文、龍溪云く、「惟だ新歲を迎ることを愛

して、世間の窮達得喪を管するに堪へざるなり。」珠云く、「まうく見るもいやきくもいや大年の借金拂の帳面。」掃蕩門なり。送窮人は晦日のことに用ふ。

徑山寺語錄終

國譯虛堂和尚語錄 卷之四

法語

●蓬萊の宜長老に示す。
●本色の衲僧、透關の眼を具して、風驚き草動くにも、悉く來機を辨ず。蓋し他の做處、穩密にして、聲前句後に落ちず、得處既に妙にして、用ひ出し來つて、自然に蓋天蓋地すればなり。豈に依草附木の輩と、日を同じうして語るべけん哉。●濟北の瞎驢、初め高安瀨頭に到つて、既に蹋踏すること能はず。却つて黃檗山中に還つて、探頭せられ影を露はす。看よ他の老漢、人を驗むる

國譯虛堂和尚語錄 〇四

●法語。(以下略脚注に注者の無名は龍溪なり。) 夫れ論語の法語の言、孝經の先王の法言、皆是れ世間法のみ、吾が宗の所謂法とは、釋迦不出世、達磨不西來、已に天下に彌き底なり、故に涅槃に説く、諸佛の師とする所は所謂法なり」と、此の法を以て群機に語る、苟も解了するときは則ち世間の事法を割ずること猶ほ夢中の如し、豈に把捉するに勞せん乎、此れより眞實に至るまで編者の名なし蓋し同じく惟份、文體の手に

出づる乎、東明日禪師法語の嗣芳侍者に示す語に曰く、「法語の作は進道勸勵の助の爲めにす、先報是れ皆已むことを得ずして一言半句を出し、一機一境を示す、揚を穿つの箭の如し、發せずんば已んぬ、發すれば則ち必ず中る、近習師法豎ならず、法語を以て已が長を稱し、胸中の不平を發越するが爲めにす、何ぞ本分の事に益あらん、況んやまた已が長と不平を發越する者、それ亦鮮し矣」と、又癡絶冲師師錄法語の巽升維那に示すの

眼目、一見して便ち、^①斷貫索を抛出して道く、
 來來去去せば、甚の了期かあらん、^②未だ毒手
 を展べすと雖も、^③早く是れ去死十分。便ち
 箇の款狀子を通じて道く、^④只だ老婆心切な
 るが爲なりと。^⑤猶ほ不實ならんことを恐れて
 險處に向つて、更に一撈を與へて道く、大愚鏡
 舌なり、見えんを待つて他に、^⑥一頓を與んと。
 箇の些子、^⑦滴油箭よりも過ぎたり、稍自ら
 眼力到らずんば、^⑧喪身失命せんこと疑なし矣
 然れども、^⑨步驟既に高し、徒に陷穽を設くる
 なり。反つて黄檗に一掌を與へて云く、甚の見
 ゆるを待つとか説かん、即今便ち打たんと。已
 に是れ、^⑩驢鞍橋を將つて、阿爺の下領と作す、
 父子投機、^⑪既に縫罅なし。方に且つ言く、
 者の風顛漢を引いて、^⑫參堂し去らしめよ、

語に曰く、「所謂法語とは蓋し
 前輩有道の士、佛祖不傳の妙
 を提持し、學者を警語す云云」とあり。
^①蓬萊。山の名、新添錄には宜
 長老に答ふる書の中に云く、
 「蓬萊は海上の名山、前輩行道
 の地」と、一統語を按ずるに、
 「浙江寧波府の蓬島山は、奉化
 縣の南四十里に在り、宋の劉
 次高が詩に、「雨從二牛嶺巖高
 一出、雲在三行人脚下一生。」宜
 公は無示と號す、報恩錄を編
 集せり。
^②本色衲僧。珠云く、「この文四
 段、つけやきばではない、眞
 實木地の色、報恩錄にて辨す」
^③具透關眼。或抄に云く、「自由
 自在に横行する眼を具する漢
 を云ふ。」
^④悉辨來機。溪云く、「現來底の
 機境、一一に辨了して其の惑
 を受けざるなり。」

他做處穩。珠云く、「他とは具
 透關眼底、做處とは法身三種
 の病等なり、行に就いて言ふ」
 溪云く、「工夫を做すの處、を
 んびんめん密なるが故に。」
^①聲前句後。溪云く、「聲前句後
 の坑子に落ちず、」珠云く、「聲
 前は默、句後は語、」或抄に云
 く、「學者の言句におちぬ。」
^②得處既妙。悟故の處法妙なり
 珠云く、「得力無事、禪でない
 妙悟と云ふ、用出來は言語の
 中をけやぶつて」と、或抄に、
 「解に就いて言ふ。」(以下溪註
 は名を略す)
^③自然蓋天。覺行圓滿、法界に
 周徧するなり、珠云く、「卷四
 の人、甚に因つてか庵外の事
 を知らざる等の如き。」
^④依紳附木。言象に依附して特
 達せざるなり、或抄に云く、
 「言句に依托してをるものを
 云ふ。」

彼此便宜に落つ、豈に今時濫りに、^①師席に據つ
 て、^②實法を以て來學を籠罩して寮舍の穩便を
 以て、^③人才を養育して、以て衣を推り食を
 讓つて、^④苟も繼紹を圖つて、以て遞に相
 援引して、^⑤本宗を盛にせんと欲するものに比
 せんやと。^⑥苦しい哉苦しい哉。正音絶ゆるこ
 と矣、^⑦古來の尊宿、動もすれば、^⑧劍刃上に於
 て人を求めるすら、尙ほ一半を得ず、^⑨何に況ん
 や繩墨の法を耶。若し是れ眞正本色の衲僧、
 透關の眼を具せば、未だ必ずしも甘心して、
 黄檗臨濟の句下にも死在せじ。
^⑩妙源侍者の病めるに示す。
^⑪佛は是れ大醫王、善く衆病を觀る、衆生
 信じて之を服するときは、^⑫則ち病瘵えずとい
 ふことなし。蓋し其れ、^⑬從本已來、^⑭深く此の

同日而語。此の一節までは總
 論なり、本色修に説の方を論
 ず。
^①濟北瞎瞎。臨濟は地に因つて
 名を得たり、臨濟を稱す、小
 院は滹沱河の側に住す、故に
 濟北と稱す、瞎瞎は臨濟の語
 なり、今は隨に寄せて語を設
 く、或抄に云く、「本色 僧の
 做處、得處を迷ぶるなり、瞎
 瞎は漢、俗人を罵るの辭。」
^②初到高安。大愚の處に到るを
 謂ふ、珠云く、「大愚は歸宗常
 に嗣ぐ、高安は江西瑞州府高
 安縣にあり。」
^③不能踏踏。踏脚未だ實地に踏
 着せず、珠云く、「けとばすこ
 とがならなんだ、」臨濟大愚に
 承嗣せざるをいふ、大愚の「汝
 が師は黄檗なり」と云はれた
 處。
^④探頭露影。探頭は勘驗をいふ
 臨濟錄に「所謂老和尚探頭す

ること莫くんど好し」と云ふ
 が如し、言ろは黄檗に勘驗せ
 られて、瞎の影迹を露はすと
 なり、珠云く、「さきをくゞら
 れ、先手を見こされた」忠曰
 く、「今黄檗に試験せられて、
 少し瞎の影迹を露す」となり
 頭は助字、爾雅に探は試なり
 と、註に「刺探嘗め試むなり」
 と。
^⑤他老漢。黄檗なり。
^⑥驗人。珠云く、「來風を勘驗す」
^⑦斷貫索。繩を繋ぐの具、或抄
 に云く、「ちぎれた牛の繩(は)
 なつた)なり、言句を云ふ、言
 句に本用處なきを以てなり、」
 珠云く、「一句語なり。」
^⑧未展毒手。珠云く、「黄檗未だ
 棒喝の毒手をば延べず、惡辣
 の手段をば延べず、」
^⑨早是去死。朝野僉議に「船に
 乗じ馬を走らしめ、死を去る
 こと一寸」と、一寸は即ち十分

なり、言ろは其の危きことなり、吾が宗用ひ来る意は、今分全く死し去りて遙に氣息を絶するの義なり、珠云く、「天に倚る長劍ではないか。早く是れは臨濟をさす。」「箇款狀子。情疑を納るるなり、珠云く、「ありのまゝ白狀した、或抄に「臨濟の爲めに再勘の手を下す」爲老委德切。珠云く、「大愚の口まねをして」と。

猶恐不實。珠云く、「猶は黄檗、不實は臨濟をさす、その上にもまた「じゃ。」

一頓。捧を云ふ。

滴油箭。箭の至急にして滯滯せざるを云ふ、珠云く、「弩弓。」忠曰く「舊解に云く、滴油箭は火急の義、禽を射るの弓に用ふ、穿弩と名づく、鐵を用ひず、只だ竹を失らして箭と作す、鋭きこと油を滴るゝが如しと。」

喪身失命。箭に當るべしとなり、珠云く、「七花八裂。」或抄に「稍々

自らは臨濟をさす、常に用ふる喪身失命とはこゝにては心ちかい疑過することなり。」

步驟。徒は黄檗をさす、瞎驢の歩驟高邁の故に、黄檗の陷弊、其の設徒然なり、陷弊は坑坎なり禽獸を取る所なり、珠云く、「穴を掘つておしおとさんとかゝつたれど、其の手を食はゞこそ。」

將驢鞍橋。此の句は尋常誤語の意今は則ち然らず、瞎驢の鞍橋を將つて黄檗の下頰を作り得たり、珠云く、「驢鞍橋、これ又なぜかう云ふた、まぎらはしき語じや、子細にすべし、阿耨下頰、大いにおてどがちがふた、落し穴を思ひがけもなく飛びこしてはたらいた、作はぐつとちがふた。」或抄に、「ろあんけうは黄檗に阿耨ば大愚に比す龜を證して驢と作す、鐘を喚んで喪と作すの類、今は大悟敬、分上の端的を言ふなり。」

父子投機。機投合なり。

既無疑。投合して問なし。疑はぬひめ。すきのないこと。珠云く、「活龍水を得るが如し、」又云く「見さだめられたでない、とんと手元が見えぬ。」

參堂去。者の風韻漢を引いて云云は臨濟の行録に詳かなり。

彼此便宜。然も是の如く便宜を得ると雖も、尙ほ是れ父子共に便宜に落つとなり、應は結句に在り、此の一節は別して其の人を擧げて以て上の節の意を證す、特に此の縁を引くことば嗣子の宣公に示す故なり。珠云く、「虚堂の目から見れば、父子の間あんまりしらん、しくて心底が見えとほされて、ほどの宜きがすぎた。」或抄に、「彼此は臨濟と黄檗となり。」

據師席。作家をいふ。

以實法來學。邪師實有の定法を以て、互に相傳授す、四來の學徒に數被す、元來定法の阿耨等と名づく

病に中れり。雪山に六年、本草を質して自り、臘月八夜に到つて、其の病既に革かなり、無心の處に於て、此の方書を獲るに、道く、奇なる哉一切の衆生、具するに如來の智慧徳相あり、但だ妄執著を以て、證することを得ずと、是に於て、道樹を起て、鹿林に詣して、三月に根を調へて、五人得度す。則便ち能善く其の薬を用ふればなり。止だ璨大師、矮師叔、深く其の膏盲必死の病に中るのみに非ず、而も西天此土、大眼目を具する宗師、皆此の病あり。直饒ひ盧扁、透關の眼、活人の機を具するも、亦其の病源を知ること莫し。而して、遞に相印授して、轉じて此の病を以て、大地の衆生を度脱して、坐者立者をして、俱に輕利を獲せしむ。今源

くることあることなし、亦説くべきなし、故に徳山云く、「我宗に語句なく、實に一法の人に與ふるなし。」珠云く、「本來鳥は黒く鶯は白く、無修無證の實法、四來の學者をかごに入れ、あみにふせたやう外へはやらじと」或抄に云く、「一實法とは有所得の法、定規法、眞實は鳥魚とるもの。」忠曰く、「籠罩とは其の籠罩を出づることを得ざらしむを云ふ、」罩はとりあみなり。」

人オ。珠云く、「才能又才質なり。」

推衣讓食。珠云く、「衣食を讓るの語、交へて之を言ふ。」

荷圖繼紹。嗣法の絶えざるを欲してなり、珠云く、「荷もは人の善惡を擇ばず、かりそめにも冬瓜の印子を以て繼紹を關る。」

遞相授引。遞は更易なり、俗

に遞に作る。

欲盛本宗。各各の本宗。珠云く、「相似底」と。

苦哉苦哉。鄭聲の邪。盛なる故に、雅樂の正音絶す矣、珠云く、「なさけないか、」見性の法、圓頓の禪、宗旨の大事さつぱりとたえきつた。」

古來尊宿。珠云く、「馬祖百丈等。」

於劍刃上。擬議すれば喪身失命、珠云く、「眞の種草の人を求むるさへ一箇半箇もまた得ず。」

何況繩墨。一定の法の據るべきありと謂ふ、此の一節は今時の弊を擧げて古人を引いて證結す、珠云く、「すみがねあて、教ふる定法。」

具透關眼。回照發頭。珠云く「疎山壽塔古帆未掛等を透過したる眼。」

黃檗臨濟。自活脫無依の路あり

らん、此の節は邁古超方の旨を示す。
 ① 妙源侍者。妙源はこの録の興聖語録の編者なり。
 ② 佛是大醫。この文四段となす、或抄に云く、「此の富煩惱病と衆病と眞病とを説く、段々眼を着くべし今は第一に煩惱病と。」
 ③ 觀衆病。珠云く、「穿察なり。」
 ④ 信而服之。珠云く、「信ずるものがありにくい。」
 ⑤ 病無不療。雜摩佛國品に、「大醫王と爲して善く衆病を療す、病に應じて藥を與へて服行を得せしむ。」
 ⑥ 又法華六の如來壽量品にも出づ。
 ⑦ 從本已來。珠云く、「世尊發覺、往來八千度。」
 ⑧ 深中此病。佛先づ自ら此の病に中れり、珠云く、「三界極苦の病、生老病死、憂悲苦惱等。」
 ⑨ 資質本草。資は取る、質は考ふるなり、本草は一切の藥性能毒を明すの書なり、今病に託して語を説

くる故、之を用ひて三界出苦の衆方を考ふることを表す。或抄に、「本草は本分に比す。」換骨の靈方願神の妙術。
 ⑩ 其病既革。革は急なり、正三昧に入つて言語道斷、心行處滅なり、絕體絶命、革は或抄に「死にちかきなり」と。
 ⑪ 無心處。氣絶心滅するの時、珠云く、「やみほうけて、湯水もとほらぬ、性たいたくつて。」或抄に、「大死一番」と。
 ⑫ 獲此方。珠云く、「金匱雜經等の方書。」
 ⑬ 奇哉一切。珠云く、「四十九年の口切りじや、長夜の間にしづんで、あさましいと思ふたればじや、希有でげんなことじや、ことに女人は五障三提の」と。智慧は大智慧徳相は根本功徳の相、華嚴經の出現品に云く、「佛子一衆生として具するに、如來の智慧あらずと云ふことなし、但だ妄想顛倒執著を以

て證得せず、若し妄想を離るれば一切智自然智無礙智即ち現前することを得、次後に又云く、「爾時如法來善法界の一切衆生を觀して是の言を作さく、奇哉奇哉。」此の諸の衆生云何そ具するに如來の智慧ある、迷惑して見ず、我れ當に教ふるに聖道を以てして、其れをして永く妄想を離れて自ら身中に於て如來廣大の智慧を見ることを得て、佛と異なること無からしむ」と。
 ⑭ 今兩章を撮つて擧ぐ。
 ⑮ 妄想執著。珠云く、「但だはなきないことには、妄想とは財を思ひ衣食を思ふて晝夜息むときなし、執着とは其の妄想の出づるにまかせて、一色にへばりつき、聲にへばり付く、不得證とは大切の人々具足の佛性をば、或抄に云く、「佛の如くにさとることをえせぬ。」
 ⑯ 於是起道樹。道樹は華嚴經樹名義集の菩提樹の注に、「佛其の下に坐して等正覺を成ず、因つて之を菩

師の病を觀るに、是れに非ざることを得ん歟。然らずんば、外寂にして中搖き、形留つて神往き、此を出で彼に没して、勞して功なし、則ち世間無常の病、時時現前せば、如來の藥も得て救はざらん耶。若儒如來眞病の本に蹈著せば、自然に病去り藥除らん。是の如く病を受くるときは、則ち病癒えずといふことなし矣。
 ① 無隱侍者に示す。
 ② 初機の學道。深山の獼猴の如く、鐵索に縛住せられて、人を見るときは、眼生じて只管跳跳たり、形衰へ氣索くることを得て、然して後、之に教ふるに藝を以てす。
 ③ 或は鎗を刺し、棒を使はしめ、水を擦び、毬を打せしむ、弄し得て既に熱するときは、方に

提樹と謂ふ焉、又云く、法苑に云く、「釋迦の道樹をば阿耨多羅と名づく。」珠云く、「眼を開くが最後、井の水の湧くやうな法門をとき出す。」
 ④ 謂鹿林。要覽鹿苑の註に、又鹿林と名づく、「波羅奈國に在り、佛成道の初め、法輪を轉じて憍陳如等の五比丘を度す處なり。」
 ⑤ 三月調根。は一夏をいふ其の時を俟つたり、佛五人の根、僅かに熟するを觀て、乃ち往いて化度す、猶ほ未だ信受せず、佛神變を現して種々に調練す、計るに三月を経、乃ち爲めに四諦十二行の法輪を轉ず、五人の中憍陳如、先づ悟解す、法眼淨を得て、即ち阿羅漢を證す、佛稱して阿若憍陳如と爲す、出世第一の弟子と爲す」と、珠云く、「調根は因果の法を説いて、四諦の法を研

究す得度は五欲の病、苦行の病、ぐわら／＼と平癒した。」
 ⑥ 善用其藥。以上本病の起源を述べ、珠云く、「五人のものへ如來自身に吞んだ藥をのませた。」
 ⑦ 止環大師。二祖の章に、「一日俄に居士と號するものあり、尊者に謂ふて曰く、弟子久しく業に疾に墮る、師の爲めに懺罪せんことを欲すと、尊者曰く、罪を將ち來れ汝が爲めに懺せん、其の人良久して曰く、罪を覺むるに不可得なり、曰く、我れ汝が與めに懺罪し竟んぬ」と、又曰く、此れ法實なり、宜しく之を懺罪と名づくべしと、正宗記に詳なり。」珠云く、「二祖の達磨にせめられた如く、病を求むるに不可得なりと云ふて。」或抄に「これは業病」と。
 ⑧ 矮師叔。香殿、跋山に謂ふて

曰く、「師叔向去に倒置ること三十年すること在らん」とこの卷の普説のところに出づ、「珠云く、「業病を以て眞病となして説く。」

②深中其膏盲。此の事は寶林錄に見えたり、珠云く、「今學者みな膏盲の窟中、針灸薬のとゞかぬ病に中る。」或抄に云く、「此れは色身の業病に託して、佛法の眞病を指す。」

③四天此土。或抄に、「これは眞病なり、沙門の一雙眼を具ふる宗師も」と。

④直修虛扁。史の列傳、「扁鵲は勃海郡の鄭人なり、性は秦氏、名は越人。」注に「秦越人、軒轅の時の扁鵲と相類す、仍て之を號して扁鵲と爲す、又虛國に家す、因つて命じて虛醫と曰ふ也。」珠云く、「直健ひとは法病は中々じや。」

⑤透髓眼活。珠云く、「醫家での名人でもじや。」

⑥還相印授。珠云く、「佛祖もやみ來つた大事の此の病」と。

⑦轉以此病。珠云く、「次第に轉展して、大地の八萬四千の病苦の業甚を。」

⑧坐者立者。坐者は王家、立者は貧家、珠云く、「びつこるざりを云ふが如し、馬子も船頭もこゝをさへ越ゆれば。」

⑨俱獲輕利。以上は委流を導ぶ、珠云く、「輕安快利で、きさんじな、らくなここと。」

⑩今觀源師。引き來つて其の人に歸す。珠云く、「觀は祭なり、生死を度脱して輕利を得たいとの病ならんか、おゝかたさうでありさうな。」

⑪外寂中搖。洞山の寶鏡三昧に曰く「宗通じ趣極まる、眞常流注外寂に中搖く係胸伏鼠」と。是れ偷心死せざるに喩ふ。珠云く、「外相は殊勝な坊さまのやうで、腹の中は五欲煩惱。」

⑫形留神往。上は外相中心に就いて言ひ、此れは形影精神に就いて言

ふ、意ろは共に同じ、珠云く、「形留は外寂神往は内攝」と。

⑬出此沒沒。出は生を謂ひ、沒は死を謂ふ、珠云く、「是非憎愛生滅の心。」又云く、「魂魄飛び去つて生死流轉。」

⑭勞而無功。是れ世間無常の病なり深く以て戒めつべし、珠云く、「文字誦經、やくにたゞぬ。」

⑮世間無常。珠云く、「たわいもない、有爲雜變。」

⑯或抄に云く、「業病」と。

⑰如來之藥。以上は幻病醫治するに堪へざるを述ぶ、珠云く、「大醫王と尊崇し契る如來の寶藥も、とんと藥の功がない。」

⑱佛。珠云く、「千萬人の中、もし。」

⑲如來眞病。大悟に喩ふ、珠云く、「如來のやませられた眞實の病源にじや。」

⑳自然病去。悟了の心も亦忘る、之れを藥病相治すといふ、珠云く、「病去るか生死無明の病、去り除るは

①此の索子を去けて、風前月下、水際雲根、

②之が自然に任せつべし。葛忽に叫ぶこと一聲して、孫大備來れといへば、他便ち面前に突在す。他に習ふ所の藝を問ふに及んでは、便ち水裏に火の發するが如し。若し是の如く體究せば、安ぞ妙ならざることを得ん。有般の漢は、便ち道ふ、虚堂、年老いて心孤なりと殊に知らず、狗は家の貧しきことを擇ばざることを。」

③如足首座に示す。

④名實相當り、行解兼備つて、平等大心を以つて、四方の衲子を待して、方に曲録牀に據るべし。又須らく八面に敵を受けて、機に臨んで縱奪すべし、邪正得て前むべからず佛祖の眼を著けて及ばざる處に透到して、

悟了の心」と。

①如是受病。珠云く、「根本より出た病ならば、修行工夫でなほらぬと云ふことはない、或抄に「受病は眞病じや。」

②病無不癒矣。也た是れ回照發面して、本意を縛して以て結ぶ、珠云く、「八萬四千の煩惱病もじや。」

③無應侍者。無應は顯孝錄の編者なり。

④初機學道。珠云く、「此の法語は二段に分つ、初機は發心の人佛道を學はんとするは。」或抄に云く、「初機で祖宗門下にふみごむとき。」

⑤深山獨巖。珠云く、「とらへられて七顛八倒。」

⑥鐵索縛住。珠云く、「公案工夫じや、州云く、「無」或は「背觸」などに、「或抄に云く、「くさりにしばられる。」制律戒法、或は古則話頭に。

①見人眼生。珠云く、「ぎろくして、さやつ」と云つて」

或抄に云く、「宗師の一棒一喝豎拂拈推の機境。」

②只管跳跳。珠云く、「あがつたり、おりたり、亂走せんと欲するも亂走するを得ず、只だ跳應する而已。」

③形衰氣索。索は盡なり、久しく聚がる、故、珠云く、「身形くたばり、あせるに氣力もなくなるで、分別妄想にたとへる。」

④教之以藝。珠云く、「獅子舞、さるがへり、いせをどりなり關候子と云ふものを以て、穿さくしてやる。」

⑤刺針使棒。此の二句は教ふる所の藝術なり、以て夜禪晝誦等の諸般の行業に喩ふ、珠云く、「鎗は和調すや、三玄十智、三種病にたとふ」

⑥弄得既熟。珠云く、「鎗及び菘

あげても、くれてもあそび得とは、難頭の話頭を百鍊千鍛し得て。

の妙用に喩ふ、思ひもよらぬ藪を

可去此家子。珠云く、「宗師の妙手の接得にて、下載の清風を得せしむ。」

如是體究。已上は心猿調伏の法盡く矣、珠云く、「學者も是の如く體究修練せば、なか神妙の域に達せざらんや。」

風前月下。任レ性逍遙、隨レ緣放曠の境界、以て比況すべし、珠云く、

有般漢便道。珠云く、「よいかげんなやつは、口ばしつて。」

ならふ處の主人なくとも、自由自在、立つのまゝきぢのまゝ、佛に入り、魔に入り、五條橋下或は熊野山中、聖胎長養、法性の自然に任すべし。

虛堂年老。錄云く、「虛堂が年老いて人をばかにすると云ふ、年よりてさみしさのあまりに、埒もないことを云ふ」と、或抄に云く、「初心猿、調伏の法を説くをせしる」

孫大備來。猴は廣雅に「一には狙と名づく、一には王孫と名づく、一には胡孫と名づく、故に孫大と稱す、忠曰く、「圓猴は圓猴なり、故に孫と稱するなり、大は太郎の大なり。」

殊不知。珠云く、「字面は何の事もない、一通り、此れは東山暗號。」

所習之藝。珠云く、「鎗棒毬等の藝疎山壽塔、牛過窓欄など。」

狗不擇家貧。化度の善きに喩ふ。吾が宗幸に本分向上の事あり、今初機心猿調伏の法を説く、故に人の判するあらんことを思ふて、此の句を著く、蓋し其の意、小機を捨てずとなり、忠曰く、「狗は虛堂自らに比す、家貧は學者の根劣に比す、言ふ意は虛堂慈悲、小根の

水裏火發。希有神妙の義、是れ欲に在つて、禪を行じて、發する所

捨てずとなり、忠曰く、「狗は虛堂自らに比す、家貧は學者の根劣に比す、言ふ意は虛堂慈悲、小根の

學者をして心死し意消して、便ち能く勃然として興り、凜然として變せしむ。方に此の題目に稱ふべし、纒に毫末許りも、人の與に傾覆せらるるあらば、則ち佛法の罪人たらん矣。豈況んや、隈隈醜醜として、半は死し半は活して、二十四氣に梘じ得られて、七顛八倒して、主と做ること成らざるをや。者般底に似たらば、叢林をして茂盛せしめ、後學に標準たらしめんと欲すること、難きに非ざることを得んや。古徳の道く、達磨大師、空手にして來り、空手にして去る、已に是れ塵を揚げ土を簸て、曲げて今時の爲にす。

待四方衲子。待は接待なり、分座說法、後昆を開鑿する故なり、曲録は忠曰く、「蓋し木を刻み屈曲せること、曲録木とも異名せらる、遂に木を看いて曲録と稱するなり。」

黃梅七百の高僧、箇箇佛法を希求す、惟だ盧行者一人のみ、眼に字を識らず、専ら供春を事とす。所以に、西天の衣盂、密に之に授く

八面受敵。珠云く、「五家七宗やりふすまをなして掛つてもびくともせぬ。」

古徳の道く、達磨大師、空手にして來り、空手にして去る、已に是れ塵を揚げ土を簸て、曲げて今時の爲にす。

邪正得前。是非邪正を坐斷して、共に進前することを得ざらしむ、臨濟の所謂明眼の道流の如きんば魔佛俱に打すの意なり、下おびへもとりつかぬ。

惟だ盧行者一人のみ、眼に字を識らず、専ら供春を事とす。所以に、西天の衣盂、密に之に授く

佛祖著眼。千聖拈不出底の難處を提示するをいふ、所謂超宗越格の正眼を具して、正不

可稱此題目。首座の名位の重きこと知るべし、此の一節は

名實相當。珠云く、「此の法語は三段なり、忠曰く、「首座の名、首座の實なり、即ち人天の眼目なり、珠云く、「名は首座の職分、實徳又眞如満足、智行兼備。」忠曰く、「首座の名目、實は叢林に表率として接生に模範たる實徳なり。」

西天の衣盂、密に之に授く

莊遊に曰く、「許由曰く、名は實の賓なり、吾れ將に實とせん」とす。一行解兼備。達磨大師云く、「佛心宗を明らかめ、行解相應、之を名づけて祖と曰ふ」と、英名徳實相當り、高行勝解兼備はるに非ざるよりは首座の重任を補ひ難し。

以平等大心。無差別の大悲心なり

以平等大心。無差別の大悲心なり

露の風規を提撮するの意なり

露の風規を提撮するの意なり

只だ一處法窟の爪牙奪命の符と云ふものがある。

只だ一處法窟の爪牙奪命の符と云ふものがある。

學者心死。靈馬心猿、大死一番、珠云く、「智見のさいばい、かたこともさはいすることならぬ、平生の心意とわかぬゆへ。」

學者心死。靈馬心猿、大死一番、珠云く、「智見のさいばい、かたこともさはいすることならぬ、平生の心意とわかぬゆへ。」

勃然而興。勃は説文に「排なり、おしひらくなり、孟子樓

勃然而興。勃は説文に「排なり、おしひらくなり、孟子樓

惠王上に曰く、「苗勃然として興る矣。」註に「勃然は興起のこと、珠云く、「こゝからひよいと目がさめると、或抄に云く、「死中活と得るじや。」

惠王上に曰く、「苗勃然として興る矣。」註に「勃然は興起のこと、珠云く、「こゝからひよいと目がさめると、或抄に云く、「死中活と得るじや。」

是れ學者をして絶後再蘇する底なり、頌古の調達の話に見ゆ、珠云く、「さつぱりと目がさめて、やれ〜と。」

是れ學者をして絶後再蘇する底なり、頌古の調達の話に見ゆ、珠云く、「さつぱりと目がさめて、やれ〜と。」